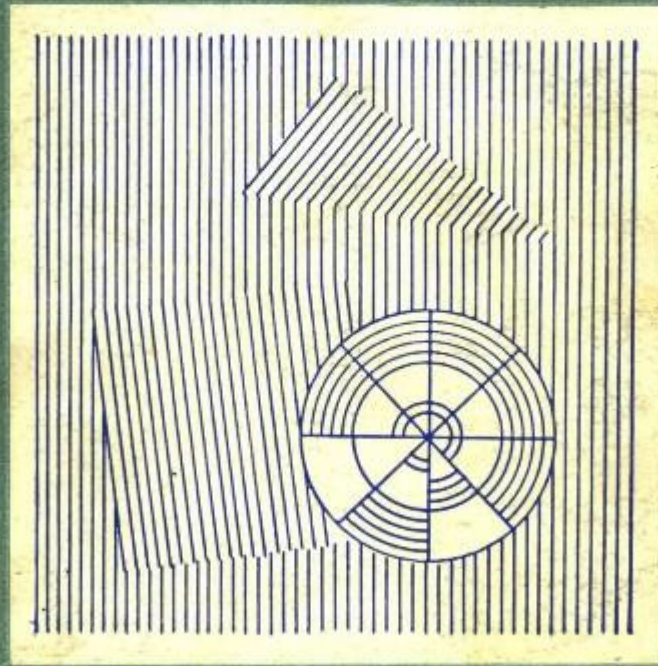


文部省認定通信教育

早稻田速記研究

研究編

付基本・文法



速記全書

早稻田速記研究

基本編
文法編



速記全書



はじめに

言語活動は社会の進歩発展にとって欠くことのできない役割をになっています。社会活動が複雑になれば、それに伴って言語活動も複雑になり、ある状態、ある思想を表わすのにも、さまざまな形容や、微妙なニュアンスを持つようになります。科学の部門一つを取り上げてみても、とどまることのない進歩発展の中で新しいことばが創られ、新しい思想が生まれていきます。

こうした状態とテンポの早い現代生活の中で、記録手段のスピード化は、各自の常識や教養を高め、能率的な活動を行なう上に非常に大きな意義を持ってきます。欧米においては、タイプライターが一般的記録手段として使用されていますが、わが国では、ことばの構造、特に表記の面で能率化が阻害されていることは周知のとおりです。カナタイプライターも、日本語に含まれる同音異義や、象形から発した表意的音節文字（表記された一つ一つの文字によって、その事物を想像する）などのまぎらわしさを改善、改革していかなければ、その力を十分に發揮することができません。そしてことばというものは、長い歴史の中から現代に引き継がれているものですから、こうした改革が早急に実現することも期待できません。

記録手段の一つとしての録音機が相当の発達を遂げている現在においても、各種の会議において、速記が重要な記録手段として利用されている事実は、単に速記の利用が簡便であるということだけではありません。それは、一定の社会における言語活動と、それを理解し表記する人間の知的活動という本質的な結びつきの上に成り立っているからです。

ともあれ、紙とシャープさえあれば、いつでもどこでも、ことばを正確に記録できる速記が、今後ますます多くの人たちに利用されることを願うものです。

早稲田式速記を学ぶかたに

この本は速記の独習書として作られたもので、早稲田式速記の最高省略法が詳しく述べられています。この本をマスターすることによって、速記の最高技術を身につけることが可能です。

初めて速記を学ぶかたにはやや程度の高いものになりますが、早稲田式速記通信教育の教材である速記講座、〈基本編（1巻～3巻）文法編（4巻～6巻）〉の全速記文字と、学習の要点を前半に収録してありますから、速記の入門から最高級までを統一的に学べるのが特色です。

速記講座の第1巻から段階を追って学習してきたかたは、前半の要約の中に、研究編の速記文字と関連づけた速記文字を入れてありますから、今まで学んできたことを整理しながら学習してください。

学び方Ⅰ

応用例の速記文字は、できるだけ重複を避け、しかも各段階で速記文字の妙味を味わえるように選んであります。部分的に不便を感ずるものがありますが、全編を終了するまでには解決しますから、各段階での文字を使い慣らすことを第一にしてください。

学び方Ⅱ

速記の学び方（独習）には幾通りかの方法があります。

- 1) 順を追って練習していく。
- 2) 最初に全編を読み、だいたいの理解を得た上で練習していく。

大きく分けるとこの二つになりますが、どちらの方法を選ぶかは各自で決めてよいことです。

学び方Ⅲ

速記上達のかぎは練習方法のよしあしにかかっています。この本でも重要な点は説明してありますが、日常の練習を効果的に行なうために、学習指導

書としての「月刊」速記学習」と、早稲田式独自の添削（書き方の訓練）指導を受けることが大切です。

速記の歴史

日本の速記

明治15年10月28日、田鎖網紀によって「日本傍聴筆記法」が発表されました。このとき東京で開かれた講習会が基になって、日本で初めての速記実務者が出ました。それで、速記界ではこの日を記念日として祝っています。明治維新の大変革後、政府の助力による欧米文化の導入、学術技芸勃興の目ざましかった時代に、速記だけはまったく一個人の力によって工夫され、世に広められたのです。

わが国には、明治23年第1回帝国議会開会以来の速記録が残されていますが、これは速記の実用価値がまったく不明であった時代に、符号の研究、実地応用、普及宣伝、門生の養成に力を注いだ、田鎖門下の努力によるものです。

早稲田式

大正13年、早稲田大学内で、田鎖式、荒浪式、佃式の研究を始め、さらに中根式、武田式等を研究、これら各式の長所をとり短所を捨てて、昭和3年、第1期の早稲田式速記法が作られました。以後実地の体験、研究を重ね、他の方式の研究をも続けた結果、昭和5年3月に早稲田式独特の文法が完成されました。これが現在の早稲田式速記です。

目 次

〈基本編〉

1. 速記文字の割出図	9
2. 基本文字	10
1) 清音の書き方	10
2) 撥音の書き方	14
3) 詰音の書き方	16
4) 拗音の書き方	17
5) 半濁音, 半濁拗音および特殊文字の書き方	19
6) 濁音の書き方	20
7) 長音および長濁音の書き方	22

〈文法編〉

1. 重音省略法	26
2. 数字の書き方	27
1) 基本数字	27
2) 分数, パーセント, 歩合	30
3) 若干数	31
4) 順位, 数量その他の数の書き方	32
5) 年号, 年月日, 時分	33
6) メートル法	35
3. イ音省略法	37
1) ウ列のイ音省略文字	37
2) オ列のイ音省略文字	37
3) イ音省略の応用例	38

4. ク音省略法	39
1) 1音目のクは普通に書く	39
2) 2音目のクは小かぎをつける	39
3) 3音目以後のクは半かぎで書く	39
4) かぎの書き方拡大図	43
5) ク音省略の応用例	44
5. ツ音省略法	46
1) 1音目のツは普通に書く	47
2) 2音目のツは最小円をつける	47
3) 3音目以後のツは字尾を交差させる	48
4) ツ音省略の応用例	49
6. 2音文字	51
1) 2字目にンのある2音文字	51
2) 2字目にイのある2音文字	52
3) 2字目にクのある2音文字	54
4) 2字目にツのある2音文字	56
5) 2字目にキのある2音文字	59
7. 同行省略法	62
1) 直接同行省略法	63
2) 間接同行省略法	68
8. 助詞と一般的常用語	69
1) 助詞の書き方	69
2) 一般的常用語	73
9. 助動詞の書き方とその活用	75
1) 肯定の加点・スル	75
2) 否定の小円・セズ	79
3) エ列(タテルレバ)の省略法	82
4) 口語助動詞	84

5) 受身の助動詞	90
6) 使役の助動詞	93
7) その他の助動詞	94
8) 助詞・助動詞と語彙との関係	96
10. 口語文の常用語	97
1) 口語常用語の語尾変化	97
2) 常用動詞の語尾変化	100
3) ニに続く常用語	103
4) その他	105
1. 上下段使用法	107
1) 上段使用法	107
2) 下段使用法	108
3) 特殊上下使用法	110
12. 個人簡略について	112
1) くりかえしの書き方	112
2) 反対熟語と反語の書き方	113
3) 成語、成句の書き方	114
13. 臨時文字の使い方	114
14. 聞き手の語音やその他の書き方	116

〈研究編〉

練習方法について	118
めくら書きの練習	118
臨機応変の応用	119
耳で聞く練習	119
速度の進み方	120

簡字の構成	121
1. ラ行省略法	122
1) 清音のラ行省略	122
2) 拗音のラ行省略	128
3) 半濁音のラ行省略	129
4) 他の省略法とラ行省略の関係	132
2. 和語省略法	143
和語2音文字	147
1) カ行音の同列2音文字	149
カ行同列2音文字と関連した文字	
2) サ行音の同列2音文字	155
サ行同列2音文字と関連した文字	
3) タ行音の同列2音文字	157
タ行同列2音文字と関連した文字	
4) ナ行音の同列2音文字	164
5) ハ行音の同列2音文字	168
6) マ行音の同列2音文字	172
ナイとナシ、ナクとナキの区別	
7) ヤ行音の同列2文字	181
2音文字の暗記法	184
書き方の注意	186
3. 漢語省略法	188
1) ツ音とチ音の関係およびその省略法	188
2) キ音とク・ツ音の関係およびその省略法	197
3) ク音の省略と2音文字の追加	202
4) 拗音のツチキク省略法	204
4. 加點省略法	211
加點省略法が考えられた趣旨	212
1) アの加點位置とアンの書き方	213
2) イの加點位置とインの書き方	214

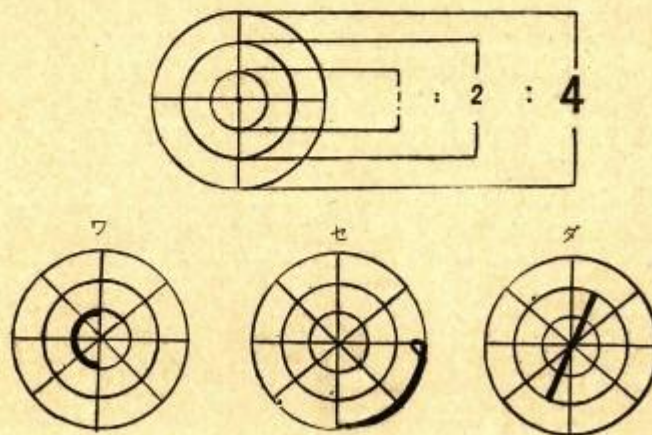
3) チの加点点位置	215
4) カの加点点位置応用	217
5) シの加点点位置応用	221
6) ミの加点点応用	231
7) その他の加点点応用文字	233
5. 任意省略法	239
1) 字の上, 字の下の位置利用法	241
2) 中・内・入・出の位置利用法	243
3) ワリ(割)の省略法	252
4) ツキ・ニツイテの活用	256
5) 戻シ, 返シの応用	258
6) 消シ・越シ・通シ・その他の省略法	261
7) 特別の省略文字	267
6. 特殊簡字とその他の省略文字	272
1) その他の省略文字	277
2) 個人簡略法の補足説明	286
交差簡略法	287
同音異義について	294
狭い意味の同音異義	294
広い意味の同音異義	295
同音異義(変則的同音異義)	296
濁音の位置を利用する	296
変音符号を省略した文字を使う	297
外国語の書き方	305
アルファベットの書き方	306
外国語特有の音	307
接頭・接尾語および常用音	308
例題	311
あとがき	323

基本編

1. 速記文字の割出図

速記文字は、直線、曲線、線の長さ、長さの割り合い、方向によって区別されます。次の図は速記文字の基礎になる割り出し図で、1 : 2 : 4の比率を持った円および同じ比率の直線からすべての文字が生まれてきます。(基図1)

基図1



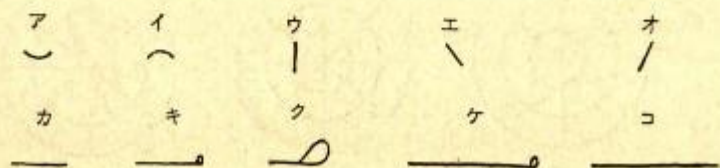
2. 基本文字

速記の文字は、ちょうどかたかなやひらがなのように、発音の通りに表わす音標文字です。この中で基本になる文字は次の7種類です。1) 清音(基図2) 2) 撥音(基図8) 3) 詰音(基図9~11) 4) 拗音(基図12) 5) 半濁音, 半濁拗音と特殊文字(基図13~14) 6) 濁音(基図15) 7) 長音, 長濁音(基図16~17) これだけを覚えれば、ごく簡単な線ですべてのことばを書き表わすことができます。このうち濁音や長音などは清音に一種の符号をつけ、半濁音, 半濁拗音などは清音の線を基にしてできたものですから簡単に覚えることができます。

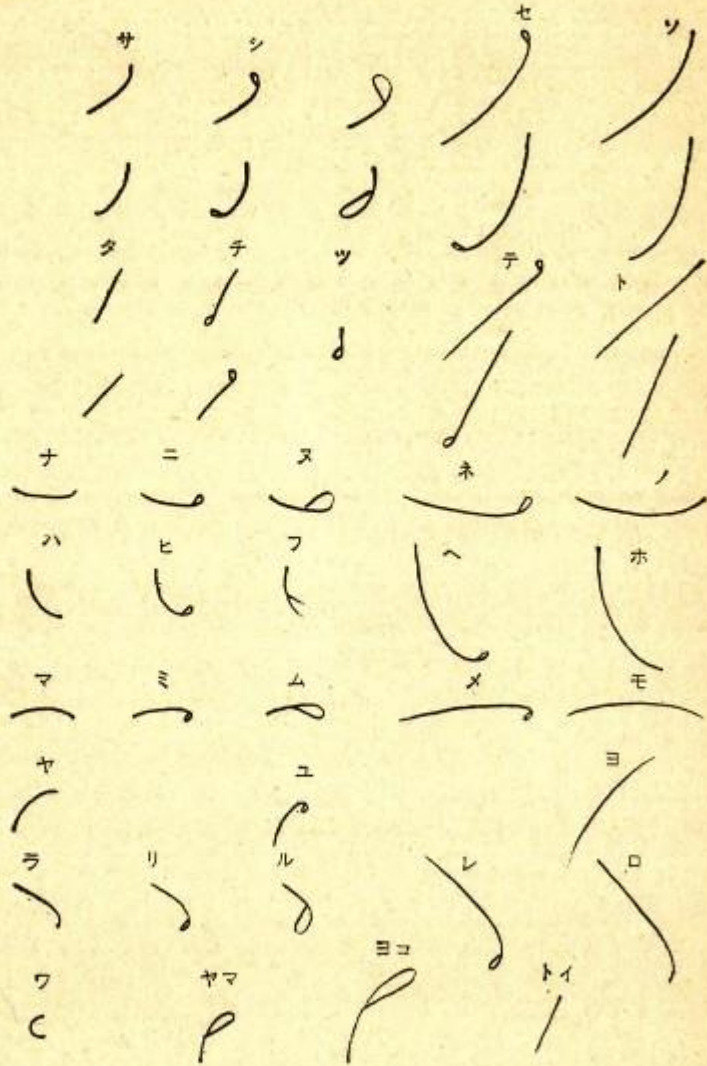
速記文字として使う線には、腕の運動方向や、速度を加えた場合の書きやすさ、書きにくさ等を比較して、簡単に速く書ける線が充てられています。その中でも頻度の高い音に対しては、最も簡単な線を充てています。この関係は省略法が進んでも変わりません。

1) 清音の書き方 (基図2)

基図2 -1



基図2 -2



正規と変規を区別する理由

ナ行とタ行は清音の中で一番使用率が高いので、どちらの方向にも自由に書けるように作られています。最初の音に対しては必ず正規を使い、2音目以後は前の字に対してつづりやすいほうを使います。

ウとタイは同じ文字ですが前後の文章によって区別できます。

イチ・ヒトは数字の1を意味する場合に使い、数字を意味しないヒト（人）には使いません。

文字のつづけ方で注意すること。

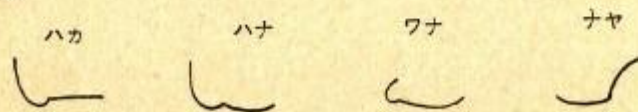
a) ゆりつぎの書き方——同じ方向に文字が続くときは最初の文字の終わったところから少し筆を返して、そこから次の字を書いていきます。その文字のつぎ目は鉛筆が3回通るのでほかの部分より濃くなります。（基図3）

基図3



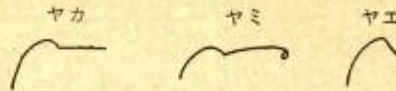
b) ゆり上げの書き方——ハ行単線にカ行、ナ行、ナ行単線にヤ行、ワ行単線にナ行が続くときは、前字の字尾をゆり上げて次の文字とのつなぎ目をはっきりさせます。（基図4）

基図4



c) ゆり下げの書き方——ヤ行単線にカ行，マ行およびエが続くときは前字の字尾をゆり下げます。(基図5)

基図5



d) 流し書き方——アとマ行，イとナ行，ナ行単線とマ行，マ行単線とナ行，ハ行単線とラ行が続くときは流して書きます。(基図6)

基図6



以上の書き方は次のことを考えて定められました。

イ 読み誤まりがないこと，同方向に続く文字をゆりつぎをしないで書くと，たとえばケあるいはテと区別ができない。またワにつづくナ行なども，ゆり上げをしないで書くとカ行の文字とまちがいやすくなる。同じようにヤとエの場合も，速度が加わったためにヤの線が多少曲がったのか，エの文字が入っているのか区別できない。

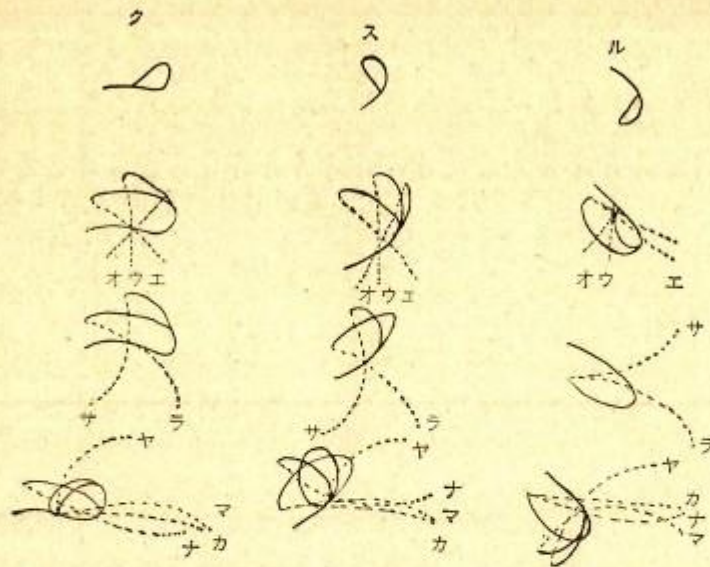
ロ 自然に書けること，ヤ行の単線にカ行，マ行が続くときゆり下げをしないで書こうとすれば，角度や直線，曲線の区別があいまいになる。

複線文字から次の文字へのつづけ方

これはそれぞれの線(文字)をつづる場合に速度を落とさないよう，線の動きのむだを省く大事な運筆の一つです。この運筆はすべての複線文字にあてはまります。ただ線の長さ，字尾門の大きさの

区別ははっきり覚えてください。(基図7)

基図7



2) 撥音の書き方

撥音(ン)はことばの中に最もたくさん出てきます。しかし清書の助けを借りなければ完全な音として表われない半人前の音なので半音ともいいます。この書き方は

- 前の音(文字)の字尾を右45度斜め上あるいは右横にはじく。
- アン・サン(正規)・ソン(正規)・ナン・ノン・ハン・ホン・ワンは字尾をとめないで線の流れる方向に力を抜く。
- ンの次に続く音(文字)は、はじいた線の延長線上に近づけ

て書く。(基図8)

基図8

	フ	ク	ケ	コ	カ
カン	一	一	一	一	一
ヤン	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
タン	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
ナン	一	一	一	一	一
ハン	シ	シ	シ	シ	シ
マン	一	一	一	一	一
ヤン	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
ラン	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
ワン	シ	シ	シ	シ	シ

3) 詰音の書き方

詰音(っ)も半人前の音です。普通の文字ではっと書きますが、速記では1字をもむだに書かないように、っは全く省略した書き方をします。

詰音は2種類——a 一つは連続詰音といって感情を表わすので「アッ、ハッ、エッ」などです。(基図9)

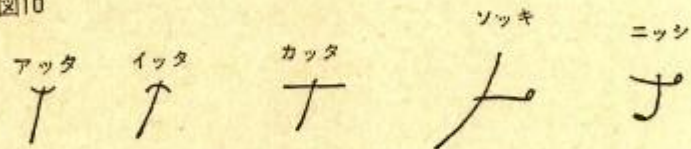
基図9



b もう一つは接続詰音で、一般に詰音という場合はこの接続詰音のことです。音と音(文字と文字)の間にはさまって発音されるっのことです。

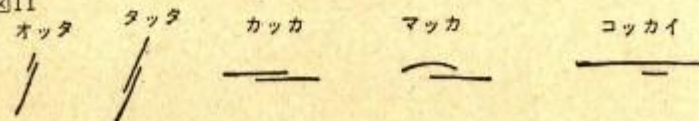
イ 前字の中央に後字の字頭を交差する。(基図10)

基図10



ロ 前字と後字の方向、角度が同じときは、前字の中央下側に後字の字頭を少し離して平行に書く。(基図11)

基図11



4) 拗音の書き方

拗音の連記文字は全部で27字あります。このうち最もよく発音される音は、拗音カ・サ・タ行の9字（シェ・チュは日本語には少ない）と、ニュ・ヒョ・リュ・リョの4字合計13字です。連記文字はこれら日常語に頻発する音に対して書きやすい線をあて、あまり使われない音に対しては比較的不便な線をあてています。このことは拗音だけの関係ではなく、連記文字全体にあてはめていえることです。（基図12）

基図12



注意 拗音のチャ・チュは清音のタ・チと似ていますが、次の点で区別されます。

(a) タ・チはなるべく正規（上から下の線）で書くこと。

- (b) チャ・チュはなるべく正規（下から上の線）で書くこと
- (c) タ・チが2字目以後に続いたときはなるべく垂直に立てるような気持で書くこと
- (d) チャ・チュが2字目以後に続いたときはなるべく水平に寝かせるような気持で書くこと

以上に注意して書いたり読んだりすればまちがうことはありません。また万一同じ文字になってもそのことばの持っている意味と前後の文章のつながりによって区別できますから心配いりません。リュとリョの場合もあとに続く文字の方向によって綴字上同じ形になりますがやはり区別して読めます。——旅行、流行——

◇ 拗音を覚える上での参考事項

a 拗音のア列（キヤ・シヤ・チャ・ニヤ・ヒヤ・ミヤ・リヤ・ツア）は、キヤ・ツア・ヒヤの3字を除いて清音のア列と似た線で構成されています。

b 拗音のウ列（キュ・シュ・チュ・ニュ・ヒュ・ミュ・リュ）はキュ・ヒュの2字以外は清音のイ列と似た線で構成されています。

(a, b)の原則は発音そのものが互いに似ている関係上 覚えやすいことを根拠にしてきめられています。

c 拗音のオ列（キョ・シヨ・チヨ・ニョ・ヒョ・ミョ・リョ・ツォ）はチヨを除いて、すべてその字末にオの楕円がつけ加えられて構成されています。

d オ列のうちでシヨとニョは他の拗音に比べて長い線が用いられています。シュはツ、ニョはノの線を基本にしています。

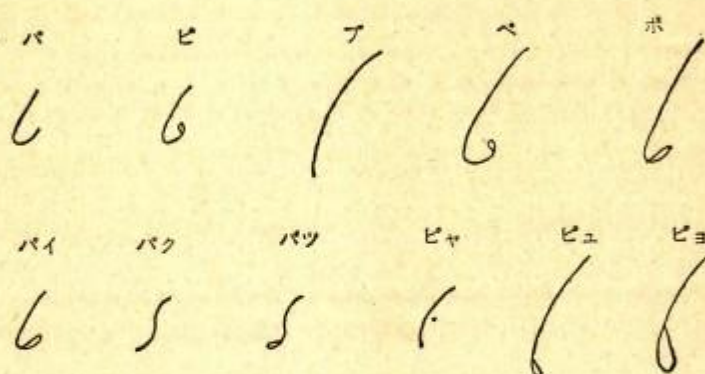
e ツァ行はツを基本にしています。（普通のことばの中にはほとんど使われない）

一般に拗音は濁音、長音、長濁音として発音される場合がほとんどです。——御苑、魚類、じゃま、樹木、受信機、助役、近所、除夜の鐘——〔基図13〕

5) 半濁音, 半濁拗音および

特殊文字の書き方

基図13



以上の発音は拗音ヒャ・ヒュ・ヒョと似ているので、文字もヒャ行の線から作られています。これらの文字は次のような場合に多く使われます。

a 外国語の単語として、あるいはもと外国語であったものが現在では日本語になっているもの。

英語から——ピアノ, ランプ, ピストル, スープ, ポケット

フランス語から——シャッポ

オランダ語から——コップ

スペイン語から——カッパ, テンプラ

ポルトガル語から——パン

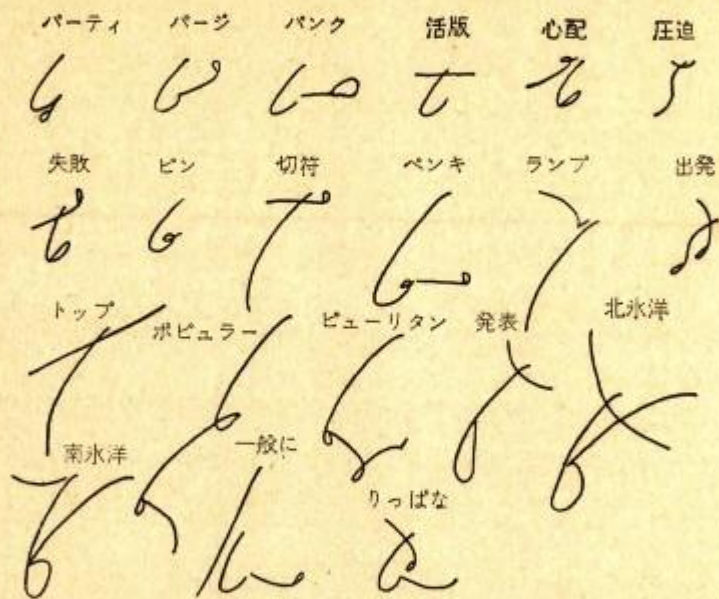
b 国語のうちに発音される場合は、たいてい撥音(ン)または

詰音（ッ）がついています。

切腹、山腹、感服、さっぴく、立法、先般、夜っびて、やっぱり
あっばれ、よっぼど、とっぴ、一般、発表、安否、憲法……。

詰音、撥音を加えた応用例（基図14）

基図14



6) 濁音の書き方

濁音を表わすにはそれぞれの文字に点を打ちます。その位置は

- a 水平方向に伸びる文字には、中央下側に約2ミリ離して加點

- b 斜めまたは垂直の文字には、左側中央に約2ミリ離して加點
- c 濁音が連続するときは、両方の文字のつぎ目に加點

以上の加點は一つの単語を書き終わってから打ちますが、一般に文章の中では、特にまぎらわしい場合とか、自分の知らない固有名詞のほかは加點をしないで清音のまま書いても前後の文章の続きぐあいで見えます。なお濁音の位置は長音の位置と同じですから、次の長音文字表を参考にしてください。(基圖15)

基圖15



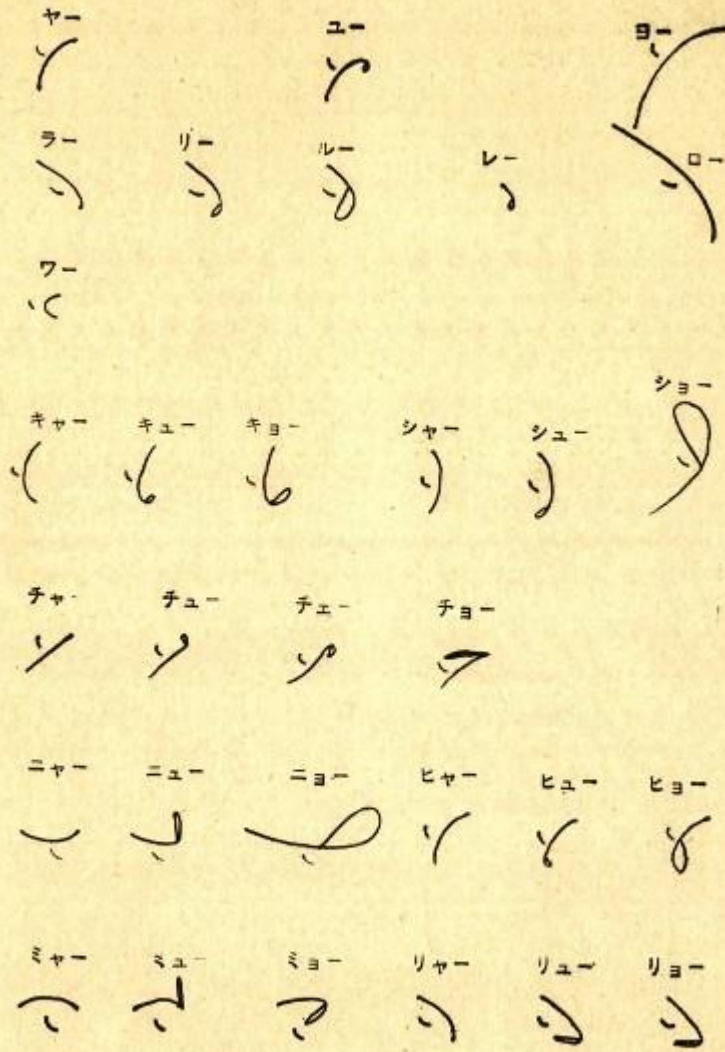
7) 長音および長濁音の書き方

長音符号の位置も濁音と同じ場所です。長濁音の場合は長音符号で各文字の中央を切ります。この符号も濁音符号と同じように文章の中では一般に省略して正しく読むことができます。(基図16)

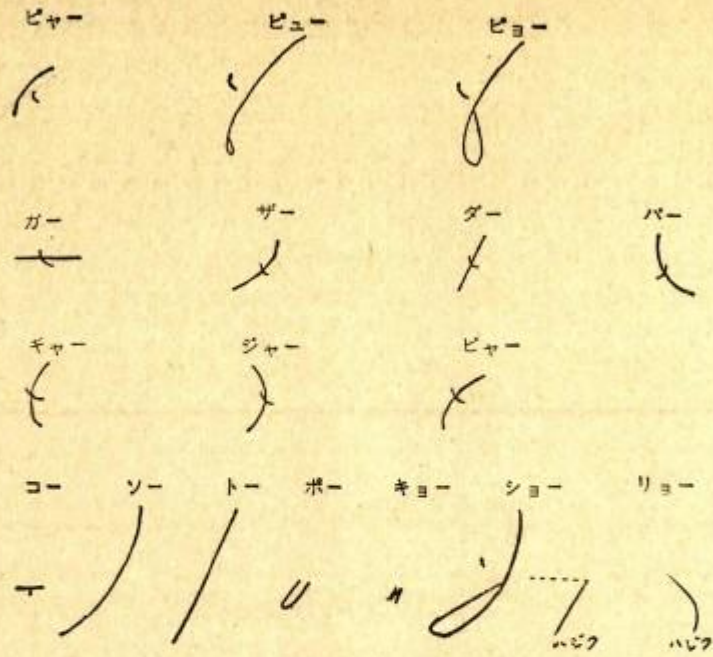
基図16-1

アー	イー	ウー	エー	オー
ゎ	っ	ゑ	ゎ	ゎ
カー	キー	クー	ケー	コー
ゎ	ゎ	ゎ	ゎ	ゎ
サー	シー	スー	セー	ソー
ソ	ッ	ッ	ッ	ソ
ター	チー	ツー	テー	トー
ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
ナー	ニー	ヌー	ネー	ノー
ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
ハー	ヒー	フー	ヘー	ホー
ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
マー	ミー	ムー	メー	モー
ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

基図16-2

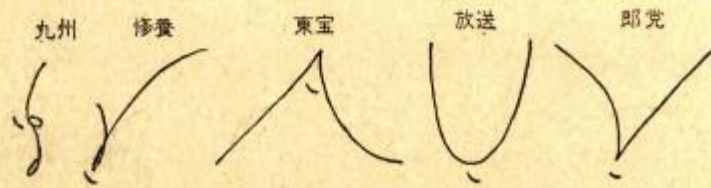


基図16-3



a 長音と長音が続いた場合は、文字のつぎ目の下あるいは左に長音符号を書きます。(基図17)

基図17



b 長音と濁音、あるいは濁音と長音、それに長濁音との各組み合わせのことばがありますが、これを一つ一つ符号で書き分ける必要はありません。たいていは前後の文章で区別して読むことができます。また特にまぎらわしいと思うことばの場合は、そのことばの中の特長的な音、あるいは強く響く音にのみ濁音、長音、あるいは長濁音符号をつけることによって十分区別して読むことができます。この符号をつける一応の目安は次の点です。

イ 長濁音と他の音との組み合わせの場合は長濁音の響きが一番強い——騒動、常習、事情、議場、場外——（基図18）

ロ 長音と濁音の場合は長音のほうに重点をおく——当分、相談、微笑、人口、晩鐘——（基図19）

基図18



基図19



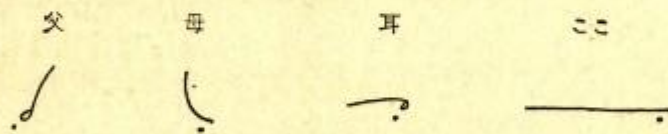
以上清音から長濁音までの文字を使ってすべてのことば、文章を書くことができます。しかしこの基本文字だけでは第1に書きにくく、第2にことばの調子、速度に合わないという不便さがあります。この点をこれからの文法によって解決していきます。

文 法 編

1. 重音省略法

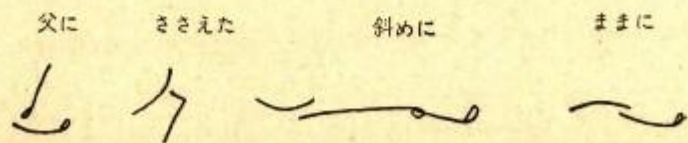
1) 父・母・耳・ここ・のように1音が重なる場合、前字尾の左斜め下約2ミリのところに点を打つ。(文図1)

文図 1



次に続く文字は加点の位置から書く。(文図2)

文図 2



2) いろいろ・さまざま・なかなか・のように2音が重なる場合

も1重音と同じ書き方をする。(文図3)

文図 3

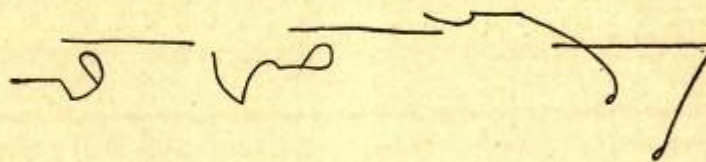
いろいろ さまざま なかなか そろそろ せいぜいちかぢかに 内々に



3) かえすがえす・早く早く・のように3音以上が重なる場合は
前の字の上から横に20~30ミリの線を引く。(文図4)

文図 4

かえすがえす 早く早く ながれながれて



2. 数字の書き方

1) 基本数字 (文図5)

文図 5-1

一単位

1 2 3 4 5 6 7 8 9

文图 5-2

十单位

1 2 3 4 5
6 7 8 9

百单位

1 2 3 4 5
6 7 8 9

千单位

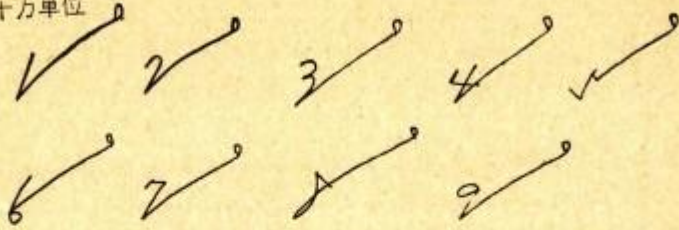
1 2 3 4 5
6 7 8 9

万单位

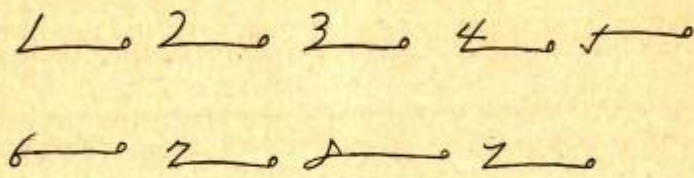
1 2 3 4 5

文图 5-3

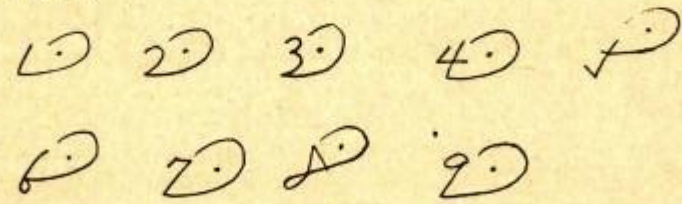
十万单位



百万单位

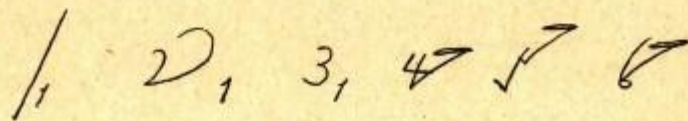


千万单位



億位

兆位



2) 分数, パーセント, 歩合 (文図6)

文図 6

$\frac{1}{2}$	$\frac{2}{3}$	$\frac{1}{10}$	$\frac{3}{10}$
2 /	3 /	✓ /	✓ /
11	2	11	3
$\frac{9}{1000}$	$1\frac{3}{5}$	5%	32%
D /	5 /	✓ /	32 /
9	3		
100%	5割		10割
✓ /	✓ /	✓ /	
3割5分7厘	1割9分8厘6毛	2割4厘	
3 /	9 /	2 /	
7	8	4	
○	分	毛	
	厘		

3) 若干数 (文図7)

文図 7-1

序数 一・二	二・三	三・四	百二十五・六	二・三の
/	2	3	/25	20
1935.6年			十七・八才	百五・六十
/935			/7	/5
千二・三百			一万二・三千	
D2			1~20	
ないし			二十五	ないし 四十
百ないし二百				
L	~ 2		25	~ 4
三	ないし 五			
3	~ 5			
何				
何十		何百	何千	何万
✓	~	~	~	~

文図 7-2

数 数十 数百 数千 数万 数千万

Handwritten symbols for 数十, 数百, 数千, 数万, 数千万

幾 幾十 幾千 幾万 幾億

Handwritten symbols for 幾十, 幾千, 幾万, 幾億

ならびに

二十五ならびに二十六

四ならびに五

25 = 26

4 = 5

4) 順位, 数量その他の数の書き方 (文図8)

文図 8-1

第1 第2 第3 一? 二つ 三つに
1章 2章 3章 1条 2条 3条
Handwritten symbols for 1章, 2章, 3章, 1条, 2条, 3条

文图 8-2

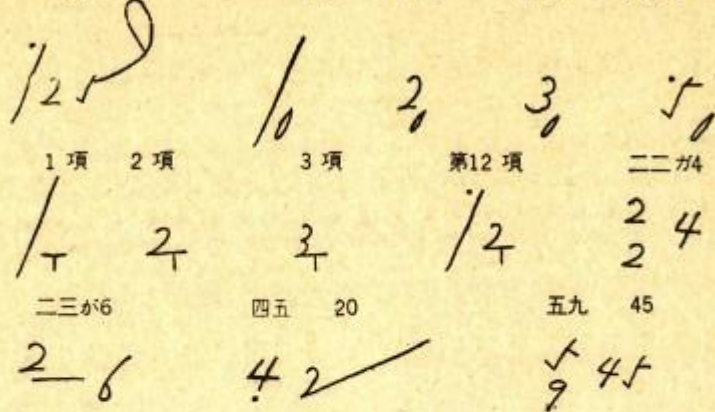
第125条

1号

2号

3号

第5号



5) 年号, 年月日, 時分 (文图9)

文图 9-1

明治

大正

昭和

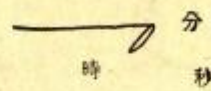
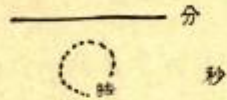
昭和 年度



文図 9-2

(午前)

(午後)



明治38年8月6日

明治40年の7月10日

38 26

45 7

昭和35年10月6日

昭和40年2月9日 昭和36年度

35 6

49 36

3カ年

3,4カ年

昭和40年度

4.5日

3 3

4

4
1

5ヶ月

3ヶ月

3.4ヶ月

今年(こんねん)

✓

3

3

7

ことし

毎年

来年

さらいねん

昨年

✓

✓

✓

✓

✓

文図 9 - 3

一昨年	明年	去年	数年
午前3時45分	午後5時に	午前7時半	

6) メートル法 (文図10)

文図 10 - 1

メートル	キロ	センチ	ミリ	マイクロン
ミリメートル	平方	キロメートル	センチメートル	立方
リットル	マイル	ドル	億ドル	億円

文図10-2

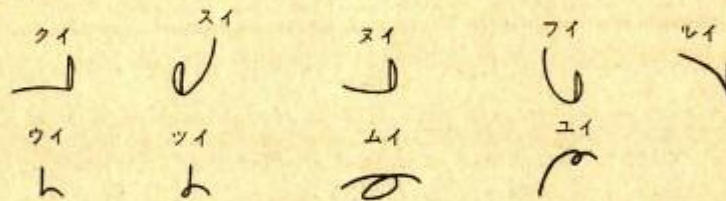
トン	デシメートル	立方メートル	センチメートル	平方メートル
ト	ダ	立	セ	ハ
ミリグラム	キログラム	ミリリットル	ヘクトリットル	キロリットル
グ	キ	リ	ヘ	キ
ポンス	ポンド	ヘクト		
ポ	ポ	ヘ		

3. イ音省略法

日常使っていることばの中には、第2音目にイの発音されるものがたくさんあります。それでこのイを省略することは速度の上に大きな影響を与えます。説明の都合上「アイ・カイ・サイ・ケイ・セイ……」などのア列とエ列のイ音省略文字は〔文図37-1, 52ページ〕に入れました。ここではウ列、オ列のイ音省略を説明します。

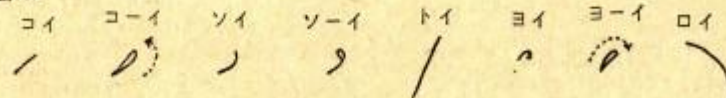
1) ウ列のイ音省略文字 (文図11)

文図11



2) オ列のイ音省略文字 (文図12)

文図12



注意 a クーイ・スーイ・ヌーイ・フーイ・ルーイなど長音の

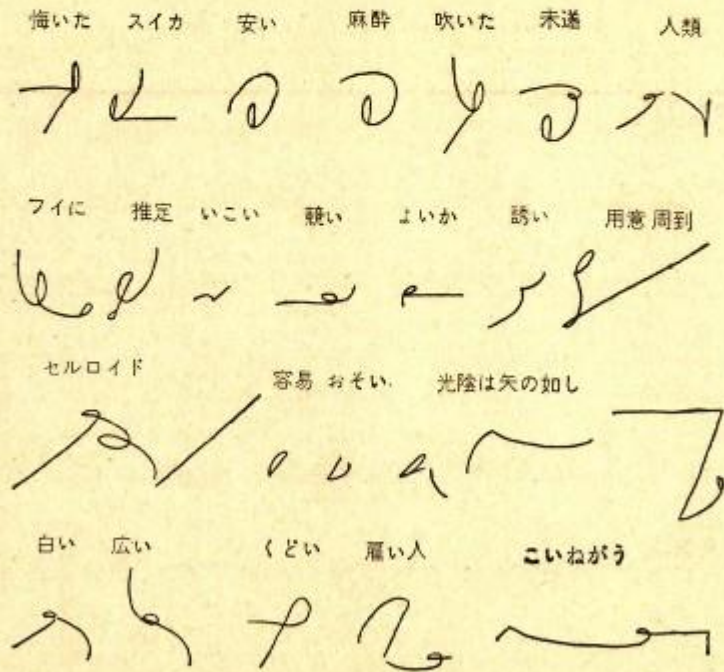
入るものは普通に基本文字で書く。

b アーとネー。イーとメーは同じ書き方だが、文章の前後の関係で区別できる。

c トイ、ロイなどの字尾をはじく文字の次にくる文字は、はじいた線の延長線上に接近して書く。(はじく文字、とめる文字をはっきり覚えること)

3) イ音省略の応用例 (文図13)

文図13




4. ク音省略法

2字目以下にクが発音される単語も「イ」の場合同様にたくさんあります。——書く、聞く、約束、たくさん、特別、科学、音楽、観測、南極、極端——このク音は次のように省略して書きます。

- 1) 1音目のクは普通を書く (文図14)
- 2) 2音目のクは小かぎをつける (文図15)
- 3) 3音目以後のクは半かぎで書く (文図16)

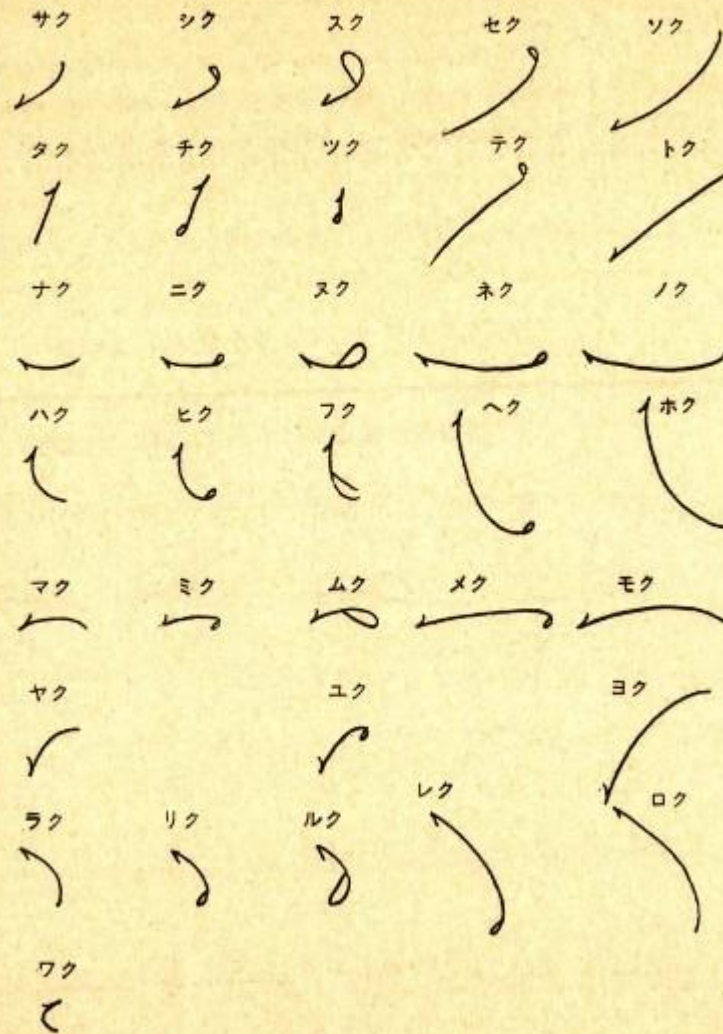
文図 14 クニ クマ クシ クダ



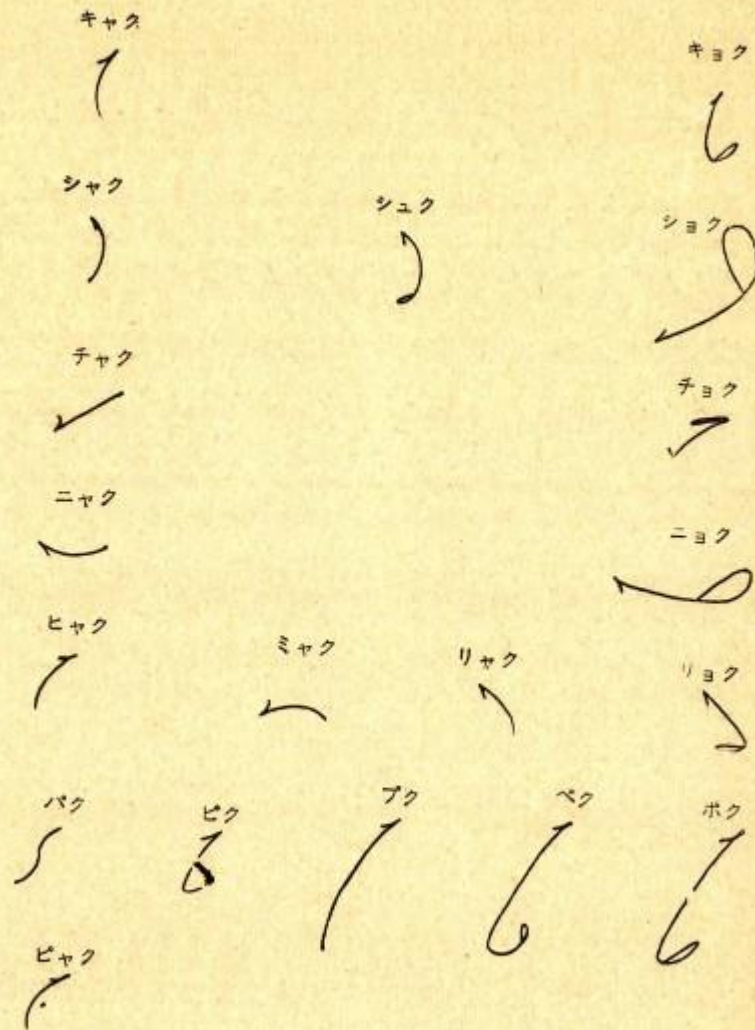
文図 15-1

アク	イク	ウク	エク	オク
㇏	㇏	1	1	1
カク	キク	クク	ケク	コク
㇏	㇏	㇏	㇏	㇏

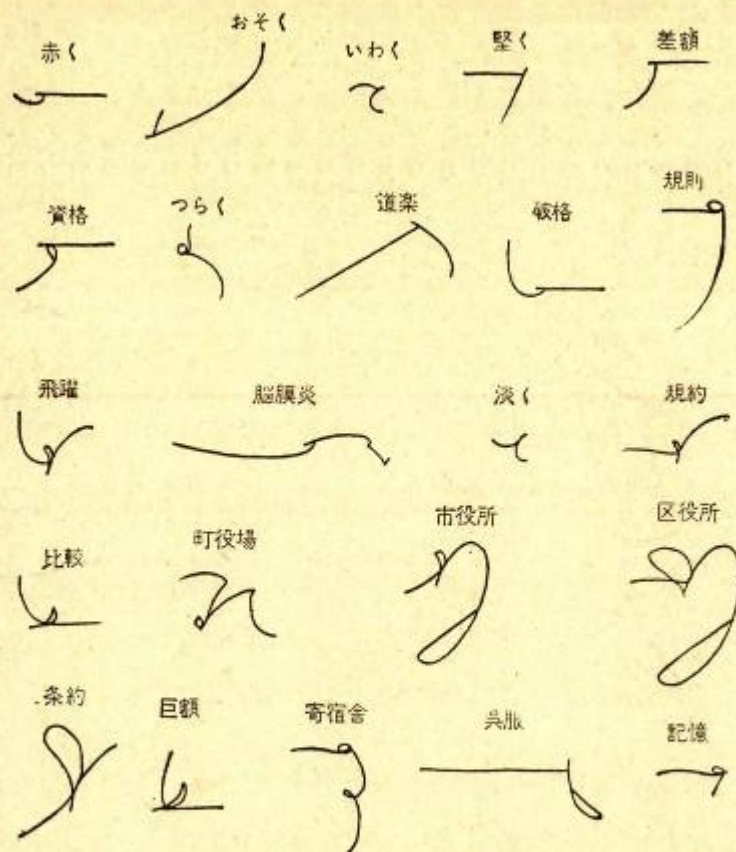
文図 15-2



文図 15-3



文図 16



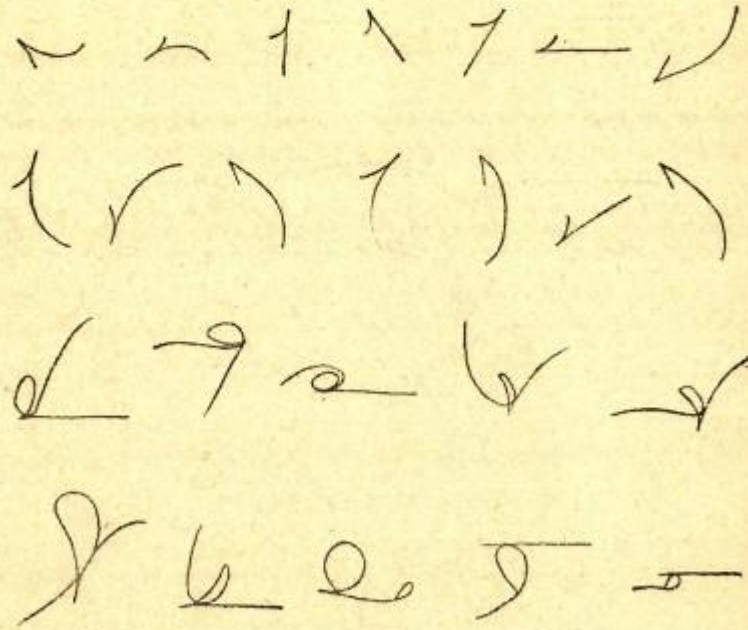
注意 a アーク灯, 航空, 速く, ホーク, 道具……などのように長音, 長濁音の次にクが発音された場合は普通に書く。これは第1に心理的にも書きにくい。第2に時間的に, 長音, 長濁音の入っていることばは清音の場合よりも2倍ないし3倍の時間を使って発

音されるので普通に書いてもまにあう。第3に普通に書いたほうが読みやすい。たとえばトク・ドクの場合は小かぎを使って書き、遠く、道具の場合は基本文字で書くために一見して区別がつく。

b ク音省略の中でも特に使用度の高い音には特別の簡略文字が作られている。これは前述の「ン」の場合にも、またこれから述べられる「ツ」その他にも共通していえることである。(2音文字の項参照)

4) かぎの書き方拡大図 (文図17)

文図 17

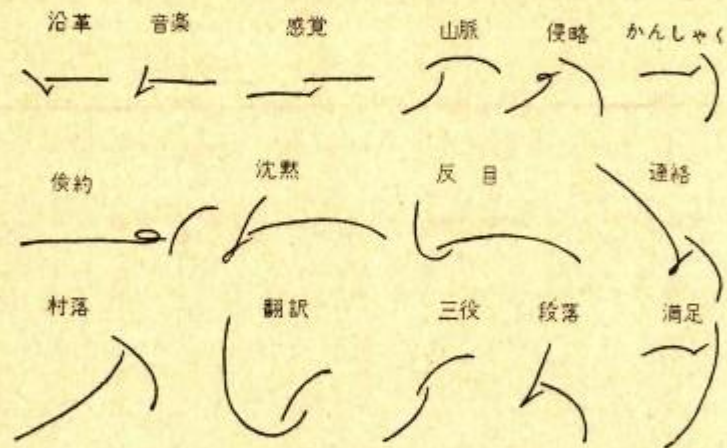


- a かぎはかるく短く、ク音省略をする文字に沿うように書く
- b 半かぎの場合文字をいちいち離して書くことは速度的にマイナスになるので、図のように前字とのつながり方がちょうど小かぎと同じ書き方になるものはそのまま筆を続けて書く。

5) ク音省略の応用例

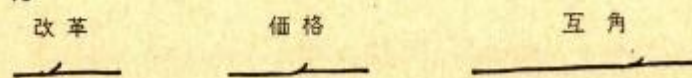
- a 撥音のあとにくる場合 (文図12)

文図 18



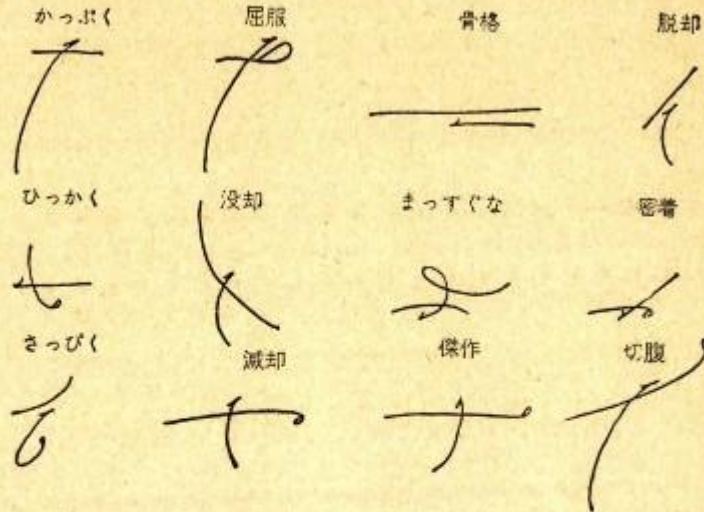
- b 同じ方向の線の場合 (文図19)

文図 19



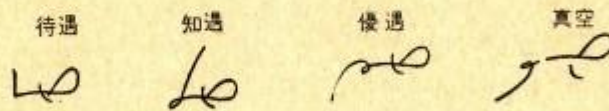
c 語音のあとにくる場合 (文図20)

文図 20



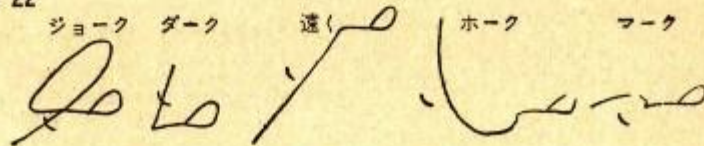
d 小かぎ, 半かぎを使うと不自然な場合
イ ク音が長音, 長濁音の場合 (文図21)

文図 21



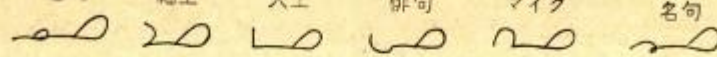
■ ク音の前字が長音, 長濁音の場合 (文図22)

文図 22



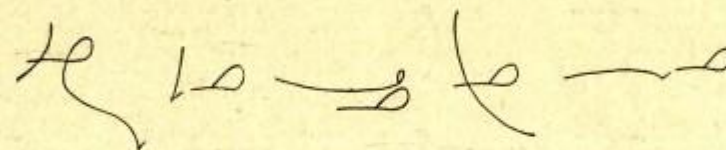
ハ イ音省略文字の次にク音が入る場合 (文図23)

文図 23

警句 細工 大工 俳句 マイク 名句


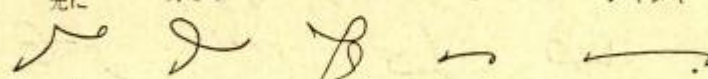
ニ 撥音, 詰音のすぐあとにク音が入る場合 (文図24)

文図 24

ザックバラン タンク ネット ホック 文句


e ク音の省略はキ音の省略にも応用できます。詳しいことは研究編で説明しますから、参考程度に見てください。(文図25)

文図 25

先に 好きな 抜き出す 右 メキメキ


5. ツ音省略法

このツ音もク音と同じように2音目以後のツで、ヤツク、トツクなどの詰音ではなく、カツドウ、マツダ、ケイサツなどの清音のツを省略する方法です。ク音省略法の小かぎを小円に変えただけですから理屈は簡単です。

1) 1音目のツは普通に書く

……月、妻…… (文図26)

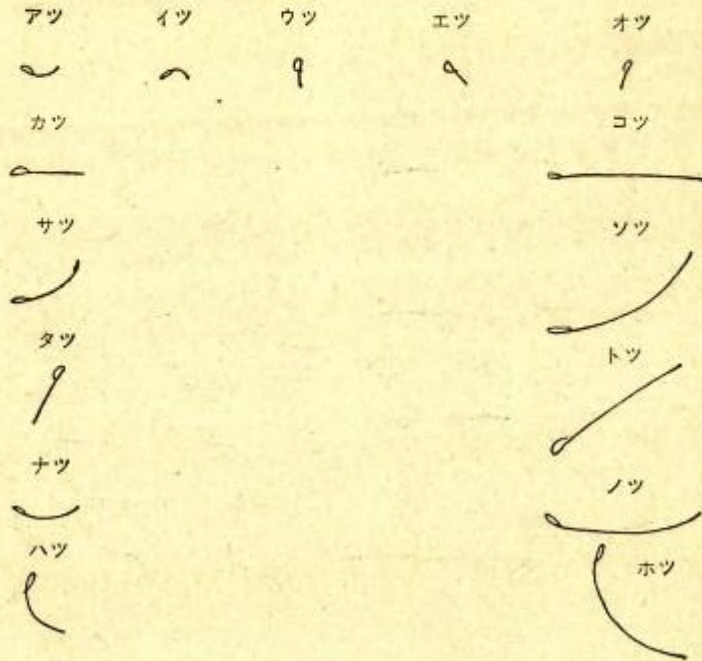
文図 26



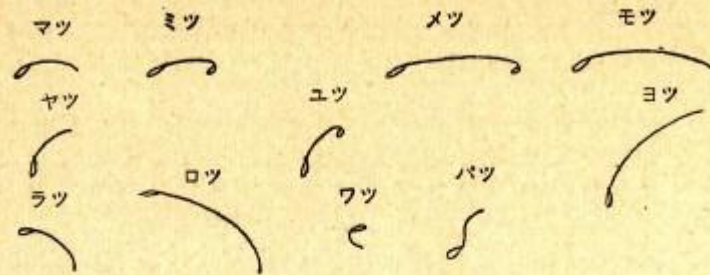
2) 2音目のツは最小円をつける

……祭り、松本…… (文図27)

文図 27-1



文図 27-2



3) 3音目以後のツは字尾を交差させる

……警察, 観察…… (文図28)

文図 28



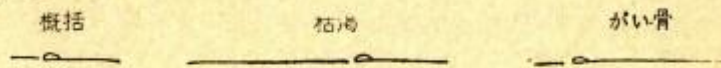
◇ ツ音の最小円使用は原則として単線文字に使い、字尾円のある

複線文字には、書きやすいものだけに限定して使う。

4) ツ音省略の応用例

a カ行が続いた場合 (文図29)

文図 29



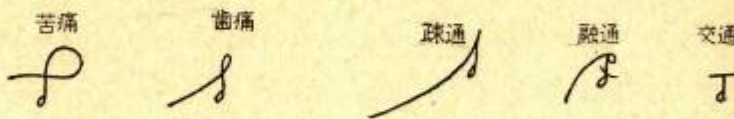
b 詰音のあとにきた場合 (文図30)

文図 30



c 最小円, 交差法を使うと不自然になるときは普通に書く
イ ツ音が長音, 長濁音の場合 (文図31)

文図 31



ロ ツの前字が長音, 長濁音の場合 (文図32)

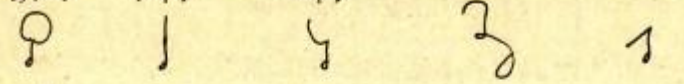
文図 32



ハイ音文字のあとにツ音がきた場合 (文図33)

文図 33

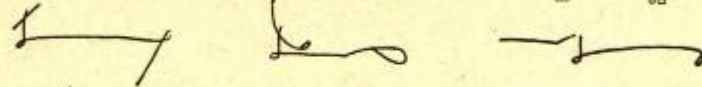
あいつ タイツ ハイツ 舞鶴 こいつ



ニ 撥音、詰音のすぐあとにツ音がきた場合 (文図34)

文図 34

おっつけた ひっつかむ 午 詰

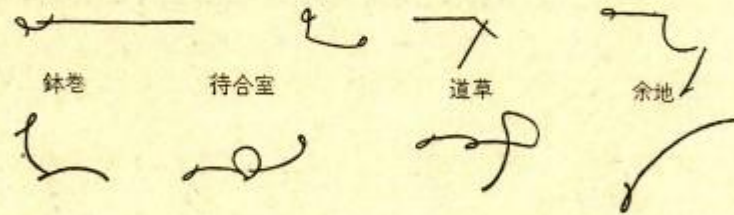


d ツ音の省略はチ音の省略にも応用できます。この詳しいことは研究編に述べてあります。(文図35)

文図 35

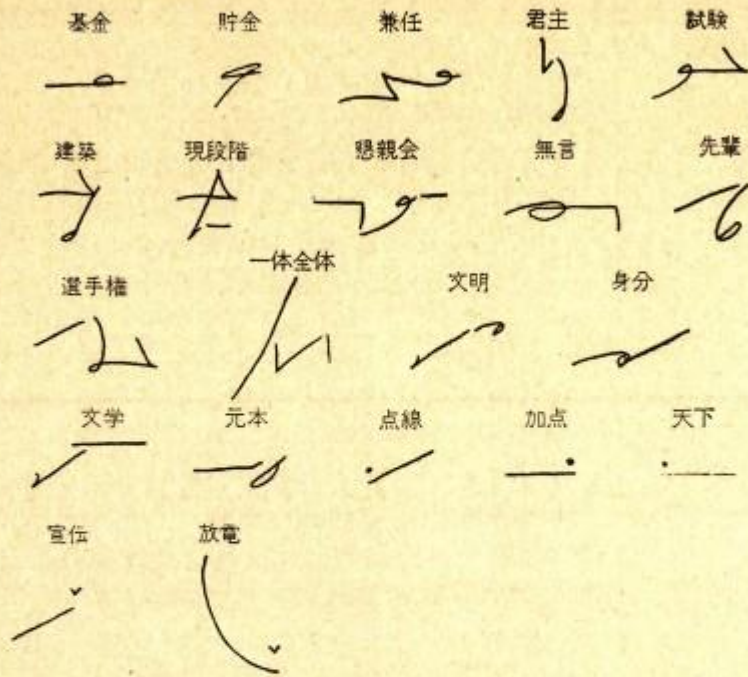
あちこち うちに 帰った 価値判断

鉢巻 待合室 道草 余地



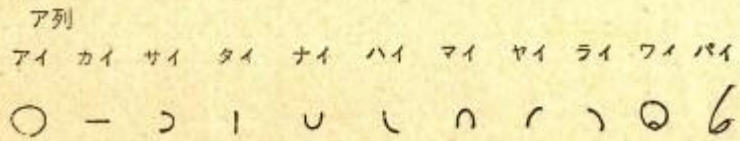
文圖 36-2

- 応用例 -



2) 2字目にイのある2音文字 (文圖37)

文圖 37-1



文図 37-2

イ列

シイ、ヒイ、ジイ、ビイ

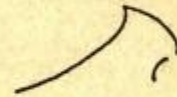
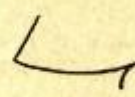
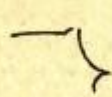


芳しい

寂しい

楽しい

そらぞらしい

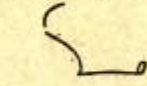
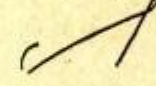
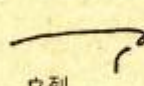


めめしい

ひいき

秀てた

ひいらぎ



ウ列

ウイ

クイ

スイ

ツイ

ヌイ



フィ

ムイ

ユイ

ルイ



エ列

エイ

ケイ

セイ

テイ

ネイ

ヘイ

メイ

レイ



オ列

コイ

コーイ

ソイ

ソーイ

ヨイ

ヨーイ

トイ

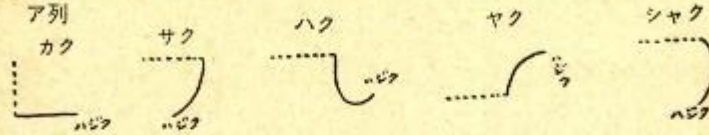
ロイ



ハジク

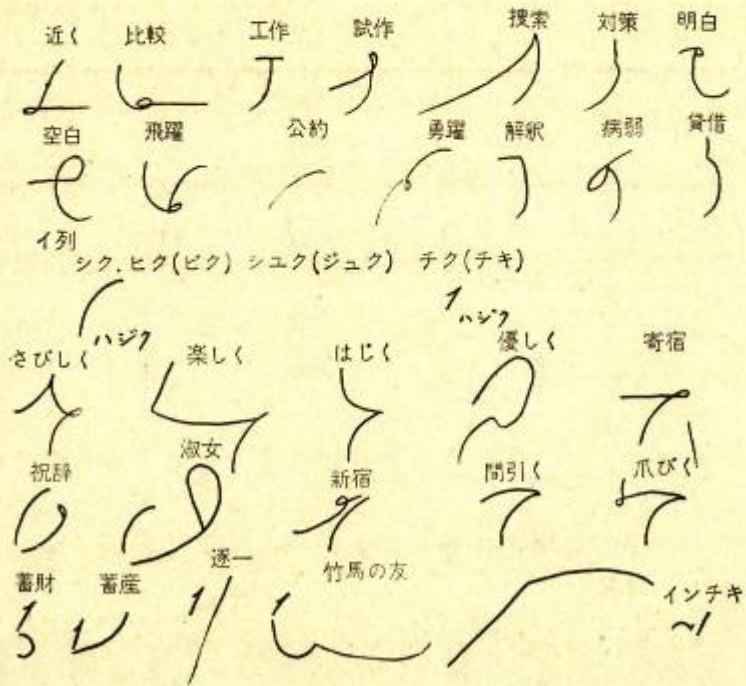
3) 2字目に「ク」のある2音文字 (文図38)

文図38-1



はじく文字は原則として2音目以後に使う (詳細は研究編)

文図38-2



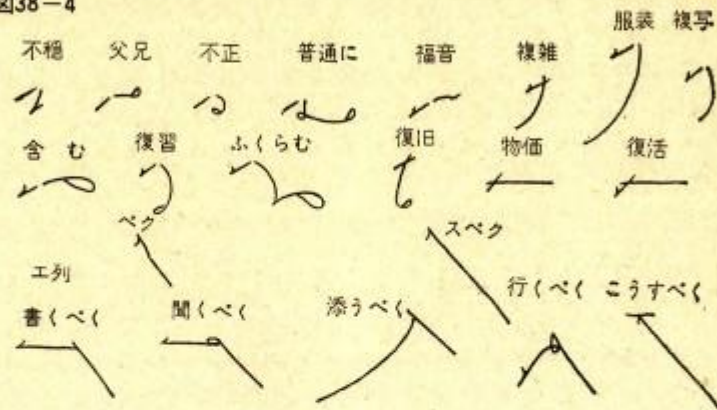
文図38-3

フ(フ)
フ

フク・フク
フ

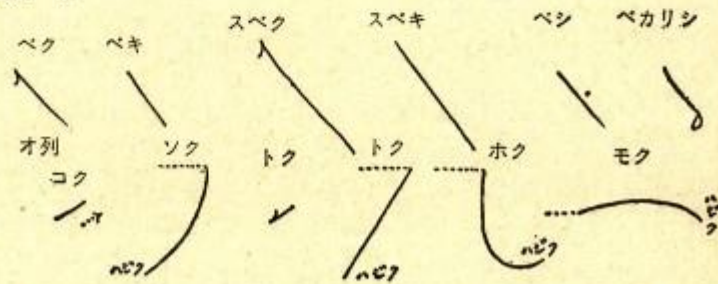
フは、フク、フツの基礎になる文字で、説明の便宜上いっしょに出してある。

文図38-4

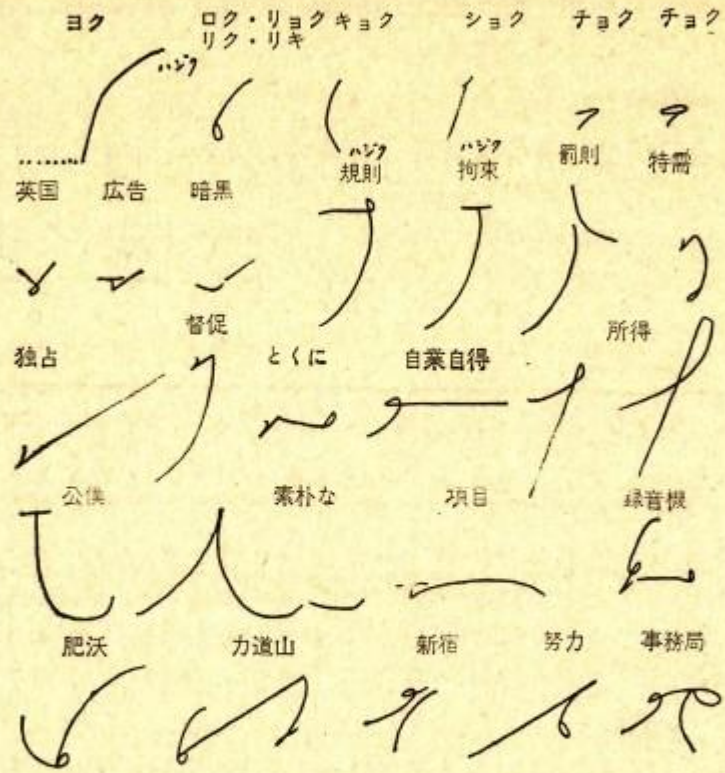


ベク、ベキ、スペク、スペキのあとにことばが続くときは全く同じ文字でも区別して読むことができるが、ベク、ベキでことばが終わるときは次のように区別する。またあまり使われないが、関連したことばとして「ベシ」「ベカリシ」がある。

文図38-5

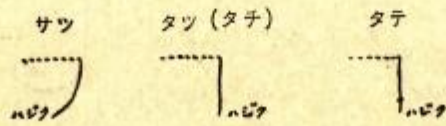


文図 38-6



4) 2字目に「ツ」のある2音文字 (文図39)

文図 39-1



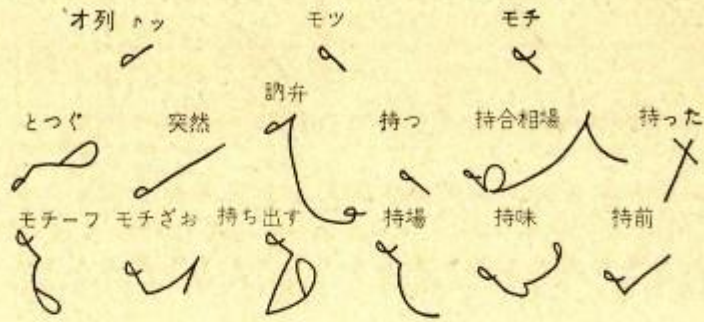
文図 39-2

あいさつ	視察	生殺与奪	惱殺	併殺	立会人		
立往生	夕立	立役者	建物	建前			
イ列	シツ・ジツ・チツ シュツ・ジュツ	ニツ (ニチ)		リツ (リチ)			
実験室	実在	实际	秩序	質実	実質	失態	実体
湿度		実に	現実	支出	事実	性質	提出
如実	名実	輸出	日常		日中	毎日	
15日	確立	自立	对立		能率		
ウ列	フツ		ツツ (ズツ)				

文図 39-3



文図 39-4

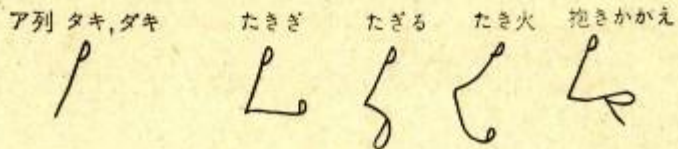


ここで今までのところを整理してみましょう。

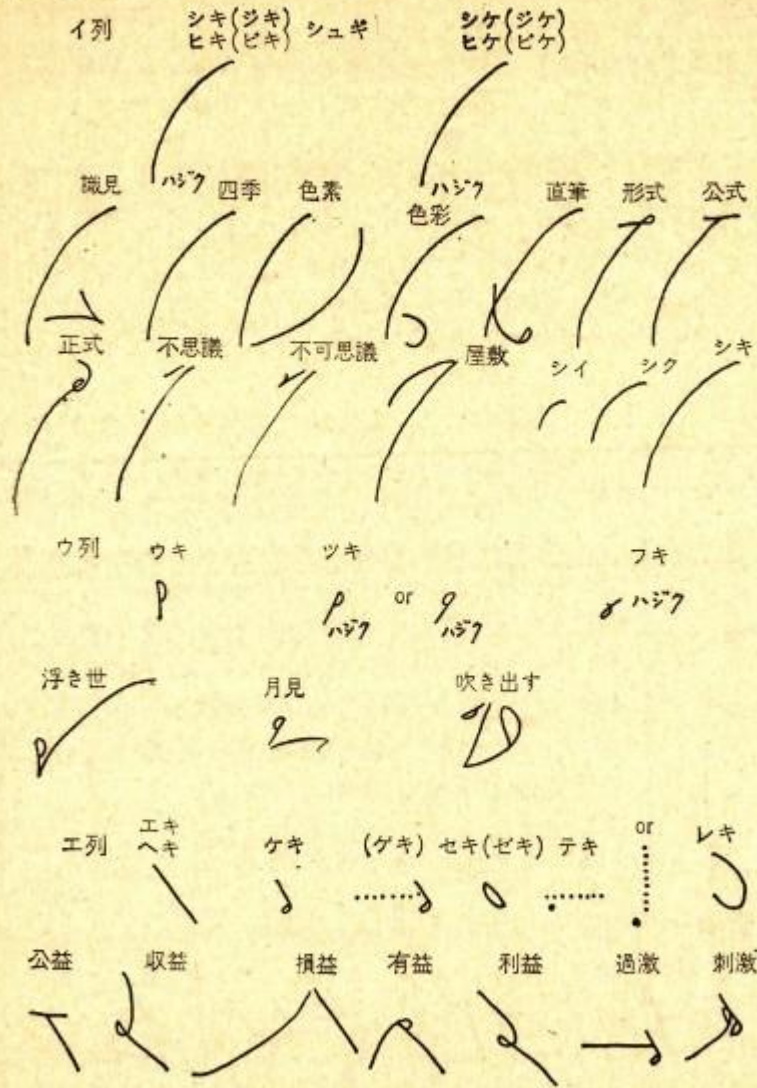
- a 点線で書かれている文字は前字あるいは後字を示します。
- b はじく文字のクあるいはツは2音目以後に使います。
- c 同一文字で幾通りもの読み方がありますが、これらはすべて文章の前後関係ではっきり区別できます。国字の場合でも「生」を生死(セイシ)、後生(ゴショウ)、生焼け(ナマ)生き(イ)生い立ち(オ)、生憎(アイニク)、生まれ(ウマ)……など前字あるいは後字の関係で読み分けますが、これと同じ理屈になります。
- d ここに述べてある2音文字の関係はあとの研究編で詳述されていますから、前後あわせて理解してください。

5) 2字目に「キ」のある2音文字(文図40)

文図 40-1



文図 40-2



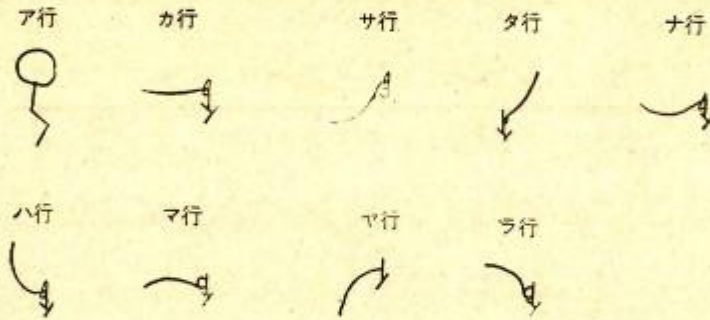
文図 40-3



7. 同行省略法

一つの単語に同行の音（カコ・過去、キケ・聞け、ホーフ・豊
富、ムミ・無味）が続いて出た場合に、あとの音は同行省略法で省
略できます。（文図41）

文図 41



同行省略法には次の種類がある。

- 1) 直接同行省略法 中間に他の音をはさまないもの。
a, 清音同行省略（文図42）,
b 変音同行省略（文図43）
- 2) 間接同行省略法 中間に他の音をはさむもの。（文
図44）

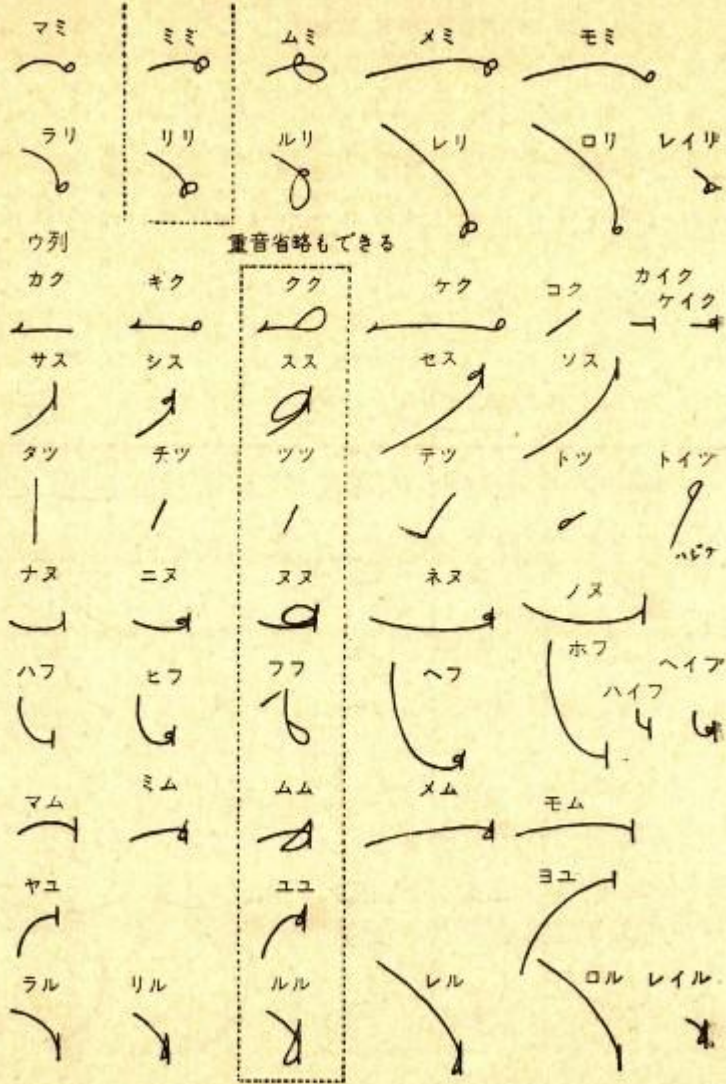
1) 直接同行省略法

a. 清音同行省略 (文図42)

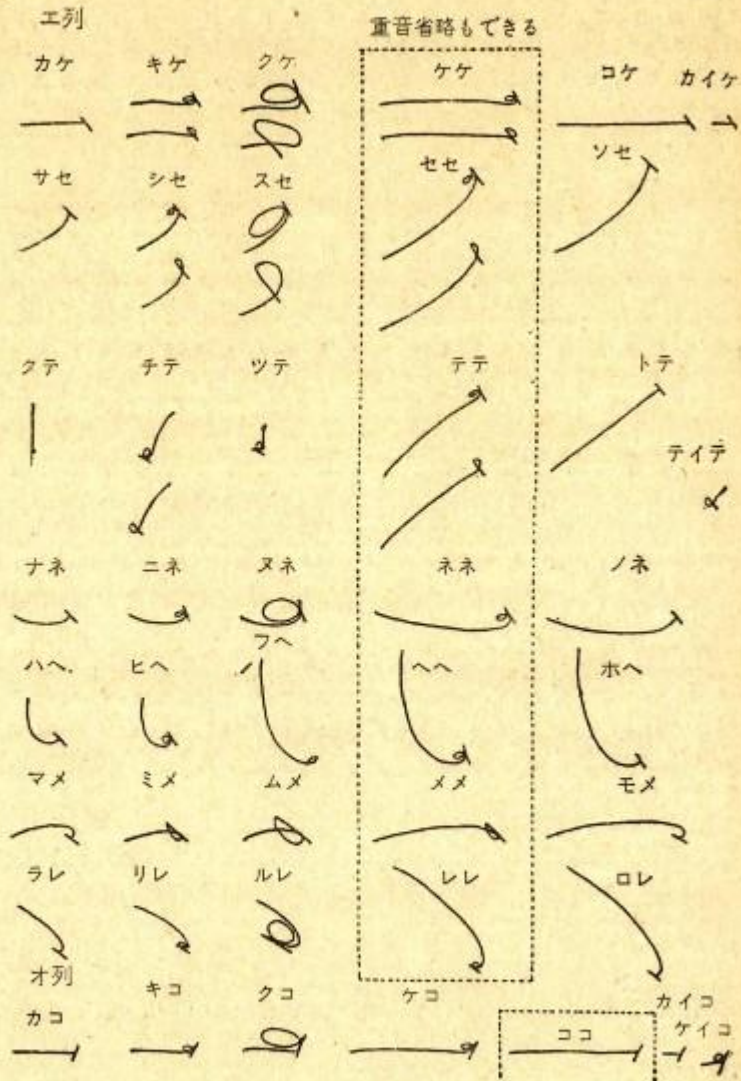
文図 42-1

ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列	
カカ	コカ	タタ	ハハ		
イ列	重音省略もできる				
カキ	キキ	クキ	ケキ	コキ	カイキ ケイキ
サシ	シシ	スシ	セシ	ソシ	
タチ	チチ	ツチ	テチ	トチ	タイチ テイチ
ナニ	ニニ	ヌニ	ネニ	ノニ	
ハヒ	ヒヒ	フヒ	ヘヒ	ホヒ	ハイヒ ヘイヒ

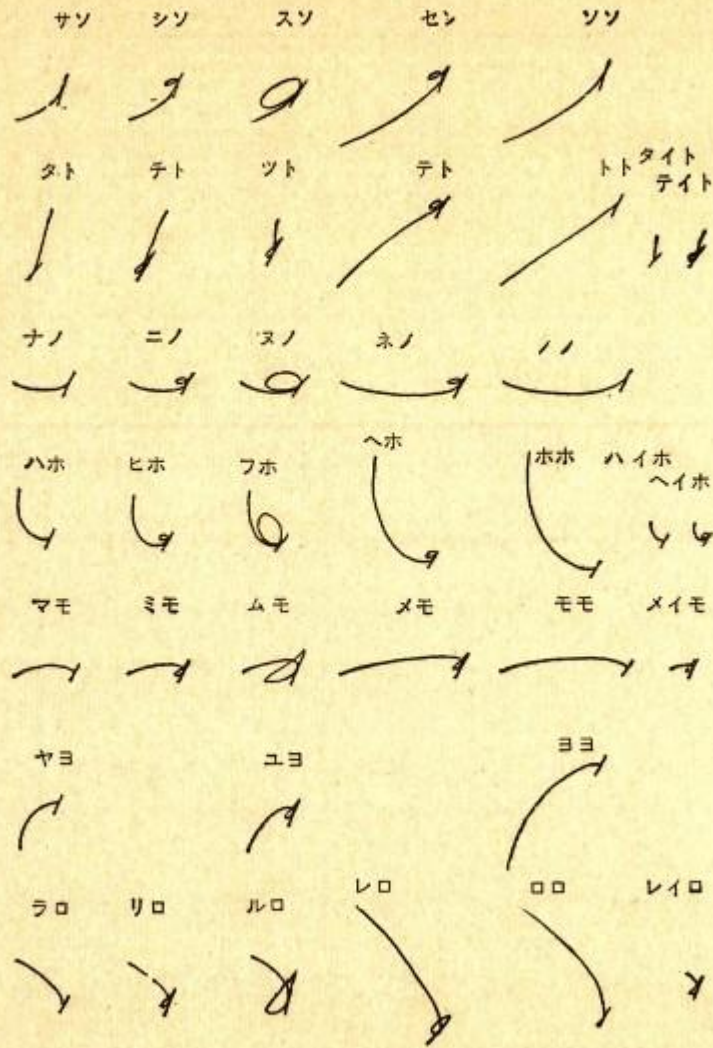
文図 42-2



文図 42-3



文図 42-4



b 変音文字の同行省略（濁音・長音・長濁音）（文図43）

ア列とイ列は変音符号を打ち、その他は清音の短線を補円符号に変えて44図のように書きます。長音、長濁音の場合は濁音よりも長く書きますが、実際には同じになっても前後関係で正しく読むことができます。また特に長濁音を区別する必要があるときは長濁音符号で切って区別します。

文図 43-1



文図 43-2

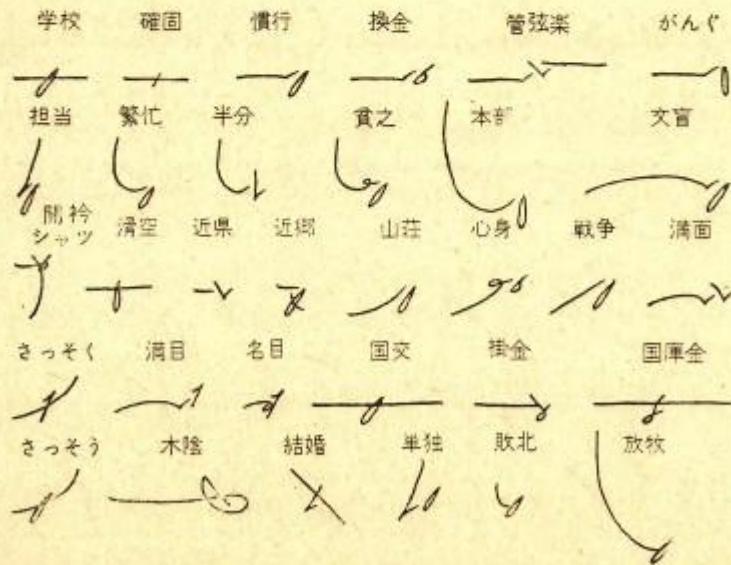


2) 間接同行省略法 (文図44)

a 撥音 (ン), または詰音 (ッ) が間にはさまっていても同行省略ができる……ガッコウ, タントウ, センソウ……

b 間に「イ・ク・ツ・チ・キ」音があっても同行省略ができる……カクギ, コクギカン, タクチ, ゴコク……

文図 44



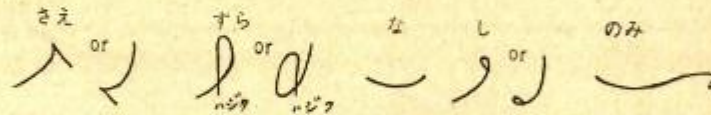
8. 助詞と一般的常用語

1) 助詞の書き方

速記の場合には、言語の中間にあつて、その前の語とあとの語との関係を示し、いろいろな意味を持たせることば（文字）のことを助詞といっています。助詞は一部を除いてすべて前のことば（文字）に続けて書きます。

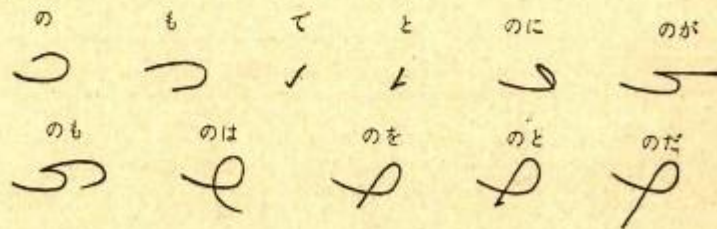
a 普通助詞 普通の速記文字をそのまま使う（文図45）

文図 45



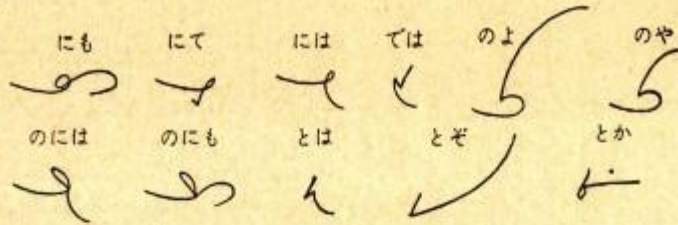
b 変形した助詞（普通の速記文字を変形したもの）（文図46）

文図 46



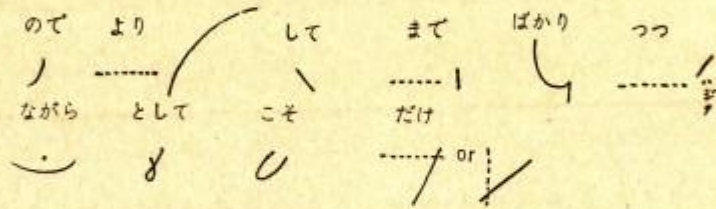
c 普通助詞と変形助詞をつなぐ（文図47）

文図 47



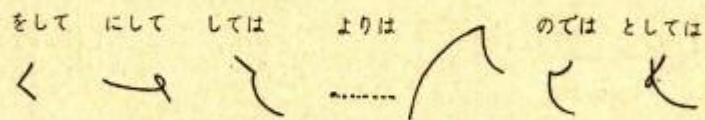
d 特別な助詞 (特別な線をあてているもの) (文図48)

文図 48



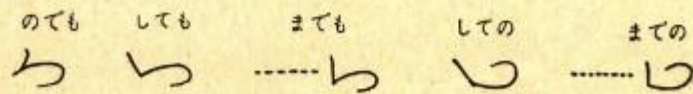
e 普通助詞と特別助詞をつなぐ (文図49)

文図 49



f 変形助詞と特別助詞をつなぐ (文図50)

文図 50-1



文図 50-2

でして	とも	としても	との	としての
✕	わ	わ	に	の
ばかりで	までで	までもなく	までもない	までもなし
↳	----- ↓	----- ↓	----- ↓	----- ↓

g 混合助詞 (各種の助詞をつなぐもの) (文図51)

文図 51

にしても	にしては	にては	にても	ても	とても
〜	〜	〜	〜	〜	〜
とては	のてして	よりも	ばかりでは	からて	
↳	↳	----- ↳	↳	↳ or	

h 打消しの助詞 (文図...)

文図 52-1

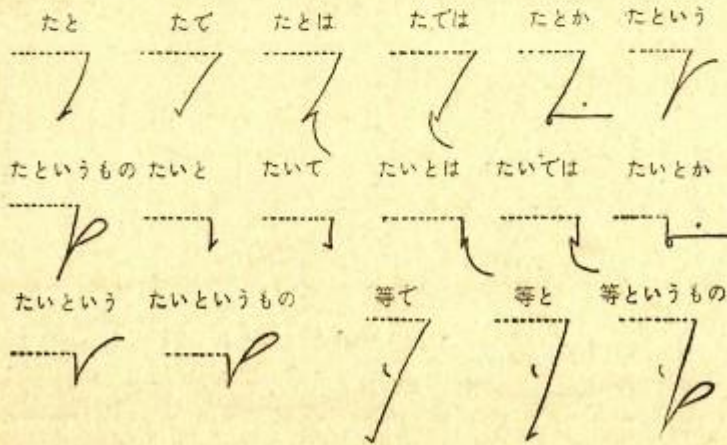
ない	なく	なかった
----- +	----- +	----- +
なかりし	なからん	(し)なければ
なかりし	なからん	(し)なければ
----- +	----- +	----- +
(し)なければならん	(し)なければならん	(し)なければならん
----- +	----- +	----- +

文図 52-2

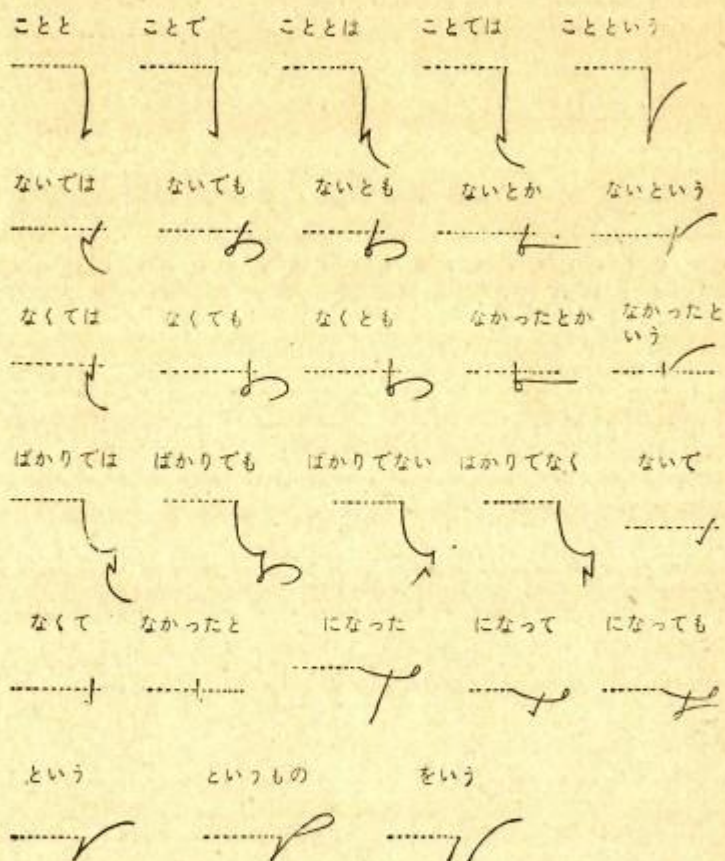


1 助詞テ・トの簡略法——前の字が上から下に向かう単線文字
のとき、助詞テ・トは次のように簡単に書きます。(文図53)

文図 53-1



文図 53-2



2) 一般的常用語

日常のことばのうち、決まって必ず使われる単語を常用語として、それを簡単な線で書くようにします。(これは速記の簡字とし

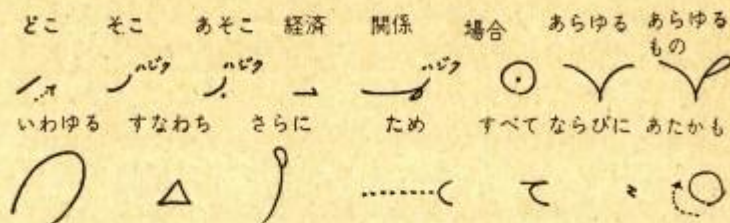
てあとで詳しく説明しますが、利用の便宜上一部分を出しておきます) (文図54)

文図 54-1

上段文字

わたくし	わたくしら	わたくしども	わたくしたち	わたくしも		
こと	ことがら	ことば	おことば	これ、この	それ、その	
かれ	かれら	かれこれ	きみ	きみら	きみたち	
日本	国民	わが国	人	みなさん	みなさま	
もの	もので	ものと	ものという	ものという	もの	
ものでは	そういう	そういうもの	こういう	こういうもの		
ああ いう	ああいう もの	ところ	ところは	ところの	ところで	ところが

文図 54-2

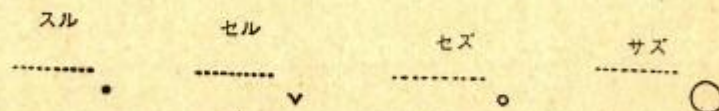


9. 助動詞の書き方とその活用

前に説明した助動詞とこの助動詞とは、必ず他のことばに続いて初めて意味を持ってきます。それで従属詞ともいいますが、連記の上では大事な役目を持っています。助動詞の使い方のじょうず、へたは速度にも大きく影響しますからよく練習してください。特に文字を書く位置が重要ですから注意しましょう。

肯定の加点と否定の小円——基本の形——（文図55）

文図 55

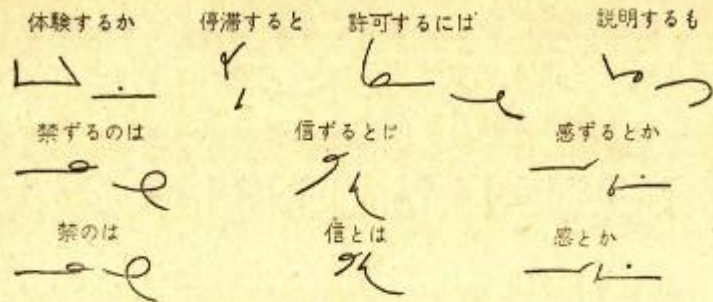


1) 肯定の加点・スル

- a 「……スルと、スルには」などの助詞はスルの位置からすぐ

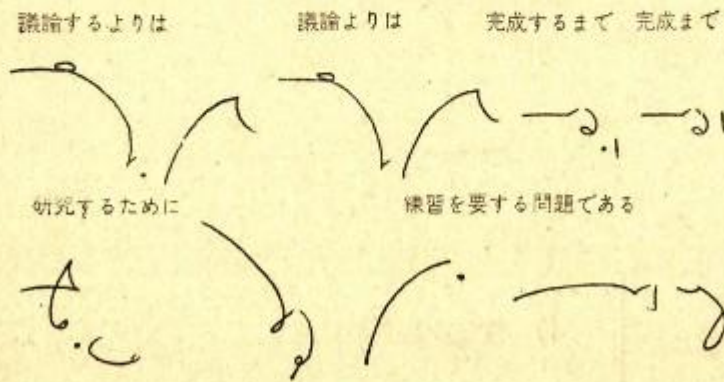
文字を書きます。(文図56)

文図56

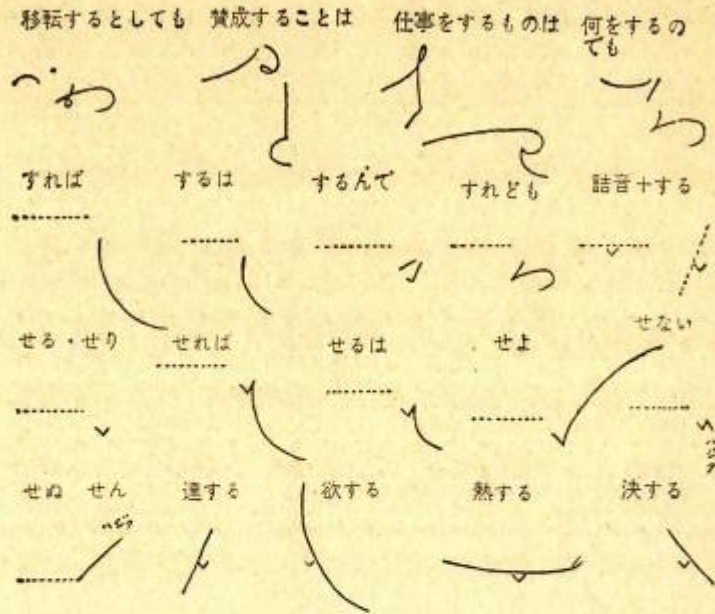


b 「……スルより、スルまで」などを除く助詞あるいは助動詞の大部分はスルの位置から書き始め、その他の品詞はスルの加点を打って書くことを原則とします。ただし各人の常識とか連記技術の程度、またそのときの文章(ことば)の前後関係で、助詞、助動詞以外でもスルの加点を省略できるものがあります。(文図57)

文図57-1



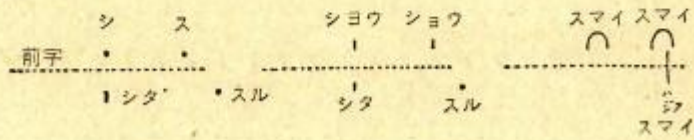
文図57-2



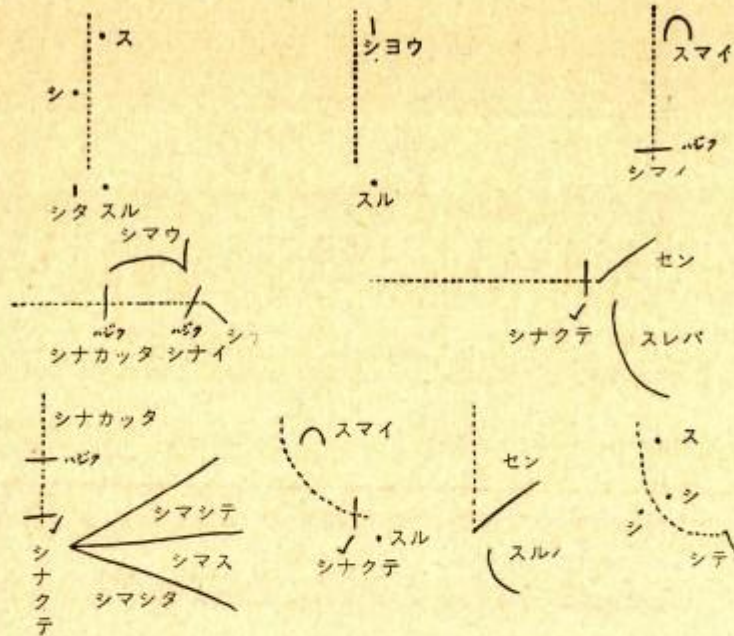
c スルの活用 (文図58)

スルということばは、「……ス、……スル、……スレバ、……シテ、……シタ、……ショウ、……スマイ、……セン (シナイ)、……シナクテ、……シナカクテ、……シナイデショウ」と変化します。この変化を加点その他の符号で簡略化したのが58図です。

文図58-1

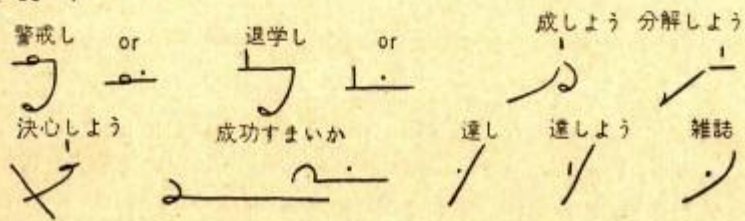


文図 58-2

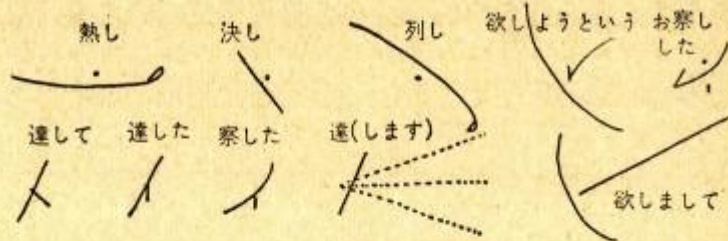


注意 シとスは文の前後関係で区別できる音です。また前字の線によって前字の上あるいは右肩のどちらか書きよいほうを使います。さらにシとスは加点よりも基本文字で普通に書いたほうが読みやすく、また書きよい場合があります。(文図59)

文図 59-1

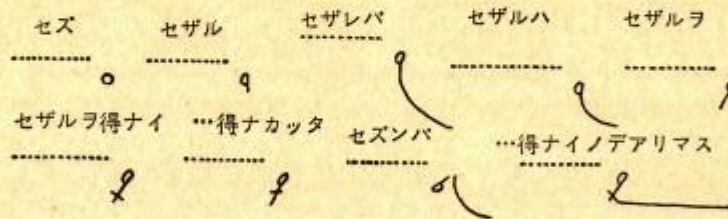


文図 59-2



2) 否定の小円・セズ (文図60)

文図 60



セズの縦と横の関係

「スル」のところでは「スル・スルノニ・スルノデ……」等に対して、「スル・シテ・ショウ……」等の変化を説明しました。これを縦と横の関係としてみます。そうすると「セズ」の場合にもこの関係が出てきます。セズの縦の活用は「セズ・セザレバ・セザラン・セズンバ・セザルヲ……」等ですが、横の活用としては「行カズ・待タズ・死ナズ・構ワズ・読マズ・切ラズ」等の否定の助動詞（ア列）と「行ケズ・待テズ・死ネズ・読メズ・切レズ」等の（エ列）があります。これを全部セズの否定小円で書き表わします。もちろ

ん単語だけの場合とか、前後の助詞を略して書く場合は混乱しますが、連続したことばの中では正確に読むことができます。(文図61-62)

文図61

否定ア列横の活用

ア列＋ズ

 〇

 サズ ○

- カズ
- サズ
- タズ
- ナズ
- ハズ
- マズ
- ヤズ
- ラズ
- ワズ
- ガズ
- ザズ
- ダズ
- バズ

否定エ列横の活用

エ列＋ズ

 or

 〇

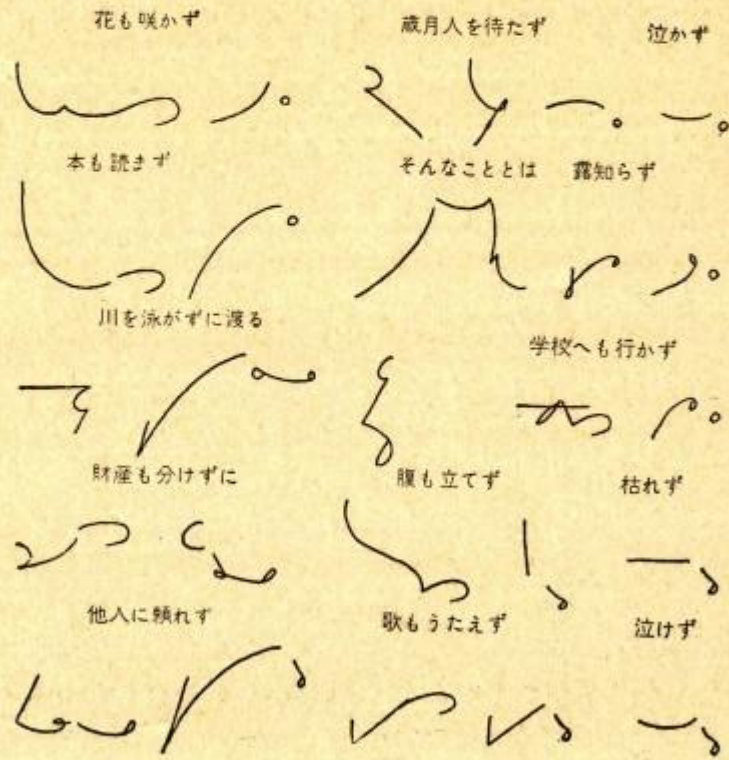
- ケズ
- セズ
- テズ
- ネズ
- ヘズ
- メズ
- エズ
- レズ
- ゲズ
- ゼズ
- デズ
- ベズ

注意 a 「カズ・セズ・タズ・ハズ」は濁音に変わった場合

「泳ガズ・信ゼズ・及バズ……」にも応用される。しかし清音の「カス・セス・タス・ハス」には使わない。それは「カズ・ゼズ……」は否定を意味し、「カス・タス……」は肯定を意味しているからであり、これを混同すると意味がわからなくなる。

b 「許サズ・離サズ」の「サズ」は「ゼズ」と同じように書く。「許ゼズ・離ゼズ」と混同するので、「サズ」だけは例外として大きな円を書く。

文図62



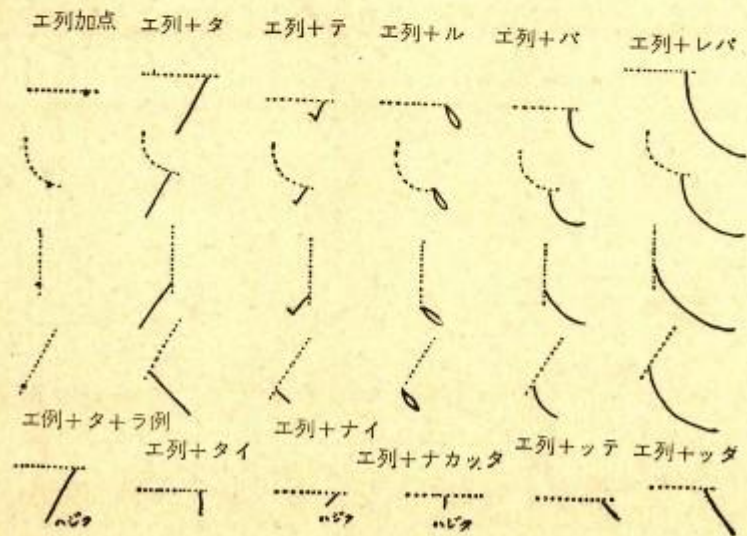
3) エ列 (タテルレバ) の省略法

「エ列」ということばがこれからもたびたび出てきますから、ここで説明しておきます。

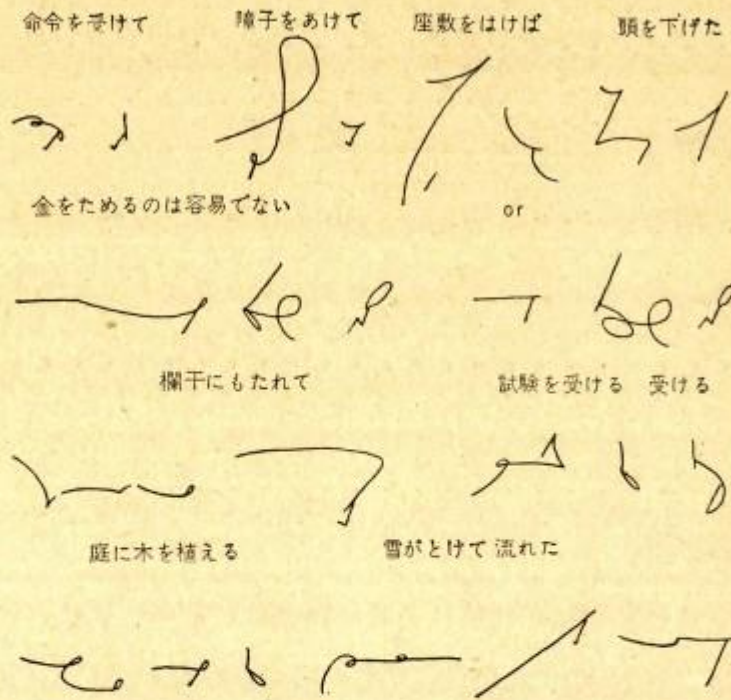
「エ列」とは50音中の「エ・ケ・セ・テ・ネ・ヘ・メ・レ」のことですが、これは横の活用になります。たとえば「慣レタ・慣レテ・慣レル・慣レレバ……」とか「泣ケタ・泣ケテ・泣ケル・泣ケレバ……」「なメタ・なメテ・なメル・なメレバ……」等と同じ書き方で表わして、それが前後の文章の関係でそれぞれ読み分けられるのです。これを「エ列省略」といい、またその語尾が「タ・テ・ル・レバ」の音となるところから「タテルレバ」の省略法ともいいます。

a エ列省略前字が単線の場合 (文図63)

文図63-1

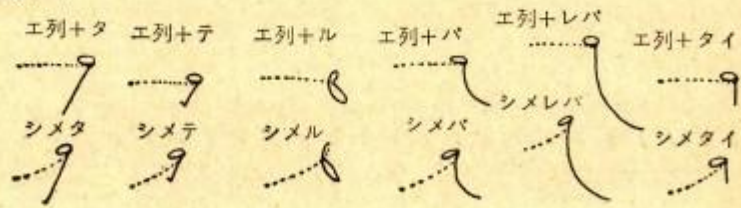


文図63-2

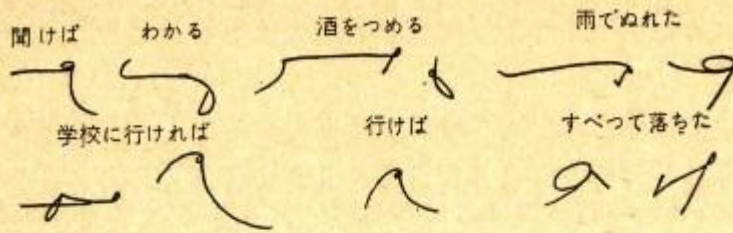


b 前字が複線の場合 (文図64)

文図64-1



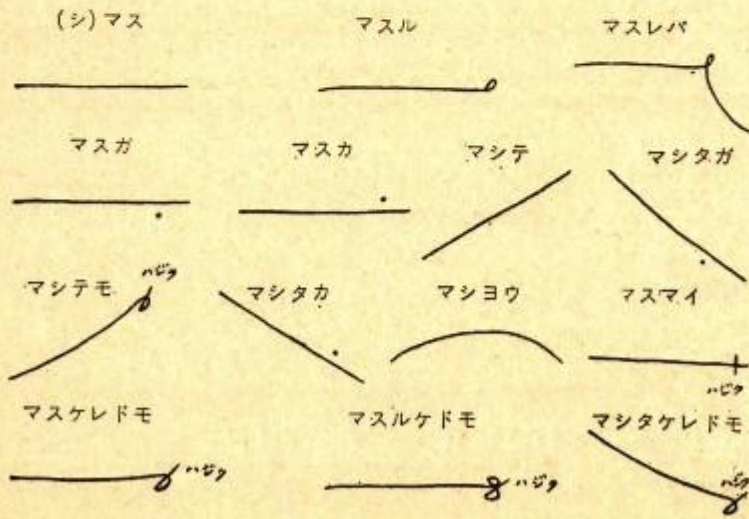
文図64-2



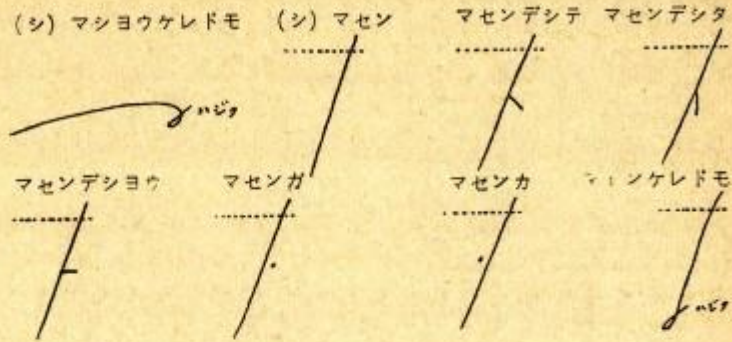
4) 口語助動詞

a マスの省略 (文図65)

文図65-1



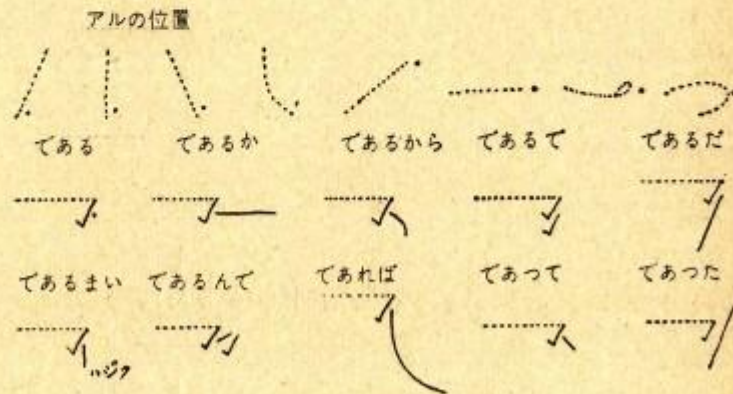
文図65-2



カッコ内の「シ」は前字が名詞の場合に使われ、その他は「マス」となりますが文字は同じ長線です。例「研究シマス」「発表シマス」「見マス」「行キマス」。前音が撥音(ン)の場合は「信ジマス」「禁ジマス」のように「シ」が「ジ」になります。

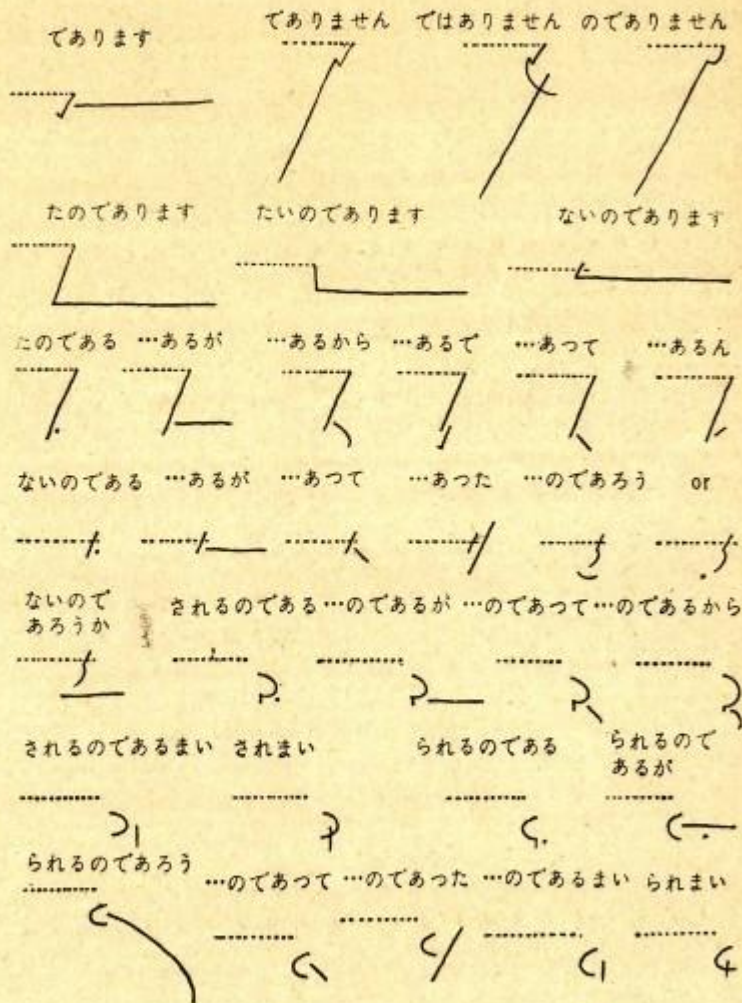
b アルの省略(文図66)

文図66-1



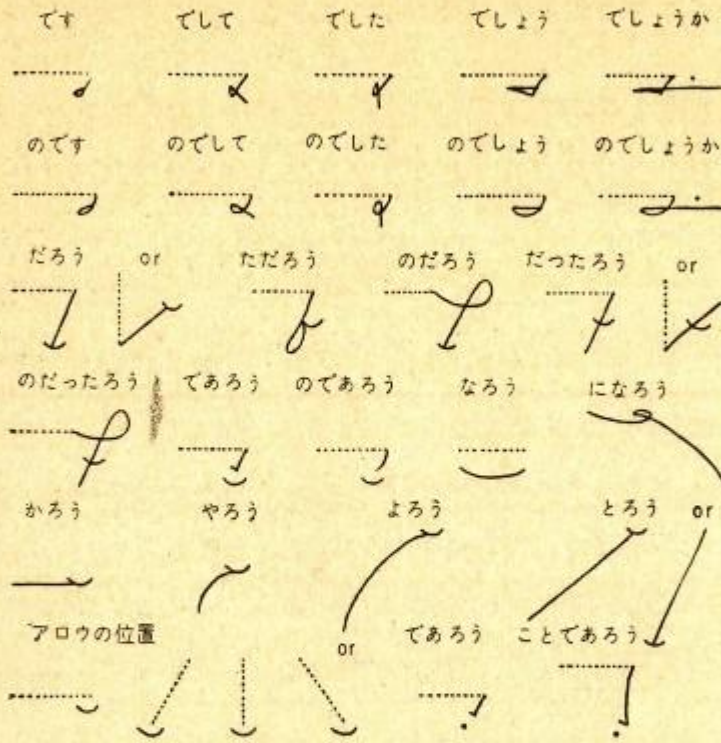
い分けてもよいでしょう。口のほうは次の「……ノデアリマス」の書き方からきています。(文図68)

文図68



d 「デス、ノデス、アロウ」の書き方(文図69)

文図69

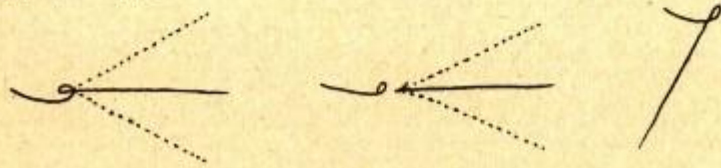


e その他(文図70)

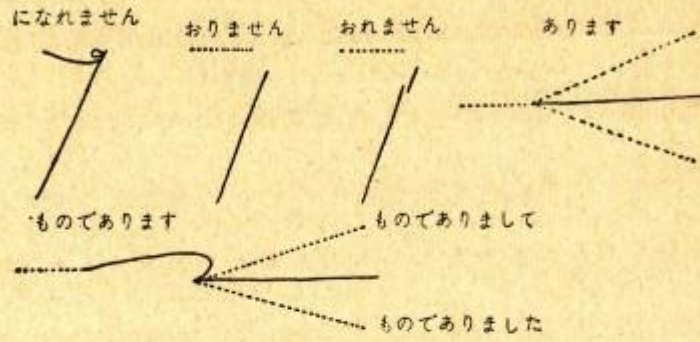
文図70-1 になります

になるのであります

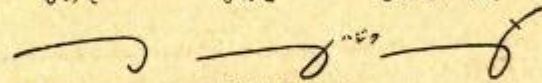
になりません



文図70-2

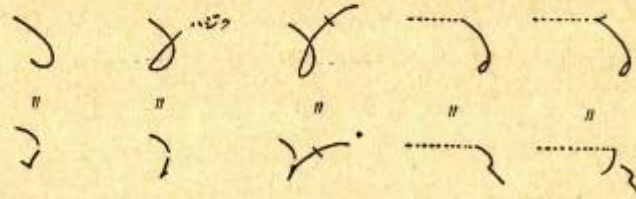


もので ものと ものといって

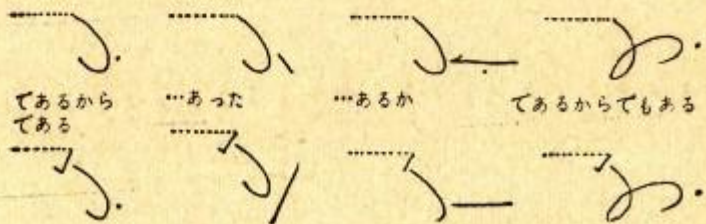


カラデ、カラシテの特別な書き方

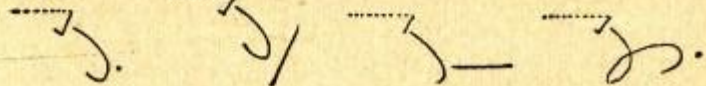
からて からと からといって からして のであるからして



からである からであって からであるのであるが からでもある



であるからである ...あった ...あるか であるからでもある



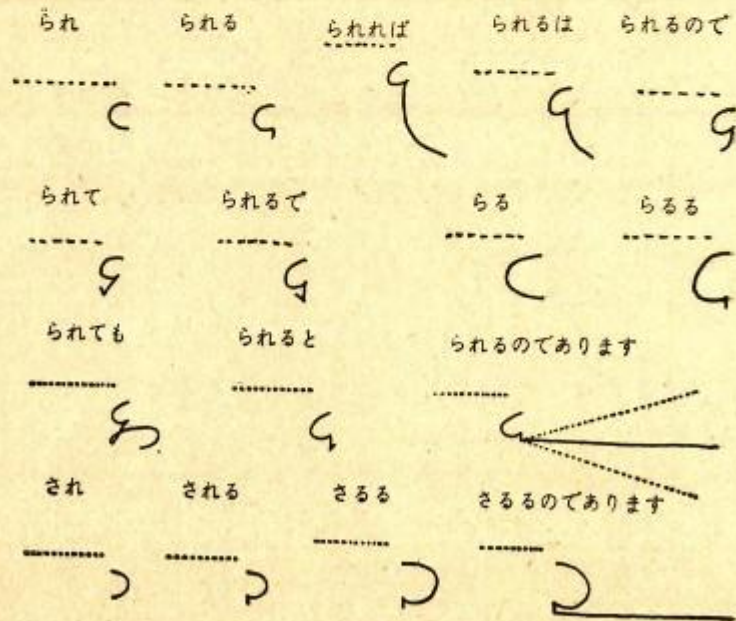
5) 受身の助動詞

日本語には受動の意味を表わすことばと敬語を表わすことばが同じ発音で表わされています。肯定の受身、敬語は「ラレ・サレ」となり、否定は「ラレズ・サレズ」となります。(文図71)

このラレの「ラ」はア列の「カ・タ・ナ・ハ・マ」のどれかの音に置き替えて「カレ・タレ・ナレ……」ともなり、(文図72) また「エ列」の「エラレ・ケラレ・セラレ……」などにも活用します。(文図72)

a 「ラレ」「サレ」の綴の活用(文図70)

文図 71-1

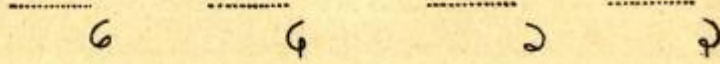


文図 71-2
られず

られざる

されず

されざる



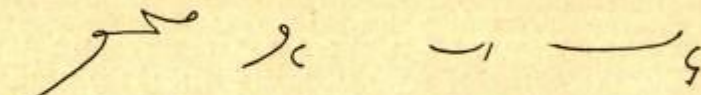
「サレ」だけは「セラレ」と読み誤まるので「ラレ」の逆の線になっています。なおこの「サレ」は「メレ・メル」にも読みます。

b 「ラレ」の横の活用 (文図71)

文図 72-1

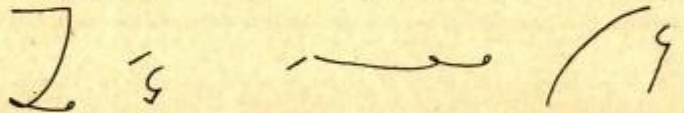
世間に知られ

難をのがれて



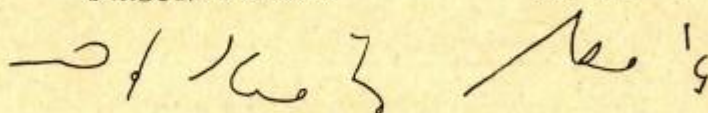
風に吹かれて

船に酔われた



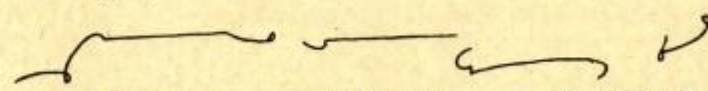
かの地を去らるるにあたり

東京に生まれて



都にあこがれる者

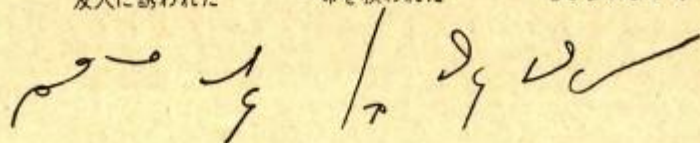
多し



友人に誘われた

一命を救われた







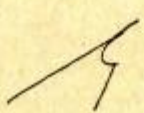



昔生まれまして



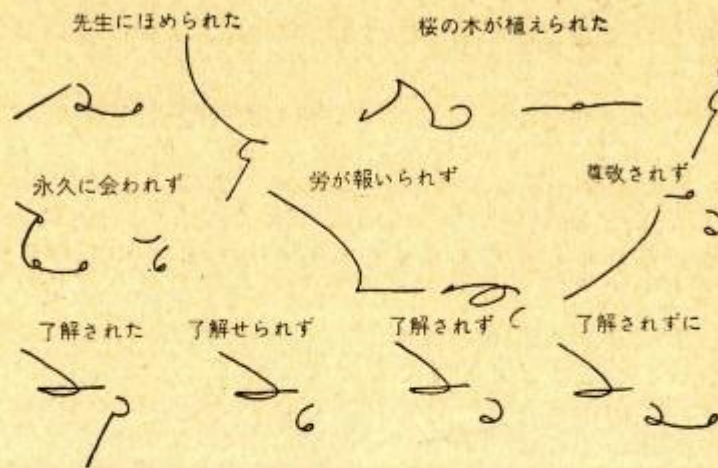
文図 72-2

ア列+レ	おもに使うことば				
----- C	ラレ	カレ	マレ	ワレ	セラレ
ア列+ル					
----- C	ラル	カル	マル	ワル	セラル
ア列+レル					
----- C	ラレル	カレル	マレル	ワレル	セラレル
ア列+ルル					
----- C	ラルル	カルル	マルル	ワルル	セラルル
エ列+ラレ	エ例+ラレル	列+ラル	エ列+ラルル		
----- C	----- C	----- C	----- C		

前字の方向によるエ列の位置

				
初心を迷げられた	定められた	きめられた	助けられる	
				

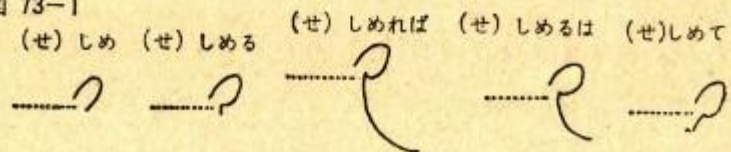
文図 72-3



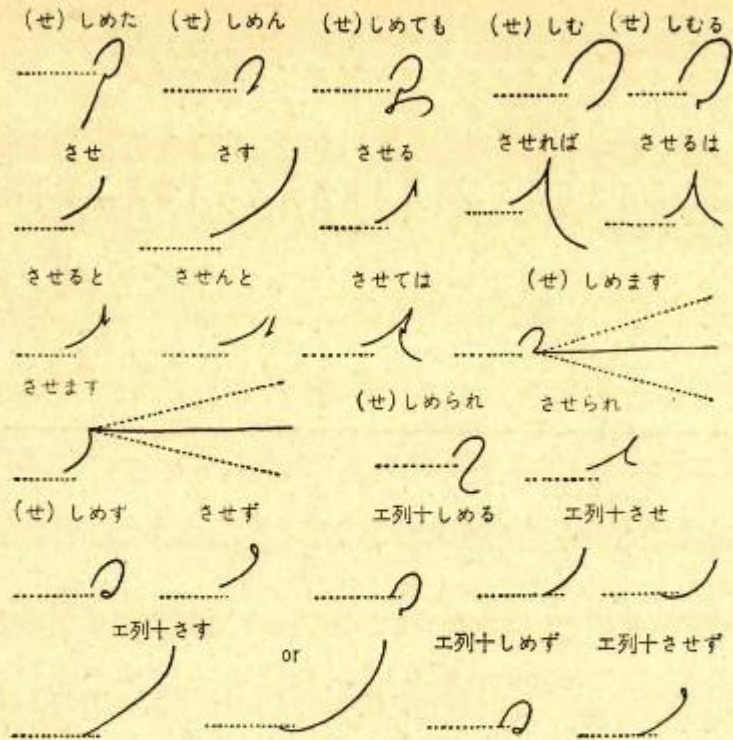
6) 使役の助動詞

使役の助動詞には「しめ」「させ」の2種類があり、すべて前字の中央と字末の間の右肩に書きます。この「しめ」は「せしめ・かしめ・たしめ・なしめ・おしめ・ましめ・らしめ」に、また「させ」は「かせ・たせ・なせ・ませ・わせ・らせ」にそのまま使うことができ、受身助動詞の場合と同じように「エ列+しめ」「エ列+させ」とも使います。(文図73)

文図 73-1

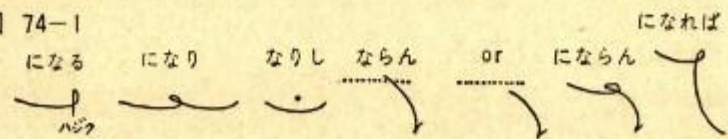


文図 73-2

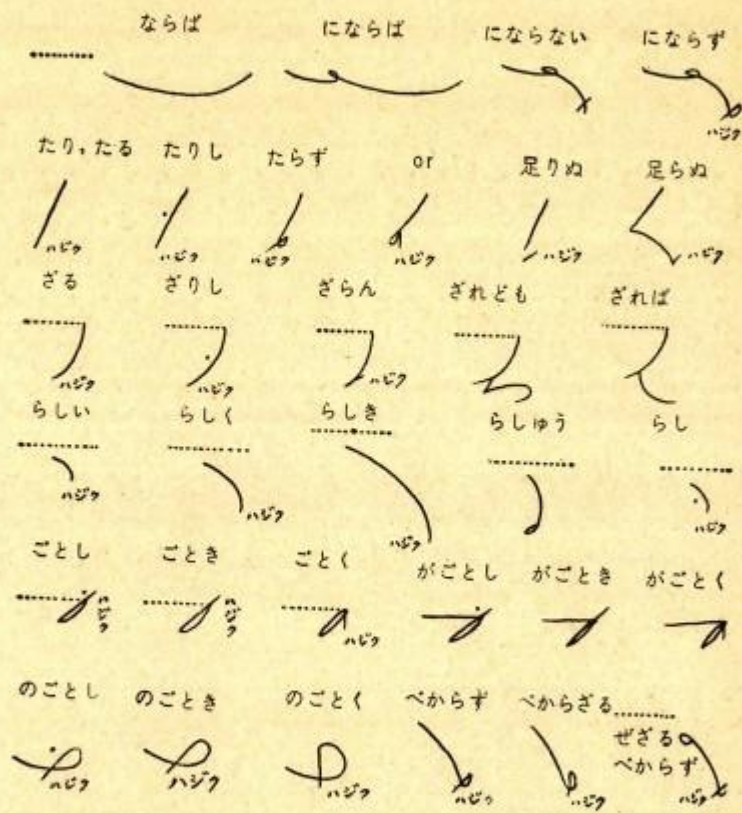


7) その他の助動詞 (文図74)

文図 74-1



文図 74-2



8) 助詞・助動詞と詰音との関係 (文図75)

文図 75

詰音+ラレ	熱せられ	達せられ	決せられ			
詰音+スル	熱する	達する	決する			
詰音+セス	熱せず	達せず	決せず			
詰音+シテ	達して	察して	欲して	屈して	熱して	決して

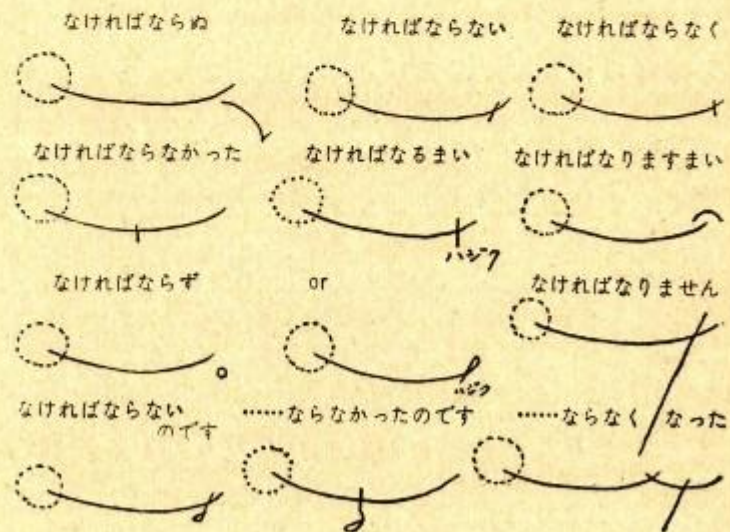
10. 口語文の常用語

助動詞とともに述記するうえに大きな役目を持つのが常用語です。今までも常用語として一部を出してきましたが、ここでは
 1) 口語に使われる常用語の語尾変化、2) 常用動詞の語尾変化、
 3) 「ニ」に続く常用語、4) その他の常用語について説明します。

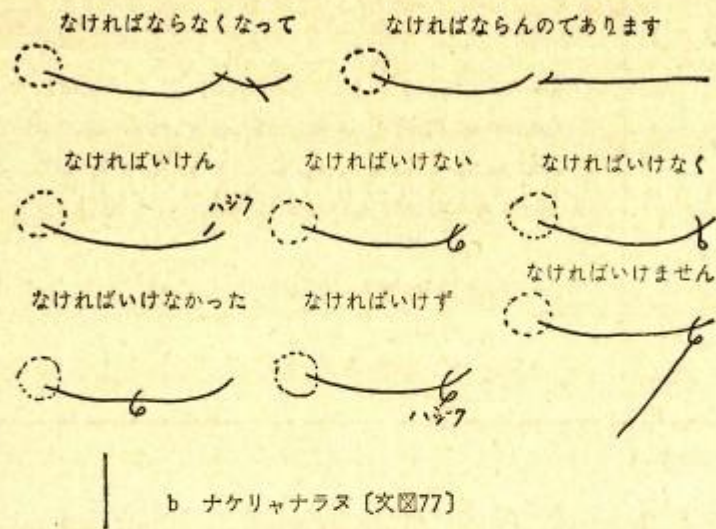
1) 口語常用語の語尾変化

a. ナケレバナラヌ (文図76)

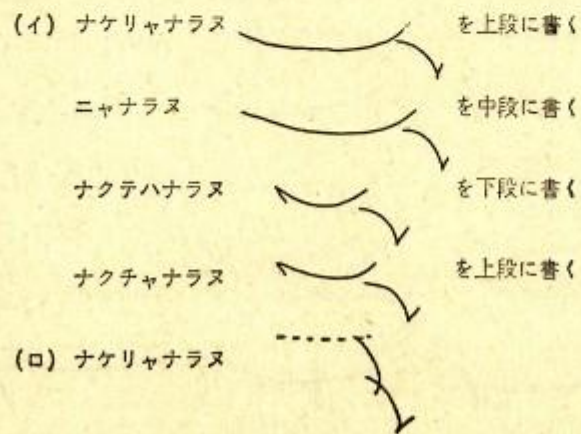
文図 76-1



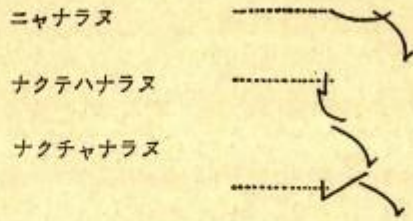
文図 76-2



文図 77-1

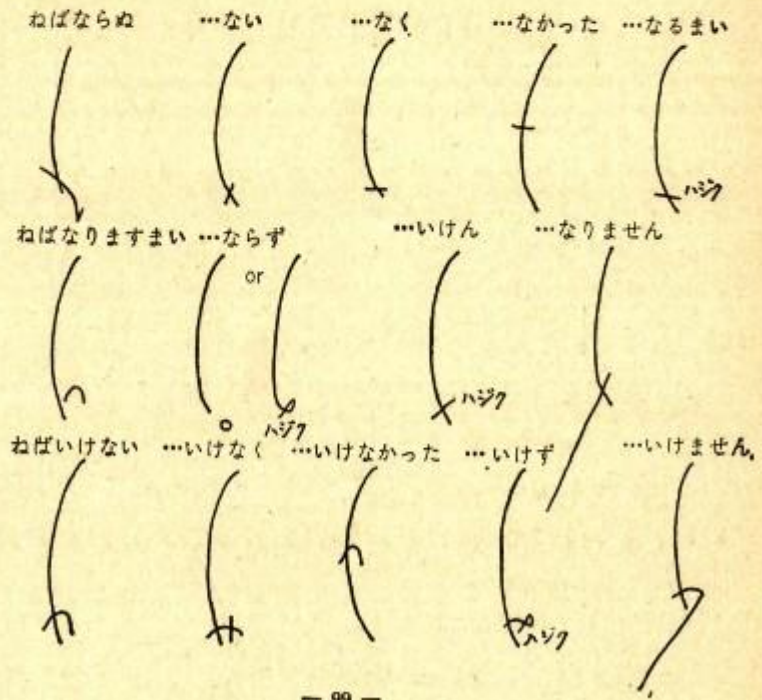


文図 77-2



c 「ネバナラヌ」 (文図78)

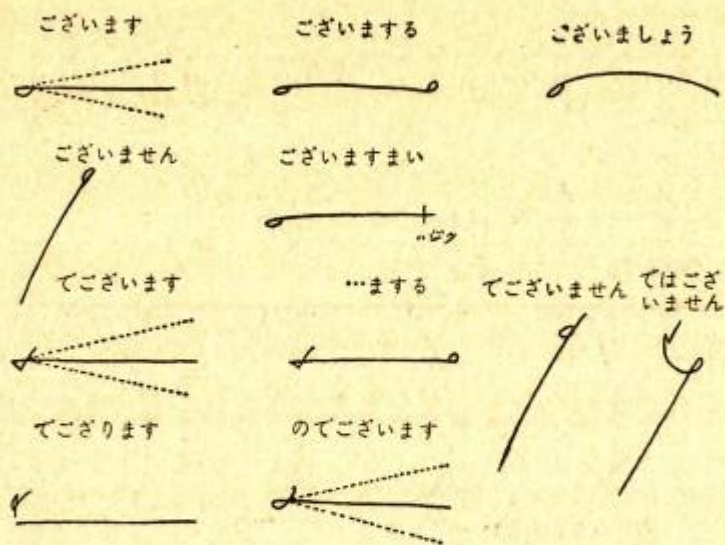
文図 78



2) 常用動詞の語尾変化

a. 「ゴザル」の変化 (文図79)

文図 79



b. 「言ウ」の変化 (文図80)

文図 80-1



文図 80-2

言うまい	言わん	言おつ	言われる	言えば	いわば
言うた	言うので	言うと	といた	といて	といても

c 「考エ、思ウ」の変化 (文図81)

文図 81-1

イ 考え 考えます 考えません 考うる 考えぬ

考えない 考えなかった 考えず 考えて 考える 考えれば

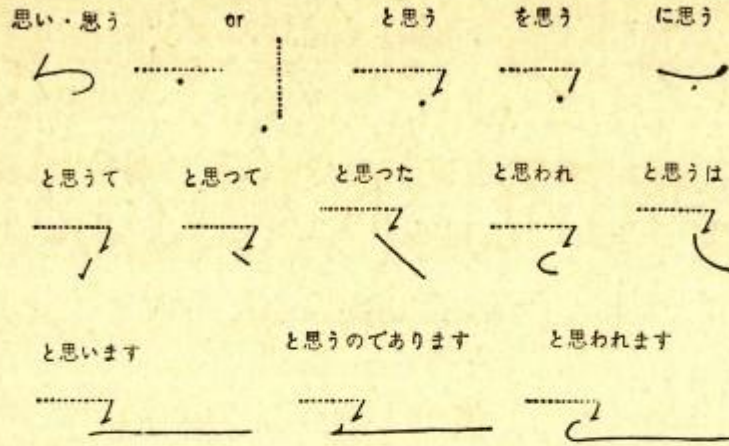
ロ 上段使用

考え 考えます 考えて 考えぬ 考えなく

考えなかった 考えれば 考える 考えるので 考えるん

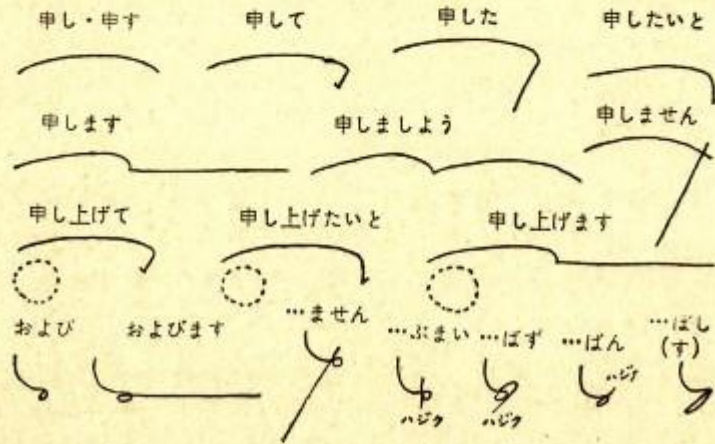
考えるのであります 考えません 考えないのであります

文図81-2



d 「申ス, オヨビ, ナス, カモシレナイ」の変化 (文図82)

文図82-1



文図82-2

なし・なす	なします	なしません	なさない	なし得ない
なさん	なすまい	なそう	なさず	なし得ず
なさせる	なされば	なされる	なさせず	なされず
かもしれない	…なかつた	…しれん	…しれず	かもしれない

3) ニに続く常用語 (文図83)

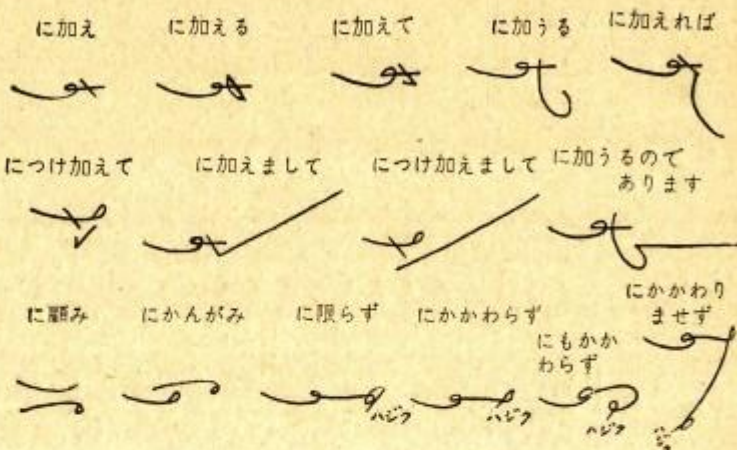
文図83-1

に対する	に対して	に対し	に対しまして		
に関する	に関して	に関しては	に関し	に関せず	に関しまして
に属する	に属して	に属し	に属せず	に属します	

文図 83-2

によって	により	による	によりて	によった	
によらない	によらず	によらず	によりまして		
に向き	こ向きて	に向かつて	に向かう	に向け	
に向き	に向こう	に向かい	に向く	に向きたい	
に向いて	に向いた	に向かへ	に向かわず		
について	につき	につく	につけ	につけず	につきまして
において	における	においては	におけるか	においてか	
におきまして		に基づき	に基づく	に基づけば	
に基づいて	に基づきまして				

文図83-3



4) その他 (文図84)

文図84-1



文図84-2



以上今までの常用語に関する部分はすべて研究編で詳しく説明してありますから、相互の研究とともに、使いやすいもの、覚えやすいものから少しずつ使ってください。

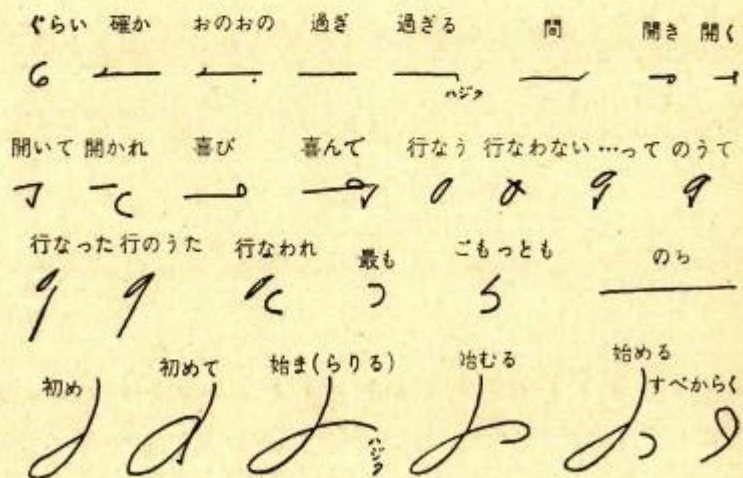
11. 上下段使用法

1) 上段使用法

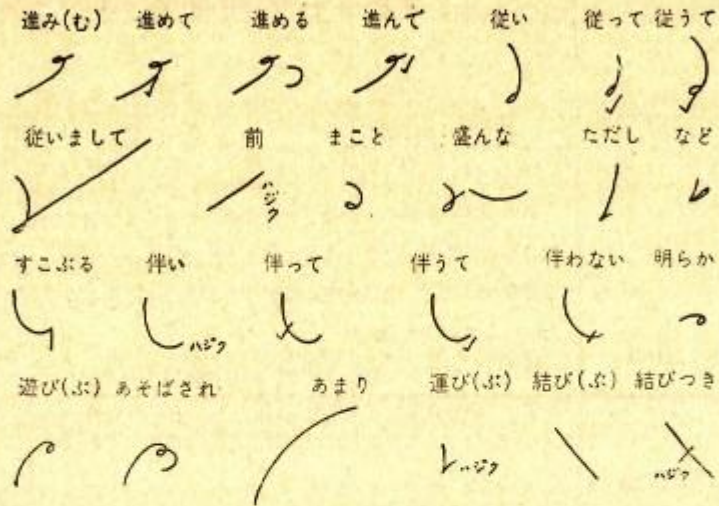
ある漢字が訓読みで発音された場合、そのまま書くと長くなったり書きにくかったりするものがあります。このことばの、訓読みを音読みに変え、普通に書く位置よりも上を書く方法を上段使用法といいます。(文図85)

始めはむずかしく感じますが、少しの練習ですぐ使えるようになります。一度に覚えようとしなくて、2、3字ずつ消化しましょう。

文図 85-1



文図85-2



2) 下段使用法

下段使用文字は、助詞あるいは助動詞の頭文字を普通線上より下げて書いて、2音目のラ行音を省略する方法です。

しかし上段使用法も下段使用法も慣れてきたら、一部を残して普通線上に書いても正しく読めるようになります。特に下段使用法は研究編のラ行省略を学ぶことによってほとんど必要なくなりますから、ここではその一部を示しておきます。「見る、切る、成る、ある、いる」などのことばを表わすのに、「ミ、キ、ナ、ア、イ」だけを下段に書いておけばよいというのは、便利なようですが、高速で書く場合にシャープの流れが阻害されるという欠陥があります。速記講座第4巻で下段使用法を覚えてしまったかたは、わりに訂正しなくてもよいですが、徐々に研究編のラ行省略に切り換えて

いきましょう。なお研究編では、アリ、アル、アレ、アロなどラ行各音の区別も説明してありますが、ここでは、ラ行省略の準2音文字的な考え方で覚えてください〔文図86〕

文図86-1

アリ・ル ナリ・ル タリ・ル イリ・ル オリ・ル サリ・ル ラリ・ル

宇尾をハジク

文図86-2

かり・る こり・る きり・る けり・る くり・る しり・る

てり・る or とり・る ぬり・る or のり・る

ふり・る へり・る まり・る まる みり・る むり・る

やり・る より・る ゆり・る りり・る わり・る しやり・る

ばり・る ぶり・る ぶり・る える・べる (へ)

3) 特殊上下使用法

上段あるいは下段、または前字の上あるいは下に特別の文字を書いて一定の意味を表わします。(文図87~89)

a 上段(文図87)

文図 87

あるいは また できる できて できるできないできなく
 できぬ できなかった 上 よう ような ようで

申し上げ 申し上げる 申し上げる
 申し上げます

いずれ いずれも いずれにしても
 上がり 上がる のぼり のぼる あげ
 この上 その上 そのような こういような こんなようて そうい
 ような

b 下段 (文図88)

文図 88

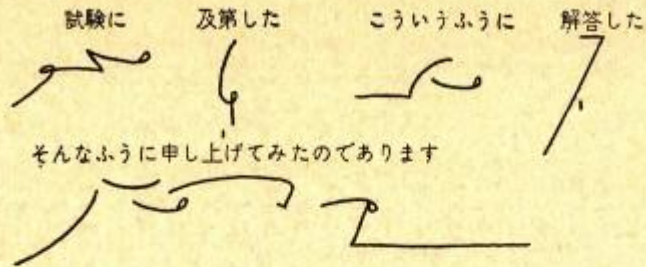
われ	われわれ	した	したり	ふう	ふうな
ㄥ	ㄥ ハゴ
さがり	さげ	くだり	しかし	しかも	しかして
..... ハゴ ハゴ ハゴ
しかるを	しかるに	しかれども	しかりといえども		
ノ	ノ	ノ	ノ		
詰音+シタ	われわれは	われわれに	われわれが		
.....		

c 応用例 (文図89)

文図 89-1

30年も	前には	速記の	独習は
3	ノ	ノ	ノ
まったくできなかった	しかしそのころと今日とは時代が違う		
ノ	ノ	ノ	ノ

文図89-2



12. 個人簡略について

その人その人の学力，記憶力，連記力によって応用する書き方です。従って必ずしもこの書き方をしなければならないということはありません。

1) くりかえしの書き方 (文図90)

文図90



2) 反対熟語と反語の書き方 (文図91)

文図91-1

利害得失	優勝劣敗	一利一害	一得一失	いいか悪いか
老いも若きも	男も女も	男性も女性も		
資本家も労働者も	朝も晩も	降っても照っても	泣いても笑っても	
白いか黒いか	勝つも負けるも	成功も不成功も		
利益不利益	景気不景気	真実不真実	勉強不勉強	利益か不利益か
利益か利益でないか	真実か真実でないか	行くか行かないか	よいかよくないか	

文図 91-2

成功するか 成功しないか 成功するかしないか 勉強するか 勉強せんか
成功するかせんか 勉強するかせんか

3) 成語, 成句の書き方 (文図92)

文図 92

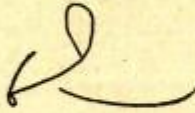
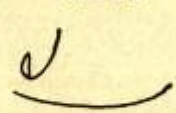

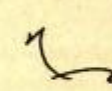

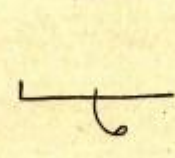
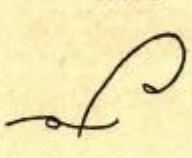
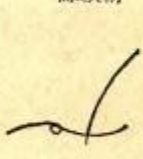
思いなばに通ざん いくんぞ知らん 月落ち鳥鳴き霜天に満つ
雲は身を助く 精神一到何事か成らざらん
井の中の蛙大海を知らず 一富士二鷹三茄子

13. 臨時文字の使い方

講演その他の速記をするときに、ひんぱんにくりかえされる固有

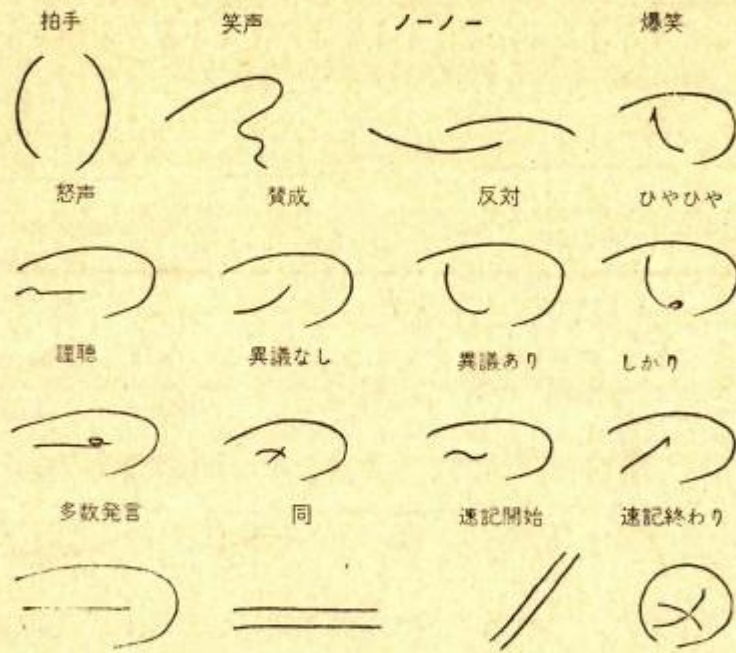
名詞（人名、地名、川、建物などの名）やその他のことばの頭文字あるいは最初の2、3字だけを書いて、その語全体を表わす書き方です。普通これを使う場合は、はじめ1、2回は全部を書き、その次から略します。これはその場限りの応用ですが、日本とかアメリカ、イギリスなど、臨時文字として常に使われるものは特に下段を略して常用簡字として使います。（文図93）

文図 93

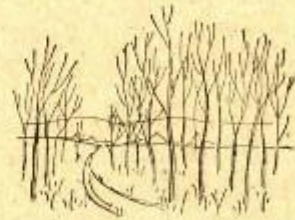
サンフランシスコ	ニューヨーク	広島			
サ	ユ	ロ			
陸上選手	水上選手	徳川家康	徳川光圀		
					
豊臣秀吉	太閤秀吉	源義経	源頼朝		
					
日本	アメリカ	イギリス	イタリア	インド	フランス
ニ	ア	イ	イ	イ	フ
オランダ	ハンガリー	スイス	スペイン	アメリカ合衆国	
オ	ハ	ス	ス	子	

14. 聞き手の語音や その他の書き方 (文図94)

文図 94



研 究 編



練習方法について

ではこれから早稲田式速記の妙味あふれる高度の省略法を説明していきます。あなたがこれらの全法則、全省略法を十分に理解し応用すれば、どんなに速いことばでも記録にとどめることが可能です。しかしこの目的を果たすためにはよい練習方法が必要です。このため省略法の説明にはいる前に、効果的な練習方法について説明しておきましょう。

- 1 正しい姿勢で机に向かうこと
- 2 数分間手首の運動（手首の関節を振る）をすること
- 3 シャープを正しく持つこと
- 4 基本線の練習を数分間行なうこと（長さの割合に従った円、直線を高速で書く練習）

この四つのことは練習ちゅうだけでなく実務についてからでも必要なことです。次に文字の練習で大事なことを列挙しましょう。

- 1 長さの比率に対する観念（1：2：4の割合）
- 2 方向の観念
- 3 角度の観念
- 4 筆の運び方の観念
- 5 正確に書く観念

めくら書きの練習

このめくら書きというのは目を閉じて書くことではなく、左側に新聞、雑誌

などを置いてそれを見ながら速記文字を書いていくことです。速記文字の方を見ないで書くのでめくら書きといいます。しかし全然見ないわけにもいきませんから手もとはときどき見る程度で、あとから読み返しができるように書く練習をすることです。慣れないうちはむずかしいようですが、だんだん手先の感覚で書けるようになります。こうして上達してきたら覚えやすいものや、特に自分の生活の中で使う率が多いと思う簡字から順に覚え、覚えにくいものはあと回しにして先に進みます。

臨機応変の応用

ここにある簡字や省略法を全部使わなければ早いことばの記録ができないということではないので、時に応じ折に触れて取り入れていくほうが効果のある練習方法です。その他徹底的に使ったほうがよい省略法と、各自の技術や常識の程度に応じて適当に使ったほうがよい省略法がありますが、これらはそのときそのときに説明してあります。

耳で聞く練習

速記は主として耳からはいることばを記録することですから耳を慣らす練習が必要です。ゆっくり朗読してくれる人があれば、10分間1,000字、または1,500字くらいからこの練習をしたほうがよいのですが、読んでくれる人がいない場合は自分一人でいろいろの省略法や運筆のコツなどを練習し、2,000字以上めくら書きができるようになったら、人の発言で練習するようにします。テープレコーダーなどは速度練習によいものですが、なによりも共同練習をすることが上達のかぎということになるでしょう。

実際の講演が書けるようになったり、または共同練習をするときも書きにく

いことばに出会ったり、いつも同じことばにひっかかるような場合には、講座を調べたり、学術指導部に質問や練習作品を出して研究することが大切です。

速度の進み方

普通10分間に1,500字から1700字、2,000字前後から2,300字、それから2,600字、2,900字、3,200字というふうに階段式に上っていくものです。つまり一定期間速度の進み方がとまったり、練習を続けていくと急に300字伸びるというふうに、とまったり伸びたりして進んでいくものです。この中には、めくら書きから発音書きに移ったときとか、新しい省略法を使い始めたときなどに速度が落ちることもあり、またスランプ状態になることもあります。一時的に停滞しても悲観せず、ねばり強く練習を続けてください。

10分間に2,600字を確実に書けるようになると普通の速度のことばはだいたい書けますから、できるだけ実際に使っていくようにしましょう。なお速度を無理に上げようとするとは必ず文字が乱れ、そのまま進んでいくとあるところで行き詰まって、逆戻りしなければならぬばかりか自信をなくしてしまう原因になります。常に自分の書いた文字を読み返し、5回のうち1度くらいは国字に書き直して、文字使用上の正確さや抜けた個所の研究、速記文字の研究などをしてください。この読み返し、特に国字に直す練習は時間がかかりますが、速記文字を書く練習におとらない大事な練習ですから必ず実行しましょう。

速記者として就職するには、勤務先にもよりますが、だいたい10分間に2,900字以上を書く力が必要であり、単に速記技術だけでなく、原稿の書き方、漢字とかなの正しい使い方、特に常識を広げることが大切です。国字に書き直す練習の中では特にこのことを意識し、あわせて日常の新聞、雑誌をはじめ、各自の進む方向に従ってそれぞれ専門の知識を持つように努力しましょう。

簡字の構成

簡字とは 速記文字は省略法を使えば使うほど簡単になります。同じことばを書くのにも省略法の程度によって字の形が変わってきます。たとえば「書く」という音を表わすために、最初は基本文字でカとクを書いていたのが、ク音省略法を習ってからは小かぎで簡単に書けるようになります。同様に「国技館」と書く場合も基本文字で書くのと、クの省略法で書くのと、さらに同行省略法で書くのとでは字画の違いがあり、大変書きやすくなってきます。

速記の簡字はこうした幾つかの省略法の中で、あることば(単語)を書くために、もっとも簡単に書けるように省略された文字です。

しかし、どんなに省略され、簡単に速く書くことができても、それが覚えにくかったり語尾の変化に対して応用ができなかったり、また日常あまり使わない文字であっては簡字としての価値が薄くなります。

そこで簡字の構成としては次の3つのことが大事になります。

- 1 日常広く使われることばを表わす文字であること
- 2 一定の法則に従って書けるので覚えやすく、読み誤まりがないこと
- 3 発言の調子、リズムに調和して簡単にしかも速く書け、語尾の活用ができる文字であること

以上の点から簡字を六つの項目に分けて説明していきます。

- 1 ラ行省略法(ラ・リ・ル・レ・ロを省略する書き方)
- 2 和語省略法(やまとことばの簡単な書き方)
- 3 漢語省略法

- 4 加點省略法（加點で音を省略する書き方）
- 5 依意省略法（ことばの意味によって省略する書き方）
- 6 特殊な簡字とその他の省略文字

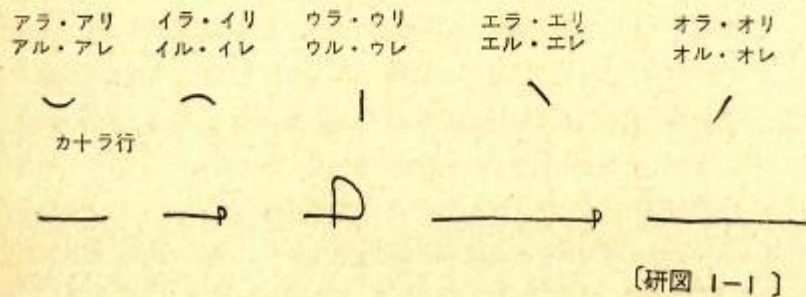
1. ラ行省略法

これは「ラムネ、りっぱ、朗読……」のように最初の音のラ行を省略するのではなく、「青空、あかり、あきれる、朝霧、アラビアン・ナイト……」のように2音目以後のラ行を省略する書き方です。

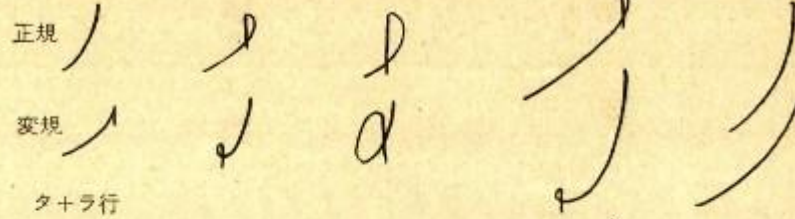
1) 清音のラ行省略

イ) 前音が単線文字で表わされるときは、その文字の流れる方向にはじめてラ行音を省略する。〔研図1〕

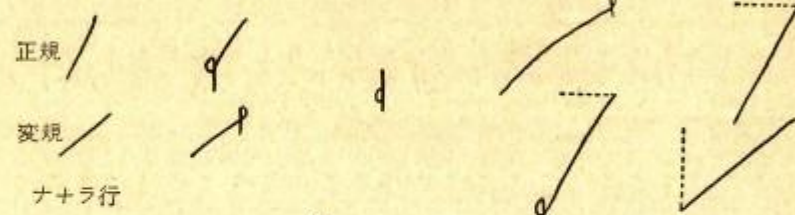
ロ) 前音が複線文字で表わされるときは、その円の終わりを下方にできるだけ短くはじめてラ行音を省略する。〔研図1〕



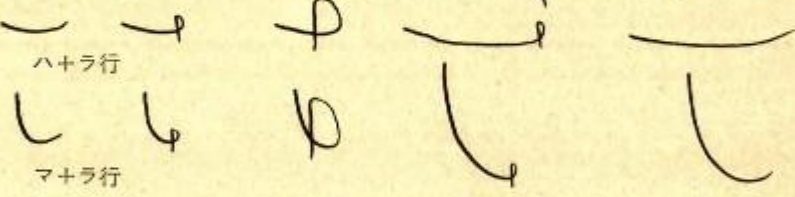
サ+ラ行



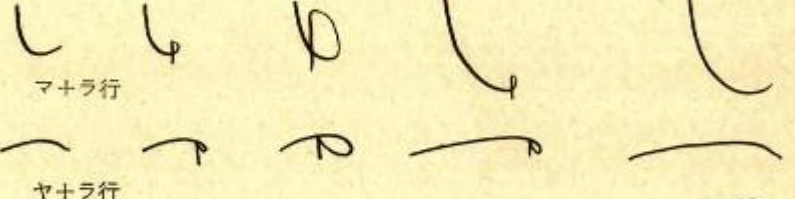
タ+ラ行



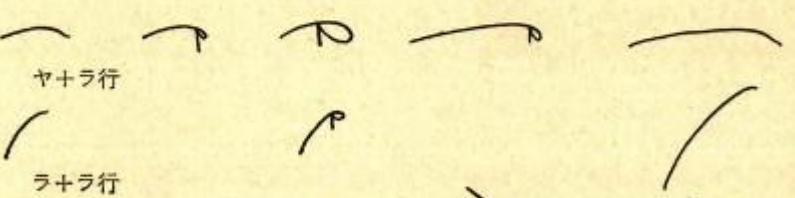
ナ+ラ行



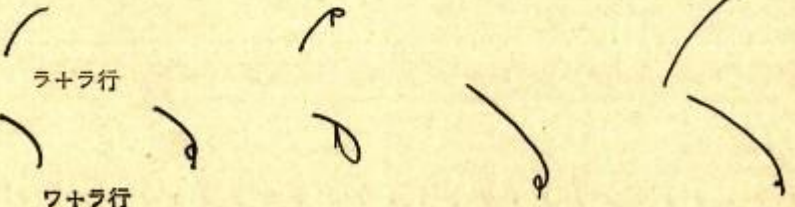
ハ+ラ行



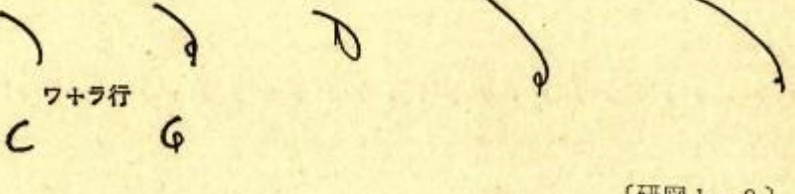
マ+ラ行



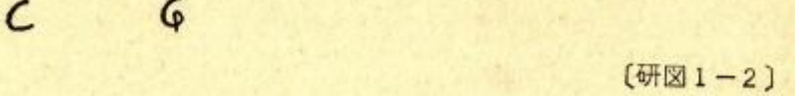
ヤ+ラ行



ラ+ラ行



ワ+ラ行



〔研図1-2〕

ハ) ラ行それぞれの音を区別する必要があるときは、ラルとリレの二つに大別し、さらにレ音はエ列省略を使うか、または基本文字エの方向に字尾を短くはじき、ロ音は基本文字オの方向に短くはじいて表わす。〔研図2〕

ラ行音を区別する書き方

アラ・アル イラ・イル ウラ・ウル エラ・エル オラ・オル

アリ・アレ イリ・イレ ウリ・ウレ エリ・エレ オリ・オレ

各行ともリレ音は研図1と同じでよい

カラ・カル キラ・キル クラ・クル ケラ・ケル コラ・コル

セラ・セル

サ行

テラ・テル トラ・トル トリ

タ行

ナラ・ナル

ナ行




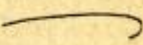


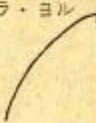
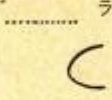





ハラ・ハル
















ハ行

フラ・フル ヘラ・ヘル

ホラ・ホル

〔研図 2-1〕

マ行	マラ・マル	ムラ・ムル	メラ・メル	モラ・モル
				
ヤ行	ヤラ・ヤル	ユラ・ユル	ヨラ・ヨル	
				
ラ行	ラル	ルラ・ルル	レラ・レル	ロラ・ロル
				
ワ行	ワラ・ワル	ワリ		
				

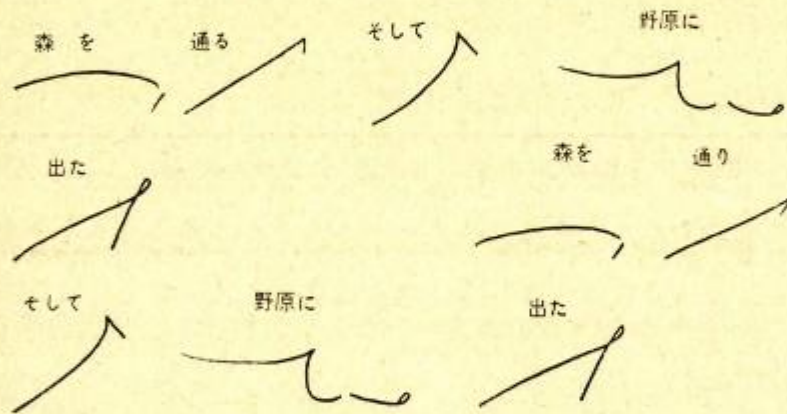
レ音	エ列またはエの方向にはじく			
				
ロ音	オの方向にはじく			
				
				

(研図2-2)

ニ) ラ行省略された特別の文字を一部きめておく。〔研図2〕

ホ) 二とおりの書き方があるものは、どちらを使ってもよい。

カ行以下のリ音は研図1と同じ書き方をします。図の中で空白の部分はラ行各音の区別なく研図1と同じでよいのですが「……をなさる、……をなさり」のように、ことばがとまったときの区別は、ル音の場合次の文字を書き始める位置を前字尾よりやや上に持っていか、少し間を置いて書くようにします。リ音の場合は前字尾になるべく接近させて後字を書きます。〔研図2-3〕



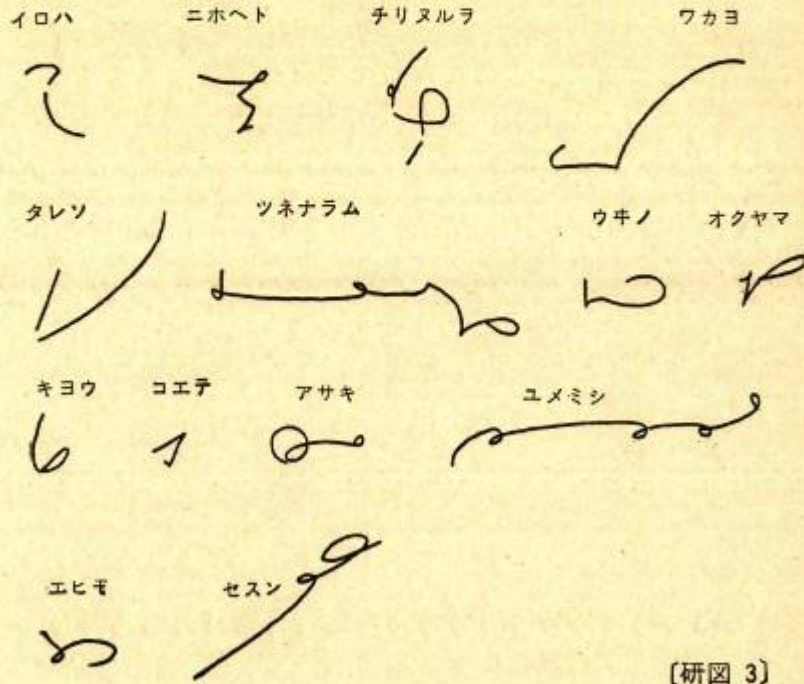
〔研図2-3〕

注意 a ア・ナ・ノ・ハ・ホ・ヤ・ヨのラ行省略文字は、アン・ナン・ノン……などと同じ形の文字になりますが、これは文の前後関係で区別できます。特に書き分ける必要があれば字尾を下方に短くはじいてラ行省略を示します。

b ウ・エ・オのラ行省略文字は、ニチ・ニツ・セツ・シツなどと同字になりますが、これも文の前後関係で区別できます。しかし使い慣れるまでは、多少下段に書いて区別することもよいでしょう。

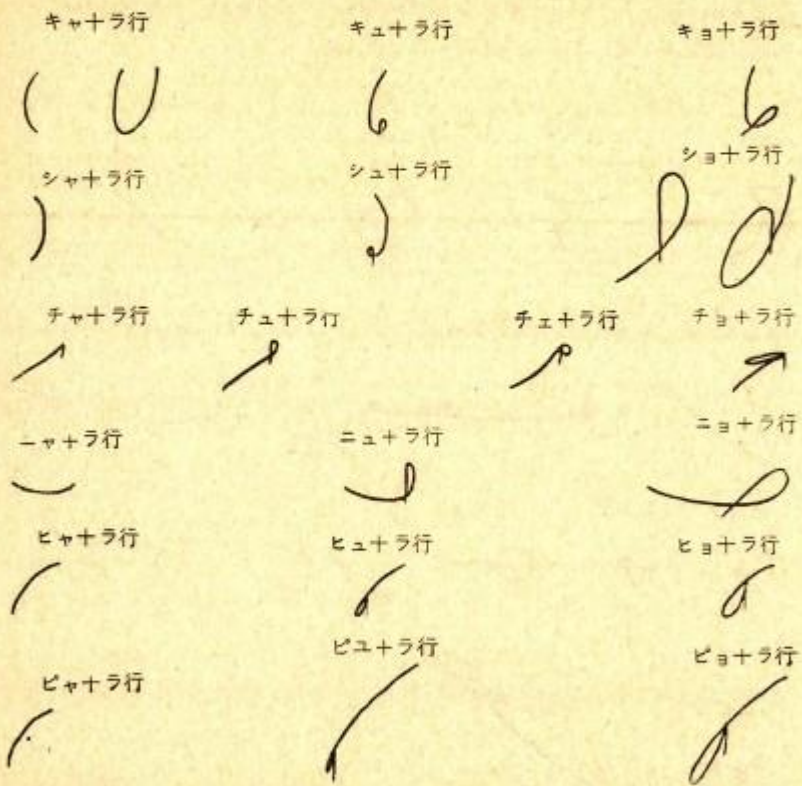
c サ行の単線、サとソの正規は基本文字の場合とは逆に上から左斜め下にはじいた線ですが、一つづりのことばの最初にサとソのラ行省略をするときは正規を優先します。2字目以後は正規変規の別なく書きやすいほうを選びます。

d ラ行の各音を区別する必要がある場合は、おもに動詞、助動詞です。「何々でアル」「何々でアリ」「何々してオル」「何々してオリ」のように、アル・アリ、オル・オリ、でことばが終わった場合区別しておかないとまちがいます。「……ナルので」とか「……ナリます」のように、ラ行省略のあとに助詞や助動詞が続いた場合は区別する必要がありません。



2) 拗音のラ行省略

拗音のラ行省略も原理は清音の場合と同じです。ただ拗音は日本語よりも外国語を速記するのによく使われます。二通りの書き方があるものは、前後の線の関係によって適当に使い分けます。〔研図4〕



〔研図 4-1〕

ミヤ+ラ行



リヤ+ラ行



ミュ+ラ行



リュ+ラ行



ミョ+ラ行



リョ+ラ行



研図4 -2]

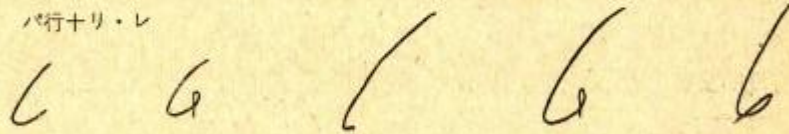
3) 半濁音のラ行省略

半濁音のラ行省略も外来語、外国語によく使われます。ここでは概略を掲げ、詳しいことは〈外国語の書き方〉のところで説明します。〔研図5〕

パ行+ラ・ル・ロ



バ行+リ・レ



〔研図5〕

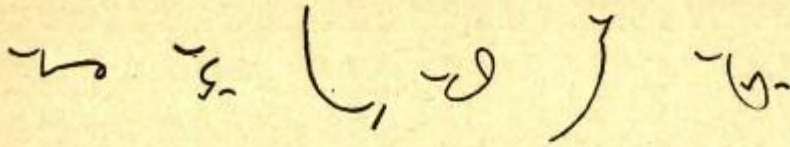
ラ行省略文字の応用例〔研図6〕

あぶらが のってくる あっさりしてよろしい あとずさりをする

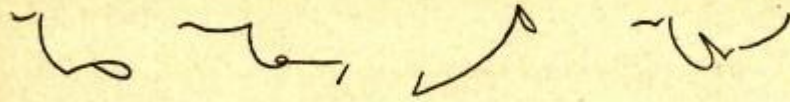


〔研図 6-1〕

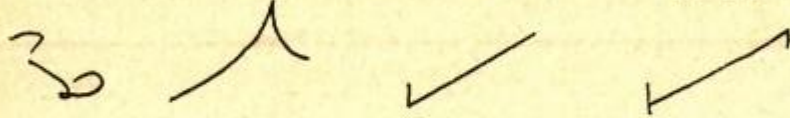
荒海 現われている 本を 著わす 青空 ありふれている



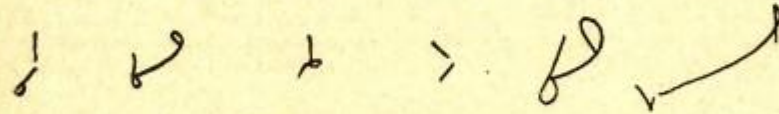
アルバム 稲光を 恐れる インフルエンザ



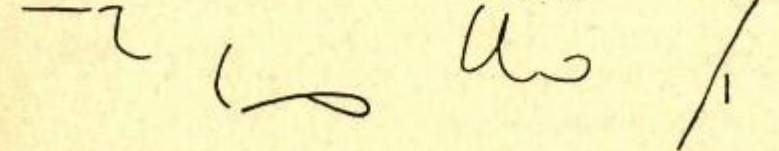
イロリの そば 受けとり 受けとる



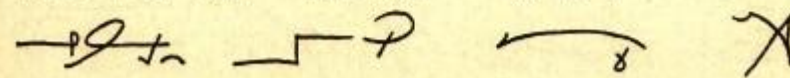
うるおう うれし うれしい えりを ただす エンゼル



からいばり キャラメル キャラバンの 一隊



キリギリスが鳴いている 暗がりの中を 黙々として 歩いた



【研図 6-2】

スリッパ すれっからし 知らんそぶり そろばん

スリッパ すれっからし 知らんそぶり そろばん

ふるさとの 便りが 待たれる 尼棒を 捕えた

ふるさとの 便りが 待たれる 尼棒を 捕えた

トランプ ならみつける 乗合自動車

トランプ ならみつける 乗合自動車

プラチナ フルスピード まっくら まっ黒

プラチナ フルスピード まっくら まっ黒

まり投げをする むりやりに モルタル 悪者

まり投げをする むりやりに モルタル 悪者

燃ゆる 私の 身寄りの 者です

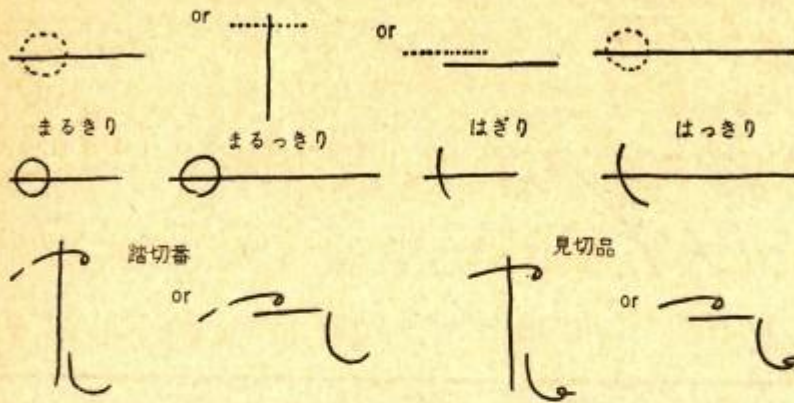
燃ゆる 私の 身寄りの 者です

(研図 6-3)

キ+ラ行〔研図7〕

キラ・キリ・キリ

……ッキラ



〔研図7〕

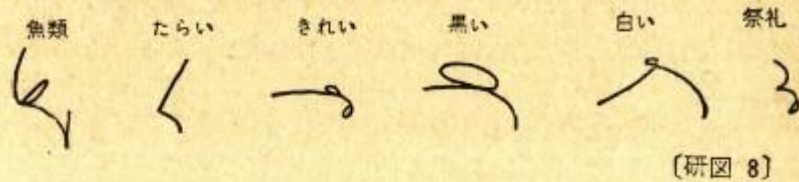
◇ 省略法が高度になると、ますます線の長さを正確にし、また基本文字の正規、変規の使い分けもまちがえないように注意が必要です。また読み返しにあたっては、「ン」と同字に扱った文字もあり、ことに一文章中ではラ・リ・ル・レ・ロを同字に扱う場合がありますからそのつもりで読んでいくことが大切です。このため自分が今まで一度も聞いたことも見たこともない、むずかしい熟語熟字は基本文字で書くとか、あるいは省略のしかたをふだんから練習しておく必要があります。

4) 他の省略法とラ行省略の関係

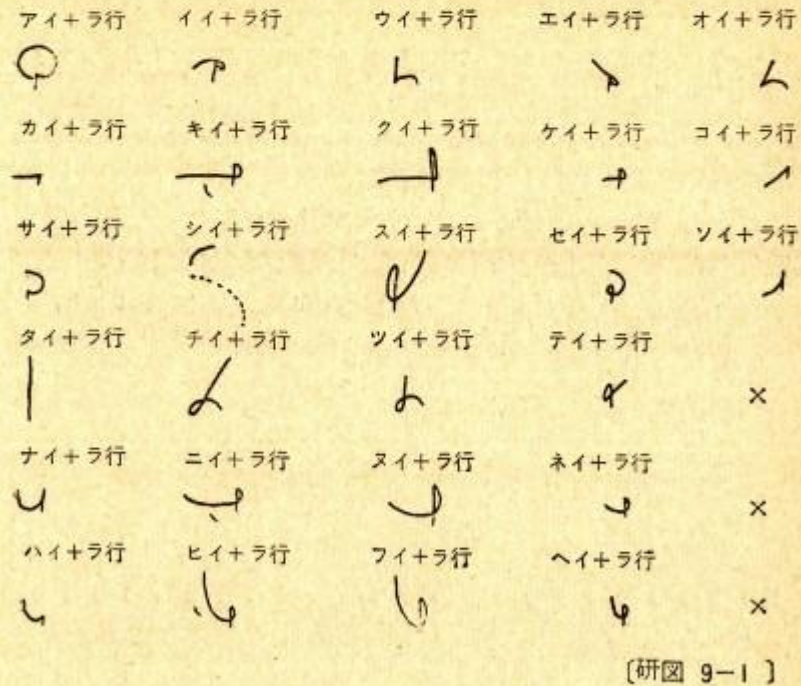
a イ音省略文字とラ行省略との関係

イ ある音に「ライ、ルイ、レイ」などのラ行のイ音省略文字が続いた場合…

…魚類、たらい、きれい……などは原則としてラ行省略法を使わないで「イ音省略法を優先する」——〔研図8〕



□ イ音省略文字の次にラ行が続いた場合……海里、経理、推理、低利、整理、フィルム……などはイ音省略文字にラ行省略を加える。〔研図9〕





[研図 9-2]

注 意

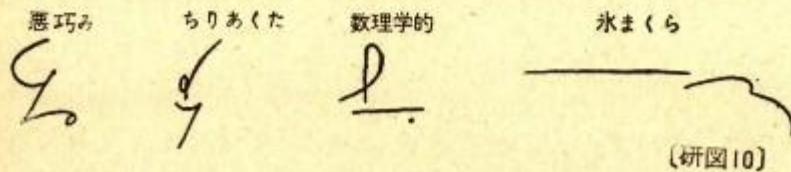
(1) 一覧表中×印のところは使うことがない。もし必要があれば普通に基本文字で書く。

(2) シイ+ラ行は、シの基本文字にラ行を省略してもよいが、形容詞語尾変化の「シイ、シク、シキ」のシイにラ行基本文字をつけるほうがよい。

(3) タイ+ラ行は、特に5～6ミリの垂直にはじいた線を使う。リツと同字になるがまちがって読む心配はない。

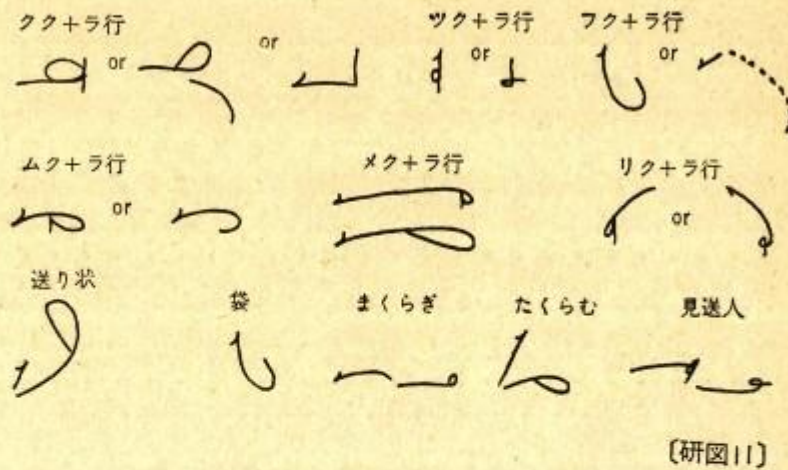
b ク音省略文字とラ行省略との関係

イ ラ行省略文字にクの半かぎを使う場合……悪巧み、ちりあくた、数理的……。〔研図10〕



[研図10]

ロ 小かぎクの省略文字にラ行省略する場合……送り状、かぐら、まくら木、たくらむ……。〔研図11〕

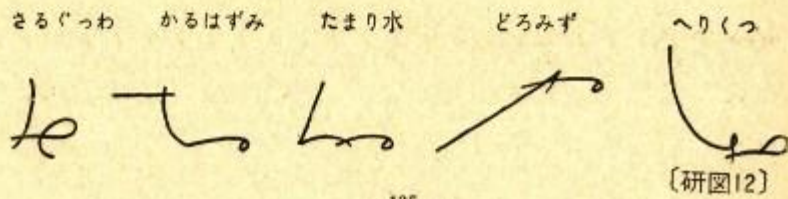


注 意

- (1) ツク+ラ行はツの基本文字にカイの線をはじめて使ってもよい。
- (2) フク+ラ行は二音文字のフクにラ行を加えるが、フクロと書く場合は図のように書く。

c ツ音省略文字とラ行省略との関係

イ ラ行省略文字に字尾を交差させたツ音省略をする場合……さるぐつわ、軽はずみ……。〔研図12〕



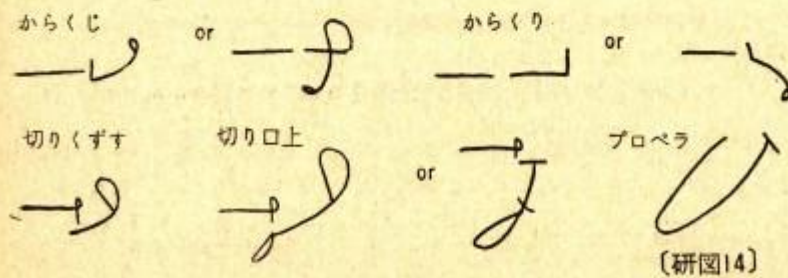
ロ 最初にツの省略をしてその文字をラ行省略する場合……移り変わり、祭り、もつれる……。〔研図13〕



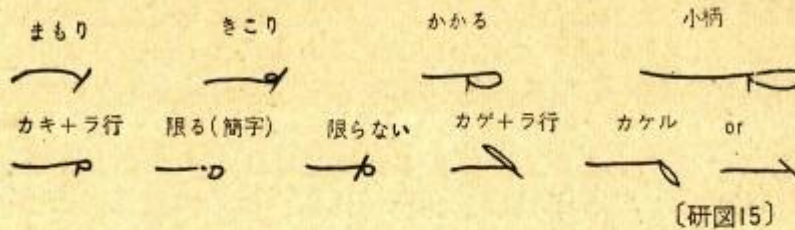
このツ音の場合は、ケツ・シツ・セツなどの二音文字や、あとで述べるツ音とチ音との関係があり、ラ行省略法だけの応用範囲は少ししかありません。

d 同行省略文字とラ行省略との関係

イ ラ行省略文字に同行省略をする場合……からくじ、からくり、切りくずす、切り口上……。〔研図14〕



ロ 同行省略文字をラ行省略する場合……守り、きこり、かかる……。〔研図15〕

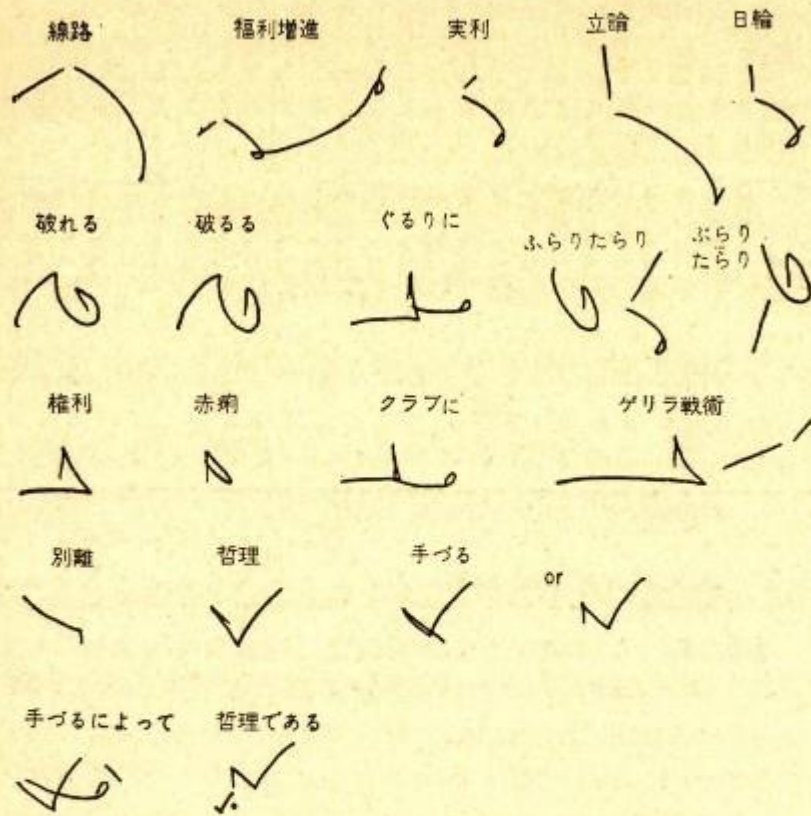


この同行省略法も二音文字その他の簡単な書き方があるのでカ行のラ行省略以外にはあまり必要がありません。

e ラ行省略の次にさらにラ行が続いた場合

f 二音文字とラ行省略との関係

線尾をはじいたラ行省略文字や、線尾をはじいた二音文字(セン・フク・シツ・ニチ・リツなど)の次にラ行が発音された場合には、普通に基本文字で書きます〔研図16〕。この意味で発音(ン)の次にラ行がきた場合も当然基本文字で書きます。しかし、「破れる、ぐるりに、ぶらりたらり、権利、赤痢……」等、ラ行省略文字や二音文字のうちで、字尾をはじかない文字の次にラ行がきたときは図のように書きます〔研図17〕。もちろん、基本文字のラ・リ・ル・レ・ロを書き添えてもよいのですが、ラ行省略はここまで応用できるわけです。応用例ちゅう、ゲリラ・権利・別離・哲理・手づる・赤痢……等は略字的に覚えて使い慣らしましょう。



〔研図16-17〕

注意——グルリという字は、クイとかクラブ、ケンリなどと同字に見えますが、クイやクラブは字尾をはじかず、グルリやケンリは字尾をはじくので、次に助詞がきた場合には、その助詞を続けて書くのと、離して書くのとの違いによって区別できます。ただグルリとケンリは高速度で書くと同字になりやすいのですが、これは文の前後の関係で誤読しません。その他「ケンリとゲンリ」

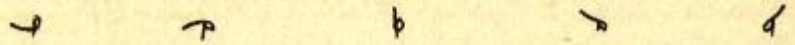
「ベツリとケズリ」「テツリとテヅル」など同字として扱う文字がありますが、[†]これも前後の内容で区別できます。しかし「フラリタラリ」と「ブラリタラリ」とは区別できない場合があります。記録ちゅうにそれを感じた場合は濁音を打つなり、あるいは濁音の位置からタラを書き「フラリとブラリ」とを区別します。テツリとテヅルは例題のようにテツという二音文字からきているので、字尾の筆を返さないではじきっぱなしでラ行省略してもよく、またエの方向に短くはじいて省略してもかまいません。

g 長音文字とラ行省略との関係

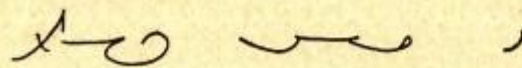
ある文章とかことばを記録する場合に、特に自分の知らない固有名詞とか、理解しにくいことば以外は、特別の事情がない限り長音、長濁音符号は省略しても、不便を感じないで読み返すことができます。このことはラ行省略文字に対してもあてはめられます。それでこの長音文字は研図1および2と、研図9のイ音省略文字をそのまま使います。ただ長音の場合は必ず線尾をウ・エ・オの方向にはじくことが原則です。

イ マ行の単線にラ行が続いた場合は、線の関係でそれぞれラ行基本文字を続けたほうが書きやすく感ずる場合があります。

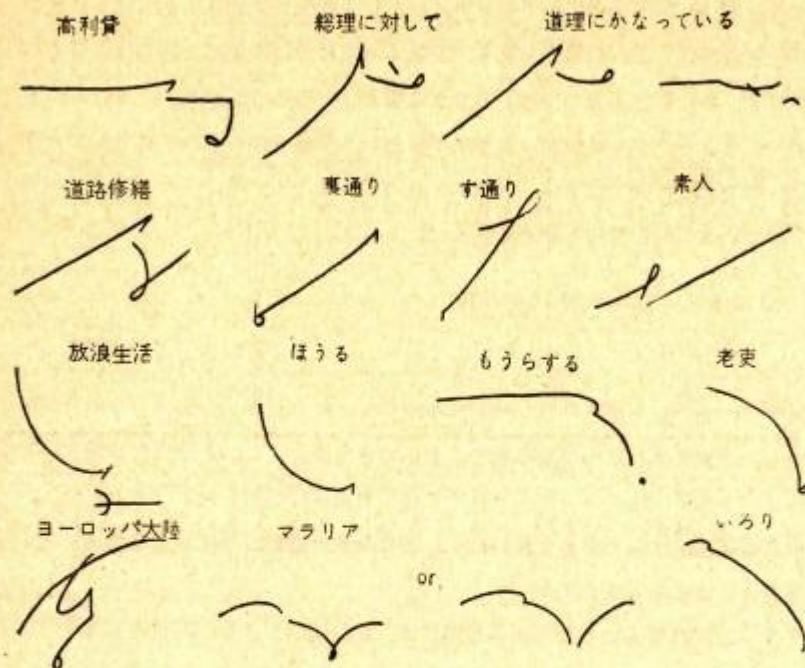
ロ ラ行の次にラ行が続いた場合は、次のラ行は同行省略で書いたほうが書きやすく読みやすい場合があります。〔研図18〕

アー+ラ行 イー+ラ行 ウー+ラ行 エー+ラ行 オー+ラ行


ザール河の流れに沿い



〔研図18-1〕



〔研図18-2〕

以上でラ行省略法全体についてひとつおりの説明しましたが、ここで今までのところを整理してみましょう。

ラ行省略法を暗記する要領

(1) ラ行を省略する前の線がどんなに簡単に書かれていても（あとで説明する〈チ・キ〉などを省略する簡単な線でも）その線が単線の場合は「線の流れる方向にはじく」また速記することばの内容によっては「線尾にウ（エ・オ）の短線をはじく」複線の場合は「線尾にウ（エ・オ）をはじく」ことによってラ行を省略する。

(2) ラ行を省略する前の線が長音である場合には、単線でも複線でも「線尾にウ（エ・オ）の短線をはじく」

(3) 自分の知らない固有名詞とか外国語、あるいは特にむずかしいことばの場合は、ラ行省略法にとらわれずに基本文字で書き、筆をとめないことが大事である。

ラ行省略法を使うときの注意

ラ行省略文字には線尾をはじいた文字と、線尾をはじかない文字（たとえば、トラ・トルとかフラ・フル……など）の二種類があります。このうちの「はじく」ということは瞬間的であっても次の文字に対して筆を離すことになります。この場合、ハに続く文字の方向によっては、筆を離している間に一文字書くことができます。この「離筆」ということは速記の上で一画の意味になるのです。そこでそういう関係の線の場合には筆を離して書いても、また普通にラ行の基本文字を添えて書いても速度の上の優劣がない、むしろ基本文字で書いた方が有利に感ずる場合があるのです。たとえば〈ハルカ、ハリヤマ、ホルモン……〉のように、ハ行の単線にラ行が続き、さらにカ行、マ行、ヤ行の右または右斜め上に延びる線を書く場合がそうです。しかし一般にカ行やサ行正規、ナ行、マ行、ヤ行などの次にラ行がきた場合は勢いよくはじいて書くほうがずっと有利です。そこでこういう点は実際にあたってどう処理していったらよいかを考えてみましょう。

1 原則としては、ラ行省略文字は全面的に使う。しかし筆を離すことは、ある場合には一画にもなり、特にむずかしいことばが発言された場合には、心理的にも基本文字で書きたくなるから、次の標準によって処理する。

(4) 前の線に対してラ行基本文字を続けにくい場合は、当然ラ行省略文字を使うこと。

(5) 前字に対してラ行基本文字を一筆で書ける場合は無理にラ行省略をしないで、基本文字で書く。

2 離筆することの効果としては、数音以上続くことばのうち、2、3音目以後にラ行がきた場合は、筆を離すことで筆勢を整え、より正確な線を出すことができる。

要するに、速記では書きにくい無理な線を使わずなおに書くこと、臨機応変に書くことが肝心である、ということになります。

〈和語・漢語・外国語〉 わたしたちが使っていることばは、昔からの純粹な日本語（おもに訓読語）すなわち和語と、中古以来中国から輸入された漢語（おもに音読語）、それに幕末から今に至るまで欧米諸国から入ってきた外来語、なお今も取り入れられている外国語というように、3種類のことばに区別できます。このことばを詳しく調べてみるとそれぞれに特長のあることがわかります。たとえば漢語の2音目以後には「イ・ン・ク・ツ・チ・キ」の音が特に多く発音されているとか、和語では「ハナ・ヤマ・アカ・サカ・ナカ・ハマ・ハカ・ラカ・ヤカ」とか「オト・オボ・コト・コロ・ソコ・トコ・モト・モノ・ヨコ」というように同列の音が続いており、また外国語、特に英語で例をあげると「エゴイスト」「ナシヨナリズム」「インタナシヨナル」「インフレーション」「カンニング」のように「スト、ズム、シヨナル、レーション、…ング」などが盛んに使われています。そこでこれらの常用の音を一筆で書く方法を考えれば、高速度の発音でも簡単に書きとめられるわけです。この3種類のことばのうち説明の都合上外国語については別に述べることにし、和語の2音文字と漢語の2音文字を説明し、なおこれらに共通する「加点によって文字を表わす方法」を説明していきます。

2. 和語省略法

和語とは、日本固有のことば、つまり中国の文化がはいつてくる前から使われていたことばを「和語」または「やまとことば」といいます。漢字の発音には、漢音（カンオン）呉音（ゴオン）唐音（トウオン）の区別があります。平安朝以後は仏教の文字は呉音、その他の場合に使われる漢字は漢音で読むことが原則になっていますが、実際の発音を研究してみると両方が交じっている上

に、唐音まではいっています。たとえば「言語」という文字は、漢音で読めば「ゲンギョ」呉音では「ゴンゴ」です。このゴンゴという発音は「言語道断」に使われますが、「ゲンギョ」という発音は少なく「ゲンゴ」と発音されることが多いのです。これは一つのことばに漢音と呉音が交じっている例です。このように日常のことばには漢音・呉音・唐音が入り交じっています。「行（イク）」という字でもほかの漢字との続き具合で「コー」「ギョー」「アン」などと読み分けます。漢字にはこの3種の音のほかに「慣用音（カンヨーオン）」といわれるのがあります。

慣用音——漢音でもなく、呉音でもなく、唐音でもなく、また現代の中国音でもない音 すなわち日本特有の漢字音のこと。例——明治のメイは漢音ではペイ、呉音ではミョウと発音する、メイは慣用音——。

世 漢音セイ、呉音セイ、慣用音セ（世間、世人、世界など）

仏 漢音フツ、呉音ボチ、慣用音ブツ、

分 漢音フン、呉音ブン、慣用音ブ、

宗 漢音ソウ、呉音ス、慣用音シュー、

格 漢音カク、呉音キャク、慣用音コー、

このような慣用音がどうしてできたのかということは、発音の面からも研究しなければなりません。だいたい、明（ペイ、ミョウ——メイ）密（ビツ、ミチ——ミツ）のように字典音がしだいに変わっていったと考えられることともう一つは、漢字の偏（ヘン）か旁（ツクリ）かどちらかにたよって読んだのが一般的になったものと考えられます。たとえば「捻出（ネンシュツ）」のネンは漢音ではジョー、呉音ではニョーですが、旁（ツクリ）の「念」にたよってネンと発音するなどです。

このように漢字には数種の読み方がありますが「訓音（クンオン）」というのは、これらの読み方とはまったく違っており、古来の日本語の意味内容に適当な漢字をあてはめて発音されている音です。たとえば「明」がペイ、ミョ

ウ、メイと発音された場合には漢語といい、アキラカと発音された場合にはいわゆる訓読みで和語といいます。同じように「密」もピツ、ミチ、ミツと発音される場合は漢語であり、ヒソカ……と使われた場合は和語になります。

漢語とは——漢音、呉音、唐音、慣用音などの音読みで表わされることばで、
和語とは——訓音によって発音されることばです。

漢語	和語
山 サン、セン、	ヤマ
赤 セキ、シャク、	アカ
半 ハン	ナカバ
健 ケン	スコヤカ
和 ワ	ナゴヤカ
安 アン	ヤスラカ
朗 ロウ	ホガラカ

このように速記の面からみて、日常使っていることばを「漢語と和語」の2種類に大別します。このうちの漢語の書き方については「イの省略法」とか「クの省略法」あるいは「2音文字」などで相当解決されていますが、和語の書き方についてはまだ専門的な書き方が説明されていません。もちろん今までの「ラ行省略法」「同行省略法」「ヤマ、ヨコなどの特殊文字」「上段使用法」などは和語を簡単に書く一部分になっていますがまだ十分ではありません。特に和語は動詞、形容詞、副詞のほか、姓名、地名などの固有名詞にも盛んに使われますから、この解決策は非常に大事なことになります。

和語を簡単に書くために考えられる省略法としては、(1)上段使用法 (2)位置
區別法 (3)同列縮字法 (4)略字万能主義 などがあります。

上段使用法——これはたとえば「アキラカ」と訓読みで発音されたものを音
読みの「メイ」に換え、それを普通の速記線上より上に書くことで「アキラ
カ」と読む方法で、早稲田式でも一部この方法を使っています。この省略法は

旧早稲田式では相当広く使っていました。理論的には簡単明瞭なこの方法も、実際の体験から弊害があることがわかりました。それは同じ発音の「キ」といっても起・基・記、「シ」といっても仕・志・思・私・司・伺・使・試……のようにたくさん訓読することばかりあり、どの訓かわからなくなる。また制限して使おうとすれば略字を覚えるほどの努力がいる。その上ややもすると乱用しやすい、というような欠点があるのです。さらにまた訓を音に換えて書くということは、すっかり慣れるまでに相当の日時と努力がいります。それで早稲田式では比較的訓音の読み換えをしやすいことだけを制限して使い、和語の補助的な解決策としています。

位置区別法——上段使用法もある意味では位置区別法といえますが、上、中下の3段どころか、4段、5段と多くの段をきめて、その段によってある音を略す方法をいいます。早稲田式でも文法編で助動詞または助詞の最初の音を下段に書いてラ行のある音を略していますが、この方法は高速度になると乱れやすく、なお全般にわたって応用ができないので、研究編で改善しています。高速度の速記で、多くの段による音の省略が不合理なことは明らかです。

同列縮字法——和語は比較的同列の音（アカタナハマヤラワ……オコソトノ……など）が続けて発音されるということから、ちょうど早稲田式の同行省略法のように、一定の省略符号をつけて同列のある音を略す方法です。しかしこれも、同行省略法が「アイウエオ」の各列を表わす5個の符号で済むのに対して、同列を省略するには「カサタナハマヤ」の各行に対して少なくとも7個の符号を作らなければならない、そのためいろいろの無理が出てくるのが予想されます。その上同行省略法のわずか5個の符号を完全に使いこなすにも相当の苦勞があるのに、まして7個になればより以上の努力と熟練が必要です。んな同列縮字法よりほかにもっと便利で簡単な書き方はないだろうか、ここから早稲田式の2音文字が考えられました。

略字万能主義——これはあることばの最初の音及び最後の音を書いてそのこ

とばの全体を表わすとか、あるいは加点を利用し、線の長短を利用して適当にその中間音を略すというような方法で、早稲田式でも、もっとも多く使われる少数のことばに対してはこの方法を使っています。しかし何千という略字を無秩序に、何の標準もなく覚えこなすことは大変むずかしいことです。速記ではできるだけ略字の数を最小限にとどめ、しかも一定の省略文法とか2音文字で覚えやすく書きやすい文字を使うことが理想です。「略字主義になるくらいなら、むしろ基本文字主義に片寄ったほうがよい」といわれているくらいです。

以上いろいろ述べてきましたが、この和語を簡単に書く方法は非常に大きな問題で、この解決には、これから述べる2音文字だけを単独に扱わないで、今までの各種省略法をも十分に活用していかなければなりません。

和語 2音文字

2音文字は今までも出てきました。同行省略法の理論はのみ込めても、これを使いこなすには相当の日時がいり、また上段使用法は理屈がわかって、これをたやすく使うようになるまでには相当の努力がいります。それに比べて2音文字は一見わずらわしく見えて、実際使ってみると便利です。それで和語にも、和語に適した2音文字を考えていくことにします。

和語の発音には同列の2音（ハナ、ヤマ、アカ、サカなど）が多いのですが、この連続して発言される2音語のうち

1 特に使用率の高いことば 2 特に書きにくい線

に対して一筆で書ける方法を考えます。つまり使用率が高くても書きやすい線であれば、それはそのままにしておく、書きにくいものを書きやすくすれば全体の速度が増すというわけです。

単線ばかり同方向に流れる線は、書きやすそうに見えても書きにくく、反対に複雑に見えても書きやすい線というものが速記文字にはあります。これは筆

の勢い、ハズミをうまく利用しているかどうか、なめらかに流れる線の動きをとめるような作用がないかどうかに関係してきます。和語2音文字はこの加速度、使用率、運筆、誤読しないかどうか等をよく調べて決定された文字です。

同列の音とはどういうものか

たびたび同列の2音ということが出ていますが、わかりやすくするためにこれを表にしてみましょう。

カ行の同列2音のことば

ア列—アカ・カカ・サカ・タカ・ナカ・ハカ・マカ・ヤカ・ラカ・ワカ

イ列—イキ・キキ・シキ・チキ・ニキ・ヒキ・ミキ・××・リキ・××

ウ列—ウク・クク・スク・ツク・ヌク・フク・ムク・ユク・ルク・××

エ列—エケ・ケケ・セケ・テケ・ネケ・ヘケ・メケ・××・レケ・××

オ列—オコ・ココ・ソコ・トコ・ノコ・ホコ・モコ・ヨコ・ロコ・××

サ行の同列2音のことば

ア列—アサ・カサ・ササ・タサ・ナサ・ハサ・マサ・ヤサ・ラサ・ワサ

イ列—イシ・キシ・シシ・チシ・ニシ・ヒシ・ミシ・××・リシ・××

ウ列—ウス・クス・スス・ツス・ヌス・フス・ムス・ユス・ルス・××

エ列—エセ・ケセ・セセ・テセ・ネセ・ヘセ・メセ・××・レセ・××

オ列—オソ・コソ・ソソ・トソ・ノソ・ホソ・モソ・ヨソ・ロソ・××

以下、タ行、ナ行、ハ行、マ行、ヤ行、ラ行と同じようになっていきます。こうしてみると、ずいぶん多くなりますが、イ列・ウ列は今までに習った重音省略法、同行省略法、ク音省略法、2音文字、また後ほど説明する漢語の省略法などで楽に書けるので除くことができます。次にエ列は和語に使われる音がほとんどないので、これも除きます。残るのはア列とオ列だけですが、これも先に述べた使用率や運筆のふめらかさ、加速度利用などの点から見ていくと、和語2音文字の必要な音はごくわずかになってしまいます。

1) カ行音の同列2音文字

ある2音のうち、第1番目の音がカ行と同列のア・カ・サ・タ・ナ……になり、第2番目の音がカ・キ・ク・ケ・コのどれかの音で構成されている2音をカ行音同列2音文字といいます。〔研図19〕

アカ	サカ	ナカ		ハカ	ハコ	ハコ
			or		or	
ヤカ	ソコ	トコ・ドコ トゴ・ドゴ	ノコ		ホコ・ボゴ ボコ・ボゴ	ヨコ ヨコ
				or		
アキ	アキ+ラ行	ナカン	アカマ・ナカミ	ナゴ	ナゴ	ヤキ ヤケ
	or					
ヨカ	ヨキ	モコ・モーコ		ホコ+ラ行	or	
					or	
ハカ+ラ行	ハカリ・バカリ ハカル・バカル	マカキ	アカク			

〔研図19〕

アカ——基本文字の「ワチャ」と書いてアカという2音文字にします。アカンはワセンと同字になり、アカラ・アカリもワセンと同字になりますが、いずれも文の前後関係で正しく読むことができます。またアカキ、アカクなどの同行音は同行省略が応用できます。

サカ——サの字尾に小円をつけ、その全体を小さくした文字で、特殊文字の「ソーイ」と同字になりますが、これも文の前後関係で区別できます。

ナカ——ナの曲線を角ばらせた線で、1画を5、6ミリに書きます。

ハカ——ハハと同字で、はがき、化かす、場敷、はかどった、はがね、はがゆい……などわかりやすい場合のみ使います。

ハコ——は同列音ではありませんがハカと関連して覚えます（ハボと同字）

ヤカ——ハカと同じようにヤの字尾上側に小円をつけた文字で、おもに最初に発言された場合に使います。

ソコ——ソの正規3分の1の線尾をはじいた文字で、今まで代名詞の「そこ」として使っていました。

トコ——も「どこ」ということばに使っていた文字でトの正規3分の1の線です（コイと同字）

ノコ——は助詞の「ノ」を書き線尾をとめます。残ら……、残り……などラ行省略するときだけはじます。

ホコ——ヨコと同じように、ホの線の勢いを利用して円をつけた文字です。

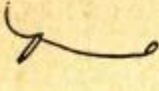









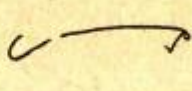


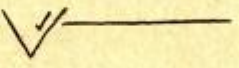
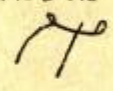
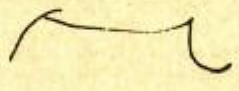

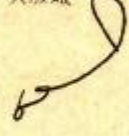



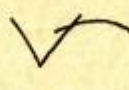
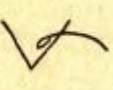

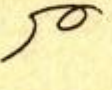
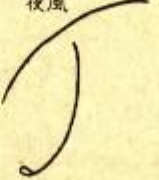
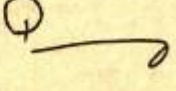
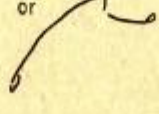
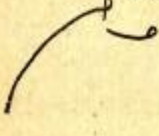


ヨコ——特殊文字のヤマ、ヨコとして今までに使ってきました。

カ行同列2音文字と関連した文字

〔研図19〕

その他同列音ではありませんが、関連して「アキ・ナゴ・ヤキ・モコ・ヨキ・ヨカ」などを覚えておくと便利です。

アキ——アカと関連してカの2分の1の線を書きます。アキをラ行省略する

箱根	とこしえに	残す	残る	のこぎり	居残料
					
誇り顔	秋田と	山形	あきらめて	or	
					
名古屋城	彼は	仲間であります		やけになった	
					
焼け野原	or			大坂城	
					
中村先生	中田	長田	中松	永松	
					
夜風が	寒い	夜風		あいまいもこ	
					
夜霧に	ぬれて	or			赤城山
					

[研図20-2]

あかがね、赤がわら、赤子などは同行省略の応用。

赤字のジは加点のシを利用し、そのシの加点からただちに次の字を書き始めます。

あがない（買う）、のナイは打消助詞のナイを応用して書きます。これと似たものでは、備え、唱え、案内、家内、区内……などがあり、みな打消助詞のナイで表わしてよいのです。

ながめて、あきらめて……などのメは「エ列の省略法」を利用します。

赤門のモは、わたくしモ、しかも、……ましてモ、などのモを応用し、この場合モとモンとは同じ形になりますがそのつもりで読んでいきます。

あからさまのアカラはラ行省略して、サマはサで前字を切って様を表わす書き方です。

とこ夏のナツはツの省略法

ところてん、ふところなどは、「トコロ」の文字か、「トコ」にラ行省略をして使います。

はかりごと、はからずもは、図のように「ハカ」の2音文字でもよく、カラズ、ナラズ、アラズなどの線を利用してもよく、また助詞のバカリを利用することもできます。

やかましい、やかましく、やかましきなどのシイ、シク、シキを形容詞の話尾活用に使うときは、シイ、シク、シキの頭に次のように父音を含めて使うことができます。

カ	{	シイ	{	シイ	{	シイ	{	シイ	{	シイ	{	シイ
		シク	{	シク	{	シク	{	シク	{	シク	{	シク
		シキ	{	シキ	{	シキ	{	シキ	{	シキ	{	シキ
ヤ	{	シイ	{	シイ	{	シイ	{	シイ	{	シイ	{	シイ
		シク	{	シク	{	シク	{	シク	{	シク	{	シク
		シキ	{	シキ	{	シキ	{	シキ	{	シキ	{	シキ

これは実際に、ヤカシイ、カワイシイ、メズシイと書いても、前後の関係で自然に「ヤカマシイ、カワイラシイ、メズラシイ」と読めます。

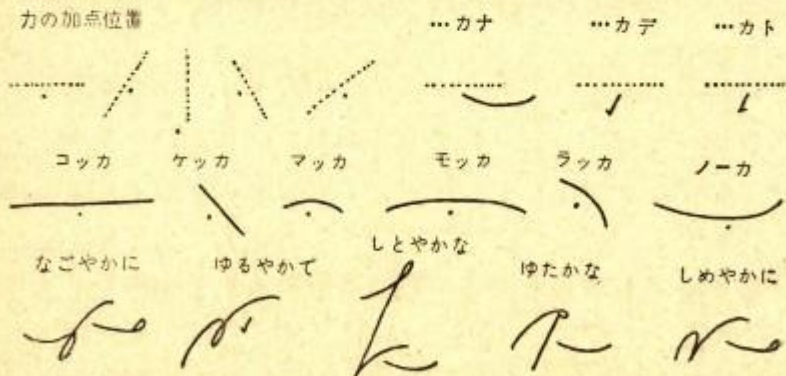
夜風のヨカ、ヨキ——などの書き方は図のように2音文字利用とか、あとで述べる「カ的位置」利用とか漢語の書き方利用など、どちらでも書けます。

永田、長田、永井、長野——などの固有名詞はなるべく濁点を打って中田、中井、中野などと区別しますが、同じ話の中に同じ固有名詞がたびたび出てきた場合は、濁点を打つ位置から次の田とか野を書いて区別します。

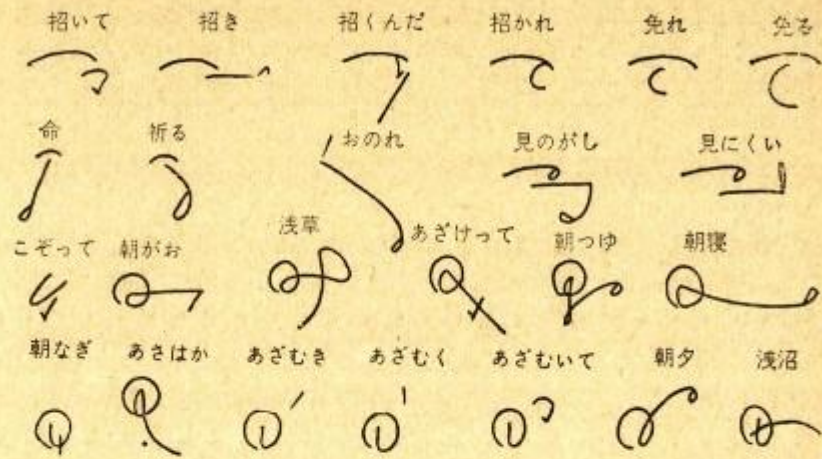
前字の下(カ)に加点してカ音を省略する書き方

なごやかな、なごやかに、なごやかで、ゆるやかな、ゆるやかに、ゆるやかで……などのカや、やかましいのカが出てきたので、カを省略する書き方をここで説明しておきます。

国家、結果、まっか……などの詰音がある場合や、法科、廊下のように長音の場合に、前字の下に加点してカ音を省略するのが「漢語の省略法」でこれを和語にも応用します。〔研図21〕



〔研図21-1〕



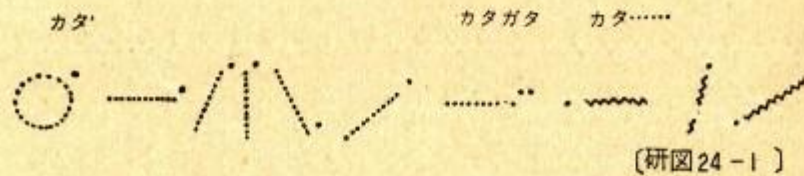
〔研図23-2〕

望・臨は「訓音換記」の応用上段にリンを書いても表わせますが、2音文字のノゾのほうが筆を難さないで書けるだけ有利です。

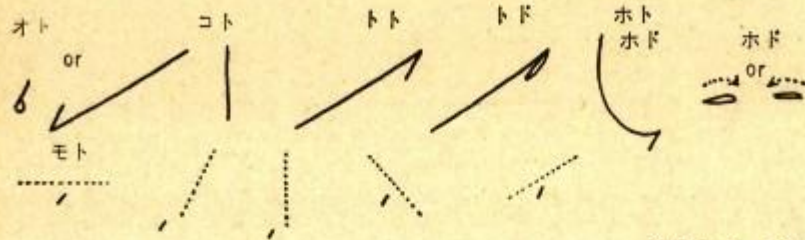
又の省略法は、又と同行のニ・ネ・ノ・「招き(く), 招かれ, 命, 祈り, おのれ, 見のがし……」などに拡張して利用できます。「招かれ」と「免れ」は招かれをエ列省略の位置に書いて区別します。

3) タ行音の同列2音文字

〔研図24〕



〔研図24-1〕



〔研図24-2〕

カタ——原則として「あなたがた」「味カタ」のように2音目以後に使う文字です。カタが最初に発音されたときは基本文字で普通に書きます。しかし速記文字に慣れてくれば、「形、刀、肩身……」のように最初に発音された場合でも、加点の位置をはっきり覚えて使ってもかまいません。

書き方としては「あなたがたの……」と発音された場合「カタ」の位置からただちに「ノ」を書きます。

なおこのカタは「肩、方、型、渦……」の音に対してだけでなく「方（ホウ）」ということばをも表わし、これを拡張応用して「法」に使うこともできます。

オト——普通に書いても書きにくい線ではないのですが、男、おとめ……など使いやすいものに利用します。（基本文字のオーと同字）

コト——今までも使ってきた「コト」をそのまま和語の2音文字として、「コドモ、コトシ……」などのことばにも使います。

トト——はトオと書き、トドは同行省略で書きます。

ホト——もホオと書き、ホドは楕円を使用します。ことばによってはどちらを「ホト、ホド」に使ってもかまいません。

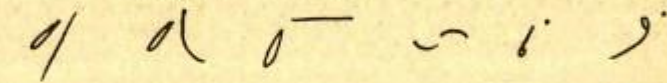
モト——最初の発音は普通に書き、2音目以後のものには、前字の中央下（モト）にオの短線を書いてモトの音を略します。

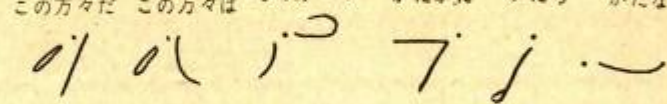
なお最初に「モト」が発音されたときでも「求め、まとめ……」のようなマ

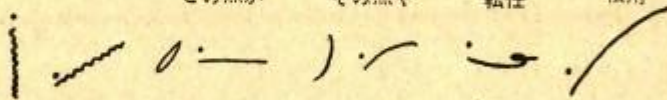
行単線にト+マ行は、トをオの短線で書き、「認め……」のようなマ行複線にト+マ行のときは「ミメ」と書いてトを略す場合もあります。

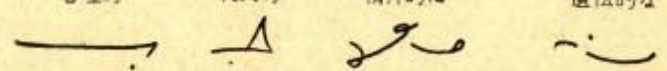
カタ、テン、テキの比較

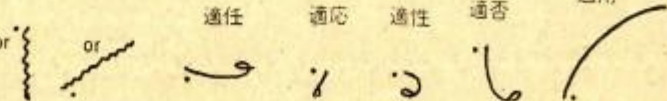
カタ、テン、テキなどの使い方ははっきり覚えておかないと実際の場合にまごつきます。〔研図25〕

カタ このかただ このかたは このかたが ありがたい おおかた 仕方
 

カタガタ この方々だ この万々は その万々の かたかた かたち かな
 

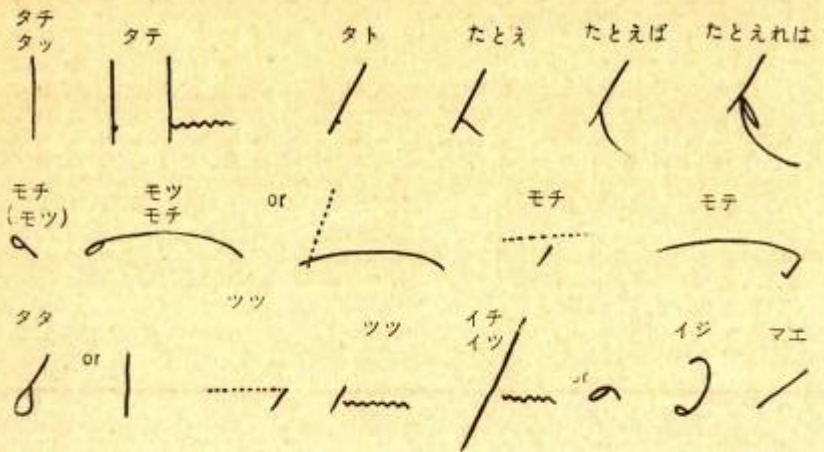
テン この点が その点や 転任 転用
 

テキ 合理的 現実的 精神的に 遺伝的な
 

テキ or or 適任 適応 適性 通否 適用
 

〔研図25〕

タ行同列2音文字と関連した文字〔研図26〕



〔研図26〕

タチ・タツ——これはリツ（立）をそのまま訓読した文字で「コト」をはじいた線です。タテ——の場合はエ列の位置に加点して区別します。

タト——タに同行省略したつもりで図のように字末に加点します。また「オト」の書き方を応用して同行省略のタチのように書いてもよいのです。（タチはコトをはじいた線を使う）しかし「たとえば、たてえ話」のタトのように、あとに続くことばがある場合が多く「タチ」の書き方はあまり使いません。

モチ・モツ——「エツ」と書いたり（後説のモツテと関連）2音目以下の場合は前字の中央下に「シツ」を書いて表わします。モチ、のテは助詞のテを利用します。

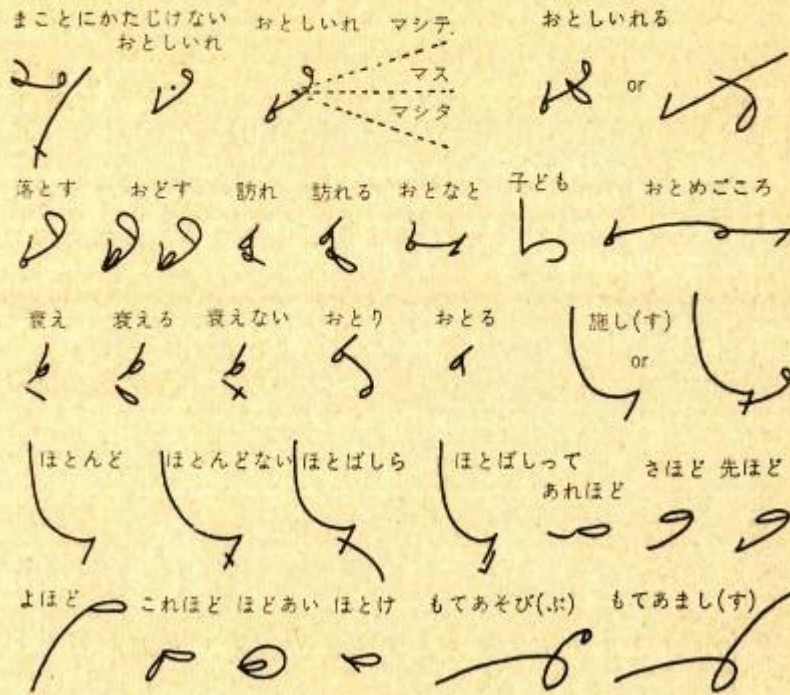
タタ——同行省略で書いてもよく、「立」の内容を意味することばの場合には「タチ タツ」をタタに伸っても読めます。

ツツ——基本文字に重音省略を利用して書いても速度の上では十分ですが、助詞の「ツツ」を応用し、「続き、包む……」などのようにツツが最初に出た場合に、次の字をツツの中央から書くと読みやすくなります。

イチ・イツ、イジ、イズ——〔研図26参照〕

マエ——数字の1をイチ、イツに使い、2音文字のリツをタツに拡張応用したのと同じようにゼン（前）をマエ（前）に使用します。

応 用 例〔研図27〕



〔研図27-1〕

もてあまし	もてあまして	もてあました	もてあまされて		
もてあそび	もてあそばれた	懐み	懐む	懐んで	
いっくしみ	or	いっくしむ	ありがたい	ありがたい	やり方
			ありがとう		
傾く	or	弟	男と	女	
ことさら	ことさらに	ことづける	届出で	届ける	
求め	or	足元	源		
立ち往生	子どもたち	家が建つ	載物	建物	
たて横	建坪	たとい	治安維持	たたかい	
				[研図27-2]	



かたじけない——のシケはシキの2音文字を応用します。

おとしいれ——「入(イル)」の音を応用してシの内側へ加点します。

落し、おどし——同字でもほとんどまちがえませんが、文の前後関係でわかりにくいと思ったときは、オドを「タドの同行省略の書き方」を応用してオに楕円をつけて書きます。または字尾円を回して後字を続けます。

廻し・す——ホにトコを続けるのは書きにくいので、特にホオ=ホドと書いて「ホドコ」とし、その内側に「シ」の省略加点を打ちます。

ほとんど——ホトだけを書いて「ンド」を略し、ほとんどない、のように打消詞が続いたときは「ホトンナイ」のように書きます。

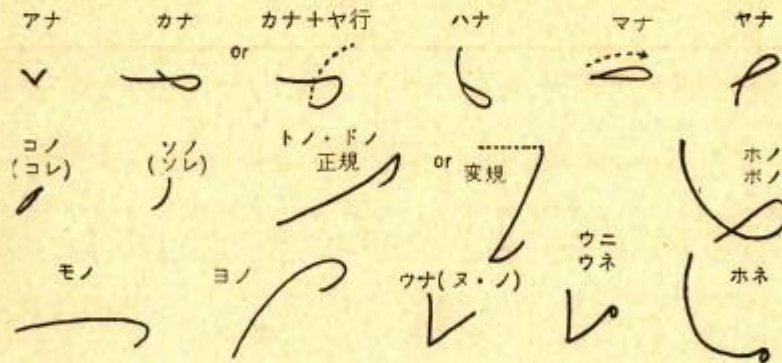
もてあそぶ、持て余す——特に遊び、余りの上段文字をモテに続けて書き、モテをほかの字とまちがえぬように長めにモを書き略字的に覚えます。

慎み・慎む、いつくしみ、いつくしむ——シミとシムの大きさと長さの区別に注意します。

数字の1を使うとき——「いつ、いずれ、著しい」などは1を使わないほうが読みやすいのです。だいたい数の1の内容を表わす場合には、その発音がイチでもイツでもヒトでも数字の1を書いて読み返しやすいのですが、それ以外は前後の文章や内容によって適当に制限していく必要があります。

4) ナ行音の同列2音文字

ナ行を2音めに持つ同列音は「アナ、カナ、サナ、タナ、ナナ、ハナ、マナ、ヤナ、ラナ、ワナ、オノ、コノ、ソノ、トノ、ノノ、ホノ、モノ、ヨノ、ロノ」などですが、このうち「サナ、タナ、ナナ、ワナ、オノ、ノノ」は文字のつながりが鋭角になるとか、また重音省略で簡単に書けます。「ラナ、ロノ」はほとんど使うときがありません。〔研図28〕



〔研図28〕

アナ——穴、アナタ、アナガチ、アナドルなどがあります。アとナは同じ方向に流れる単線であり、字尾に円のある複線が続くよりも書きにくくなります。こういうところから「アカ、ナカ」などの2音文字も考えられたのですが、このアナもちょうどナカをナの線の底をとがらせて表わしたように、アの線の底をとがらせます。したがって、アナはナカより全体に小さくなります。書く気持としてはできるだけ小さくアに角度をつけるのです。

カナ——仮名、カナシ、カナデルなどのカナも同じ方向に流れる単線です。この書き方は、カの加速度を利用してナを逆に戻すようにします。同行省略のカカと似た文字になりますが、万一同じようになっても文の前後関係で区別できます。しかし要(カナメ)、金物、などの「カナ+マ行」、「かなやま君」などの「かな+ヤ行」以外の行が続くときは、ナの逆線をカの少し上まで出して区別すると読みやすくなります。

ハナ——花、ハナハダ、ハナヤカ、ハナレテなどのハナは基本文字のフと同字です。しかしフはほとんどの場合短い線を右斜め上にはじく字を使い、しかもフは1音でハナは2音になっているのでまちがえるようなことはありません。このハナの字源は「ヤマ」という文字と比べてみるとすぐわかります。

マナ——マナイタ、マナコ、マナビなどのマナもやはり、マの字尾から一気にナを戻します。ちょうどホドの楕円を大きく書いたようになります。

ヤナ——ヤナギ……ヤの字末へナの逆線を書きヤマと区別するために字尾を突き出します。

コノ、ソノ——今まで「これ・この、それ・その」に使っていたのを全体のことば(固有名詞でもよい)に応用します。

トノ、モノ、ヨノ——ト、モ、ヨの基本文字にかたかなの「ノ」をつけます。

ホノ——ホノボノ、ホノカ……はハナの書き方のようにホの字末に大円をつけ、ホコとまちがえぬために字尾を出します。

ウナ・ウヌ・ウノ——ウナガシ、ウヌボレ、ウノハナのように使うことばの範囲が狭いので「ナ、ヌ、ノ」を同字で書きます。ウの倍の線、つまり「コト」の線にチャの線を続けてウナ・ウヌ・ウノの2音文字とします。ナカと似た文字ですがナカはナの曲線の感じが加えられており、ウナ……はウの直線の感じが加えられています。

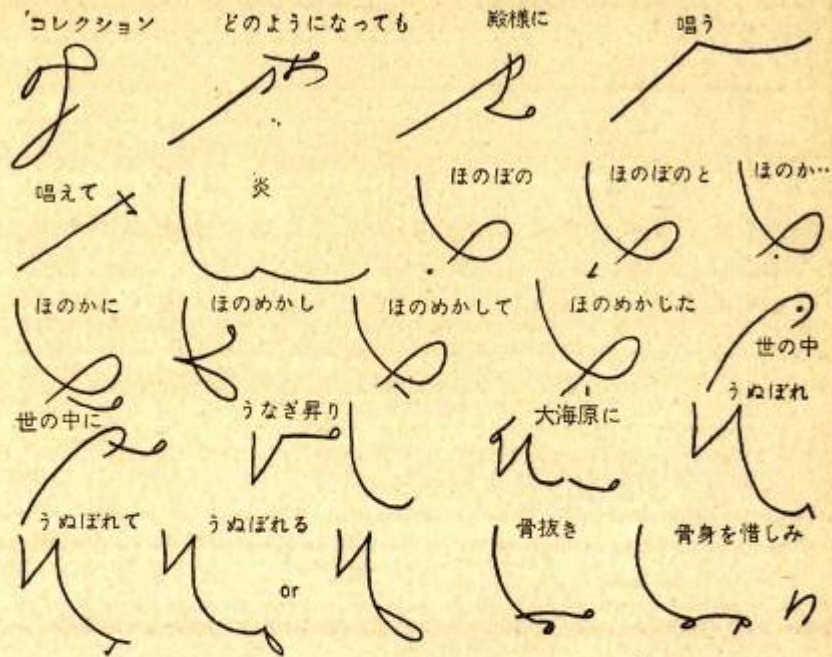
ウニ・ウネ・ホネ——前の説明と関連して覚えられる文字です。ウニ・ウネは同字で表わし、ウナの線尾にニ、ホネの基本文字の最小円をつけます。ホネは

ホヒの同行省略と同じ文字になりますが、使われることばが、骨抜き、ほねお
り、ほねなし……など範囲が狭いのでホヒとまちがう心配はありません。

応 用 例〔研図29〕

アナウンサー	悔り(る)	悔って	かなえの軽重	かなえ(カナイ)の
悲しみ	悲し	カナヅカイ	カナリヤ	カタカナやひらがなは
花合わせ	花かご	花形	花盛りである	はなし家を 花園
花見客	はなれわざ	離る	離れて	はなやか 大阪の 此花区
まな板	眼	学び	学んだ	
銀座の	柳	柳田	好み お好み次第	
これら	これらの	それら	それらの	あれこれ それやこれや

〔研図29-1〕



〔研図29-2〕

あなどり(る)——は前記アナにトリ・トルを続けるわけですが、あなどって、あなどったのように語尾が変わりますから、ラ行省略の正規よりも図のようにトをはじいた変規で使うほうが便利です。

かなえ(縣)の軽重(ケイチョウ)——のカナエはナイの打消助詞を使います。同じように柳のヤナギもナキの打消助詞を使ってよいのです。

金具、カナリヤ——はカナの2音文字を使うよりも、ク音省略、ラ行省略で書くほうが便利です。火難なども同じ。

花盛り——2音文字のサカ、上段文字の盛(セイ)どちらでも書けます。

離れ・離る——はラ行省略しますが、離れて・れたと続く場合は特にテ・タ

を難さないで、ハナテ、ハナタと書きます。ラ行省略してテ、タを書いてよいのですが、離れて・れた、忘れて・れたはよく使われることばなので一種の常用語として、特にレを略して書くのです。

好み・好む——のコノは右回りでも左回りでも書きやすいほうでよく、好んでのコノンは「国民」と同字になりますからそのつもりで読みます。

炎——普通にホとノを書くほうが気持ちに合います。

ほめかし・す——特にホノシ・ホノスのように書いて略字的に覚えます。

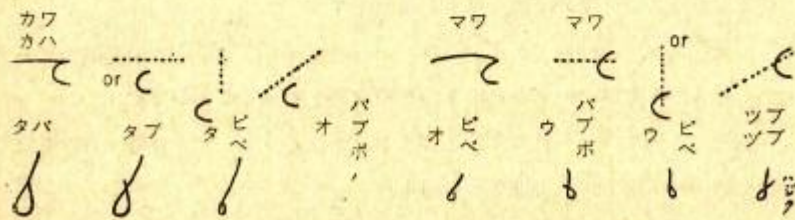
世の中——ヨノの中へ加點してナカを意味します。

うめぼれる——レルの楕円をホの字末に一筆で書きます。

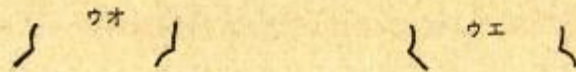
背抜き——ヌを抜いてキを交差させます。

5) ハ行音の同列2音文字

ハ行はワ行と密接な関係があります。「アハとアワ、カハとカワ、サハとサワ……」のように同音に聞こえる場合があるので、ここでまとめて説明します。ハ行、ワ行の同列音もだいたい書きやすい線ですが、オやウ、クの正規、トの変規にハ行が続く場合はそのつながりが鈍角になり、しかも直線と曲線の単線が続くのでやや書きにくくなります。〔研図30〕



〔研図30-1〕



〔研図30-2〕

カハ・カワ——これは少しも書きにくいことはないので、最初に発音された場合は当然基本文字で書きます。2音目以後の場合でも前の線の続けぐあいによっては略す必要がないのですが、「品川、吉野川、化けの皮……」などと速く書くと文字が乱れてきます。そこでそういう前の線の関係とか、続く音の多い少ないによって書きづらいつ感じた場合は、「下（カ）の加点」を利用して前字の中央下にワだけを書いてカの音を略します。これは2音文字ではないのですが、実際の使用率は多く、また使っても便利です。

タバ——あまり多くは使われませんが、運筆を少しでもなめらかにするためと、これに似た書き方がほかにもだいぶあるので2音文字として出しておきます。タバは同行省略のタタのようにタの字末に小円を書きますが、タタの円より少し大き目に書きます。しかしタタと同字になってもさしつかえありません。このタバの書き方は「淀橋、木戸場に……」のように、変規のトにバが続いたときにでも応用できます。

マワ——最初に発音された場合は普通に書きますが、前字の関係によっては、前の字に「ワを回して」マを略します。引き回し、あと回し、時計の針の回る方向、金回り……など、主として「回し、回す、回り」のことばに応用されます。マワとかカワなどは前の字によって適宜に応用するので、「適宜応用文字」ともいい、純粋な2音文字とはいえませんが、説明の都合上いっしょに述べたわけです。

オボ——覚え、おぼろ月などのオボ、これは「オー（オホ）」の発音がオボに似ているので、そのオーという長音文字の線尾を少し出すことで「オボ」の2音文字とします。このオボとかタバ、トバなどのよく似た書き方は、オ、タ

の正規、トの変規、ウのように上方から下方に流れる線にハ行が続く場合にだけ応用します。この場合だいたいハ行は「バ・ブ・ボ」が同字に扱われ、「ビ・ベ」が同字に扱われます。

タブ・タボ——もタバと同字でよいのですが、タボは事実上使用されることばがないのでタブだけに適用します。タバと区別するには図のように線を少し出しておきます。

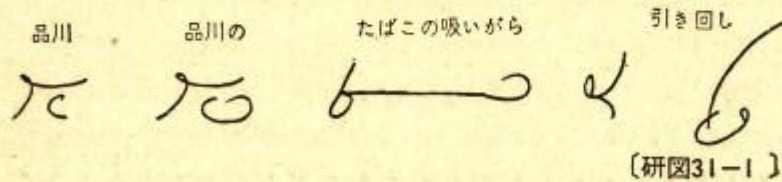
タビ・タベ——使用率が多く、同行省略タチと同字になりますがタチはリツ(立)を使うので誤読しません。

オビ・オベ——オーやオトと同字になりますが、実際に使って誤読しないことを調べてきめた文字ですから心配いりません。

ツブ——は特にフの使い方を拡張応用してツンのように書いて表わします。

その他——ウオ、ウエのように直線を鈍角で続けなければならぬような場合には、最初のウの字末を心持ち曲線に変えて次のオとかエを続けるようにすれば速度も落とさず、また読みやすく書けます。これは理屈とか理論というより技術的なこととなります。

応 用 例 題〔研図31〕



かき回し 時計の針の回るように 金まわりがよい

覚え 覚えて 覚えた 覚える おぼつかない わずか

おぼれる おぼれて おぼろげに おぼろげで

おぼろ 月夜 たぶらかす ダブル このたびは 旅路

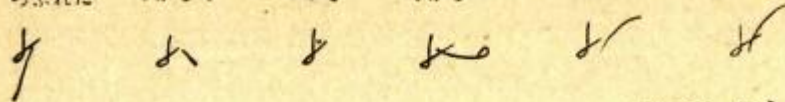
たびたび 食べた 食べる 淀橋 阪止場

多弁と駄弁とは区別する 帯には少し短い おべんちゃらをいった

おばさんとおばあさんとは区別する 彼のおはこはなんだ

オブザーバー オフセットの印刷物 産声をあげて 産湯を使った

(研図31-2)

つぶれた つぶして つぶさ つぶさに つぶやく つぶやき


〔研図31-3〕

おばさんとおばあさん——おばあさんと書く場合は必ずオバワテンと一回りさせて書き、おばさんと区別します。

うぶ声——のコエは普通にコエと書いてもよいのですが、コエとコイはだいたい同字に扱って大丈夫です。

6) マ行音の同列2音文字

〔研図32〕

ナマ 正規 ナマ 変規 ハマ、ハム 正規 ハマ 変規 ヤマ ヤム ヤミ (ヤメ) ヤメ ヤモ

 コモ ソモ トモ ノモ ヨミ ヨマ ヨモ (ヨメ) ヨム

〔研図32〕

ナマ——基本文字の流す書き方でもよいのですが、次に続く線によっては書きにくい場合があるので2音文字を使います。あとに続く線によって正規、変規(ヌと同字)を適当に使っていきます。

ヤマ、ヤム——今まで使っていたヤマをヤムにも使います。

ロモ、ソモ トモ、ノモ、ヨモ——のモは有尾円のモですが、これは原則として右斜め上に延びる線に対して使うものです。ソやトを変規で書く場合には「えません。

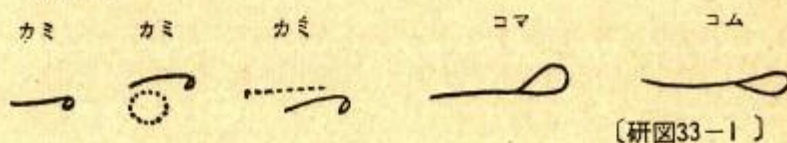
ヨミ・ヨメ——同列音ではありませんが、ヤミ、ヤメと関連して覚えます。

その他——図によってそのまま覚えてください。ただ「ヨマ・ヨム」の2音文字は「ヨコ」とまちがえないか、という心配がありますが、これが同じ文字としても「横須賀や横浜」を「ヨマスカやヨマハマ」「本を読むのです」を「本をヨコのです」とは読みません。速記文字に慣れると同時に、すなおに読んでいけばまちがえることはありません。しかし各文字の造られた基はそれぞれ違っています。「ヨコ」のヨはヨの字末にオの楕円をつけた文字であり、「ヨマ・ヨム」のムは楕円でなく小円です。ですからそのつもりで書いていけばいっそう読みやすくなります。なお「読売新聞」「読み方」「お嫁さん」「嫁取り」のように名詞として使う場合には、「ヨミ・ヨメ」は同字でも区別できますが、「読み、読め」のように動詞として使う場合には、メは「エ列の加点位置」を利用するほうが読み返しに楽です。こういう点は「ヤミ、ヤメ」の場合にも、またこれから習う中にもありますから注意しておいてください。

2音めのマ行音

次に2音めにマ行音を含む文字を説明します。同列音以外のものもありますが、だいたい似たような書き方ですから、少しづつ使い慣らしてください。

〔研図33〕





〔研図33-2〕

カミ——上・神・紙……カキをカミに兼用します。また福の神、山の神、この紙、のような場合は前字の中央上（カミ）にミだけを書いてカを略します。これは下（カ）の位置を利用することもできるので前字の連筆ぐあいによって適当に使えばよいのです。カミの書き方はカをややそらせて同行省略のナニを帯くつもりで連筆します。ナニは一般に何（ナン）と書きますからまちがえることはありません。手紙は特にテミと書きます。

コマ——コにマの逆線を返してもよいし、小さい丸、小丸を困り・る・困って・困った・こまかい・こまかく、などのコマに使ってもかまいません。「駒ヶ岳、こまやか、小間使」など最初にコマが発音された場合は小丸を右回りに書いてコマを表わしますが、「生駒（イコマ）、古ごま」のような場合はコにマの逆線で書いたほうがすなおな書き方です。

コム——「ゴム、小麦」などに使われるだけで使用率はあまりありません。コマ、コムを同字に扱ってもよいのですが、同行省略のコカの形でもさしつかえありません。

コミ・コム——繰り込み・む、乗り込み・む、見込み・む、落ち込み・む、閉み・む……のようにコミ・コムが2音め以後に発言された場合に「オの線」を前字の中央下につけて表わします。

コメ——米を意味することばのときはベイと書いて位置にかかわらず自由

に使いますが、やり込めて……の場合は前字の内側へ「ヘイ」を書きます。

シマ・シム・シモ・シミ・シメ——使役の助動詞「……セシメテ」に使っていたのを一般に2音文字として使います。

シモとシマは固有名詞のときなどに誤読しやすいので、シマの字尾をはじいてシモ、あるいは字末の近くに加点してシモというように区別します。もう一つ別な書き方は「下(シモ)」の内容を持つことばが2音め以後に発音された場合に「下(モト)」の書き方と同じように書いてもよいのですが、これらは慣れてくると自然に出てくることで、特にどういう場合にはどの書き方というようなことはありません。

イマ——今……は速記文字に慣れてくれば、今や、今に、今の、今は、などイと同方向のマをまったく略して、イヤ、イマ、イノ、イハと続けて書きます。ただ今川、今野、今村などの固有名詞は井川、井野、井村と区別できませんから、イマの次の字を離して書きます。

イミ——ミの最小円をイにつけてイーと同じ形に書き、もしまぎらわしい場合はイミの字尾から少し離して次の字を書きます。意味という場合はイーとまったく同じに使っても誤読しません。

イモ——有尾円のモの利用で、イモとイモンは同字です。

セメ——セキという漢語の2音文字より少し大きく書きます。

ツイ、ツマ——普通に書いても速度的には変わりませんが、クイ、ファイなどの書き方のように、ツの最小円をそれぞれイ、マの長さの楕円に変えて図のように書きます。

ツマラ・ツマリ・ツマル——はマをラ行省略しても書けますが、図の文字は旧早稲田式のク・チ・ツ・テ・トのツにあたり、この文字一字でツマをラ行省略した文字にします。なおツマラ……に慣れてきたら、ツモリにも拡張応用します。行きづまり・る……などにも使いますが、この場合のユキ、ユクはクの省略法を応用して同字で書きます。(漢語の書き方のところで説明)

応用例〔研図34〕

手紙を書いた	上の	句と下の	句を	読し
夜まわり	神様や	仏様に	手をこまねき	こまねいて
	or			
細かく	困りまして	困るのであります	申込書	米つき
米つき	小麦	or	日本は島国である	
		or		
島流し	事務室に入った	籍問機関		
	or			
川中島の戦い	島村	下村	締切時間	
しめやかに	今ごろ	戒めて	南米移民	里芋
				じゃがいも ^妹

〔研図34-1〕

セメント 行き詰まる 行き詰まった 福の神 山の神 困る

4 8 9 5 R 。

困って 細かい 駒ヶ岳 こまやか 小間使い 生物

9 a Z 7 2 一

線込み 乗り込み 見込み 囲み やりこめて 今や

7 一 一 一 7 7

今に 今の 今川 伊川 or 今村

一 一 一 一 or 一

井村 主意気である 鼻息が荒い なまかじり

一 7 or 一 一 7

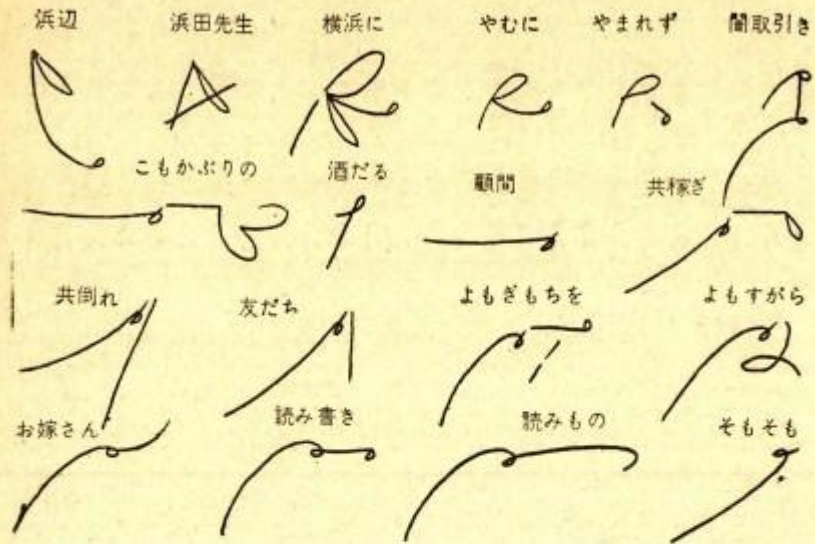
なまざかな なまめかしい なまめかしい なまたまご

h h h L

葉巻 はまぐり アルバム 浜中 ハムサンド

7 7 7 7 or 7

〔研図34-2〕



〔研図34-3〕

なまいき——イキはイを交差させてイツと同じように書きます。鼻息もハナイツと書きます。(漢語の書き方で説明)

共倒れ——クオレは、クを少し長くして倒します。つまりクオを揺りついでつもりで長く書きそのつぎめと思われるところに加点してクオレに使います。

嫁さん——同じ話の中に嫁さんということばがたびたび出るようなときは「ヨメン」と書いておいて十分読めます。

夜回り——ヨマ+ワリでも、ヨ+マワリでも書けます。

小麦、小麦粉——同じ話の中にたびたび出るときは小麦のムキに「向かって」のムキを応用して書きます。

国——ク1字を書いて国を表わし常用語として使います。島国のような場合もシマにクを続けて書きます。

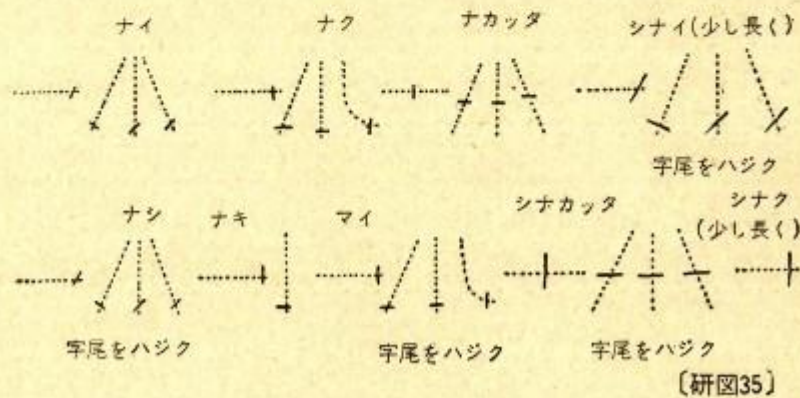
島流し——島の中（ナカ）からシを書きます。川中島も同じことです。

移民、委員、慰問、いずれも、いも——皆同じ字で区別できますが、まぎらわしいと感じたときは普通に書くなり、アンダーラインを引いて読み返しのときの注意にしておきます。

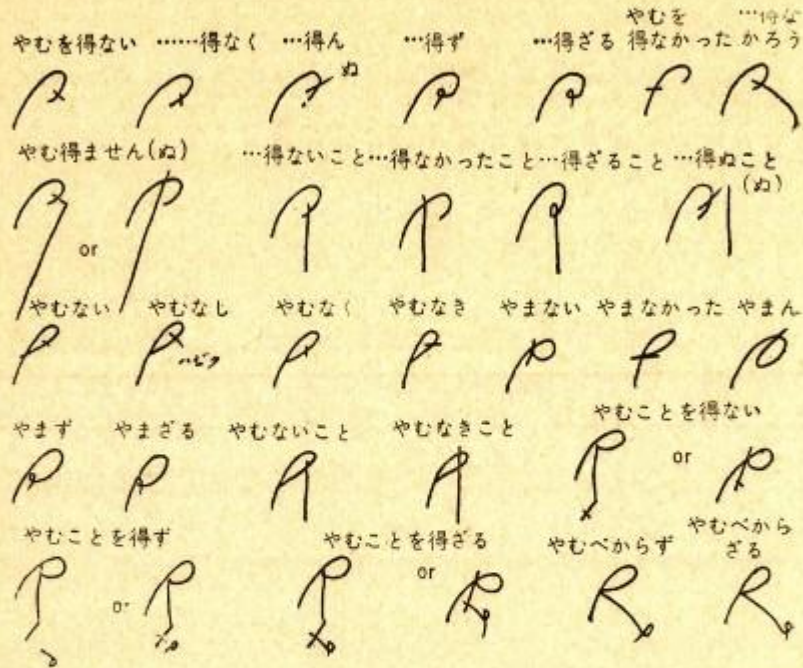
じゃがいも——ガイの短い線を略してただちに「ジャイモ」と書き略字的に使うと便利です。

ナイとナシ、ナクとナキの区別

この区別を説明するのは、次のヤマとヤムの2音文字を利用した「やむを得ず」という常用語の活用のしかたと関係するからです。今まで「ナイとナシ、ナクとナキ」は文の前後関係で読んできましたが、こまかく区別すると図のようになります。多少めんどろですが、どうしても区別しなければならないときに便利です。つまり「ナイ、ナクはとめ、ナシ、ナキははじく」となります。シナイ、シナク、シナカッタなどの「シ」が前につくときは少し長めに書いてナイ、ナク、ナカッタなどと区別します。〔研図35〕



ヤマ・ヤムの語尾変化 【研図36】



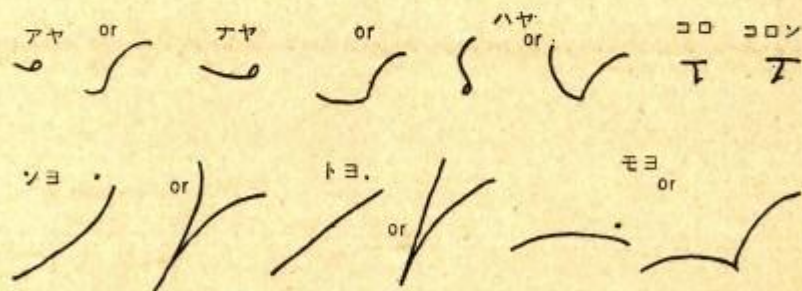
【研図36】

36図ちゆうの注意する点を説明しますと、やむことを得ない、やむことを得ず、などのコトは略して図のように書いても読めます。またやまざる、やまない、のトコロも図のように略することができます。しかしここで肝心なことは、今までにも述べてきたように、「便利なものから使っていく」つまり日常ふだんに使われていることばを、やさしく速く書くようにするということです。「やま・やむの語尾変化」の中では後段の「やむない、やむなし、

やむことを得ない、得ざる……」などはほとんど使われません。全然ないという
 ことでもないので掲げておきましたが、むしろ「やむを得ない……」の形を
 徹底的に覚えて使い慣らすという学び方が大事です。

7) ヤ行音の同列2音文字

ヤ行音の同列2音もたくさんありますが、2音文字の必要を感じるものは少
 ししかありません。このうちの2、3について普通に書いてもよいが、またこ
 ういうふうに書いてもよいという書き方を説明します。これらの文字は各自が
 適当に使えばよいのですが、使ったり使わなかったりするとかえって速度が鈍
 りますから、使う人は徹底して使い、使わない人は今までどおり使わないこと
 にするか、自分のよいと思う文字だけを制限して使うようにします。(研図37)



(研図37)

アヤ——緩、危うい、怪し、アヤメ……のアヤはアアと同じ字です。ヤとい
 う音は2音目に使われる場合その母音のアと似ている音です。たとえば「アジ
 アーアジヤ、ロシアーロシア、シベリアーシベリヤ、ピアノーピヤノ……」の

ように2音め以下のアとヤは同音に聞こえる場合が多いのです。そこでアヤウイはアアウイ、アヤシはアアシ、アヤメはアアメと書いておけば、音が似ているためにすぐ正しい読み方に気づきます。

ナヤ——アヤの書き方にまねて、ナに小さい円をつけます。ニまたはヌと同じ文字になりますが、これを使うことばは「納屋(ナヤ)、悩み、悩む」くらいで、ニをヌに書いても読み違えないかわりに大した効果也没有せん。

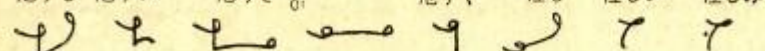
ハヤ——早、速、林……はだいぶ使いますから、この2音文字を使ったほうがよいでしょう。ハの曲線を垂直に立ててその左側にアヤ、ナヤと同じように小さい円をつけます。これはキャツと同じ文字になりますが文の前後関係で十分区別できます。

ソヨ、トヨ、モヨ——基本文字で書くか、特に略字にする場合はヨウ(揚)の加点を図のように打ち、次の文字はその加点の位置から書きます。しかしあまり使うことばがありません。

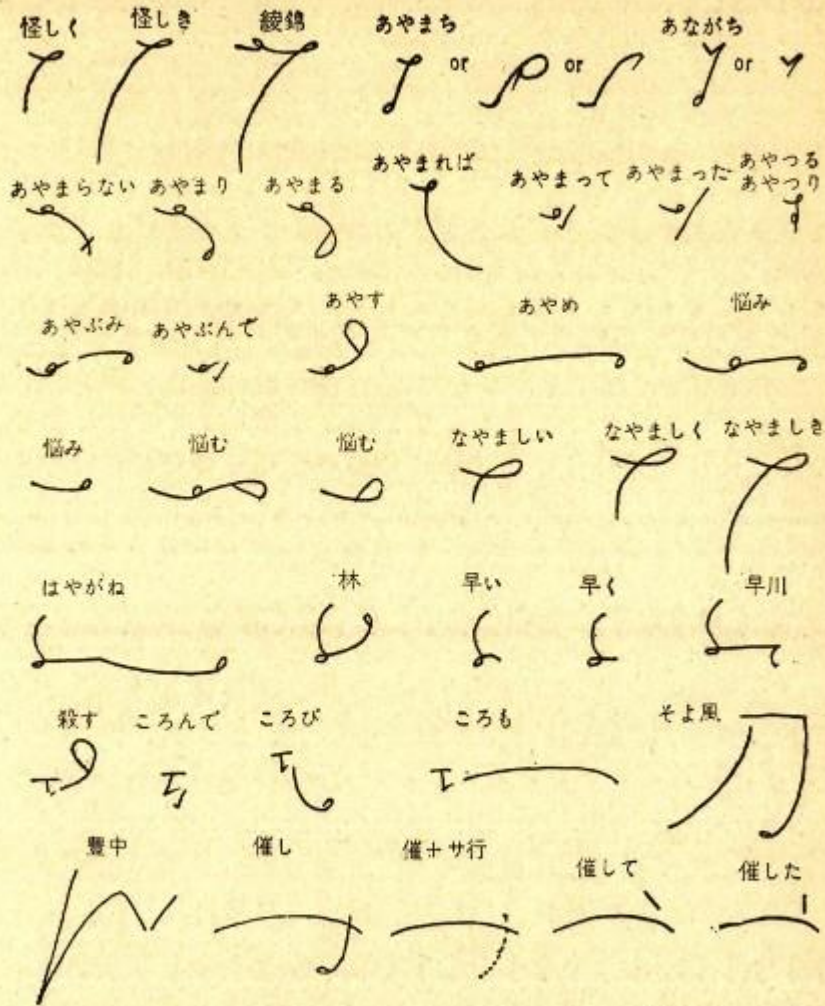
コロ——これはラ行の同列音ですが、ラ行はラ行省略法があり、2音文字の必要があるのは「コロ、コロン」だけですから、いっしょに説明しておきます。コロの字源は「頃」の偏からきています。

コロン——図のようにコロとコロンの書き方は多少変わっていますが、同じように書いても誤読しません。なおコロはコをはじいたラ行省略で書いてもよいのですが、読みやすさという点ではこの2音文字のほうがすぐれています。

応用例〔研図38〕

危うし 危うい 危うき^o 危うく 怪し 怪しい 怪しみ


研図38-1]



〔研図38-2〕

あやまち——アにヤマの字を続けてその字尾をはじいた文字はあとで説明す

るチの書き方の応用です。もう一つの書き方は略字的にアアチとマを略して書いて「あやまち」と覚えます。

あながち——も同じ理屈です。

怪しく——「ああいう」と同じ形ですが、シクは字尾をはじきイウは字尾をとめます。しかし実際には同じになっても文の前後関係で区別できます。

あやぶみ・あやぶんで……——ブを普通に基本文字で書いてもよく、短線のフを図のように使ってもかまいません。

催し——ヨウの加点の位置を利用して図のよきに書きます。

以上で「和語の2音文字」を終わります。複雑なようですが、これを各行別に整理してみると、何かの関連、よりどころがあることに気づくと思います。互いの関係を知りはっきり覚えておくとなかなか忘れませんが、なまかじりでは忘れがちになります。これは普通の漢字も同じことで、一画一点を注意してはしっかり覚えたものはなかなか忘れません。速記文字も長さの関係から、字尾をはじくかとめるか、単線か複線か、直線か曲線か、字尾は小円か最小円か、その円は内側につくか外側につくか、よく観察して疑問の起ころぬようにしておきましょう。

2音文字の暗記法

文字の暗記法としては各人によって違うでしょうが、一つの方法は、まず一覽表にまとめて互いの比較研究をし、だいたい頭にはいたらこんどは単語カードに書いて一字ずつをはっきり覚えるのが確実で能率的です。こうしてはしっかり覚えた文字から次々と除き、同じ文字で他の読み方のあるものはそれもいっしょに覚えます。もう一つの方法は、新しい2音文字を使って一つのまとまった熟字、熟語にして覚え、その熟字から関連してだんだん広い範囲に使いこなす方法です。各自の覚えやすい方法でやればよいのですが、ここで復習の意

味で今までのところをまとめてみましょう。

a 熟字的な覚え方

アカ——赤字公債，赤旗，サカ——大阪，魚のサカ，ナカ——なかなか。

b 同行省略の利用

博多のハカ，ハコ，ヤカ，ヨカ，名古屋のナゴ，ヤキ，ヨキ。

c 音の利用

アヤのヤとアは共通した音を持っているので同字でよい。

d ことばの意味を利用

前字尾にのぞかせてノゾ，前字を抜いてヌ音（関連音のノ音も略）を略す。右肩に加点してカタやホウ（方）、文字の下に加点してカ音を略し、引き回しのマワはワを前字に回す。山の神や福の神など上（カミ）の意味でミを前字の上に書いてもよい。

e 文字の意味を利用

イチ・イツ・（ヒト）は数字の1，タツ・タチ・タテは立（リツ）で書き、コマは小丸でコマかい，コマかく，コマらぬなどに使い，コメは米（ベイ）と書く。

f 逆線の利用

悲しいカナ，速記をマナび，ヤナギの下，ナマ傷，ハマの真砂，これに関連して，ツイ，ツマを覚える。

g 有尾円のモを利用

ヤモ，コモ，ソモ，トモ，ヨモ，ノモ，イモンとイモはみな字尾の小円をはじいて表わす。

h 基本文字との関連

ヨコとホコ，ヤマとハナは基本文字に分解すれば理屈は簡単。朝顔のアサ，赤字のアカなどは，アの半母音ワに関連した線を使って表わす。

i それぞれ関連のある文字

あなたのアナ、仲間のナカなど同方向に流れる単線を書きよく鋭角にしたもの。ハヤ、ナヤはアヤと関連した文字で、オビ・オベ、タビ・タベ、ウビ・ウベとオバ・オブ・オボ、タバ・タブ・タボ、ウバ・ウブ・ウボはそれぞれ字尾に小さい円をつけ読み方の区別も統一されている。次にヤミ・ヤメ、ヨミ・ヨメ、ウニ・ウネ、ヤマ・ヤム、ヨマ・ヨム（ホネ）もそれぞれ関連している。

じそその他

どこそこのトコ、ソコ、残るのノコ、こぞってのコソ、コト、コノ、ソノ、モノ、シミ、シマ・シモ、ツツなどは助詞や助動詞、常用語など今までに使ってきたものの拡張応用。

モト、シモ、は前字の下（モト）にオの短線をつけて表わし、シタは上・下対照の文字、これに似た書き方にモチ・コミ・コムがあり、モチははじいて前後の字を離し、コミ・コムははじかずにオの短線を前字に込（コ）めて（前字につけて）表わす。見込み、繰り込む、払い込み、申し込んだり、書き込んで、などみなオを前字につけるが、見込まれ、申し込まれなどのマレ・マレンはオを、ラレ・ハレ・マレ・カレなどの受身を表わす書き方の線（ワの線）に変えて書く。

トト様、トノ様は似ているが、トトは同行省略、トノは、トノ・モノ・ヨノなどかたかなのノをつける。

ホト・ホドは二とおりの書き方がある。イマはイ1字で表わし、コロは頃からきている。

以上のようにいろいろ比べて研究してみると覚えやすいと思います。

書き方の注意

次に今までにも述べたことですが、書き方の上での注意を2、3述べて締めくくりとします。

羽衣（ハゴロモ）と書くには a ハ+コロ+モ、b ハ+コ+ラ行省略+モ、
十八番（オハコ）には a オ+バ+コ、b オ+ハ+コ、c オ+ハ+コ、
下関（シモノセキ）には a シ+モノ、b シ+モノ

のようにいろいろの書き方があります。これはどれを書いてもよいのですが、必ず自分の書いた字を読んで、自分の速記文字に慣れることが大切です。2音文字を覚えたつもりでいても実際に書いてみると書けない、または書いても読めないというのは線が非常に乱れているとか、ほんとうによく2音文字を覚えていなかったということが原因ですから、こういう熟字に対しては特に注意して、むしろ形そのままを略字のつもりで暗記しておけば、その次からは完全に読めます。

もう一つのことは、使いやすいものから使っていく。その文字を使ったほうが断然書きやすいというものから利用していくということです。2音文字があっても必ずそれを使わなければならないという規則はありません。普通に書いても速度に変わりのないものもあるのですから、実際に何回も何十回も書いてみて比較研究することです。一目見ただけで「こちらが簡単だ」ときめることはできません。簡単なようで書きにくい、複雑なようで書きやすいものがあることは、今までも説明したとおりです。

3. 漢語省略法

漢語は第2音目に「インツチキク」のどれかの音がしばしば使われる、というのが特長です。この中でイ音とン音は今までの省略法で十分なので、ツ・チ・キ・ク音に対する省略を研究していきます。ただここで注意したいことは、漢語には漢語だけの書き方、和語には和語だけの書き方というふうに、それぞれの省略法を限定してしまうのではなく、すべての省略法が互いに補い合っているということです。したがって漢語の省略の場合も、漢語自体の特長をとらえた省略法とともに、他のすべての省略法がプラスされることになります。

1) ツ音とチ音の関係およびその省略法

まず速記ではツとチを同字で表わしてよいということです。ツとチを漢字について調べてみると、頭音（1字で2音を表わす漢字の最初の音）は別として尾音（1字で2音を表わす漢字の最後の音）は同じ漢字をツ・チに発音していることがわかります。

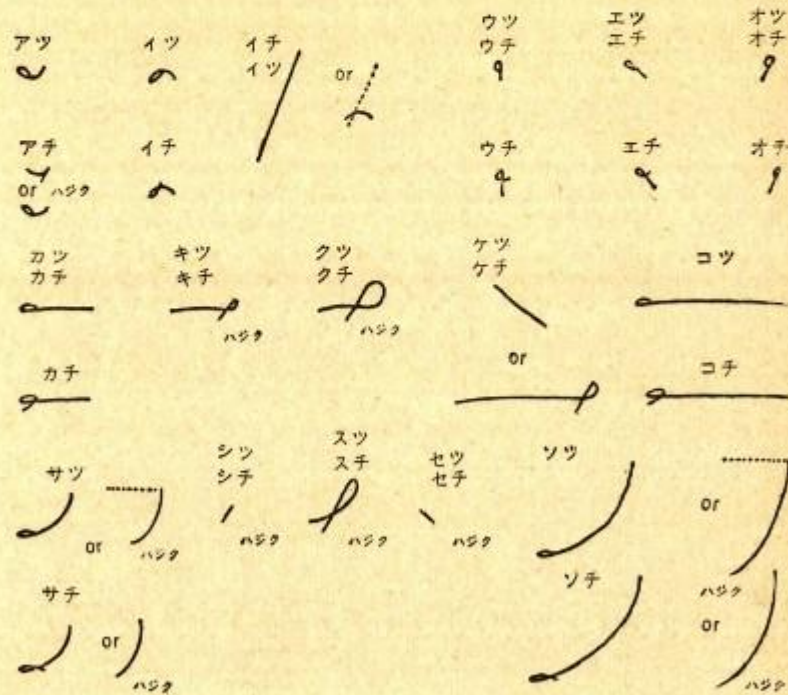
逸	漢音	イツ	呉音	イチ
越	漢音	エツ	呉音	エチ
吉	漢音	キツ	呉音	キチ
質	漢音	シツ	呉音	シチ
鉢	漢音	ハツ	呉音	ハチ

それで速記でもツ・チを同じ文字で表わし、読むときにツで意味の通じない

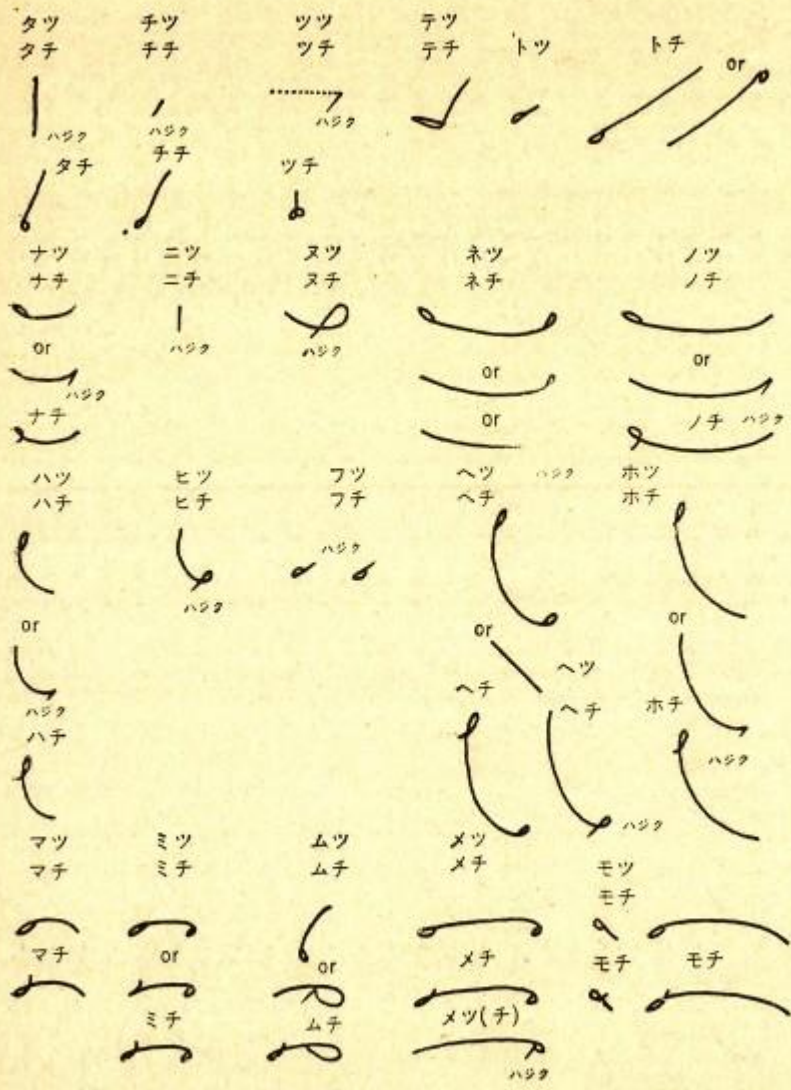
場合はチに読もうというわけです。この読み返しに慣れてきたら、漢字音だけでなく、訓音（和語）に応用することもできます。ただ特に注意が必要なのは次の点です。

◇ 固有名詞や、動詞（落つ・落ち、打つ・打ち、持つ・持ち）のように、そのことばで終わる場合にはツ・チを区別して書く。その方法は、(1)チを書く場合に字頭の小円の先を出す、(2)母音オの線を短くはじいた文字をチに使う。

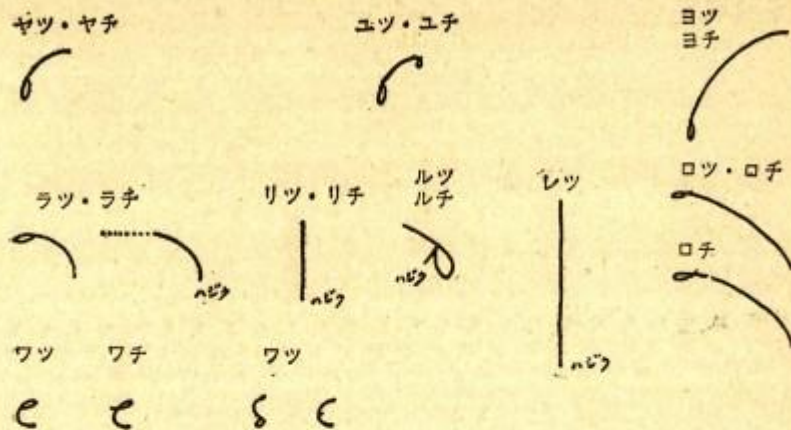
もちろんその他の場合はツ・チを同字に書き文の前後関係によって読み分けていきます。〔研図39〕



〔研図39-1〕



【研図39-2】



【研図39-3】

研図39の注意

サツ・サチ——の変規はサラ・サリなどのラ行省略文字と同字なので、視察、警察、偵察のように主として2字め以後に発音され、また前の字が複線のとときに限定して使います。

ソツ・ソチ——ソのラ行省略と区別するため、思い切り長くはじきます。ネツ・ネチ、メツ・メチ——も基本文字より長く書き2音文字として使います。もちろん字頭にツ音省略、または字尾にオの短線をはじいて省略してもよいのです。

レツ・レチ——リツの1倍半の長さにしてすべての場合に使えます。

ムツ・ムチ——数字の6の字尾円を少し小さくして表わします。

ハツ、ホツ、ロツ、ラツ——サツ、ソツの要領で基本線をそのままはじいてツ音省略することも可能ですが、これは速記文字に相当自信が付き ふだんの

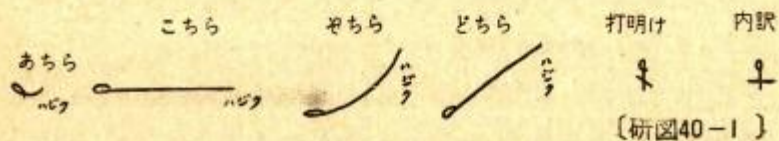
練習の中で「この熟字に対しては応用できる」というように、速記文字に対する批判力ができてから使うほうがよいでしょう。ただ非常に使う率の高い熟字に対してのみ、略字的に限定して使うことはかまいません。

チチ——はチに重音省略で書き、ツチはツに同行省略、または基本文字で書いたほうが読み返しが楽です。

ケツ・ケチ・ヘツ・ベツ・ヘチ——は同字です。

シツ・シチ・チツ・ツツ——タツ・タチ・リツ・リチ——も同字です。一つの文字で幾とおりに読み分けるものがだいぶありますが、これは慣れることによつてことばの前後関係で正確に読み分けられます。また熟練することによつて必ずしも同じ文字を使わず自分なりに読みにくいと思うことばに対しては他の省略文字をあてることもできるようになります。普通の文字の場合でも、たとえば「烏」という字はア・イ・ウ・エ・オに読めます。この問題は国字に対して相当の実力がなければ解けない問題だと思えます。漢字には音読と訓読とたいてい2種類以上の読み方がありますが、「烏」という字は口へんをつけると「嗚呼（アア）」となり、「烏賊」と書いてイカ、「烏有（ウユウ）」「烏帽子（エボシ）」「烏藩（オコガマシイのオコ）」のように、烏のあとに続く文字によつてアイウエオと読めるというわけですが、漢字に対する知識があるかないかによつて、違った発音のものを正しく読めるか読めないかということになってきます。「烏（カラス）」をアイウエオに読むのは相当無理があつても、速記文字の同字は音に関連性があるので慣れればそうむずかしいことはありません。もちろん一般の常識を養つておくことは大切です。

応用例〔研図40〕



打ち合わせ	打ち消し	打ち水	内訳は	内訳が	打ち明けて…る
し	し <small>ハビク</small>	し	し	し	し
越前と	越後の	国	陥る	陥らない	
し	し	し	し or し	し	
陥つて	陥つ	陥りまして	落ちついて	わずか	わずかな
し	し	し	し	し	し
勝ち抜き	喫煙室	□入屋	□車	□ずさみ	
し	し	し	し	し or し	
くつろぎ	くつろいで	くつがえし	くつがえると	草津の温泉	
し	し	し	し	し	
警察署	視察に行く	偵察機	入札する	摩擦がある	
し	し	し	し	し	
適当に措置をする		突然に	納弁		
し	し or し	し	し	し or し	
熱心な人		もちろん	むろん	十分	責任
し	し	し	し	し	し

[研図40-2]

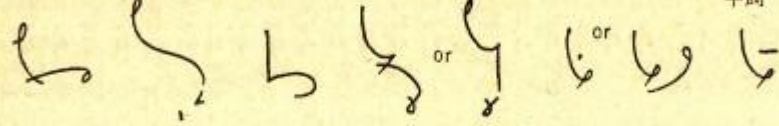
熱情をもって

熱病にかかった

熱烈に



はちみつ はつらつとした子ども はつらつとして 羊 羊飼



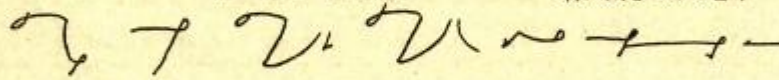
それは必要である 湖 水のみ



待人来たる

松田さんと町田さんは

特に気をつけて書く

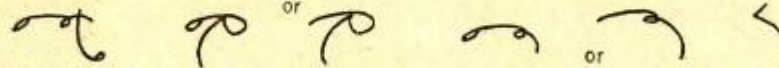


三井三菱

むずかしく

みずから

おのずから



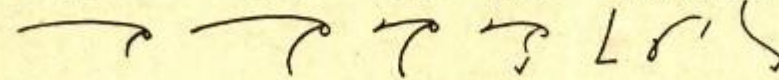
珍しい

珍しく

導く

導いて

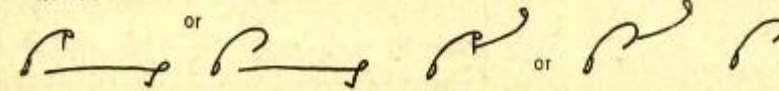
高い家賃を払って



譲り受けて

譲り渡し

譲り渡して



〔研図40-3〕

アチラ、コチラ、ソチラ、ドチラ——チをツで表わし（アツラ、コツラ）、
さらにその文字をラ行省略ではじく。

打ち明け、内訳——のアとワは母音と半母音の同列で音が似ているので同じ
字にしてもよい。また図のように区別してもよい。

陥り・る——オツ……チの字に加点を入れてオチイリ・ル。あとに続く文字
はその加点の位置から書く。この入（イリ・ル）を略した熟字には、恐れ入る、
口入屋、落とし入れる……などがある。

落ち着いて・た——オチの中央にイテ・イタをつけて書く。わずかも同じよ
うにワにカをつける。

口車——のマは仲間のマの加点と同じようにマ音を略す。

口ざさみ・む——口と並行にミ・ムを書いて略字的に覚えてもよい。

くつろぎ・ぐ——のツとロはツ音省略のツとラ行省略のロが同じ表わし方に
なるので、重音の位置からカ行あるいはイテ・イタを書く。

くつがえし・す——クツにカを返してカエシ・カエスを表わす。またカエを
カイで表わし、それにシ・スを普通に書いても、発言の調子（速度）に合う。

くつがえり・る——カの代わりにカイを返して表わす。

草津、警察、視察、入札……——サをはじいてサツと使う。特に菩薩（ボサ
ツ）摩擦（マサツ）にも使える。

措置——はツを長くはじいて覚えると便利。

突然——トツとゼンを揺りつぎしないで一筆に書く。

とつ弁——ペンをエンで表わしても十分読める。

熱心——「もちろん、むろん、十分、人間、責任」と同じように「ネツロ
ン」と書く。

はつらつ——のラツもサツのようにはじいて書いて読める熟字。

羊（ヒツジ）——のシは助詞の加点のシを使う。

必要——のヨウは、ヨウの加点を利用して中央上から次に続く音を書くのが

正しいが、これはよく使われることば（常用語）なので、ヒツだけで必要と略字的に覚える。

湖、水のみ——湖はミズミと書き、水のみはヌキの応用で書く。

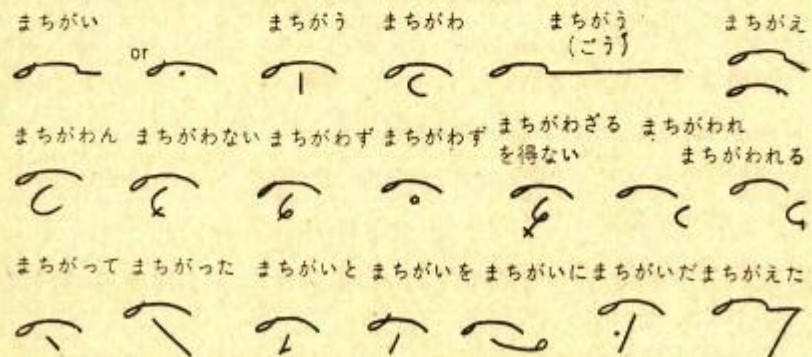
三井、三菱——ビシはミにヒを交差させ、三井、三菱が読けて発音されたら、ミツイにヒを交差させるか、ミツにヒを交差させ一つの熟字として覚えると便利。

むずかしい。みずから、おのずから——も常に使うことばで、特にズを略して「ム□カシイ、ミ□カラ」と書き、オノズカラも最初と最後の音だけで略字的に書く。これに似たものとして、珍しい、導き、がある。

譲り受け——のりはラ行省略でウの短線をはじくので、リとウを兼用する。

まちがいの語尾活用

まちがいの語尾活用のうち、まちがって・まちがった、の書き方は、これから「(前音)ッテ、(前音)ッタ」を表わすのにたびたび使われる文字ですから、ここではっきり覚えておいてください。〔研図41〕



〔研図41-1〕

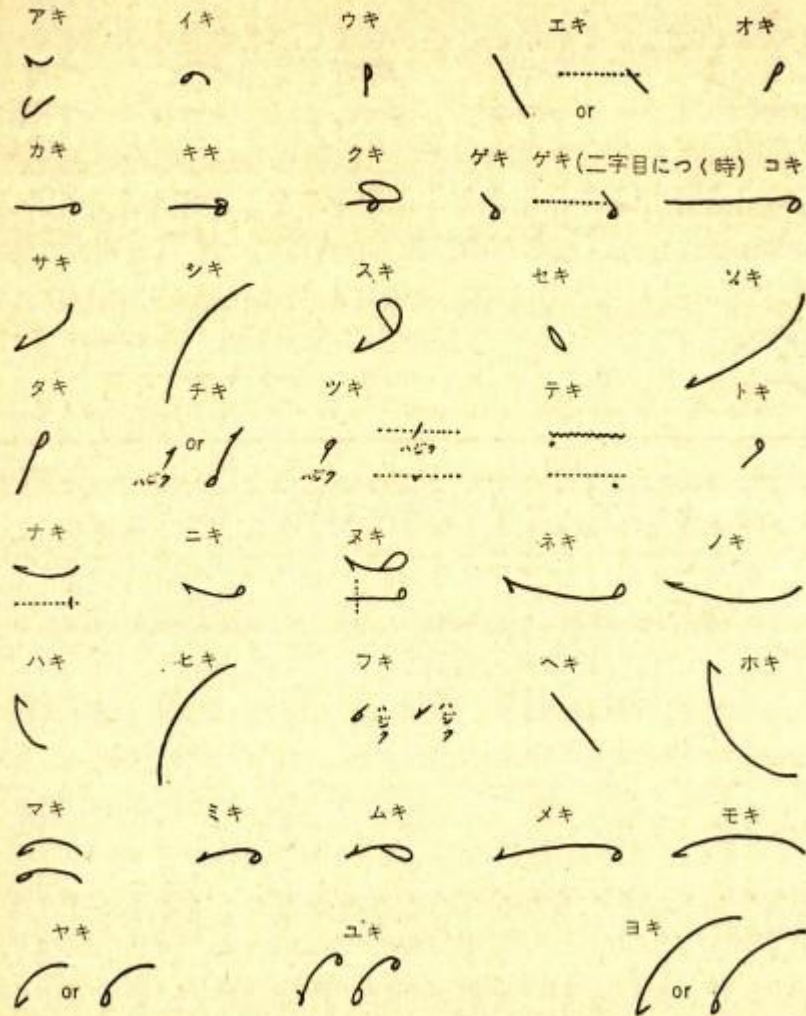


〔研図41-2〕

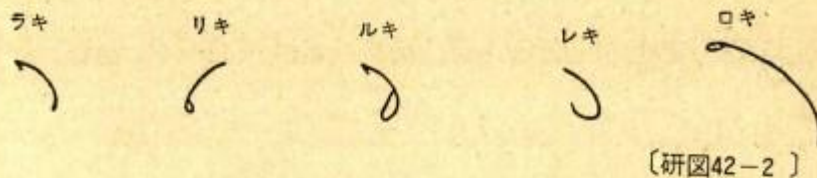
2) キ音とク・ツ音の関係およびその省略法

このキ音も2音め以後にキが発音された場合です。漢語の尾音キを研究してみると、同じ尾音のク・ツ音と同字に取り扱ってもさしつかえないということがわかります。ただキ音とク・ツ音を同じように扱うといっても、読みにくいものまで無理に同じにするわけではありません。たとえば「行きます」ということばを「行くます」と書いても、「行くます」という読み方は不自然で当然「行きます」と読めますし、また書くときにも抵抗を感じないで書けます。ただこの場合も「学校へ行き(く)、そして……」と、キ・クのあとにことばが続いていないときにはキ・クを区別して書きます。これはタツ・タチの場合でも同じことが言えます。またツの場合でも、たとえば「沖繩」を「オツナワ」と書いても読めるわけですが、それでは「オツナワ」という地名があった場合はどうするか、この場合は図のようにツを省略する円を逆につけてキ音とツ音を

区別するのです。〔研図42〕



〔研図42-1〕



〔研図42-2〕

アキは和語の2音文字、カキ、コキなどは同行省略文字、エキやセキは漢語の2音文字というように、今までに覚えてきたものがそのまま利用できます。またイキ、ウキなど普通にキを書いたほうが書きやすいという場合もありますから、省略法だけにとらわれて筆速を落とすことのないように不断の練習が大事です。

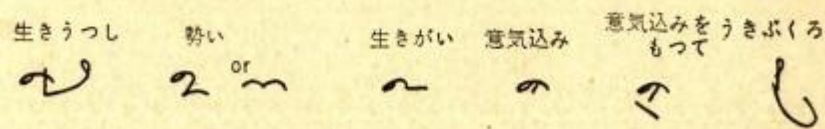
キ音とク・ツ音の関係に対する注意

a 今までに習った2音文字や、同行省略法、和語2音文字などはそのまま優先して使うこと。

b イキ、ウキ、オキのように頭の音が単線で書かれる文字の場合は「キ」と「ツ」を同じに使い、ミキ、ムキ、メキのように頭の音が複線の場合は「キ」と「ク」を同じ字とする。

c 行き・行く、好き・好く、清き・清く……のように、キとクを区別する必要があるときは、クはク音省略法で書き、キはツ音省略法で書くこと。

応用例〔研図43〕



〔研図43-1〕

異議なし 「異議なし」と呼ぶ声あり うき身をやつす 易者になって 役前で

or
の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪

利益 収益 そ益 検査は 検閲と 現役で

㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰

沖合に 捕い 捕って 捕った 置きたいと
思います 接木 次に

㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷

傷がつき 傷がついて それにつき それについて 厚き 気づき

㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽

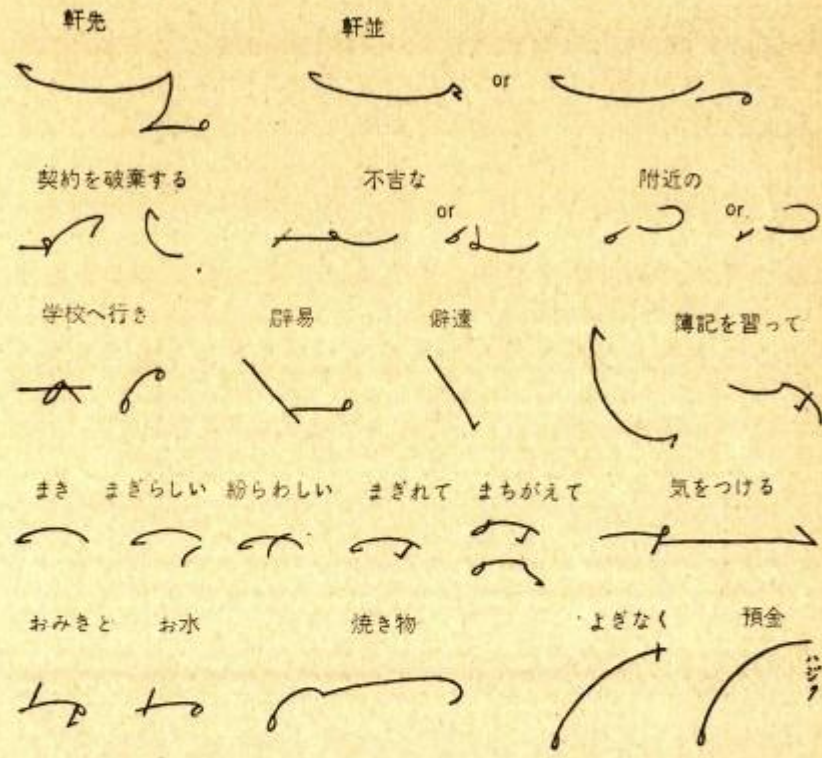
広島駅に着き 福岡駅についた 泣きごとを並べて 泣き寝入り

㊾ ㊿ ㋀ ㋁ ㋂

にぎりつぶして ...をにぎる 抜き差しならぬ 抜き手をきって 抜き書き

㋃ ㋄ ㋅ ㋆ ㋇

〔研図43-2〕



〔研図43-3〕

異議なしと呼ぶ者あり——これは議会で使われることばで、たとえば議長が「何々君の動議にご異議ありませんか」と諮った場合に議員のある人から「異議なし」という発言があったときに例題のように書きます。

勢い——イツオイと書いてもよいのですが、常用語なのでイイと書いて略字的に覚えて使うと便利です。

易者——労働者のシャも同じ書き方をしますが、このシャは前字の線の関係で基本文字のシャが書きにくいときに、シツをシャに兼用するのです。

疫癘（エキリ）——エを切ってエキリでもよく、また疫癘ということばがたびたび発言されたときは、エキをはじいてラ行省略します。

利益——エキを続けるのが本当ですが、常用語なのでリエと書いて略字化します。

受益——利益とまちがわないようにシューをエで切って区別します。

検疫、検閲——もまちがわないように区別します。検疫（權益）と県別（軒別）は同字。また現役は濁音を含んでいるので図のように書くと読むときに便利です。要するにこれらの区別は似たようなことば（同じ文字になって意味の違うもの）で、前後の文章の関係からも区別しにくいものを区別して読めるようにする注意で、こういうことは読み返す練習をすることによって発見もでき、ことばを聞く注意力も高まってきます。

軒並み——並びに、の書き方を応用したり、「手をこまねき」「招く」などのナ行省略のように下にミを書きます。

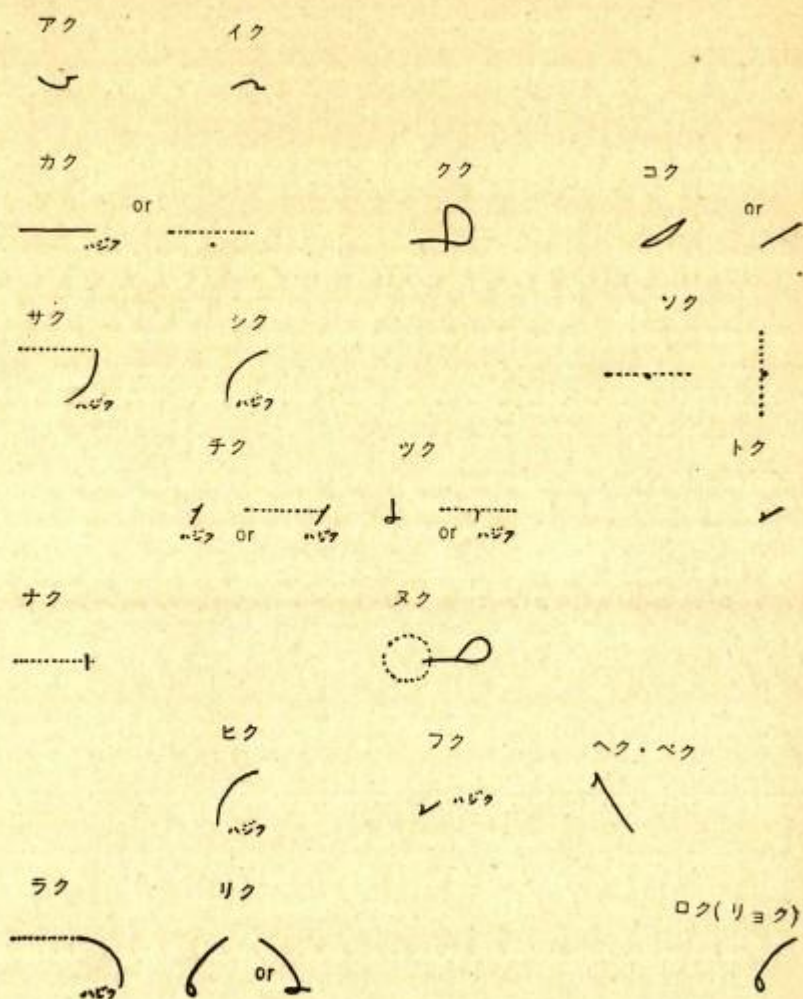
3) ク音の省略と2音文字の追加

このク音の省略も2音め以後に発音されるク音です。ク音省略は今までの省略法でも十分ですが、なおいっそう完全に速記するために、特に使用率の高いもの、また今までの省略法では多少書きにくいものに対してこの省略のしかたを追加します。

a 特に使用率の多い「カク」と「コク」には特別な書き方をし、また「サク」「ラク」「リャク」は前字の線によって書きにくい場合、そして他の語と誤読しない場合にサ、ラ、をはじいてそれぞれサク、ラク、リャクに使います。……政策、自作、小作、省略、計略、気楽……など

b アク、イク、ツクには字頭の小さきの代わりに、字尾にカイの短線をつ

けてク音を省略します。〔研図44〕——文図15を参照——



〔研図44〕

アク、イク、ツク——小かぎ使用を優先して使いますが、作り、作る、と書く場合は小かぎよりもカイの短線をはじいてラ行省略したほうが能率的です。

カク——最初にカクと書く場合は小カギを使い、改革、計画、科学、企画、区画、内閣、入学、明確、味覚、無学……のように前字がカ行、ナ行、マ行で、特に書きにくいことば、使用の多いことばに対してのみ、厳重に制限して加点のカクを使います。

この加点のカクは無制限に使うと誤読の原因になります。カをはじいてクを略す書き方も覚えてください。

コク——小かぎを使うク音省略法のコクは説明するまでもありませんが、コレ・コノの楕円を少し長く（5、6ミリ）書いてコクに使います。注意することは、前後の文字の関係で、このコクが同行省略文字とまちがうようなときは、コイの線を5、6ミリに延ばした単線を使います。

サク——ラク、カクと同じようにサをはじいてサク、サツを同字とします。

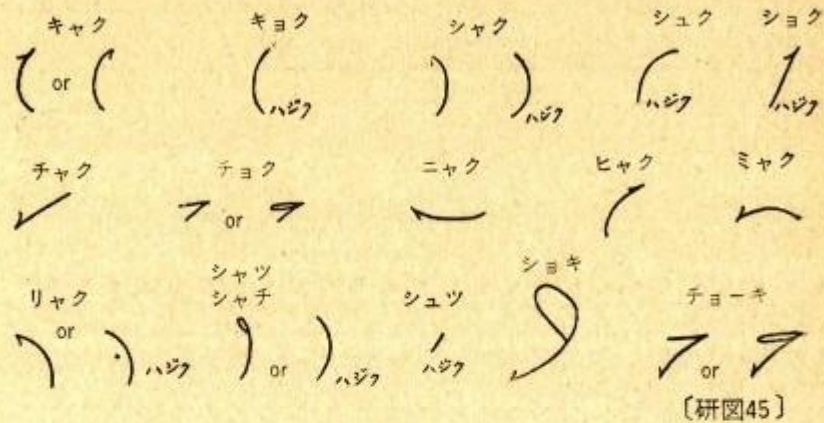
ソク——前字のまん中に図のように短線を属させて、ソク・ゾクを略します

チク——「チ音とツ音の関係」のところ述べた「キチ、クチ」などのはじいたチを取り出して、これにクの小かぎをつけ2音文字として使います。建築貯蓄のように3字め以後の場合のチは小かぎを半かぎにして書きます。

リク——リョク・ロク・リキ・リクを同字に使います。

4) 拗音のツチキク省略法

拗音にも「ツ・チ・キ・ク」の音がつくことばはたくさんあります。この中で「キヤク、シュク、チャク、チョク、ニヤク、ヒヤク、ミヤク、リヤク、シヤツ、シュツ」は今までに使ってきたものですから説明を略します〔研図45〕



【研図45】

キョク、ギョク——キョの線をそのまま使います。極端、極東などはキョタ
ン、キョトウと続けて書き、局外、曲芸、曲線、極論など次の文字が続けにく
い場合はキョをはじいて書きます。最初の音だけでなく、時局、積極、消極、
結局、当局などあらゆる場合に2音文字として使えます。

シャク、ジャク——今までどおりかぎをつけて書いてもよいことはいうまで
もないのですが、くじゃく、静寂(セイジャク) 虚弱(キョジャク) など半か
ぎをつけにくい場合にシヤをはじいてシャクと使います。

借家、若年(ジャクネン) 弱体、釈放、寂滅など最初の音がシャク、ジャク
の場合はかぎをつけても書きにくいので、だいたいかぎをつけます。

ショク・ジョク——最初にショク・ジョクと発音されたときに使います。2
音目以後に使うときはク音省略の半かぎの書き方になりますが、このショクで
読みにくいと感じたときは普通に書きます。

チョク・チョキ——は同字で扱い、あとに続く文字の関係で二つの文字を適
当に使い分けます。

シヨキ——シヨクをシヨキにも使ってかまいませんが、シヨに小かぎをつけてシヨキとします。

チョーキ——特にチヨに小かぎをつけて「長期」と使います。

今までの整理

シ チ・キ・クの漢語の簡単な書き方はこれで全部説明しましたが、今までの一覧表を作ってみましょう。理屈を聞いただけでは頭が混乱してわからなかったことも、自分自身で積極的に整理し、まとめてみると、はっきりしてきて研究心や興味も湧いておもしろいものです。それでは今までの中から特に注意することを抜き出してみましょう。

カクを加点で表わす書き方、コクの楕円、サクのはじいた文字、前の字の中央につけるソクなど、あまり使い過ぎるとあとで読めないのではないかという不安が起きて、速度が鈍ったり、書き直すという二重の手数をかけることになります。速記文字は、どんなに簡単に見えても、それを書く瞬間に気持が乱れたり、まごつくようではだめです。そういうときはむしろ普通に略さないで書いたほうがよいのです。そこで「カク、サク、ソク」などは、あなたの速記に対する力に応じて、後日略字を作るための根拠にする、つまり略字を作る基の文字（位置）として覚えまた応用するという程度にしたほうがよいでしょう。

沿革、音楽……のようにカク・ガクの前の字がカ行、ナ行、マ行以外の線の場合は、加点のカクをしません。

間隔、金額……のように、前の字がカ行でも、シの次にカクが発音された場合はなるべく半かぎで書きます。

深刻、先刻、残酷、新築……のように、コク、チクの前の字が「シ」の場合も、普通の文字で書いたほうが読みやすくなります。

以上のようなことは理屈でなく、実際にシャープをとって書き、体験することで完全に理解できることですが、その参考のために例題を出しておきますか

ら、書き方や省略のしかたのコツを学んでください。

カク・ガクの応用例〔研図46〕

改革	計画	科学・価格	企画	区画・苦学	外貨獲得
内閣	入学・入閣	明確	味覚	無学	数学
中学生	女学生	小学生	改革をする	拡大する	
改革案は	計画経済に	計画する	計画して	計画した	計画され
計画的	計画的に	科学の	進歩は	苦学生を	明確に
無学文盲な人である					

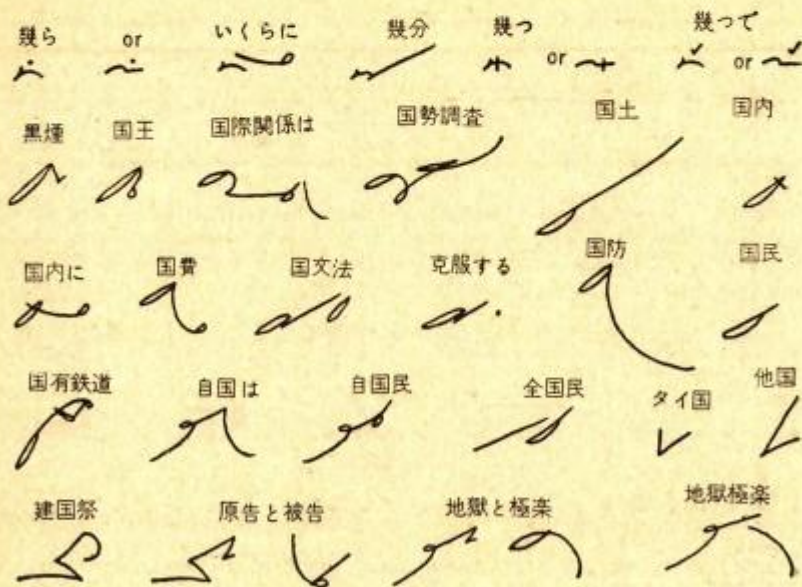
〔研図46〕

一般にはカク・ガクの加点の位置から次の文字を書き、次の字がスルとかテキ(的)のように、さらに加点文字が続くときはカク・ガクの加点をはっきり打つ。

カク・ガクの加点は、ㄩ行、ナ行、マ行の「ン」を含まない文字に対して使うので、だいたい例題の単語を中心に応用すればよい。例題以外のは各自の実力に応じて適当に制限して使う。

外貨獲得のガイカは揺りつぎでもよいが、例題のように「カイキ」と書いて略字的にカイカと覚えておくと便利。

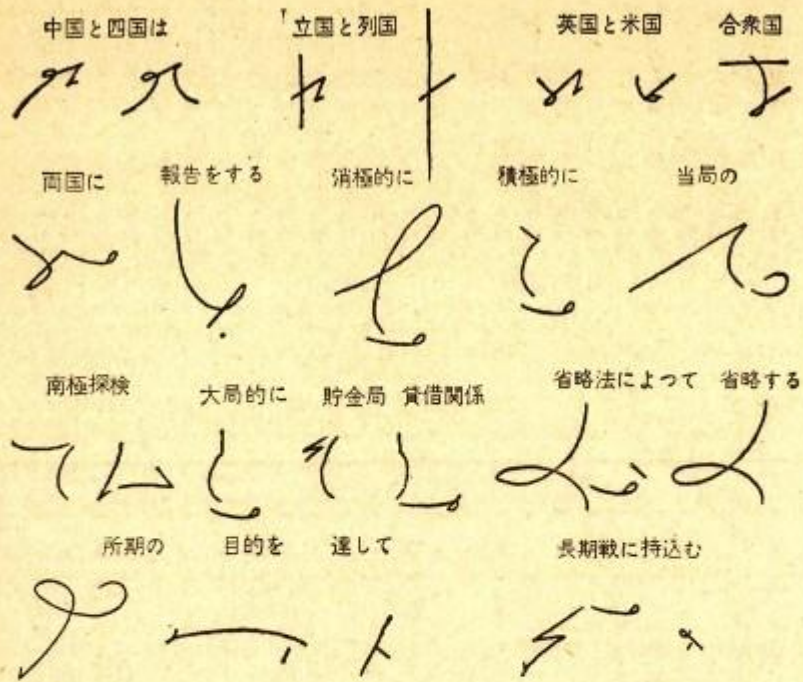
ク音省略応用例〔研図47〕



〔研図47-1〕

畜産奨励	貯蓄心	船を二隻送った	独善
陸海軍軍人	陸上選手	理屈	機密
局員	曲線と直線	局長さん	食物
職業	職業紹介	職域は鼻息や生意気と同じように書く	食料や肥料は
閣僚	改良する	愛国と愛着	おそろく
政策	規則書	休息所	風俗習慣
及落が決定した	祖國と	諸国の	諸国民は
	諸国民と書いてもよろしい		

【研図47-2】



〔研図47-3〕

国民——常用語で、コクンと書いて国民にする。自国民、全国民と発言された場合にまごつかないように注意する。

独善、独占——トクとセンを一筆で書く。

陸軍、陸海軍——特に「レイン」「レイカイケン」と書いてもよい。

理屈——「ロクツ」と書いてもよく、また旧早稲田式のツの変規を応用して「リツ」と書きリクツとする。

職業——ギョウは後説するギョウの加点位置を利用。

食物——モツ・モチの最小円の代わりに、ちょうどツ音省略と同じように交

差させる。

食糧——シヨクを長く書いてリョウを略す。

肥料、閑僚——「ヒロー」「カクロー」とオをはじいたら行省略で書く。

恐らく——オもりもオ列なので、オの重音の位置からラを書き「オラク」を「オソラク」とする。

さっそく——「サソク」またはソをオに代えて「サッオク」と書く。

祖国、鎖国——サ行単線にカ行は普通に書いたほうがよい。

4. 加 点 省 略 法

これはある一定の位置に、一定の制限を設けて加点をすることによって特定の音を省略することです。たとえばカの加点とか、カクの加点がその例です。カの加点は仮に定められたもので、場合によってはカクとして読むこともあるので、あくまでも一つの仮定に過ぎません。くりかえしますがカの加点は前の字の中央下側に加点するので、これを前の字の上側やあるいは他のところに打ったのではカになりません。つまり一定の位置がきめられているのです。そしてカクの加点は前の字がカ行、ナ行、マ行のように水平に延びる線に対して使うというふうには制限されています。

同じ加点でも「テキ、テン」などは2音文字として広く使いますが、これから説明していく加点省略法は、相当の制限をつけて使用するという点を頭にに入れてください。

この省略法はあとで述べる「交差法」と密接な関係があります。「交差法」とは、あることばをあらかじめ簡単な文字（簡字）にして覚えておき、それを使い慣らしていくうちにだんだんそれが普通の文字と同じような感覚で読める

ような文字ですが、この加點省略法は、その簡字を造り、また簡字を覚えやすくするために、一定の標準、根拠を与える役目を持っています。

加點省略法が考えられた趣旨

ことばというものは固定し、きまったものではなく、文化や時代の流れの中で常に新陳代謝をしています。科学の進歩や政治機構、経済の変化、法律改正、国際国内情勢の変化の中で絶えず新しいことばが造られ、必要のなくなったことばが減びていきます。

そこでこのように常に流れ動いていることばを、時代が変わっても、また社会情勢が変わって新語、新熟字が使われても、少なくとも日本語が根本的に変わらない限り、常に簡単に書き表わせるように融通性のある省略法が必要になります。そのために考えられたものが、この「加點省略法」とか後述の「交差法」です。

もう一つの問題は、仕事をする場所、種類によって、ことばの内容、常用のことばに違いがあるということです。たとえば衆参両院とか、都道府県、市区会などの議会速記には、そこで常に使われる特別な用語があり、また新聞、通信方面、演説会や、座談会……などみなそれぞれの特長があります。またこれを別の面から見れば、労組、工業、商業、学術、文芸……等々それぞれのところで特に使われる常用語もあって、これらを全部略字化し固定することは容易なことではなく、またそれだけの必要もありません。これは各自の仕事の領分によって、簡略化する問題です。しかし各自の簡略化が無原則に無統一に行なわれるのではなく、融通性のある一定の法則に従ってされるのが合理的であり、この目的を果たす役割を加點省略法に持たせたわけです。以下具体的に説明していきましょう。

1) アの加点位置とアンの書き方

このアの位置は主として名詞を書く場合に使います。またその位置から右斜め上にンをはじいて「アン」とします。〔研図48〕

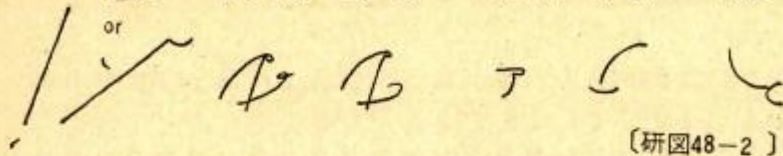


2音目以後のア・アンはワ・ワンと書いてもよい

提案	懸案	原案	治安	or	決議案	立案
				or		
本案と	法案	本法立案に よって	本法案が		予算案	
成案となった		これはいい案だ	名案だ		確案	
改正案	同案	or	新案	勸案	議案	
		or				

〔研図48-1〕

答案 ユダヤ人 ユダヤの アメリカ アジア 把握



〔研図48-2〕

「各案に」「本案が」「法律案の」などの議会常用語に用いて運筆をなめらかにします。愚案、賢案、たくあんなどにも使いよく、高速度で書いても文字が乱れない利点があります。しかし普通にアをはじいてアンで書いたほうがよい場合もあり、要するに高速度の運筆に対して文字が乱れず読みやすくなるという点を考えてどちらを使うかをきめていきます。

アとアンの書き方には加点のほかにもう一つの書き方があります。2音め以後に発音されるアは「アジア(ヤ)」「ピアノ(ヤ)」「シベリア(ヤ)」などのアとヤの関係のように、「ハアターハワク」「ケンアターケンワク」「トウアンヨーシ、トウワンヨーシ」など母音のアと同列の半母音ワを同じように使って書きよくします。

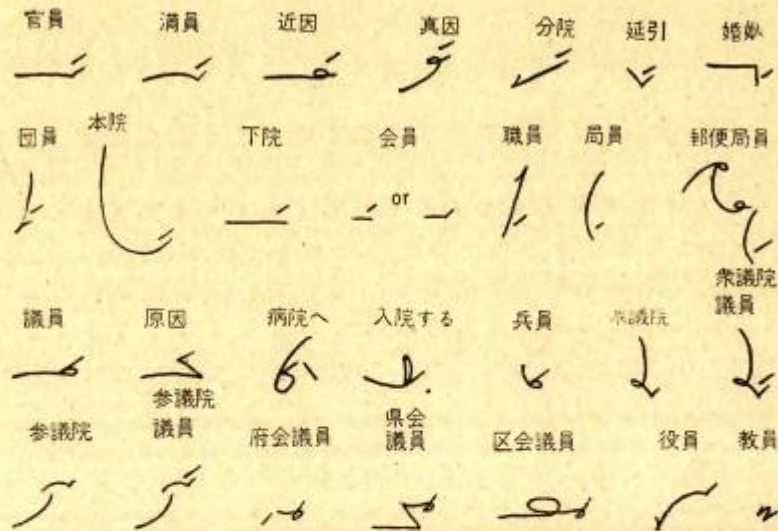
2) イの加点位置とインの書き方

イはアの反対側に加点します。アは字尾の下、イは字尾の上と覚えてよいでしょう。(研図49)



〔研図49-1〕

単線または撥音+イン



〔研図49-2〕

例題のように前の字が単線や「ン」の場合はイの加点位置を使い複線の場合は続けて書きます。ただし、「定員、通院、社員」のように基本文字のインで書きよい場合は普通に書きます。

3) チの加点位置

使用範囲が少ないので、同列母音のイの加点位置といっしょに扱います。御承知、御存じはこのチの位置を利用して語尾を活用させます。〔研図50〕

ばくち	爆沈	局地	局地解決	ご承知	ご存じ
ご存じの	ご承知のとおり	ご承知のとおりで あります	ご承知のとおり と思う		
ご承知のことで	ありませうけども	ご承知のことと思うのであります			
ご承知のごとき	ご承知のごとく	ご承知のように			
ご承知のごとき	ご承知のごとく	ご承知のように			
ご承知になった	ご承知でもありませうが				
ご存じのごとく	ご存じのように	ご存じかも知れません			

〔研図50〕

4) カの加点位置応用

カ₁の加点利用については研図21および46図で説明しました。この位置をさらに幾つかのことばに応用します。

a カ₁の加点をカイに応用〔研図51〕

カ₁の利用

不可分	不完全	文化	分科会	文化的に	欠陥	発刊
以下	以下に	以下なる	いかよう		or	

カイ

委員会	役員会	今回	海外	開会	外海	改革	内閣
開会いたします	特別会計	一般会計	伺い	伺いたい	伺って		
伺った	疑い	疑いたい	疑って	疑った			

〔研図51〕

例題のように3音の以後にカイが発音され、そのことばが常に使われる場合に
 応用します。警戒、盛会などの書きやすいものは普通に書き、またなるべく
 カクの加点といっしょにならないようにします。

このように同じ位置で利用のしかたの違うものが重なるとむづかしく感じら
 れますが、実際には、ことばに慣れて、そのことばを書き慣れていけば決して
 むづかしいものではありません。常に無理なく、気持ちに合うように書く練習を
 続けてください。

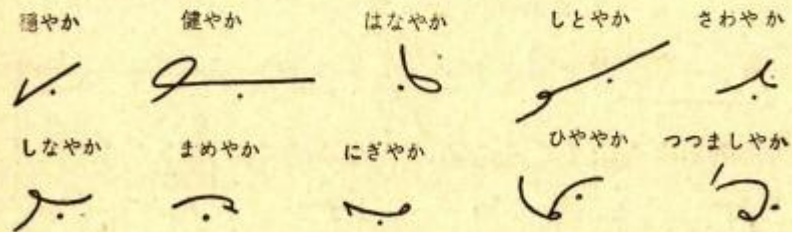
改革をカイクと書いて区別すると便利です。

特別会計、一般会計はケイを略して略字的に覚えます。

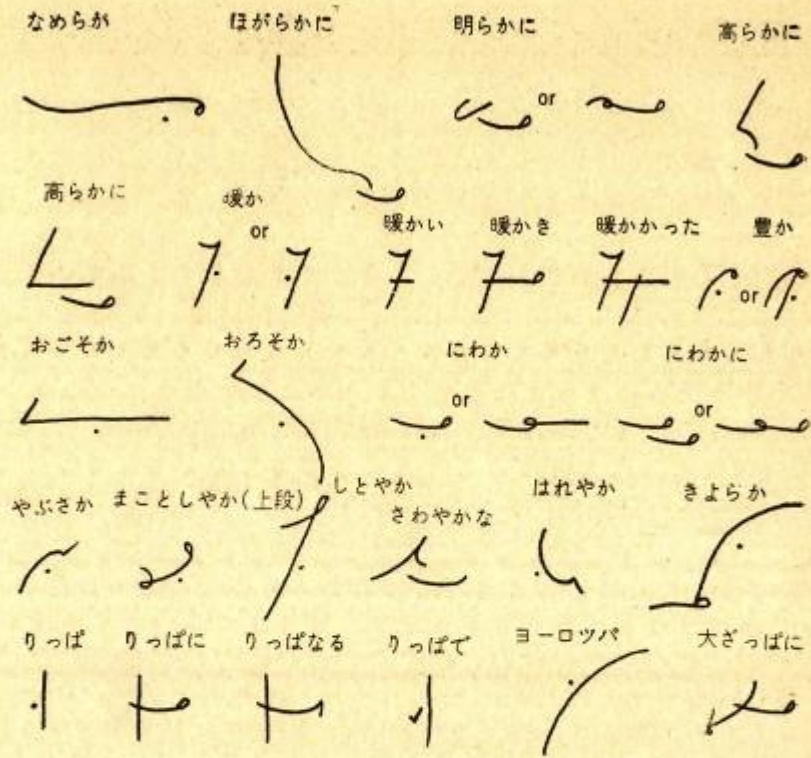
伺いもウとカイを続けて略字化し語尾を活用させます。

b 父音（カサタナハマヤラフ）をカに加えて応用

カカ、サカ、タカ、ナカ、ハカ、マカ、ヤカ、ラカのことばにもカ
 の加点そのまま応用するということになりますが、実際には「穏ヤカな、健ヤカに、
 はなヤカな、さわヤカに、なめラカに、高ラカに、あたタカな、ゆタカに、浅
 ハカな」のように、副詞や形容動詞（形容詞の場合もある）にのみ使い、しか
 も主として使われるのは「ヤカ」と「ラカ」だけです。これらのことばでカ音
 を略しただけでは書きにくいという場合に使います。〔研図52〕



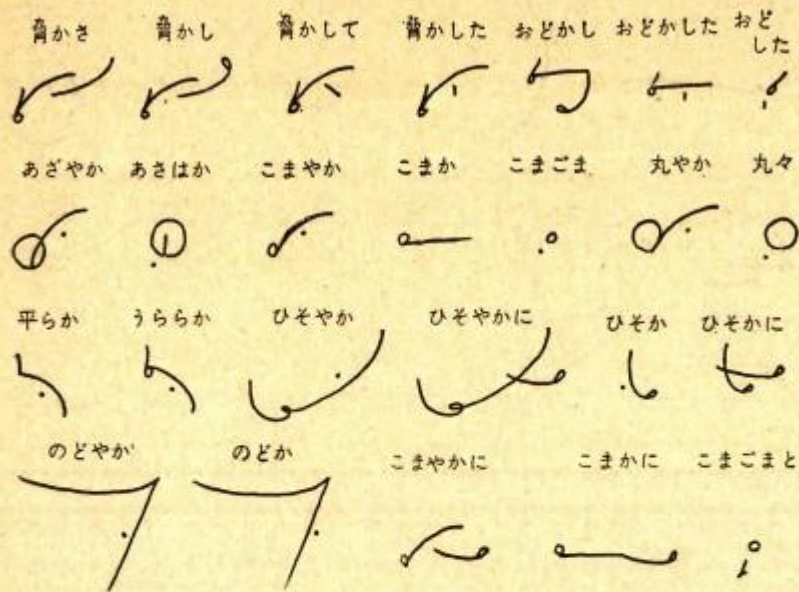
〔研図52-1〕



〔研図52-2〕

例題中——おごソカ、ひソカ、おろソカは「サカ」を拡張応用し「りっぱ」はカの応用ではありませんが、ことばの種類が同じであり語尾の活用も同じなので特に加線で略したわけです。やぶさか、おだやかも別種のことばですが、音があてはまっているので入れておきました。

特に注意する点 費かし、あざやか、こまやか、丸やか、平らか、うららかは父音+カを使わずにカの加線で書きます。またひそやか、のどやかの語尾活用は交差するように加点を内側に打ってまぎらわしさをなくします〔研図53〕



(研図53)

以上「カの加点」は、(1)カ、(2)カク、(3)カイ、(4)父音+カ、といういろいろ使われるので一つ整理してみます。

(1) カに使う場合——「詰音+カ」「長音+カ」を原則とし、和語、その他に適宜応用。

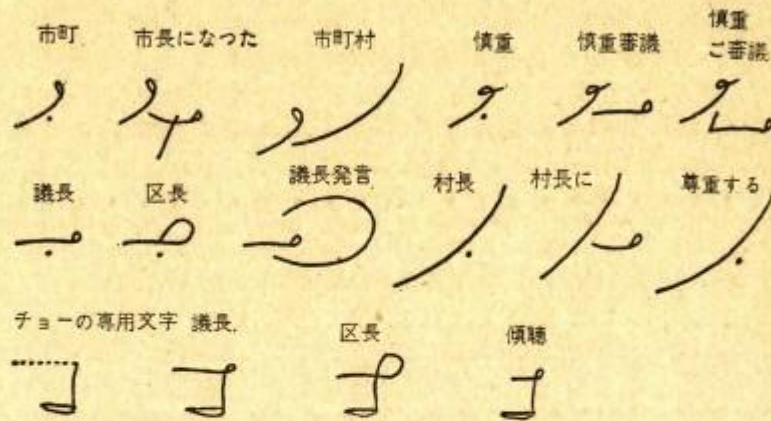
(2) カクに使う場合——前の字がカ行、ナ行、マ行で「特に書きにくい場合」に使う。

(3) カイに使う場合——3音目以後にカイが発言された場合に限って使い、たとえ3音目以後でもカイの基本文字を書きやすいときは普通に書く。

(4) 父音+カの場合——さわやか、にぎやか……などのことばに限って応用する。

カの位置をチョーに応用

一般には加点でなくチョー専用の文字か、普通にチョを書きます〔研図54〕



〔研図54〕

チョーの専用文字——はチョや、チ(ジ)ョ、チ(ジ)ョーには使わないで「チョー」の場合だけに使います。これは今までのチョを正規で書いても変規で書いても書きにくいという人のために、書き方を少し変えた文字です。

5) シの加点位罫応用

シの加点位罫は前字の中央より上、1、2ミリのところ。今までは「達し、察し、熟し」のように、原則として助詞や助動詞にシの加点を使ってきましたが、これに一定の制限を加えて、助詞や助動詞以外のものにも応用していきます。〔研図55〕

シの加点				屈し	決し	雑誌	必死
物質	末子	密使	決心	熱心			
					or		
発信	雑誌に	物質の	安心	なにしろ	臨時	民事	
民事訴訟	刑事事件	志	むさぼる	もし		もしくは	
確信	取締まり	なきにしもあらず		事件			
					or		
テロ事件	5.15事件	ひつじ	いにしえ	ないがしろに			
ひたすら	ひたすらに	けしからん	いざ知らず				
	or				or		

〔研図55〕

第2音めのシの加点は前音が詰音の場合に使い、その他前音が「ン」の場合にも適当に応用します。アシ、イシ、ウシとか、コーシ、ソーシ、トーシなどには使いません。

このように制限を加えると、この利用範囲は少ないようですが、むしろシの加点の使い方は3音め以後に多くあり、3、4音め以後にはシ、あるいはジとして、長音の次にでも使っていきます。

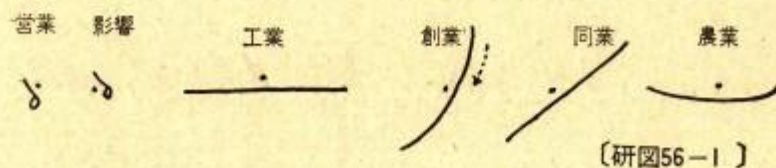
a シの加点をギョーに応用

シの加点位置はそのままギョーに応用します。ただここで注意することは、位置は同じでもこの場合は前音が詰音であり、ギョーは前音が「長音」「濁音」の場合に限って使います。ここで「シの加点」と「ギョーの加点」の関係を説明しましょう。

◇ 日本語には「詰音+ギョー」のことばがないので、「詰音+シ」をギョーとまちがうことはない。

◇ 長音の次には「ギョー」がたくさん使われるので、長音の次にはシの加点を認めない。

ということになります。これは「ギョー」が2音めに使われる場合の原則ですが……農業、工業、商業……、勸業、兼業、残業のように「ン」の場合は「シ」と誤読しない範囲で適当に使ってかまいません。また第3音め以後にも無理のない程度に応用します。ことに3、4音め以後はギョーだけでなく、場合によってはキョ、キョー、ギョにも兼用します。〔研図56〕



休業 就業 商業 or 事業 漁業 営業に関して

工業法 農業予算 就業して 事業に 漁業交渉 罷業

勸業 産業 難行 難行苦行 人形 民業 林業

現業 兼業 失業した 産業と 作業 産業組合 工業組合

商業組合 漁業組合 漁業組合の 同業組合 卒業

卒業式 卒業生 副業 職業 失業者 分業 分業的に

【研図56-2】

宗教	儒教	妥協案を示した	遊興税	キリスト教徒	キリスト教と
こ ^{or}	じ	ひ?	ぶ	キ	ト

〔研図57-2〕

省略法にはできるだけ例外のないほうがよいのですが、長年の経験の中から特に基本文字で書きにくく、しかもそれが常用語として日常よく使われることばに対しては、例外的に使うことがあります。この中で特に影響は営業と区別して下側に加点します。

b シの加点をラに應用

シの加点をギョーにもラにも應用するわけですが、これにも制限があります。それは第1に「かれら、われら、きみら、ぼくら、わたくしら、おまえら、あなたら、幾ら、これら、それら……」のように主として代名詞の複数形の「ラ」に使います。この代名詞の中には「ぼくら、幾ら」のように、ラ行省略で書けるものもありますが、大部分はラの加点を使います。ぼくら、かれらと同じ種類のことばには「きみたち、ぼくたち」「きみ方、おまえ方」「わたくしども」などがありますが、「タチ」は和語のタチ(リツ)を使い、「方」は右肩に加点し「ども」は前字の終わりのほうにオの短線を交差させて簡単に書きます。(かれ氏だけは普通に書く)

第2に、しかしながら、いかなながら、はばかりながら……のように「何々ナガラ」のラに加点を使います。

第3に、いたずらのように連記文字が縦に長くなるような場合にラの加点を使います。

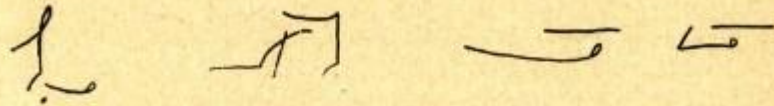
「かれ」はカイをはじき、「われ」もワをはじき、「きみ」はキだけを「きみ」

と覚えて普通の位置（上段にも下段にもしなくてよい）に書きます。それから「なんじら、自分ら」と、すでに加点を使ってある文字に対しては重ねてラの加点は使いません。〔研図58〕



〔研図58〕

仕事をするように こういったようなことは 寝ようか 起きようか



〔研図59-2〕

注意 ヨーの位置利用は便利で、使う率も多いのですが、基本文字のヨそのものが腕の動きに合った書きよい線なので、前後の文字の関係によっては無理に加点位置を利用しないで、自然な筆の流れを利用します。利用、栄養、無用など、普通に書いて書きやすいものは略さないほうが確実です。

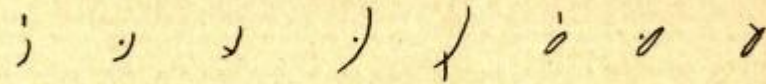
加点位置の比較例題〔研図60〕

それらとその中——その中は「その」を少し長く書いて区別します。

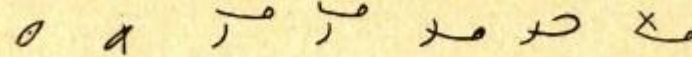
そのうち——前字尾をウの短線で交差させ、ウツ=ウチとします。

それらニ・ノ——後字を深く入れて読みやすくすることも一つの方法です。

そのうえ それら それゆえ その中 そのうち このうえ これら これゆえ



この中 このうち そのようにその上に それらに それらの いろいろに



〔研図60-1〕

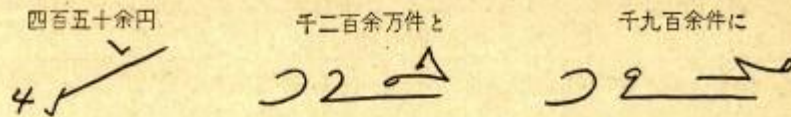
それゆえに	その中に	そのうちに	このように	この上に
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
これらの	この中に	このうちに	これゆえに	
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	

〔研図60-2〕

ヨ一の応用例〔研図61〕

余万円	余円	余万石	余石	余万件	余件
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
余万円	余円	余万石	余石		
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ		
二億八千百余万円	二億七千七百余万円	一千二百余円て			
2,8ㇿ	2,ㇿㇿ	ㇿㇿ			
五億七千余万円	四十万五千七十余円	百二十余万円			
ㇿ,ㇿ	4ㇿㇿ	ㇿㇿ			

〔研図61-1〕



〔研図61-2〕

以上でシの加点位置に関連した書き方を終わります。加点の利用はぜひぶん複雑なようですが、「シ・ギョ・ラ・ヨー」と「カ・カイ・カク・ヤカ・ラカ・チャー」はそれぞれ反対側の位置になります。なお3音目以後に「シン」が発音された場合に「アン・イン」と同じように、シの位置からンをはじいてシンと使うことができます。

6) ミの加点応用

願み、試み、慈しみ、中味……のミは、二つの線以上で表わされる文字に限り、その字末の内側に加点して「ミ」音を略します。ですからこれは少なくとも3音めか4音め以後でないと「ミ」の加点を使うことはないということになります。なぜなら二つの線で表わされる文字は少なくとも2音以上の発音を書いているからです。

第1 願み、試み、かんがみ……などの一般常用語。

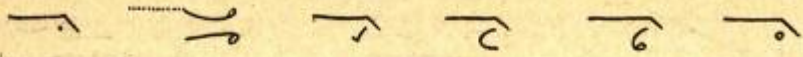
第2 中味、車……などの、前字が主として上、あるいは右斜め上に向かう直線でマ行を続けにくい場合。

第3 怪しみ、苦しみ、悲しみ、楽しみ……など、(このシミ、シムには2音文字の利用もあります)。

第4 秩父宮、高松宮、大國主命……などのミヤ、ミコトのミを略す場合。

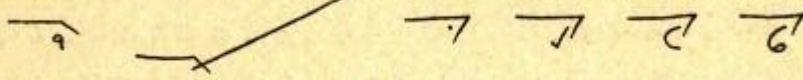
〔研図62〕

顧み(る) 二顧み 顧みて 顧みられ 顧みられず 顧みず



試みられず

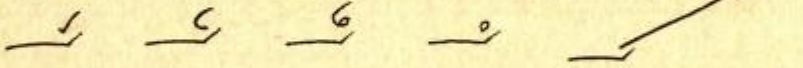
顧みざる 顧みまして 試み 試みて 試みられ



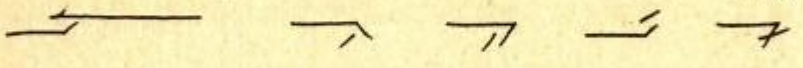
試みず 試みざる 試みまして かんがみ(る) にかんがみ



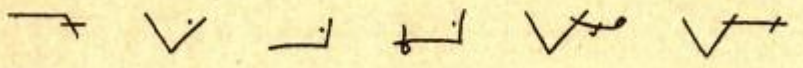
かんがみて かんがみられ かんがみられず かんがみず かんがみまして



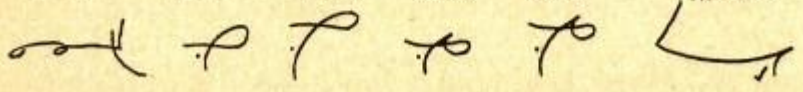
かんがみるのであります 顧みない 試みない かんがみん 試みん



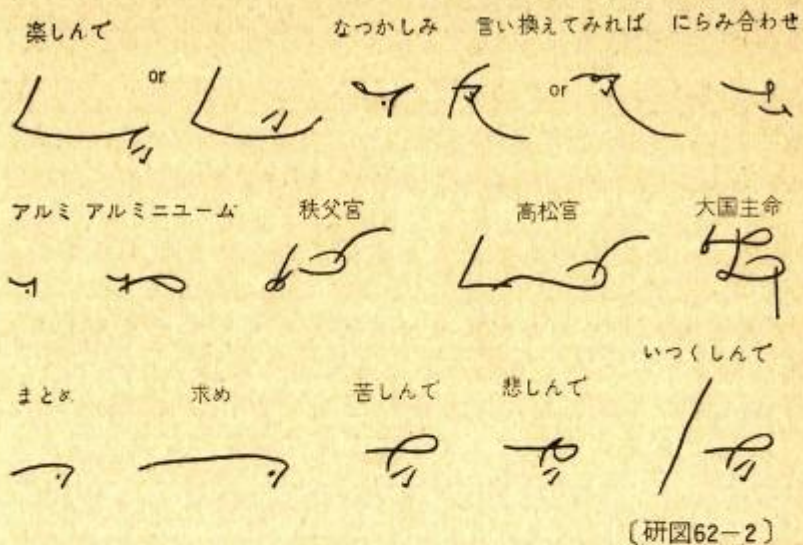
顧みなかった 中味 仲間 車 乳母車 仲間になって 仲間がない



水準は 苦しみ 苦しむ 悲しみ 悲しむ 楽しみて



〔研図62-1〕



アルミニウムは、ミの位置からムを書いて中間のニューを又きます。なおこの「ミ」の加点は、マ行全体にも応用できます。「仲間、中味」「まとめ、求む」のマ・ミ・ムなどに使えるわけです。例題の「悲しみ、苦しみ」などは「カナシイミ、クルシイミ」と書き、「悲しむ、苦しむ」の場合は「シイ」を少し長くして区別します。

7) その他の加点点用文字

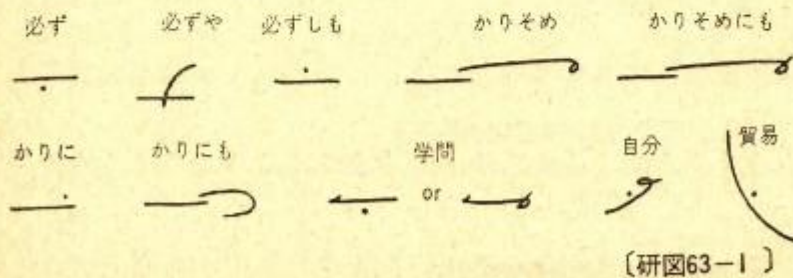
a ホーの加点点と常用簡字の加点点

すでにカタの加点点を「方(ホー)」に兼用することは述べましたが、これを

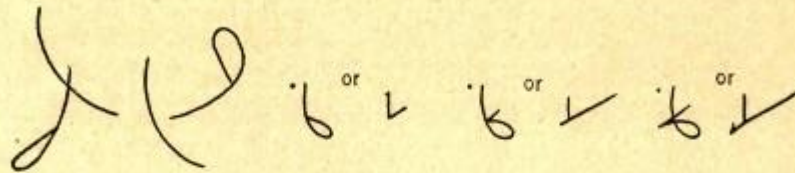
「何々法」とか「何々法案」の「法」に使ってもよいかどうかという問題です。普通ならカタ（方）の加点はホウ（方）を意味する漢字音省略法として使えるわけですが、これを広く使うということになると乱用しやすくなります。このためこの問題はあなたの速記文字に対する自信、実力によって解決していく問題になり、一律にきめることができません。だいたいの要領としては、まず加点字音の省略法全体がよく理解され、慣れてから、適当に応用しやすいものに対して応用していくのがよいでしょう。最初からカタにもホーにも使おうという気持ちになると失敗するおそれがあります。

簡字の加点は63図の程度に覚えてください。「必ず」はズの濁音を表わすつもりで濁音の位置に加点し、「必ずしも」はそれと対照して反対側。そして「シ」に重きをおいて加点する。というふう覚えておくとわかりやすいでしょう。「かり（仮）に」は普通に書いてもよいのですが、カをラ行省略してカリとし、イと同じ位置に加点してニを略し、「かり（仮）にも」はその位置からモを書きます。

「学問、自分、貿易」など加点で略した文字に次の字が続くとき特別の場合以外は、その加点の位置から次の文字を書きます。だいふ、だいぶん、大部分などのダイは基本文字のダイでもよいのですが、特に「第1、第2、第3」などの「第」の加点を利用することもできます。〔研図63〕



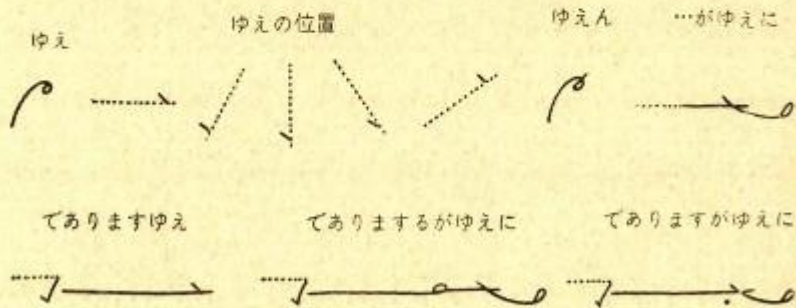
貿易商 貿易上 だいぶ だいぶん 大部分



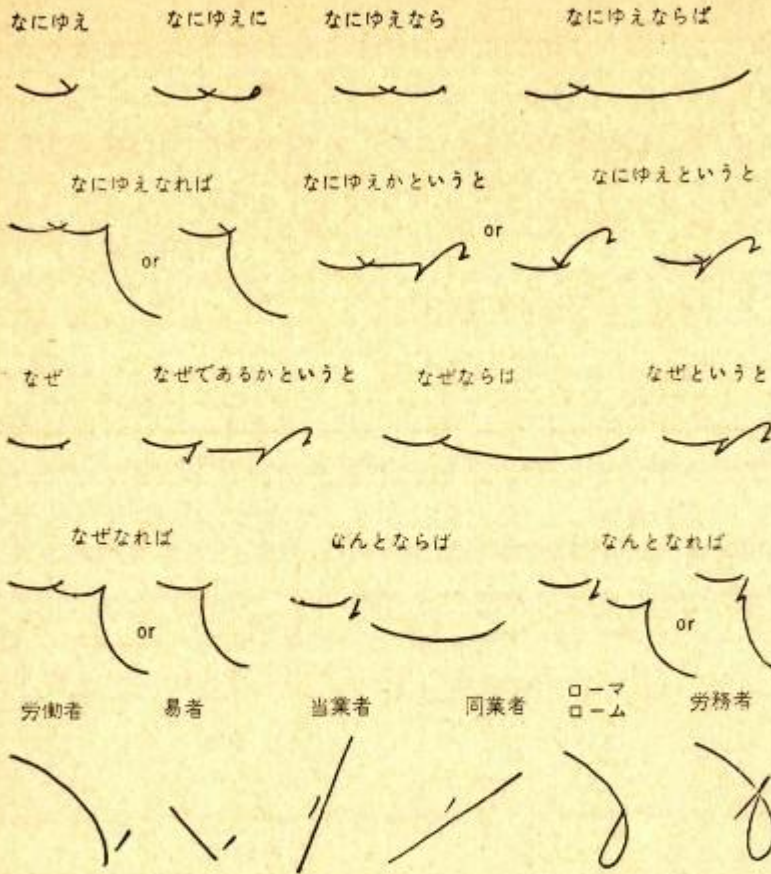
〔研図63-2〕

b 「ゆえ」と「シャ」の書き方

これはもちろん普通に基本文字の「ユ」を「ゆえ」と使い「シャ」も普通に書いてよいのですが、ゆえ、は前字末に「エ」の短線をつけ、シャ、は基本文字のシャが書きにくいときに（主として前字が上下に延びた線）、「シツ」の線をシャに応用します。ナラバはナの長線、ナレバはハの長線であり「なぜ」の書き方は「エ列の省略位置」から書きます。「ローマ、ローム」は「ヨマ、ヨム」を応用した文字で2音文字として使います。〔研図64〕



〔研図64-1〕



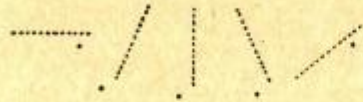
〔研図64-2〕

c 加點位置一覽表

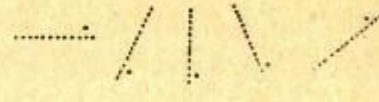
以上で加點で音を省略する書き方を終わりますが、ここで加點の位置を総ま

とめしてみましょう。〔研図65〕

アの加点位置



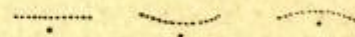
イおよびチの加点位置



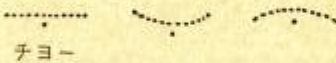
カの加点位置



カイ(3音目以後で常用語のみ)



カク(カナマ行のみに使う)



父音+カ(ヤカ、ラカなど)

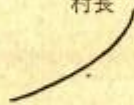


チヨー

市長



村長



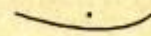
チョウ



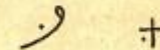
原則

ギョー(長音・濁音+ギョー)

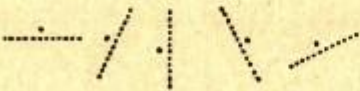
農業



事業 キリスト教



シの加点位置(カの反対側)



営業



影響



〔研図65-1〕

5. 依意省略法

これは早稲田式依意（イイ）省略法といって、字のとおりあることばの持っている意味、あるいは内容によって音や字数を省略する方法です。ある文字の下にタイを書いて「シタイ」を表わすなど、今までにもすでに使っていることがらで、けっしてむずかしいことではありません。

「手をあげる」とか「頭が下がる」というような場合、少し速記の心得があれば、そのことばの「意味・内容」によって、別に不自然な気持もなく前字の上、下を利用して書き表わすでしょう。このように書いて、しかもそれが読みやすければ、これは速記の目的に合っているといえます。

速記文字は音標文字である、ということからみると、この省略法は発音された音を書かないで音を省略するのですから、原則に反しているともいえますがしかし速記ちゅうに自然に動く気持を全然無視することもよくありません。たとえば「マル」ということばを書く場合に、一定の大きさのマルを書いてそれをマルという速記文字にきめてしまえば、りっぱに役立ちます。

けっきょく速記文字は覚えやすく、手数の少ない文字であれば速度も自然に出ますから、「依意省略法」は「いい省略法」ということにもなります。

それでは、どの程度にこの省略法を応用したらよいかを説明します。

今までに習ってきたものの中でこの省略法の範囲に入るものには次の文字があります。

テン——点を天（上）に打って表わす。

ロク・リョク——アラビア数字の「6」をそのまま使う。

リツ——立（リツ）、まっすぐ立てた線をはじく。

上——前字の中央上に少し離してウの $\frac{1}{2}$ の線で表わす。
 ヨウ——揚（アゲル）という意味から、前字の中央上に少し離して加點。
 申シ上ゲ——モを前字の上に上げ、申し上げる。はモをラ行省略ではじく。
 下——上の反対で前音の中央下にウの短線を少し離して書く。
 ニヨッテ——ニの右肩にシテ（詰音+テの書き方）を寄せて書く。
 ニ向カッテ——オをはじいた短線をニのほうに向けて書く。
 ニツイテ——テをニの中央につける。
 トトモニ——トとニを共にさせて（交わらせて）書く。
 ト同ジ——トとオを同じように並べて書く。「同じ」の場合はオとオを並べる。同じく・同じゅうなども、オと並べてシク、シュウを書く。
 返シ——前字にカを返す。
 戻シ——モを戻す。
 ヌキ（抜き）前字からヌを抜いてヌ音を省略する。
 キリ（切り）前字の中央をカの短線で切る。
 ワリ（割り）前字を一つづりのことばの最後の音の文字で割って表わす。
 携ワリ——タツの中央に最後の音を表わす文字をさわらせてサワを略す。
 モト（下）——前字の中央下（もと）にオの短線を書く。
 ナカ（中）——前字の中側に加點する。
 ウチ（内）——ナカに加點をウの短線にする。
 イリ（入）ニユウ（入）——前字の中側に加點する。
 ソク・ゾク——前字の中央に後字を属させる（接触）。
 カ（下）——前字の下に加點する。
 ノゾ——後字の頭を前字の後からのぞかせる。
 カタ——前字の右肩に加點。
 タチ・タツ——リツ（立）をそのまま訓読して使う。
 イチ・イツ——数字の1をトの変規の長さにしてはじく。

マエ——ゼン（前）の2音文字をそのまま使う。

カミ——前字の中央上（カミ）、または下（カ）の位置からミを書く。

コマ——小さい丸を右回りに書く。

コミ・コム——オの短線を前字の中央下側に込める（接触）

シモ（下）——モと同じ書き方。

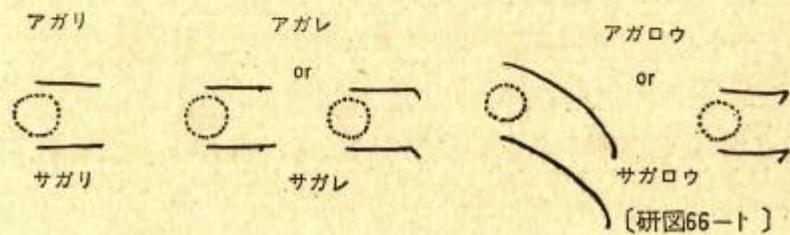
このようにたくさんありますが、以下こうした関係を体系づけて語尾活用とともに説明していきましょう。

1) 字の上、字の下の位置利用法

これは前字の上または下の位置を利用する方法ですが、字の上とか下という以上当然前の字がなければ利用できません。ただこの方法に熟練してくると、字の上、字の下の気持を上段あるいは下段に書いて表わす場合もありますが、原則としては前字のない場合、あるいは前字があってもそれが書きにくい線の場合は普通に書きます。

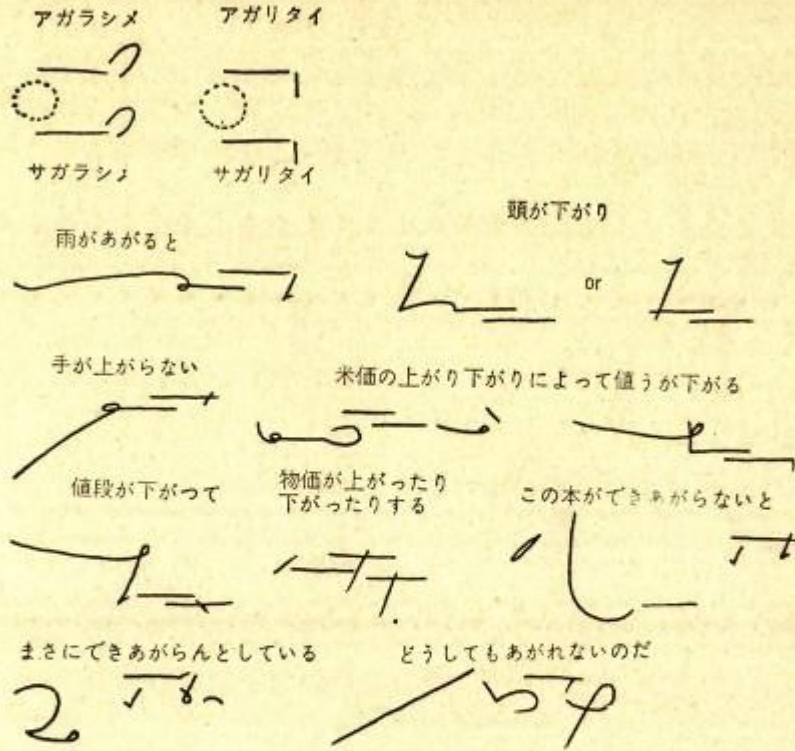
この上下位置利用法は、上（ウエ・カミ・アガリ・アゲ・ノボリ）、下（シタ・シモ・サガリ・サゲ・クダリ）のような音を略します。

a アガリ——サガリの語尾活用〔研図66〕



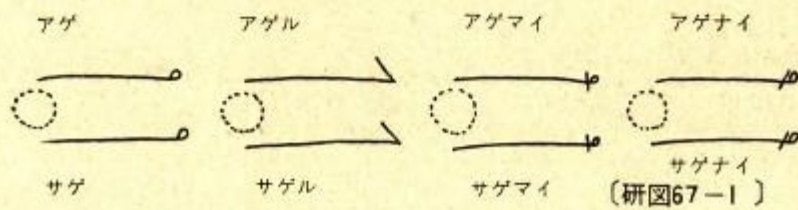
アガラ	アガル	アガラバ	アガレバ	アガレレバ
サガラ	サガル	サガラバ	サガレバ	サガレレバ
アガラン	アガッテ		アガルト	アガレレバ アガレル
サガラン	サガッテ		サガルト	サガレル
アガラレ	アガリマセン	アガレマセン	アガラナイ	アガレナイ
サガラレ	サガリマセン	サガレマセン	サガラナイ	サガレナイ
アガレナカッタ	アガレス	アガレス	アガラズ	or
サガラナカッタ	サガレス	サガレス	サガラズ	
アガレナイ	アガレナカッタ	アガルマイ	アガレマイ	アガラレス
サガレナイ	サガレナカッタ	サガルマイ	サガレマイ	サガラレス

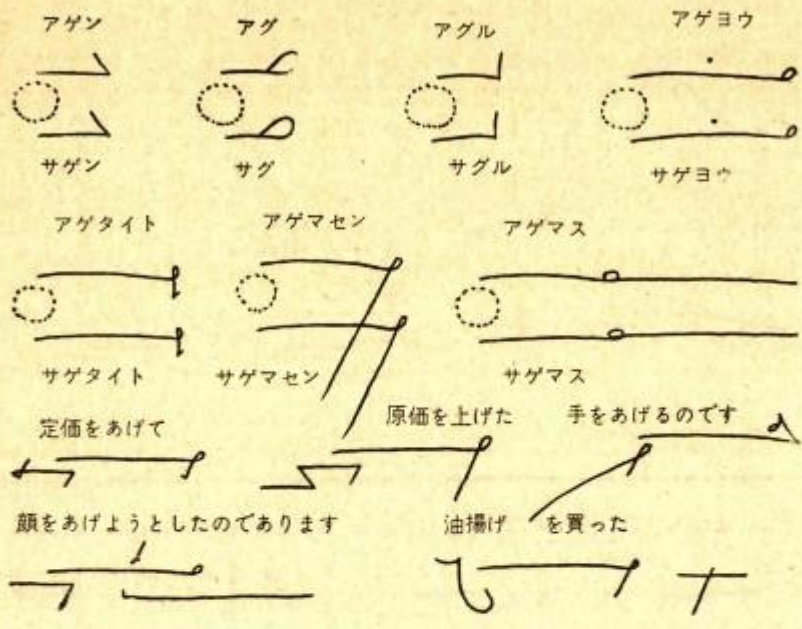
【研図66-2】



〔研図66-3〕

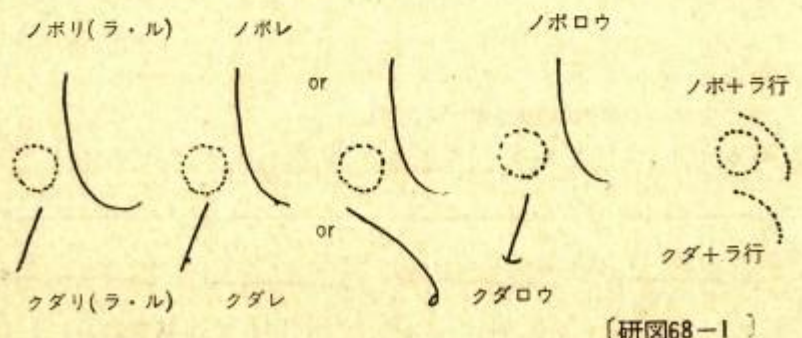
b アゲ—サゲの語尾活用〔研図67〕



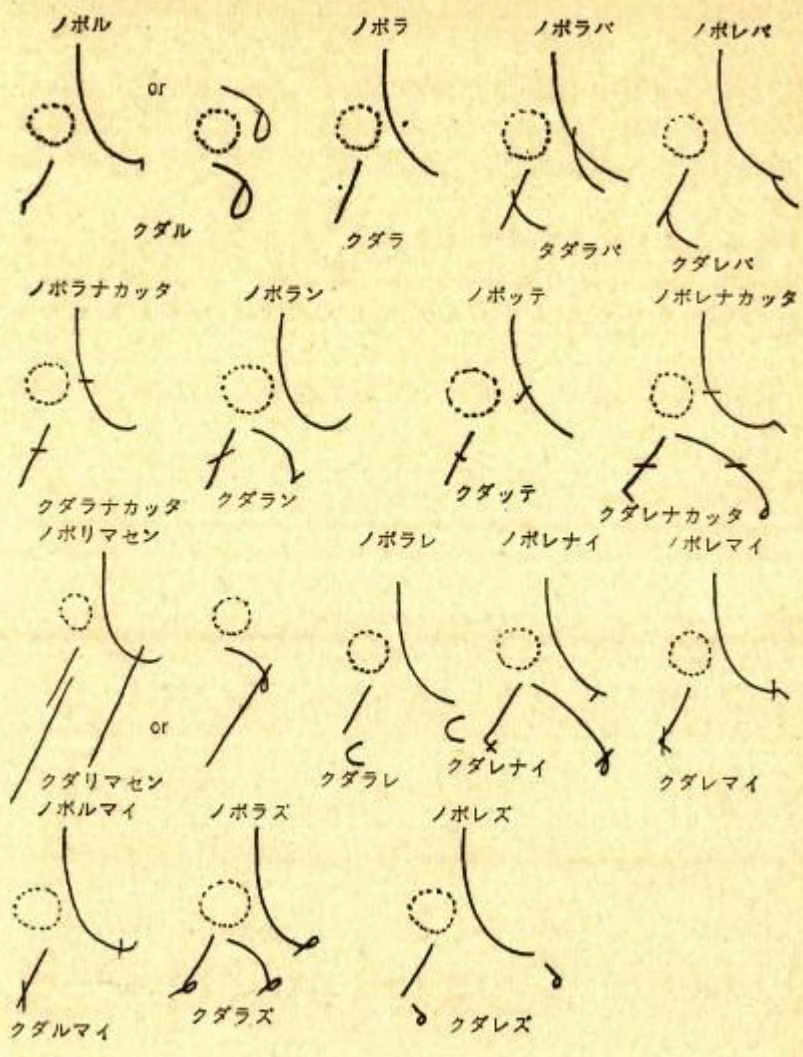


〔研図67-2〕

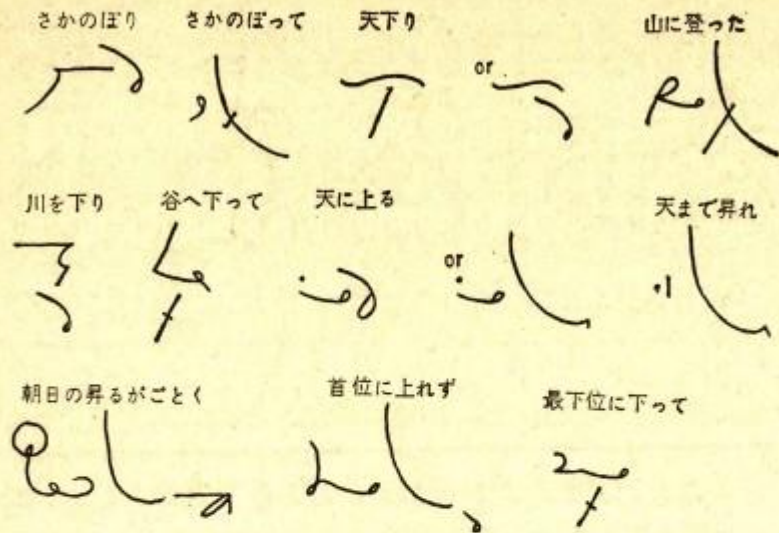
c ノボリ—クダリの語尾活用〔研図68〕



〔研図68-1〕



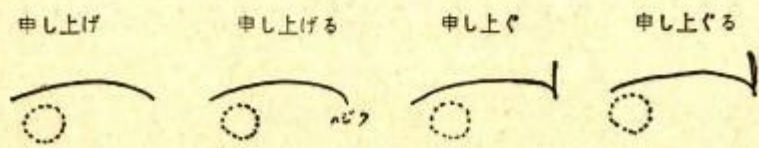
〔研図68-2〕



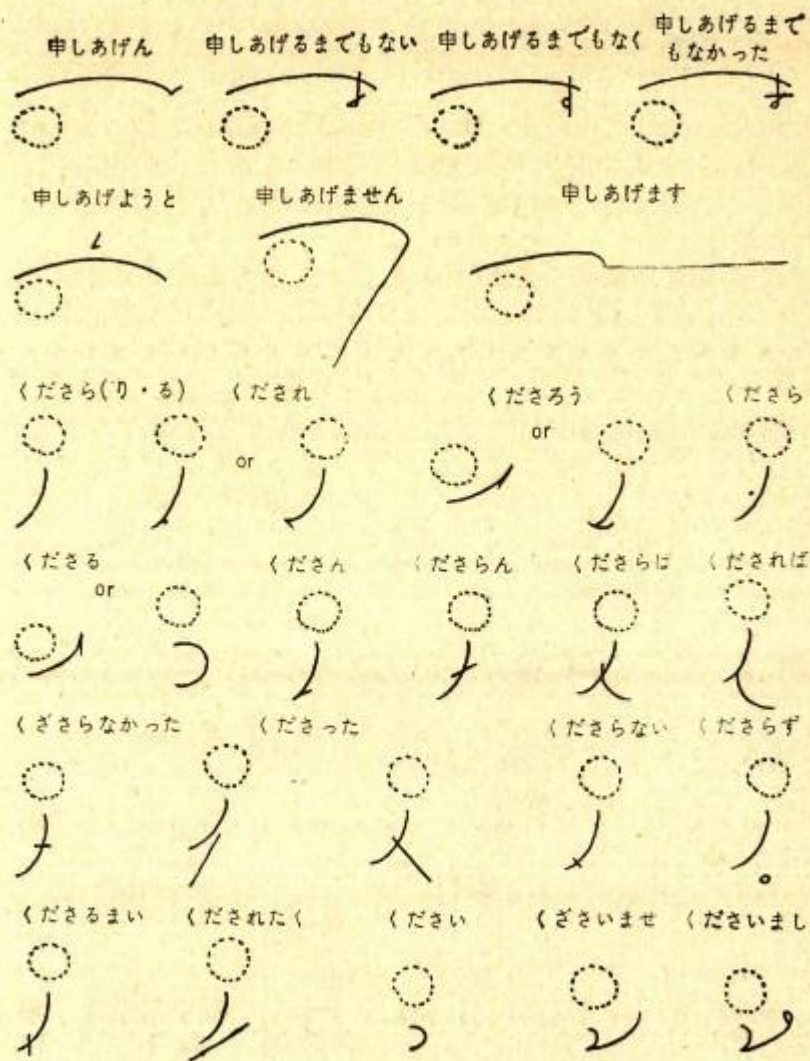
【研図68-3】

アガリ——サガリは主としてカ行を使い、ノボリ——クダリは「ホ」「リ」を使いますが、前字の都合によってはラ・リ・ル・レ・ロをそれぞれ使ってもかまいません。使い分けることはかえってまぎらわしいようですが、少し慣れてくると自由自在に使って便利です。

d 申し上げとくたさいの語尾活用【研図69】



【研図69-1】

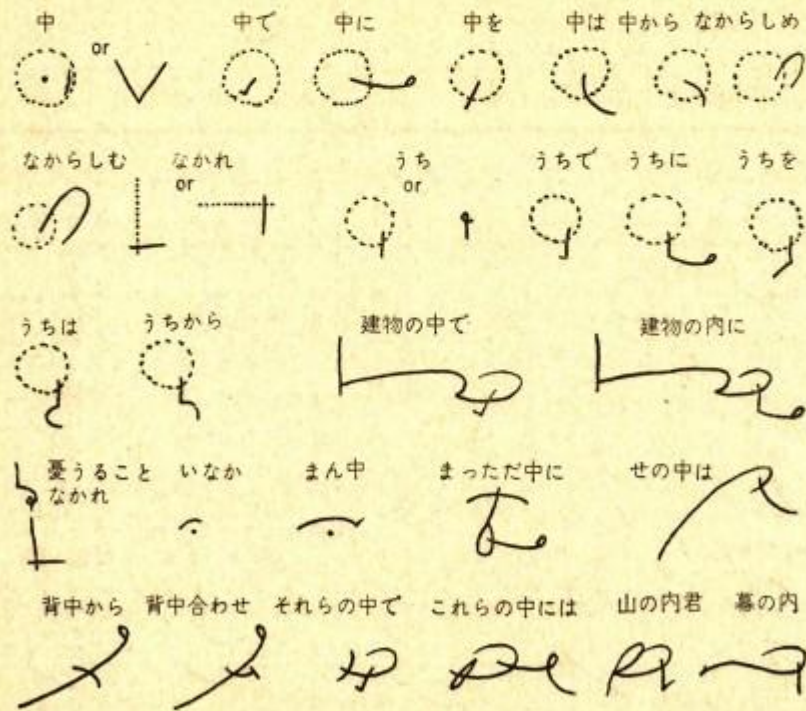


〔研図69-2〕

図を見ればすぐわかると思いますが、くださいの活用は「クダサ……」をラ行省略するのでサの変規をはじいたものです。

2) 中・内・入・出の位置利用法

a 中・内の位置利用〔研図70〕

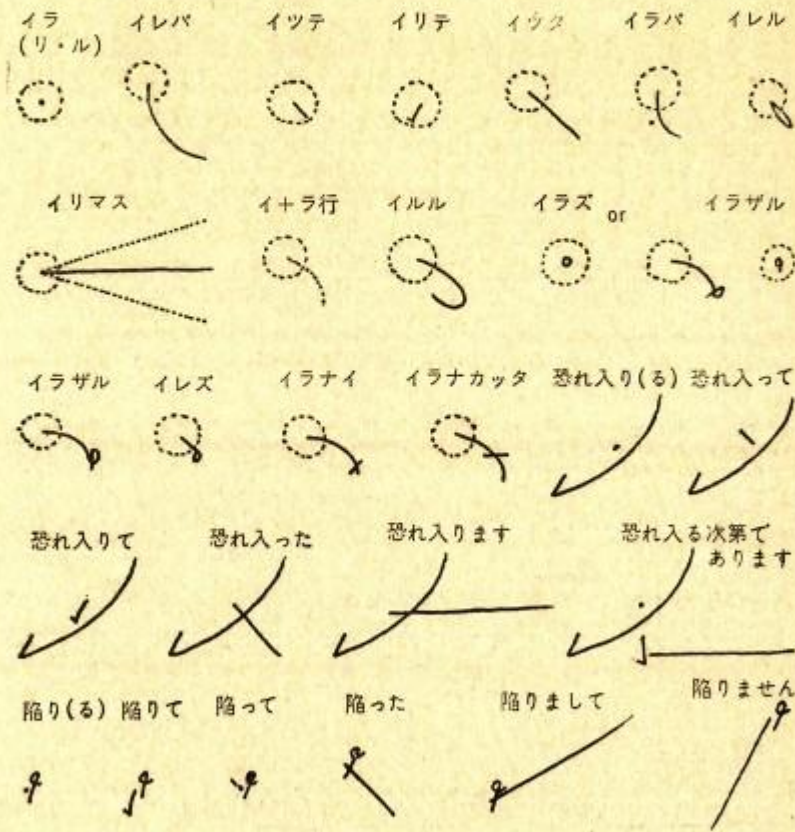


〔研図70〕

ナカもウチも同じ内容を意味することばですが、発音どおり区別して書くためにウチの場合はウの短線で「ウツーウチ」を書きます。

ナカラシメ・ナカレ——これは「ナイ・ナク・ナカラン……」などといっしょに扱うことばですが図のように前字末を打消して表わします。

b 入・出の位置利用〔研図71~72〕



〔研図71-1〕

陥れば 陥らない 陥らず or 陥らしめ おどしいれ

おどしいれ おどしいれる おどしいれられる 繰り入れて 繰り入れ

繰り入れた 繰り入れます 繰入金 or 繰り入れる

繰り入れず 借り入れ or 借入金 or 刈り入れどき

身を入れた 心を入れ替えて 見ているのである 書いているのであるが

考えているのであります or

〔妍圖71-2〕

デ	イデ	デテ	イデテ	イデタ	デマス
デル	デナイ	デズ	イデン	イデズ	イデザル
デルノデアル	デルノデアリマス	まかり出	届け出れば		
届けいでず	届出人	申し出て	申し出た	申しいでた	
輸出入	歳出入	輸入	歳入	輸出輸入	歳出歳入
輸入輸出	歳入歳出	輸入額は	収入支出	歳出歳入 総予算案	
輸出入額	歳出入は	輸出入品	歳出入とも		

(研図72)

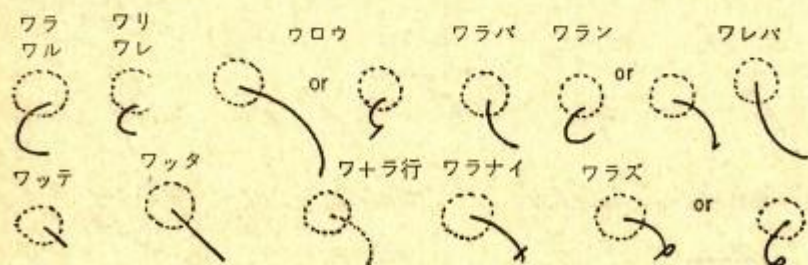
入ル・出ル、は主として動詞に使われ、語尾活用がたくさんありますが、イラバ・イリテ、イデテ・イデザル、など文語体の活用語は日常ほとんど使われません。ですからここでは「入・出」の位置の原則的な理解にとどめ、実際に速記をするとき、使用率の多いことばにのみ応用するというのが能率的です。

72図の出（シュツ）に対する入（ニユウ）の使い方はここに出ているくらいのもので一般には応用しません。輸出輸入や歳出歳入は重音の加点を応用するつもりで書き、収入支出はシの加点位置へシュツを書きます。

3) ワリ(割)の省略法

a ワラ・ワルは大きいワ（受身のラル・ハルなどの線）で割り、ワリ・ワレは小さいワ（受身のラレ・ハレなどの線）で割る方法。

b 前字をラ行で「ワラ・ワリ・ワル・ワレ・ワロウ」と活用させる方法と二とおりあります。ワで割りにくいときはラ行で割り、ラ行で割りにくいときはワで割ります。この省略法の原則は一つづりの最後の音を表わす速記文字で前字を割るということですから、「終わリマス」などはオをマスで割るわけです。〔研図73〕



〔研図73-1〕

賜わる 賜わり 賜わって 賜わった 賜わります 終わる

カ カ カ カ カ

オ+ラ行 終わった 終わらない 終わらず 終わらば 終わらん

カ カ カ カ カ

終わります

終わるのであります

…を終わる

or

カ カ カ

承わり

承わる

承わります

承わりたいのであります

ト ト ト

承わるのであります

承わった

承われば

断わり

断わる

ト ト ト ト ト

断+ラ行

断わって

断わった

お断わり

偽り

偽って

偽った

ト ト ト ト ト

交わり

交+ラ行

交わって

交われば

交わらば

混じる

マ マ マ マ マ

〔研図73-2〕

混じって 混じった 伝わり 伝+ラ行 伝わった 伝わらない

or
つじ or づじ せ せ

伝わらない 伝わりまして つたつて つたつた つたわらない

せ いせ せ せ せ

備え 備える or 備う 備えれば
べ べ or べ or べ

備わり 備わ+ラ行 備わって 備わった 備わろう 備わらば

べ べ べ べ べ べ

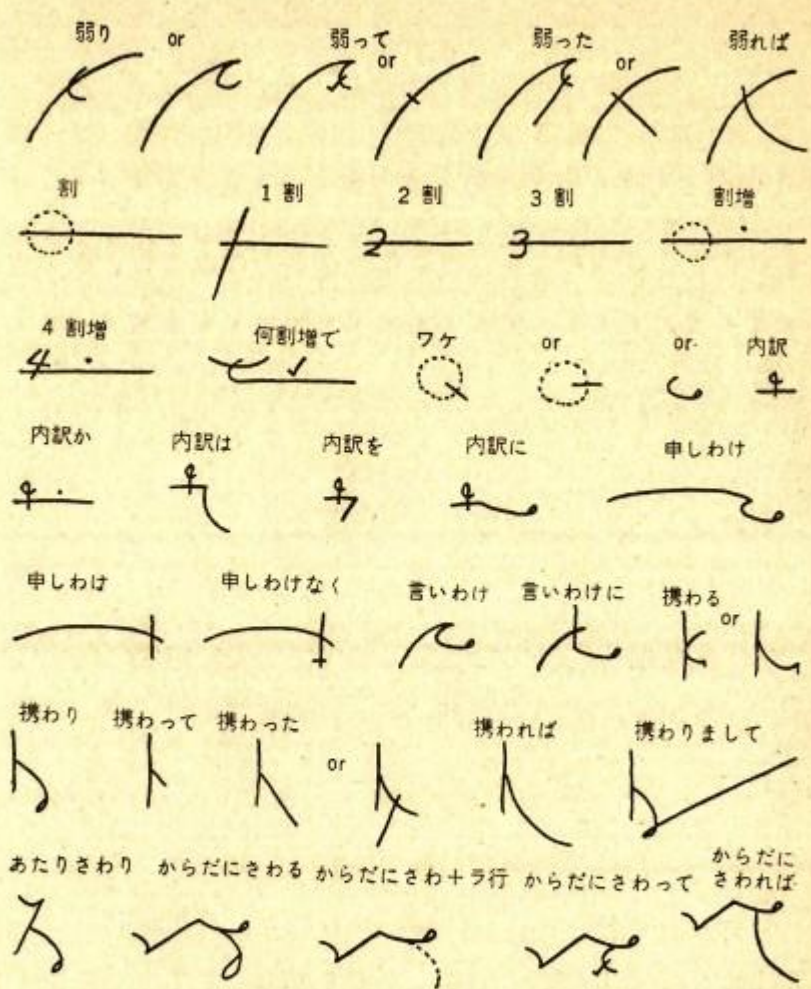
備わらんと 横たわり 横たわる 横たわって 横たわった

べ べ べ べ べ

横たわりまして 代わり 代わりに 代わりまして 代わるのであります

べ て て て て

〔研図73-3〕



〔研図73-4〕

注意「マジワッテ—マジッテ」「ツタワッテ—ツタッテ」などのことは

は、区別して書きます。

代わり・さわり・弱り……など前字が1字の場合は、ワをラ行省略して、「カ・サ・ヨ」にそのまま続けてもよいし、「代わりに・代わりまして……」などはワで割って文字を続けたほうが便利です。1割・2割・3割のように前字が数字の場合は特に「切る」と「割り」を同字に使い、「割増(ワリマシ)」は数字をマスで割ってその上にシの加点を打って表わしてもかまいません。

ワケ——カイまたはエで前字を分けます。「申しわけ」のように縦に切る場合は「ナク」とまちがわぬように少し長めに書きます。

携わり——タツを割るのではなく後字をさわらせて中間の音を略します。

4) ツキ・ニツイテの活用

前字の中央に後字の字頭をつけて「ツキ」の語尾を活用させます。ツキ・ツク・ツケは、基づき・基づく・基づけと区別するために図のように書きます。「引き続いて・引き続き……」は、線の関係から、中央でなく字尾に近く後字を続けます。〔研図74〕



〔研図74-1〕

ツカ ツキ ツイテ ツイタ ツケル ツケン(ヌ)

気をつけて or or 火をつける or or

火がつくと or 火がつくであろう 火がついて 火がつけば 取り次ぎ

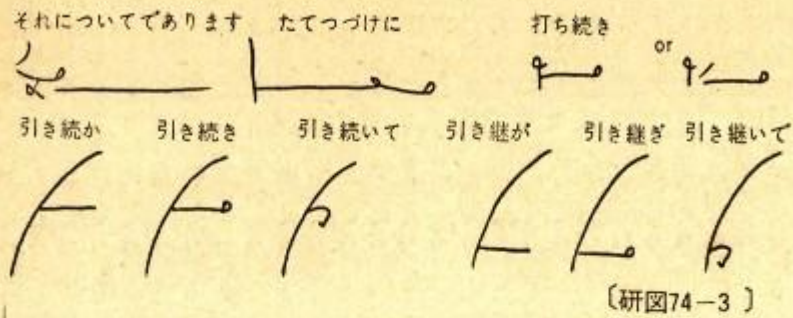
取りついて 落ちつかない 落ちついて 受付 受け付ける 受け継ぎ

受けついて くぎつけ 預け 預け入れ わずか わずかに

おぼつかない おぼろ月夜 or 玉突きに 職につけば 職につければ

職について 大阪へ着いて 旅館についた 床につけば 弱点につけ入る

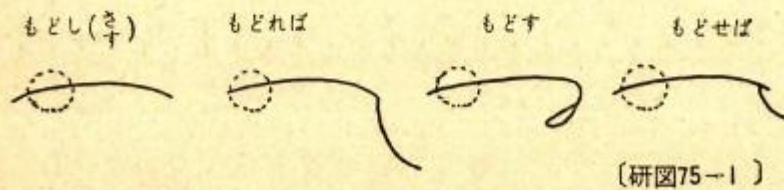
【研図74-2】

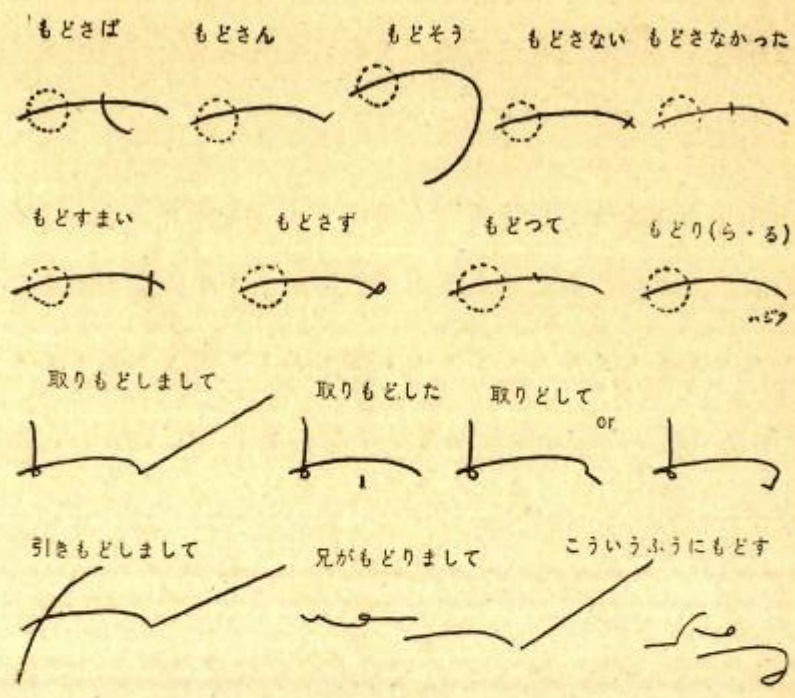


5) 戻シ、返シの応用

前字に「モ」を戻し、「カ」を返して戻し、返しの音を省略する方法です。

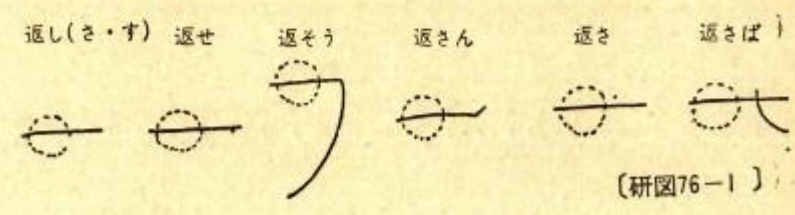
戻シ——はモの字尾をはじかないで「戻サ・戻ス」にも使います。さらに「戻シマス・戻サナイ・戻スト……」のように助詞や助動詞が続いた場合は全然区別する必要がありません。ただ「戻シ・戻ス」とそこで打ち切りになった場合は、「シ」の加点を打つなり、「サ」を書いて区別します。それから前字がカ行やナ行などでモを戻しにくい場合は、図のように下側に書きます。(上に書くと「申し上げ」……になる)次に「戻シ」はサ行だけでなく、モの字尾をはじいて「戻り……」のようにラ行にも活用できます。〔研図75〕

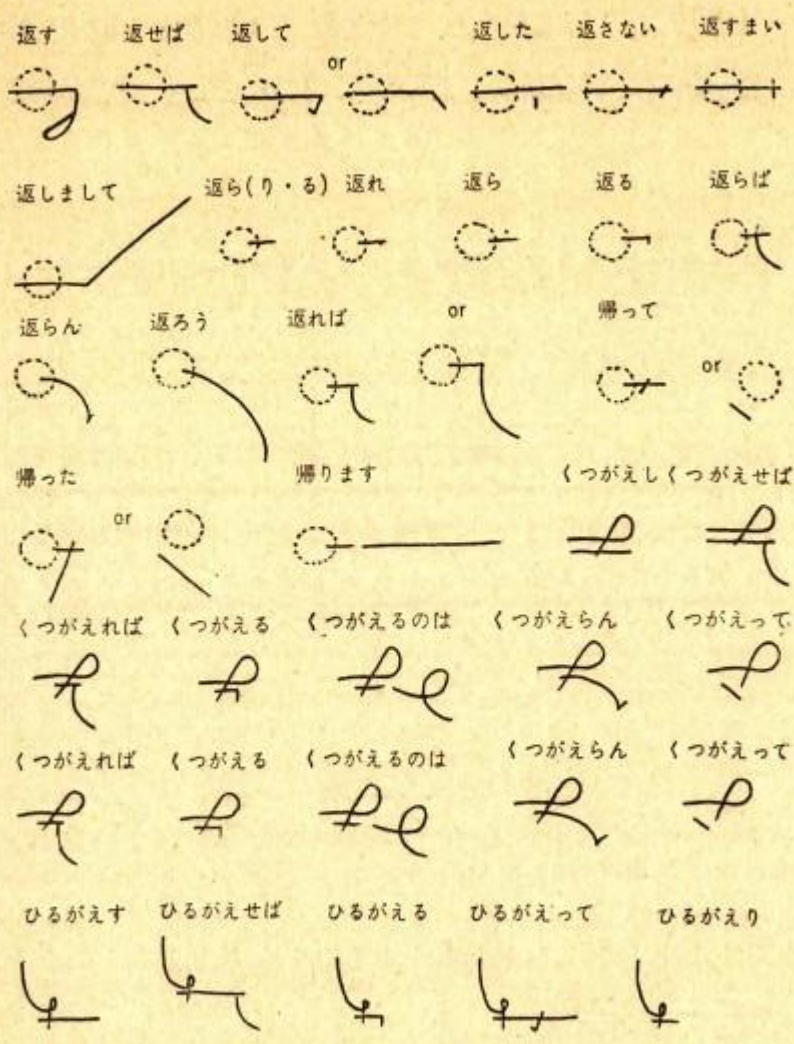




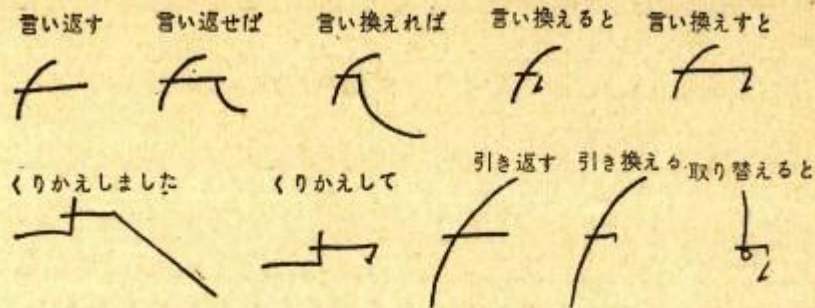
【研図75-2】

返シ——返しの活用もサ行だけでなく「返ラ・リ・返ル・レ」とラ行にも活用しますが、図のようにラ行はカイの線を返してサ行と区別します。(研図76)





(研図76-2)



〔研図76-3〕

注意

a 「返し・戻し」の活用である「返り・戻り」も前字に線を戻すわけですが、このラ行の場合はそれぞれ字尾をはじいて表わせるので、線を戻すことだけにこだわる必要はありません。

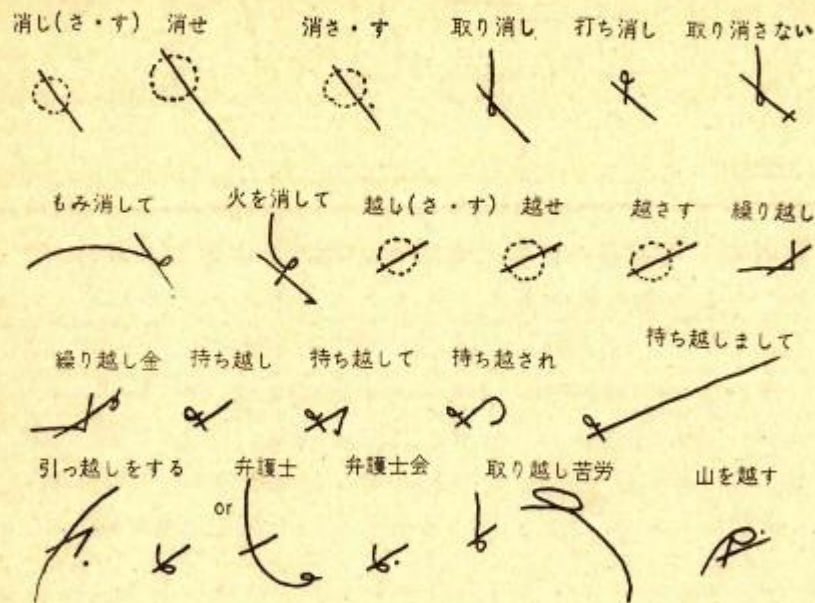
b 「入ラ・入り・入ル・入レ」「戻ラ・戻リ・戻ル・戻レ」「上ラ・上リ・上ル・上レ」「返サ・返シ・返ス・返セ」などのラ・リ・ル・レ・サ・シ・ス・セ（動詞4段活用）は、あとにことばが続く場合、同じように書いても前後の関係で読み分けられますが、ことばが続かない場合（返シ・返ス——戻リ・戻ル——行き・行く）のようなときには、それぞれ区別して書きます。

6) 消シ・越シ・通シ・その他の省略法

消シ——前字をエの少し長い線で消して「消サ・消シ・消ス」を表わし、あとにことばが続かないときは前字をサ行で消して「消サ・消シ・消ス」に使う

方法もあります。「消セ」はエ列の位置を使うか、また「消シ」よりも長い線で「消セ」を表わします。

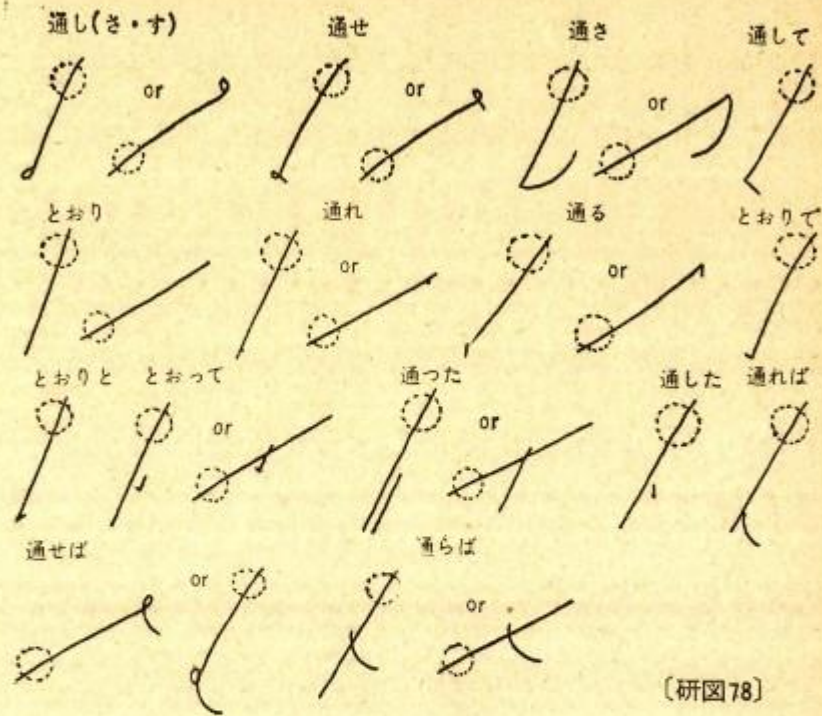
越シ——消シはケ音から関連して同列のエの長い線で消しますが、越しはコイの少し長い線で前字を越して「越サ・越シ・越ス」を表わします。繰越金は同行省略を応用し、持ち越しましてはコシとマシテを一筆に書きます。越しが越えと発音されたときはコイ=コエというふうにご利用します。〔研図77〕



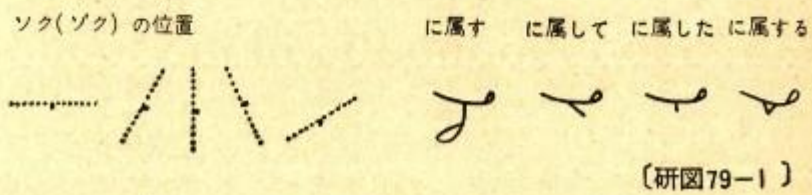
〔研図77〕


通シ・通り——通りはご承知のとおり・御存知のとおり、の使い方今までに出ましたが、図のように活用させます。

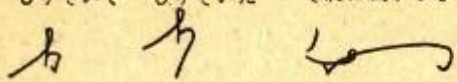
通シはトの字尾にシの最小円をつけて、ちょうど基本文字のテを前字に通すようにして「通シ」に使います。〔研図78〕



ニ属スルの応用——ニ属スルの活用形は文法編の図83で出してありますが、この応用として前字の中央に後字の字頭を接触させてソク・ゾクのことばを省略します。〔研図79〕

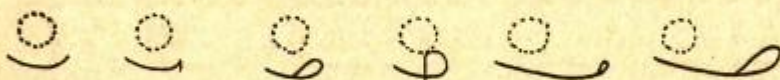


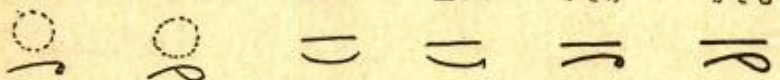
さっそくながら しりぞか しりぞき しりぞく


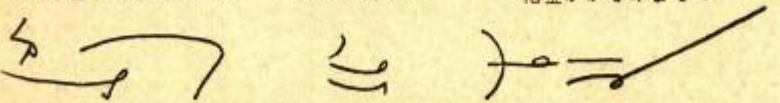
 しりぞいて しりぞいた それに属するものである


[研究79-2]

重ネ——前字にナ行・マ行を重ねて書き、カサの2音を省略しますが、前字に重ねにくい場合はカとナ行を重ねて書きます。〔研図80〕

重なり 重なる 重ね 重ねる 重ね 重ねる


 かさ(端)み かさむ 重なり 重なる かさみ かさむ


 お礼を重ねて申し上げた それに重なる 借金がかさみまして


[研図80]

ト同ジ・加エ——これも文法編の図83に出っていますが、この語尾活用を説明しましょう。〔研図81〕

同じ と同じ と同じく と同じき と同じゆう と同じだ

同じこと 同じところ 同じところ 同じゆう 同じだ 同じである

加え or 加える or 加う or 加うる or

に加え に加える に加えると に加えて に加えれば

に加う に加うる に加うれば に加えまして に加えるので
 ありまして

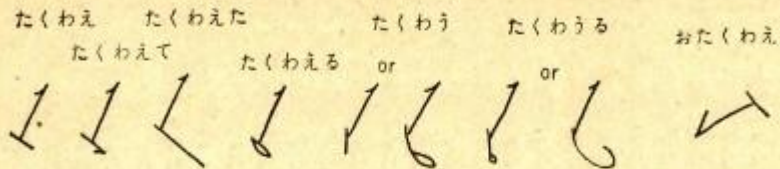
かけて加えて つけ加え つけ加えました つけ加えまして
 つけ加えて

つけ加える つけ加うる つけ加えます につけ加えて
 or

お加え or お加えになって ...を加え or

〔研図81〕

タクワエ——タにクワエでもよいのですが、タクの小かぎが習慣的に出やすいので、タクにエの短線を加えて表わします。〔研図82〕

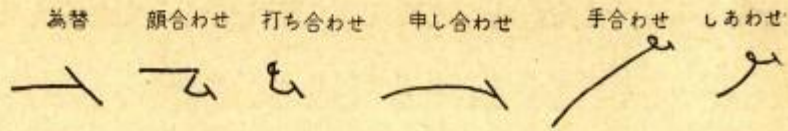


〔研図82〕

合ワセ——アにエを合わせて表わします。合わせの語尾は「合ワセ・ワセル・ワセテ・ワセタ」と「合ワス・ワシ・ワシテ・ワシタ」があり、セとシの使い分けに注意します。〔研図83〕

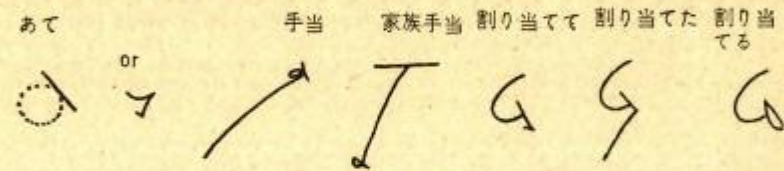


〔研図83-1〕

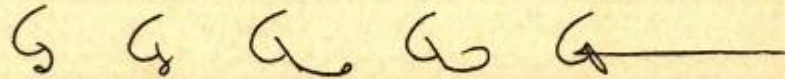


〔研図83-2〕

当て——加エや合ワセと同じ筆法です。〔研図84〕



割り当て制 割り当て金 割り当てに 割り当ての 割り当てるのであります



〔研図84〕

7) 特別の省略文字

今までの意味や内容によって省略する書き方は、一つのことばだけに限らず広い範囲に応用できました。たとえば「返し」を理解すれば「くりかえし、引き返し、取り返し、打ち返し……」などに応用でき、「割り」を覚えれば「終わり、いつわり、断わり、たまわり……」というように、その省略法にあてはまることばに広く応用できました。これから説明する文字は、もちろん意によ

って省略することは変わりませんが、その文字だけに限られるという特別の文字です。それともう一つ違う点は、今までの省略法は原則として前字がない場合は省略できなかったのですが、この特別の文字は前字と関係なく独立して使えるという性質を持っています。

特別の省略文字は——そのことばの持つ内容を、他の速記文字と誤読しない範囲で速記しやすいように造った文字です。多少の例外やこじつけ的な理屈もありますが、「ことばの内容を線によって表わす」という趣旨で造られました。〔研図85〕

いろいろ	いろいろに	いろいろな	いろいろで	組合	組合員
×	ㄣ	ㄣ	ㄣ ^{or} ×	×	×
あべこべ	あべこべに	あべこべで	あべこべだ	マルクス	
×	ㄣ	×	× ^{or} ㄣ	ㄣ ^{or} ㄣ	
いわゆる	あらゆる		ならびに	キリスト	キリストは
ㄣ	ㄣ ^{or}	ㄣ	ㄣ	+	ㄣ
キリストも	キリストと	クリスチャンで	クリスマス	赤十字	赤十字は
ㄣ	+	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
赤十字で	十字架		プラス	マイナス	カケル
ㄣ	ㄣ	ㄣ ^{or}	+	-	×
					÷ ^{or} ㄣ

〔研図85-1〕

イコール $5'$ $3'$ a' b' $2ab$ -5 アルファ
 $=$ f^2 3^x $a^2 b^3$ $2ab$ -5 d
 ベーター 角abc H_2O 三角 四角
 β $\triangle abc$ H_2O \triangle \square

〔研図85-2〕

図85で説明しますと、「あべこべ」はアのエ列位置へ、あべこべにパターンをし、「いわゆる」はイを「いう」の方向に大きくふくらませ、「あらゆる」はあらゆるものを包むつもりで書きます。もう一つのあらゆるはア・ラを一つの文字に変形してそれにヤ・ユを添えます。

その他数学や物理、化学などに使う記号の中で速く書ける文字はそのまま使います。

図86はことばの語尾が活用する文字で、主として動詞であり、図85の場合は動詞以外の品詞が主になります。〔研図86〕

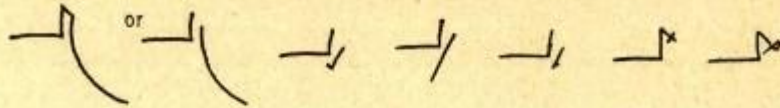
組み合わせ(す) 組み合わせ 組み合わせる 組み合わせて
 \times \times \times \times or \times
 組み合わせて 組み合わせた 組み合わせまして 傾か(き・く)
 \times \times \times \times
 傾く 傾け 傾けて 傾けん 傾+カ行 傾かん 傾いて 傾+サ行
 \nearrow \searrow \searrow \searrow \searrow \searrow \searrow \searrow

〔研図86-1〕

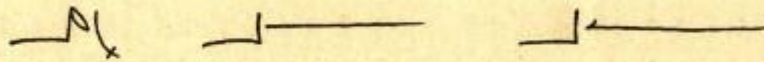
倒る	倒れ	倒るる	倒れる	倒れて	倒れた
倒れない	倒れなかった	倒れず	倒さ	倒して	倒した
倒されて	倒さず	倒しました	奉り(らる) 奉れ		
奉る	奉れば	奉ろう	奉らば	奉らん	奉って 奉り
比ぶ	比べ	比ぶる	比ぶれば	比べる	

〔研図86-2〕

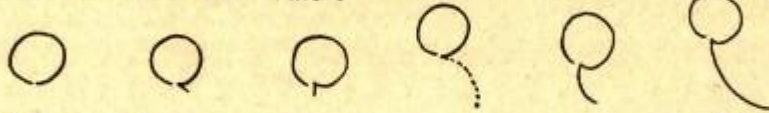
比べれば 比べて 比べた 比べると 比べない 比べず



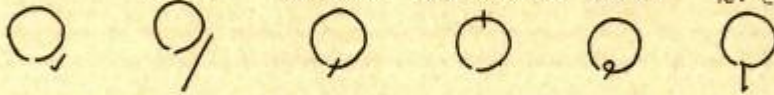
比べるのではない 比べます 比べるのであります



集まり(ら・る) 集まれ 集まる 集ま+ラ行 集まらば 集まれば



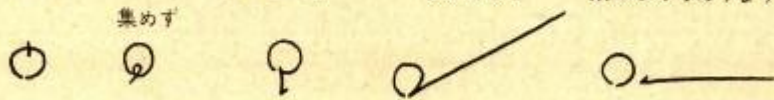
集まって 集まった 集まらない 集まらなかった 集まらず 集まりたいと



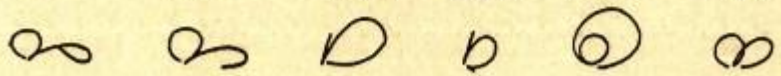
集まりまして 集め 集める 集めれば 集めて 集めない



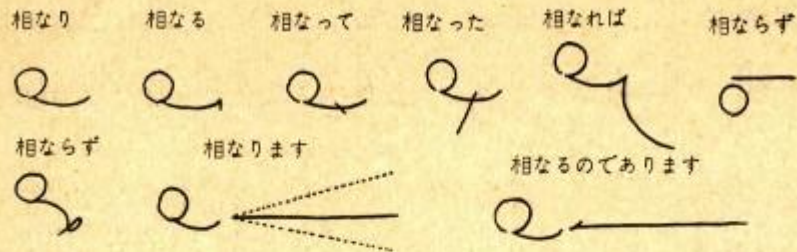
集めなかった 集めたいと 集めまして 集めるのであります



集む 集むる お集まり お集め 相集まり 相集め



〔研図86-3〕



〔研図86-4〕

比べて・比べた——はクラのエ列の位置からテやタを書いてもよいのですが、図のように書くほうが便利です。

集マル・集メル・集ムル——丸の大小によって「マ」と「メ」を区別します。「集ムル」はあまり使われないことばですが、集めの丸に「ム・ムル」をそれぞれつけて書きます。以上の書き方とは別にそれぞれ、丸にムやメをつけたり、エ列の位置を使っても書けることは言うまでもないことです。

以上で意味による省略法を終わります。この省略法の利用は速記技術の向上に大きな役割を持っていますから、いっそう研究してください。

6 特殊簡字とその他の省略文字

特殊簡字は日常使われることばの中で特に大事なもの、また今までの省略法でも省略できないものに対して応用します。これは一定の法則に従って省略されたものでなく、習慣、経験の中から便宜上造られた文字です。このためなぜこう書くのかという説明も困難ですが、記憶しやすいように曲がりなりにも一応説明していきます。常用語として今まで出したものと一部重複するものもあ

ります。〔研図87〕

場合 場合は 場合に 場合で 将来 将来は 将来で 将来と

○ Q Q ϕ T T T T

将来の ため ために ための ためて

TCCCC

...のために ...するため 見たため 書いたため そのために

.....CC K K K

諸君 諸君は 諸君に 関係が 関係で 関係は

~ ~ ~ ~ ~ ~

救済の 救済で 救済事業 心に 心として あたかも

CO C Cシ ~ ~ O

すなわち 候 ござ候 ござなく候

△) 9 9

(漢字の「今」をくずして) あるいは(速記文字オンとニチを続けて) コンニチワ
コンニチ

今 → ㄣ → ㄣ = ㄣ → ㄣ ㄣ

〔研図87-1〕

きょう きょうは きょうの きょうで

キョウ キョウハ キョウノ キョウデ

(漢字の少より) 少ない (速字をくずして) 少ない 少し

少 → 少 → 少_{ハジメ} 少 → 少 → 少_{ハジメ} 少_{ハジメ}

ページ ページに ページは

P ページ R ページは R

すべて(ひらがなのて) すべての すべてのは すべてので すべてにおいて

テ テ_{ハジメ} テ_{ハジメ} テ_{ハジメ} テ_{ハジメ}

非常(カタカナのヒ) 非常に 非常な 非常なる 非常時

ヒ ヒ_{ハジメ} ヒ_{ハジメ} ヒ_{ハジメ} ヒ_{ハジメ}

(漢字の頃より)ころ コー

頃 - 頃_{ハジメ}

宗教(ひらがなのし) 宗教は

シ シ_{ハジメ}

主義主張 資本主義 資本主義
経済

主義

イ
◎

ロ
◎

ハ
◎

◎

◎

◎

[研図87-2]

マルクス主義に 自由主義が 自由主義的な 自由主義経済

自由主義が

利己主義で 民権主義や 人道主義には 国家主義は

自由主義的な

そういう主義と 堅実主義の

自由主義経済

少ないの語風活用

少し 少しも 少しく 少ない 少なき 少なく

少し or 少く 少く or 少く 少く or 少く 少く or 少く 少く or 少く 少く or 少く

少し 少なくとも 少なくとも 少なくとも 少なくとも 少なくとも

少し or 少く 少く or 少く 少く or 少く 少く or 少く 少く or 少く

少なくなろう 少なくなろう 少なくなければ 少なくとも 少なくとも

少なくなければ 少なくとも 少なくとも 少なくとも 少なくとも

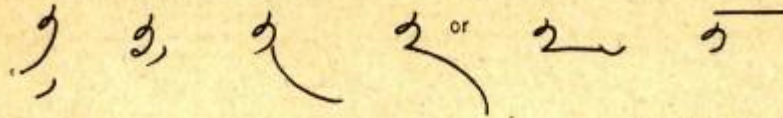
少なくとも 少なくとも 少なくとも 少なくとも 少なくとも

少なくなければ 少なくとも 少なくとも 少なくとも 少なくとも

〔研図87-3〕

少なく 少しあるので 少なければ 少なからう
するので

少なからず



[研究 87-4]

場合——普通に書いても書きにくい文字ではないのですが使用率が多いので右回りにアイと書き、中心に点を打ちます。

将来・招来・生来——将来は後（ノチ）のことであるというところから、「コー」という文字に似せて書きます。（コーは縦の線が短い）

ため——為（タメ・イ）の音読みでイの変規を上段に書いていたものを中段に下し、イとよく似た線ワを前字に接近させて書きます。

諸君——2音文字のショクを逆に書いたつもりでンをはっきりはじきます。

救済——キューの深い曲線とサイの反対の線を連想して「C」のように書き、共済（教材）——は「C」を大きく書きます。

心——使用率や運筆の関係で「カロ」のように書きます。

ページ——page の頭字「P」をとります。

今日——漢字の今をくずして字尾をはじき、きょうは字尾をとめます。

すべて——ひらがなの「て」を書き字尾はとめます。

宗教——ひらがなの「し」を救済とまちがえないようにかぎをつけて書き字尾をはじきます。

主義——3種類の書き方があります。(1), 前字のない場合, (2), 小円のついた前字があってその中へ加点しやすい場合……資本主義……, (3), (2)の加点ができない場合で, 前字末が円の中心にくるように書く。……利己主義……

少しと少し——字のものは漢字の少ですが, その活用例です。

だいたいにおいて, スクナ……は字尾をはじき

スコ……は、はじめない

少はそれ自体がスクナイという意味ですから、それをさらにナイで打ち消すと、少ないの反対で多いということになります。つまり「少なくない、少なくともなかった、少なくなかろう」というようになるわけです。

その他の省略文字

ここに出すのは今までも説明されてきた法則によって省略された文字ですが、運筆上特に注意をするものを一覧表にしておきます。〔研図88〕

おもしろい	おもしろく	おもしろき	おもしろかった	ご説明	説明			
ん	ん	ん	ん	ん	ん			
機密	緊密	親密	機械器具	きっかけ	ご承知のごとき			
ご承知のごとく	かくのごとき	かくのごとく	かくのごとし	…のごとき				
…のごとく	…のごとし	のごとき	のごとく	のごとし	原因			
権限	さすが	or	さすがに	山村	漁村	政治	政治	経済
↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘

〔研図88-1〕

株式	株式会社	株式会社は	株式会社に	海外貿易	外国貿易
外国貿易で	世界	…方面で	動員	農村	農林
農産	増産	増産計画	ご了承	つかさどり	財務
債務	つかまつり	つかまつって	手伝い	手伝う	手伝わ
手伝えば	手伝え	手伝おう	or	手伝って	お手伝い
合名会社	合資会社	金融	金融機関		

[研図 63-2]

最初と最後の音をとる

省+カ行 省き 省いて 省いた 省こう

励+マ行 励み 励む 励んで 励もう

あわてふため+カ行 あわてふためき あわてふためいて

尊+ハ行 尊び 尊い 尊き 尊く 尊んで

とうと(尊)+カ行 とうとき とうとく とうとんで とうと+ハ行

そそのか+サ行 そそのかし そそのかして そそのかされて

〔研図88-3〕

結ば (び・ぶ) 結べ 結んで 結ぶ 結べば 結びついで

結びついた 結びつき すべてからく 思い半ばにすぎます

思い半ばにすぎるものがあります お願い お願いします

を願ひ を願ひたい を願ひたいと を願ひうのであります

を願ひます を願ひまして をお願い をお願いします

をお願いしたいと思います を願ひつて になえ になえん

になえない になえなく になえなかつた になえず になえざる

〔研図88-4〕

にたえません	にたえないところで	にたえざるところで
にたえない次第で	いかにたえん	並びにたえないのであります
にたえる	or	

最初の文字を工作したもの

経済	経済界	経済で	研究	研究は	研究して
困難	すみやか	すみやかに	さらに	さら	今さら
今さらながら	ことさら	ことさらに	資金	質問	ご質問
理由	財政	税制	行政	調整	統制

【研図88-5】

認+マ行	まと+マ行	求+マ行
認め	まとまり	まとめ
求む	求め	

最初と最後の文字を工作したもの

あまつさえ	いしずえ	いしずえに	いやが上	いやが上にも			
教え	覚え	伺い	疑い	疑えば	お伺い	お疑い	をお伺い
精神	精神的に	政府	生活	生活が	悪い	悪く	
悪かった	改良	間僚	緊急	緊急動議	配給		
恩給	はたしてしからば	はたしてしかれば	はたしてしかりとすれば				

【研図88-6】

一日も早く いら早く えこひいき がないかどうか はないか
 どうか どうか

伸び(べ) 述(伸)ぶ 述べる 述ぶる 減び(べ)

減ぶ 減ば 減ぼ 訴え 訴う 訴うる

古い 古く 古き おそれ おそれ多い おそれ多き

答えて 答えた or 答える ごテイ ご提案 or ご提出 ごていねいに

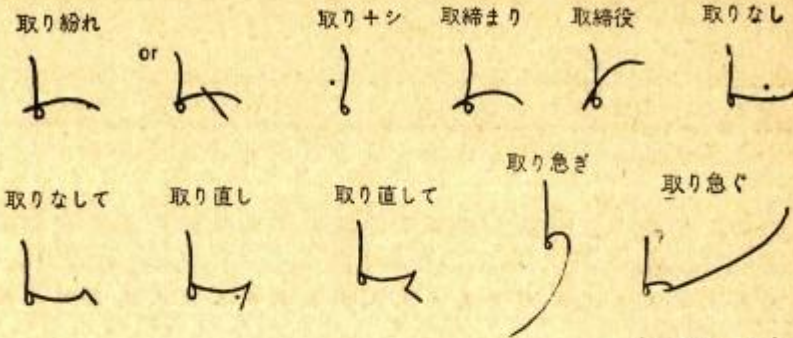
ご丁重 ご演説 演説 演説会 文部省 農林省

大蔵省 文部大臣 農林大臣 商工会議所

〔研図88-7〕

太平洋	同感	ご同感	答弁	or	ご答弁
疑問	議論	世論	さし控え	さし控えて	財団法人
社団法人	納入	設ける	設くる	ベルリン	
北京	ピクニック	防空	払い戻し金	借入金	
奨励金	助成金	補助金	補償金	取り十ハカ	
取り計らい	取り計らう	取り計り	取り払い	取り払う	

【研図88-8】



〔研図88-9〕

以上で早稲田式が使っている省略文字の説明を終わります。これを習得する上でもっとも大切なことは、覚えやすいもの、使いやすいものから順に使いこなしていくということです。一度に全部を覚えきれものでもなく、また覚えたとっても使いこなせないもので、少しずつ取り入れていくということが、けっきょく速記上達の近道であることをよく理解してください。

個人簡略法の補足説明

文法編で個人簡略の利用方法を出しましたが、その中の「臨時文字使用法」について説明を加えますから、この使い方についてはっきりした理解を持ってください。

この臨時文字は、その人その人のよく知っている地名とか人名など、主として固有名詞の頭文字、あるいは最初の2、3字を臨時に書いて、その語全体を表わす書き方です。たとえば「平安朝時代には、かの有名なムヤセという有名な女流文学者が出て」というように、速記文字ちゅうにかなでムヤセが書いてあれば、それは臨時文字であることがはっきりし、またムは「紫式部」の略であり、セは「清少納言」の頭字であることは、少し歴史を知っていればすぐわかることです。また「大戦途中で死去せる前米国大統領」といえば、その大統領は「ルーズベルト」であることがはっきりしているので、かたかなで「ル」と書いておけば、あとになってもはっきり「ルーズベルト」と読めます。このような例は幾らもあります。要するにその人その人の学力、記憶力、常識の程度によって、講演、演説、座談会などの中に、この方法で簡単に書けるものがたくさんあります。もっともあまり使い過ぎると、かえって運筆のなめらかな動きをとめることにもなり、また誤まった記憶から思わぬ失敗をすることもあります。繊維関係の「ポリエチレン・ポリスチレン・ポリプロピレン」など、うっかり「ポ」だけ書いたのではあとで困ります。ふだんからまちがいがやすいことばには気をつけておくことも必要です。また実際に使うときには、同じ話の中に同じことば（名詞）が何度もくりかえされたときに最初の1、2度だけ正

確に速記文字で書いてあとは略して書くとか、発音がゆっくりしているときには簡略法を使わずに、なるべく基本で書いておくという注意が必要です。

交差簡略法

日常使っていることば（熟語）の中には、「最初と中間の音」または「最初と最後の音」を聞いただけで、全体のことばを理解できるものがたくさんあります。たとえば「需要+供給」「人権+じゅうりん」「社会+保障」「安全+保障+理事会」「政府+当局」「国際+連合」「互い+に」「いただき」など、最初の数音と中間、あるいは最後の音を聞けば、他のことば（音）を省いておいてもわかるものがあります。交差簡略法は、3音以上のことば（名詞・動詞・副詞）の最初の1音ないし数音を書き、それに中間あるいは最後の1字を交差（交わらせる）または平行させることで、そのことば全体の意味を表わそうという方法です。この交差法には次の三つの方法があります。〔研図89〕

(1) 二つの熟語のうち、はじめの熟語を正確に書き、あとの半分の音のどれかを交差させる方法。〔研図89(1)〕

需要供給	国際連合	政府当局	社会保障	さしはさむ

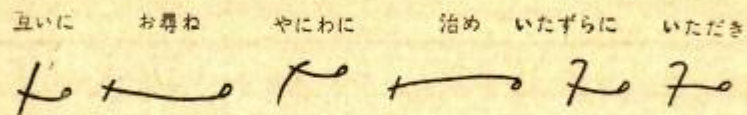
〔研図89(1)〕

(2) 二つの熟語のうち、はじめの熟語の一語だけを書き、それにあとの熟語の音のどれかを交差させる方法。〔研図89(2)〕



〔研図89(2)〕

(3) はじめとおわりの1字だけを交差させる方法。〔研図89(3)〕



〔研図89(3)〕

ところで、この三つの区分けをいちいち考えながら速記したのでは、かえってわずらわしいようなものですが、実際にあなたが筆をとって書いてみればその心配がないことに気づくでしょう。

(1)の熟語は前半分の文字が続いているので「国際……」「需要……」と自然に全部書くようになり、

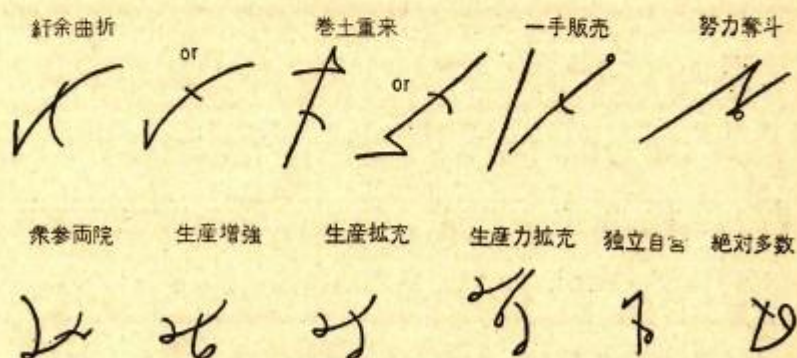
(2)は一般に筆を離すので、後半のどれかの音を交差させるためには、前半を全部書かないほうが交差させやすい、という関係があり、少し練習すれば自然な気持で書けるようになります。

(1)と(2)でもう一つ注意することは、両方とも後半の音のどれかを前の字に交差させるということです。つまり前の字に対して交差しやすい線で交差すればよいので、「さしはさむ」の例では、サシにハでもムでもどちらでもかまわな

いのですが、ハを交差させたほうが書きよいので自然、図のような形に統一されてきます。そしてまた、この交差法は「加點省略法」や「依意省略法」「臨時文字使用法」と深い関係があり、たとえば「需要供給」の場合は加點のキョーの位置と関連があるとか、「さしはさむ」はサシにハをはさめるという「依意省略法」に関連するということのようなことで一段と読みやすくなります。

(3)の場合は、はじめと終わりの文字を交差させるのですが、「互いに、尋ね、助け、治め……」というように「サ・シ・ス」の加點を拡張応用したり、また3音の熟字に関連した文字が多く、また「いたずらに、全く、やはり、やにわに……」のように副詞的なことばに多く利用します。

以上でだいたい交差法の利用のしかたがわかったことと思います。ただ文字を交差させると詰音(ツ)とまちがわないかという不安があると思いますが、これは少し慣れてくれば詰音か、交差法によって略された音かはすぐわかるようになります。またカ行・ナ行・マ行などで交差しにくい場合は図90例題のように並行に書きます。詰音の場合、前字の中央下に後字の字頭を書いて並行させるのに対し、交差法は字頭を揃えて書きます。〔研図90〕



〔研図90-1〕

楽しみ お楽しみ たしなみ たしなむ たしなんて
 り^{or} し じ た た た

おたしなみ 助け お助け 治め お治め
 じ じ じ じ じ

さしずめ いさぎよき いさぎよく いさぎよい 隔たり 隔たって
 じ じ じ じ じ じ

隔たった 絶体絶命 生存競争 生産増強 できる限り
 じ じ じ じ じ

でき得る限り できるだけ あたらずさわらず あたらずというえども遅からず
 じ じ じ じ

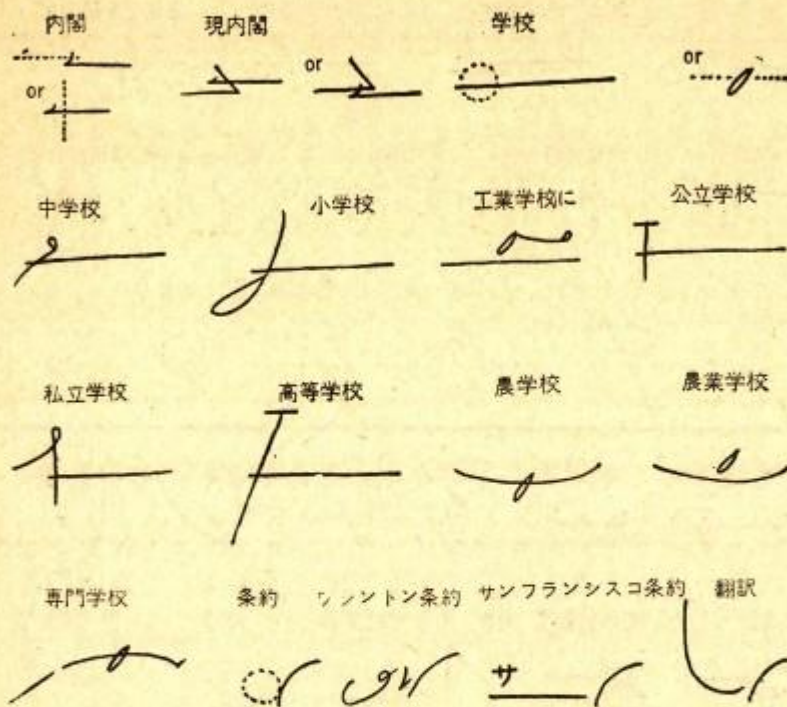
うやむや 農漁山村 ナポレオン 下請け
 じ じ じ じ

下請け 新たに 新たなる 改まる 改む 改むる
 じ じ じ じ じ じ

【研図90-2】

改める	…か否か	…か否や	と否とを問わず	
当局	大蔵当局	文部当局	政府当局	学校当局者
一致	満場一致	協力一致	一致団結	安定
生活の安定	生活定定	協定	日ソ協定	本協定
生活	国民生活	わたくしたちの生活	銀行	日本銀行
勤業銀行	階級	無産階級	有産階級	インテリ階級
法	方法	法案		…の方法

〔研図90-3〕



〔研図90-4〕

交差法はその原理さえのみ定めれば、各人の常識、技術の程度などでどこにでも応用できます。しかし省略法が高等になればなるほど重宝である反面、誤まって読む危険性も伴ってきますから、まず初めにこの本に出ているものから使い慣らし、次第に応用範囲を広げていく、そしてその場合も他の省略法ではどうも書きにくいということばに対してだけ使用するというように、乱用しない注意が必要です。

固有名詞や熟語などの簡略化については、イ・ン・ク・ツ・チ・キの各省略

法、あるいはラ行省略法、和語・漢語の2音文字で大部分が解決されますが、なお個人簡略法や交差法、加点簡略法、依意省略法等を有効に活用しましょう。

これらの法則を応用するためには技術の訓練はもちろんのことですが、特に常識を養うことが必要ですから、技術と常識をともに向上させるように努めてください。

このあと「同音異義」と「外国語の書き方」を説明して研究編全部の講述を終わります。

同音異義について

同音異義とは、音が同じで意味の違うことばのことですが、速記ではこれを広い意味の同音異義と狭い意味の同音異義に分けて考えていきます。

狭い意味の同音異義

普通にいわれている同音異義で、発音が同じために反訳のときに注意が必要なことばです。この中には (1) 文の前後の関係で簡単に区別のできることば——価額・科学、功業・工業、制止・静止、取捨・修習、生气・制規、転化・転嫁、包容・法要——など (2) ある程度の常識、または専門の知識がないと区別しにくいことば——意思・意志、科学・化学、学課・学科、科料・過料、基因・起因、奇禍・奇貨、検収・検修、収容・収用、召集・招集——などがあります。

(1)を仮に「一般的同音異義」と名づけ、(2)を「専門的同音異義」と名づけますが、この限界をはっきり区別するのは困難で、各人の常識あるいは知識の程度によってきまってきます。どちらにしても (1)、(2) は速記文字とは関係がなく、これはことば自体の問題であり、またその人その人の常識、知識の問題であるということです。

広い意味の同音異義

狭い意味の同音異義は「発音が同じである」ために速記文字も同字になることばでしたが、この「広い意味の同音異義」は「発音は違っているが」速記文字で書いた場合に同字になることばです。たとえば「私邸・自邸、先年・前年、以後・以降」などは変音符号を略して書くと全く同じ字になり、しかも文の前後の関係によって判断しても区別のつかないことばです。これを特に「変則的同音異義」のことばと言います。これはむしろ同音というよりも「同字異義」といえますが、結果からみると同音異義と同じことになります。

このほかに同じ文字で違った意味を表わす「イ・イエ・イミ、ユン・ユエン・ユニュー、ヤミン・ヤメン・ヤモ……」などがありますが、これは速記文字が同じであっても、文の前後関係ではっきり区別ができるので、同音異義の文字からは除きます。

同音異義

- (1) 狭い意味の同音異義
- a 一般的同音異義〈発音も速記文字も同じだが常識で区別できるもの〉
 - b 専門的同音異義〈発音も速記文字も同じだが高度の常識や知識によって区別できるもの〉
- (2) 広い意味の同音異義
- a 狭い意味の同音異義 a, b を含める
 - b 同字異義（変則的同音異義） 変音符号を略して書くと速記文字が同じになり、ことばの内容が似ているために区別しにくいもの

この中で(1)は各人の常識の問題であり、また速記文字とは直接の関係がないので説明を省いて、(2)の同字異義について説明していきましょう。

同字異義(変則的同音異義)

これは変音符号と関係のあることばですから、速記ちゅうにまぎらわしいと思ったときは変音符号をつければ解決のつく問題ですが、変音符号を省略してしかも区別のできる方法があれば、そのほうが有利です。そこでその方法として考えられるのは、

第1に、変音(濁音)の位置を利用すること、

第2に、変音符号を省略した特殊な文字を使うこと、

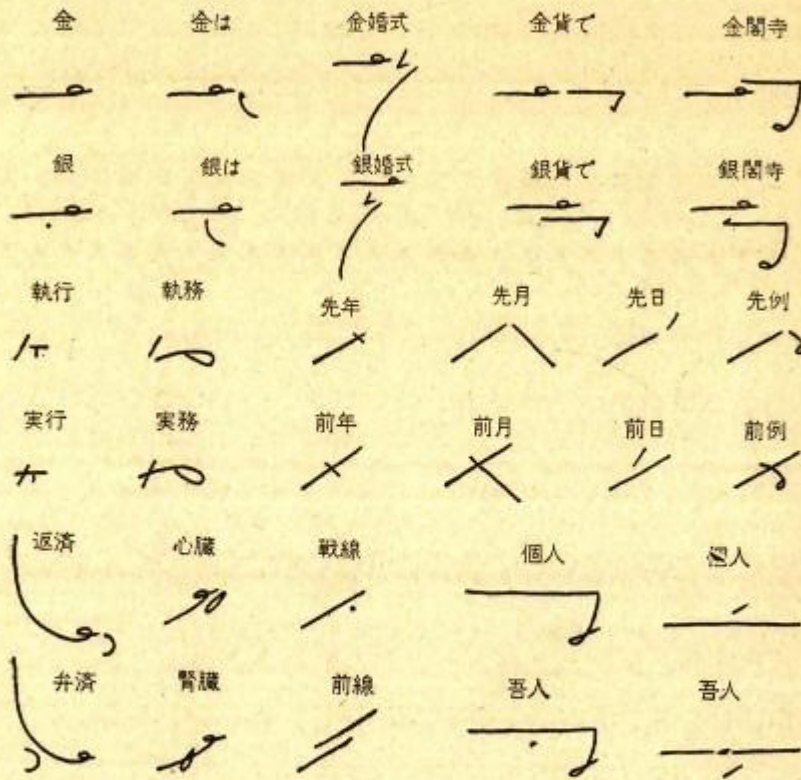
第3に、あらかじめ同字異義のことばをきめて、略字的に使うこと、(増税と租税、女学校と小学校など)

しかしここであらためて濁音の文字や、長音の文字を全部作る必要はありません。いろいろな方向に伸びる線がある中で、速記しやすい線はそれほど多くありません。この数少ない線の中から、さらに変音文字を新しく作るということは困難であるばかりでなく、ことば自体の頻度からも実際上の効果が期待できません。それでこの第2の特殊な文字を使うことは最も頻度が高く、また同字異義を解決するのに最も有効な文字だけにとどめるのです。そこで同じ文字で意味の違う(同字異義)ことばを調べてみると、だいたいオ列の長音とカ行・サ行の濁音文字さえ解決すればよいことがわかります。以下例をあげて説明していきましょう。

1) 濁音の位置を利用する

濁音の加点は一つづりのことばを書き終えてから打つのですが、加点の代わ

りにその位置からすぐ次のことばを書き始める書き方です。〔研図91〕



〔研図91〕

2) 変音符号を省略した文字を使う

実際に必要な文字は、濁音では「ジ」、長濁音では「ジュー・ジョー」の2

字、それにオ列の長音文字です。

ジとジューの区別〔研図92〕

シ	私邸	私宅	新業	市価	四郎
ジ	自邸	自宅	事業	時価	次郎
シュ	主要	就業	就業員	就業者	新進
ジュ	重要	従業	従業員	従業者	新人
史実	詩聖	男子			
事実	辞世	男児			

〔研図92〕

ジ—シをできるだけ短く「ソーイ・サカ」と同じ字に書き、ジューはシヤの線尾からウの逆線を書きます。

オ列の長音文字で区別〔研図93〕

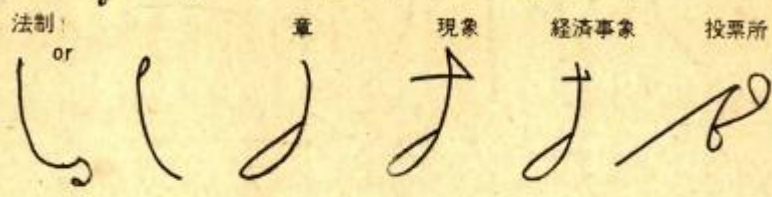


〔研図93-1〕

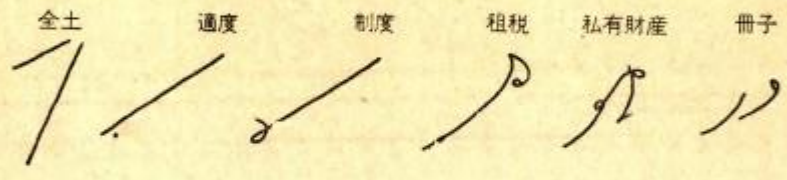
法令 条 現状 経済事情 投票場



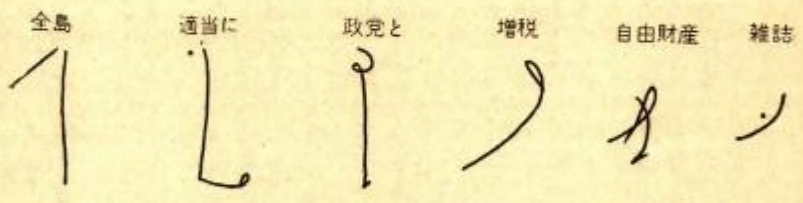
法制 or 章 現象 経済事象 投票所



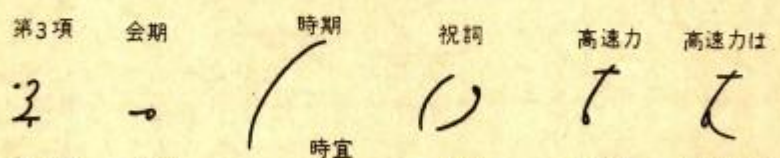
全土 適度 制度 租税 私有財産 冊子



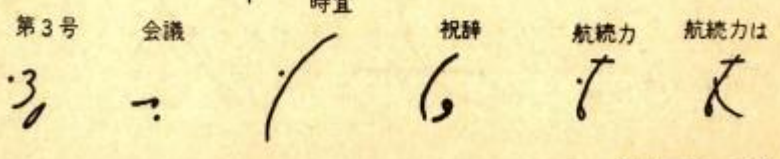
全島 適当に 政党と 増税 自由財産 雑誌



第3項 会期 時期 祝詞 高速力 高速力は



第3号 会議 時宜 祝辞 航続力 航続力は



〔研図93-2〕

コ— 次に続く線によっては加点をウ、またはオの短線に変えて書きます。
 キョ— 次に続く線によって書き方が変わりますが、図によって理解してください。

ソ— 変規のソをなるべく立てて書く。

ショ— ト— も変規のショ、トを書きます。

ホ— ホを立てて書くかまたは5、6ミリの線を図のように書きます。

ジョ— はなるべく大きく書きます。

コ—専用文字応用例〔研図94〕

高位	or	降雨	好運	講演会	功を急ぐ	
ㄣ	ノ	ㄥ	ㄥ	ㄥ-	ㄥ	
効果	幸福に	こうかつ	高空	航空部隊	高校	
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	
後顧	攻げき	光榮に	広告部	交易	鉦泉	
ㄣ	ㄥ	ㄣ	ㄥ	ㄥ	ㄣ	
公金	or	or	交差	コース	耕作人	
ㄣ	ㄥ	ㄣ	ㄥ	ㄥ	ㄣ	
皇室	降雪	交際	校正	交通	公認	硬軟
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄣ	ㄣ

〔研図94-1〕

高速度	交通機関	公定価格	高度	高等	後半	
工場	交付	紅白	紅白試合	公明	荒野	公約
公理	or	効力	航路	功勞	公共物	講釈
向上	交渉	こうする	こうして	こうした	公職	効率
交際系	高慢	公衆電話	攻略した	or	コーチ	公平
以降	成功	對抗	紀行	傾向	化合	愚行

[研図94-2]

キョー・ショー専用文字応用例〔研図95〕

驚異	教員		強化	文化協会	強行軍	教訓
共産主義	共済	教室	教授	強弱	恐縮する	教職
教壇	協定	共通	京都	東京	強迫	興味
教養	郷里	協力	供給	小学	承諾	
省略	強大と	巨大	妥協	妥協点	or	

〔研図95〕

注意 (1)下のほうに伸びる線を使い過ぎると、運筆のなめらかさや速度を落とすので、なるべく同字異義の紛らわしいことばだけに使う。

(2) 同字異義のところ規定している文字は1字1音、つまり「コー」は「コー」だけに使い「ゴ」や「ゴー」には使わない。

(3) 「コー」「キョー」「ショー」の3字くらいからだんだんに使い慣らし

ていくほうがよい。

以上、早稲田速記の重要省略法をすべて説明しました。あと「外国語の書き方」を残していますが、これも一部の文字を除いて今までの省略法を応用しているのが大部分ですから、よく復習し、自分が使う文字を整理していくことが大切です。すべての簡字、すべての略字を全部覚え込もうとするよりは、実際にいろいろの文章にあたって、各自の腕、力にあった速記文字を使いこなすということと、省略の方法、原理を理解する態度で学ぶことが実際のなやり方です。次ページからの「外国語の書き方」でも、アルファベットと、外国語の特徴音だけを覚えて応用しても、かなり便利なものですからもう一息がんばりましょう。

外国語の書き方

ここに「外国語」という意味は、日本語の中に短いことばとして外国語が引用され、あるいは1単語・1熟語として使われる程度の外国語のことをいいます。そこで日本語の中に使われる「英・独・仏・露語」特に英語を中心として、その書き方を例示していきましょう。

日本語速記の目的は、日本語の完全な速記です。もちろん日本語速記と諸外国語をあわせて完全に速記できる方式が考えられないことはないと思いますが、それは理想であって実行のむづかしい理由があります。つまり、外国語を速記するには、その外国語に十分通じていなければ速記をとることができません。かりに数ヶ国語を知っていても、その外国語の速記法には、それぞれ独特の省略法や、多くの略字が必要です。たとえば英文速記のピットマン式とかグレッグ式には、ちょうど日本語の速記に、それぞれ日本語に適した省略法があるのと同じように、英語に適した省略法や略字が作られています。日本語速記を目的とする速記法に、外国語の全文速記を期待することは非常な労力と時間を必要とすることになります。

そこで早稲田式では、日本語の中で使われる外国語を速記できるように、各国語に共通する基本文字をきめ、特にたびたび使われる音、あるいは熟語に対してのみ独特の省略法をきめています。ただここに基本文字をきめるといっても、外国語専用の速記文字を作る訳ではなく、今まで使い慣らした速記文字に多少追加する程度で別にむづかしいことはありません。

- (1) 清音 拗音・半濁音……などの基本文字はそのまま使う。
 - (2) 日本語にない音、またはまれな音で、外国語に多い音に対して特別な文字を作り、また字の形を多少変える。
 - (3) 今までの省略法はさしつかえない限り全部応用する。
 - (4) 変音符号は適当に使う（自分の知っている単語は略してもよく、また知らない単語でも何回も発言されるときは、はじめの1、2回に変音符号を使いあとは略す）。
 - (5) 接頭語（エス・エキス・ダブル……）または接尾語（スト・ズム・プス・ング……）で特に使用度の高い音には、2音文字的な略記法を使う。
 - (6) 外国語ちゅう特にむずかしいものは、上段文字にするか、あとでわかるようにアンダー・ラインを書き添えておく。
- 以上が外国語速記の根本的な方針ですが、具体的な書き方を図で研究してください。例題ちゅう×印はほとんど使わないものです。

アルファベットの書き方〔研図96〕



「ハ」は字尾をはじく印

〔研図96〕

外国語特有の音

クワ	クイ	クエ	クオ	クワイ
ㄑ or —	ㄑ	ㄑ	ㄑ	○ ○
スイ	スユ	スウイ	スエ	スウォ
ㄒ	ㄒ	ㄒ	ㄒ	ㄒ
テイ	デイ	トゥ	ドゥ	テユ
ㄒ	ㄒ	ㄒ	ㄒ	ㄒ
ツァ	ツイ	ツェ	ツォ	ツァイ
ㄑ	ㄑ	ㄑ	ㄑ	ㄑ
or —	or —	or —	or —	or —
ファ	ファイ	フィ	フェ	フォ
ㄑ	ㄑ	ㄑ	ㄑ	ㄑ or ㄑ
ウァ・ヴァ	ウィ・ヴィ	ウエ	ヴェ	ウオ
ㄑ	ㄑ or ㄑ	ㄑ or ㄑ	ㄑ	ㄑ
				ㄑ or ㄑ

[研図97]

接頭・接尾語および常用音

…ア	アウト	or	アップ	or	アフ(フ)	アルファ	or
アンティ	イニシア	or	ヴァイ	ウィーク	ヴィス	ヴィズム	ヴェス
ヴォイ	…ウス	…ウブ	…ウント	…ウト			
エア	エクス	エキサ	エキシ	エキゾ			
エクス	エス	オヴ フ	or	オフ	オベ		
…ウキ	or	…ンキ	キャナ	キャフエ (ノバ)	キャビ (ビ)	キャップ	キュア
…ツク	or	…ンク	クス	…ックス	グレード グラント	ケット	

[研図98-1]

コネ コット コミュニ ジェス or ショップ or システム
 シネ ショア or ショナル ション スタイル
 スト ズム ゼネ タイムズ
 ダブル ...タフォ(フェ) ...チック ...チリズム チャイニ
 チュア チョップ ...チヨン デイショ テイジ ティブ or
 ティシズム ティズム ティスト ティック
 ティング ティッシュ ト ドヴァエ
 ナイフ ...ナス ニア ニスト ニズム

[研図98-2]

例 題

⑦ アイディア ^{アウト} サイダー アカウント アカデミ アトラクション アナーキズム

o 7 ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

アバンギャルド アブノーマル アマチュア アルバイト アジア:アフリカ

ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

アトム ^{アトラス} ^{アイソトープ} ^{アグレマン} ^{アラブ連合}

7 7 ㄨ ㄨ ㄨ

アビール アメリカ ^{アバート} ^{アソシエーション} アルコール アンコール

ㄨ 7 ㄨ ㄨ ㄨ

アルマイト アンケート アンペア ^{アルミ} ^{アルミニウム} ^{アングロサクソン}

ㄨ 7 ㄨ 7 ㄨ ㄨ

アンモニア ^{アラベスク} ILO or

ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

⑧ イージ-ゴ-イング ^{イデオロギー} ^{イニシアチブ} イメージ インスタント

ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ ㄨ

〔研図99-1〕

インター インター インテリ インテリ
 ナショナル ナショナリズム ゲンツァア ゲンチャインフレ or インフレーション
 or or

イコール イタリー イエルサレム エルサレム EDC
 or = 7 2 2 2 2 2

⊙ ヴァラエティ ヴァリエー ウラジオ ウィット ウラン VOA
 ション ストック or

⊕ エゴイズム エゴイスト エスプリ エトランジェ エロティシズム エスカレーター
 ター

エアコンディショニング エンジン エンジン エージェント エチケット ABC
 エンジン エンジン

AP AFP AFL LC SOS FOB NHK NOC MSA

⊕ オアシス or オバー・ローン オリンピック オープン・マーケット オペレーション

オーソドックス オーソリティ オブザーバー オリジナル オプティミズム オルガナイズ

[研図99-2]

㊦

ガイダンス ガリオア エロア カタルシス カタログ カタストロフィ

Handwritten cursive letters for the first row of words.

カソリック カムチャッカ ガヴァメント カムフラージュ カモフラージュ

Handwritten cursive letters for the second row of words.

カルシウム カロリー ガレージ カレッジ ガロン カット

Handwritten cursive letters for the third row of words.

カテゴリー

カリキュラム

カルテル

Handwritten cursive letters for the fourth row of words.

㊧・㊨・㊩

キリスト キリシヤ ギルド

クレジット グラム

クーデター

Handwritten cursive letters for the fifth row of words.

グランプリ クローズドショップ クライマックス グロテスク

Handwritten cursive letters for the sixth row of words.

クウェート クラシック

Handwritten cursive letters for the seventh row of words.

クエスチョン クェーカー クォーター ゲシュタルト ゲメインシャフト

Handwritten cursive letters for the eighth row of words.

ゲベール ケンブリッジ ケープカナベラル ケースワーク

Handwritten cursive letters for the ninth row of words.

【研図99-3】

㊦ ココム コール コルホーズ コロンボ コロンビア コー
 コンゴ コンサルタント コンテナー コントロール・タワー コンクリート
 コミュニケ コンディション コモンセンス コミック
 コミンフォルム コンプレックス コンツェルン ゴ・ジン・ジェーム
 ㊦㊧ サブジェクト サンフランシスコ サズベンス サロン サービス
 サボタージュ シベリア ジャーナリスト or
 サジェスチョン シヴィライゼーション ジャーナリズム ジリング or
 ジス(JIS) ジェトロ シンジケート シンガポール シンポジウム
 or or or or or
 SEATO CPI CPS GHQ C I F
 or or
 or or or or or or

【研図99-4】

㊦ ステージ スクリーン スコア スターリング・スキャップ ストック
 ブロック

ストリップ スプートニク or スタジオ スチーム スチール スペイン

ストライキ ストライク スタイル スエズ ステーション スترون スクラップ
 チウム

㊧ セシウム セリング or セールス・プロモーション

センス or センチメンタル セルフ・サービス センセーション Z 版

㊨ ソビエト ソビエト・ロシア ソビエト連邦 ソ連 ソ連邦

ソーク・ワクチン ソクタイブ ソノシート ソノラマ ソシアル

〔研図99-5〕

㊦㊧㊨ タレント ダイナミック ダイレクト ダンプカー
 or or or or
 WHO タイプライター チタン チャイナ チンコム
 チェコスロバキア チフス チケット チェンジ チャージ チャンネル
 ツーリスト ツーリスト・ビューロー ツーリスト・チェック ツィスト
 or or or or
 ㊩ デザイン デノミネーション or
 デフレクション テロ TV テレビ テレビジョン
 or or or or
 ディーゼル デフォルメ デリケート ディレクタント テープ テープ
 レコーダー コーダ
 ㊪ トップ or or or or
 トップ・マネージメント ドライブ

[研図99-6]

トラス	ドル・ユーザンス	トロイカ方式	トリック	トラック
⑦・⑧・⑨ ナイキ	ナイーブ	ナイター	ナチュラル	ナチュラリゼーション
ナバーム弾	ナイジェリア	ナトリウム	ニュー・フロンティア	ニューフェース
ニヒリズム	ニュアンス	ニカラグア	ニュー・ジージラント	ニューヨークヌーベル
⑩ ノンフィクション	ノーベル賞	ノーコメント		
⑪ パンアメリカン	パイオニア	ハイファイ	ハウザー賞	バーター貿易
パーソナル・コミュニケーション	バテト・ラオ	パネル		
パリ	パワー	バルカン	バンドン	バクテリア
				バクダッド
				ハイフォン

【研図99-7】

パーセンテージ ハンディ・ハンディ バロメーター パスト パニック
 or キャップ

⑥ ヒロイズム ヒューマニズム ビデオテープ ビューリッツァ
 or

ビール ビンボン ビューリタン PTA PR BCG

⑦ ファクター ファシズム ファン フィクション プロレタリア

フーン現象 プライバシー フルブライト法 フレーン フィリッピン
 トラスト

フィロソフィ フルジョア プレミア プレスキャンペーン プロペラ

⑧ ベンクラブ ベルリン ベソ ベーフメント

[研図99-8]

ベートーベン ベルサイユ ベン ペンシバニア ベンベルグ ベースアップ
 ④ ボヘミア ホノルル ポンプ ポピュラー ホディガード
 ポッドム宣言 ポラリス ポラロイド・カメラ ホームヘルパー
 or
 ボイコット ボイラー ボリューム ボルトガル
 ⑤ マス・プロダクション
 マーキュリー計画 マーケティングリサーチ マーシャル・プラン
 マルクス主義 マルキシズム マイク マイクロフォン マキシマム マラリア
 マッサージ マスコミ マニア マニキュア マラヤ or
 ③・④ ミサイル ミイラ ミステリー ミッドウェイ メモリアル

〔研図99-9〕

メソジスト メリヤス メソポタミア
 メランコリー メロドラマ メンタルテスト
 ⊕ モダニズム モラトリアム or
 モラル or モチーフ or モンタージュ
 モニター モノレール モスクワ モンゴル
 ⊕ ⊙ ⊙ ユース・ホステル ユニオン・ショップ ユニット
 ヤルタ会談 ユートピア
 ユネスコ ユニバーサル ユニバーシティー ユダヤ or
 ユーゴスラビア UP USA USSR 4H or ヨーロッパ

〔研図99-10〕

⑦ ライセンス or ラオス ラジオ・ビーコン ラテン・アメリカ

ラテン語 ランデブー ランニング ラウンド ライバル

⑧ リコール制 リベート リアリスト リアル リリシズム

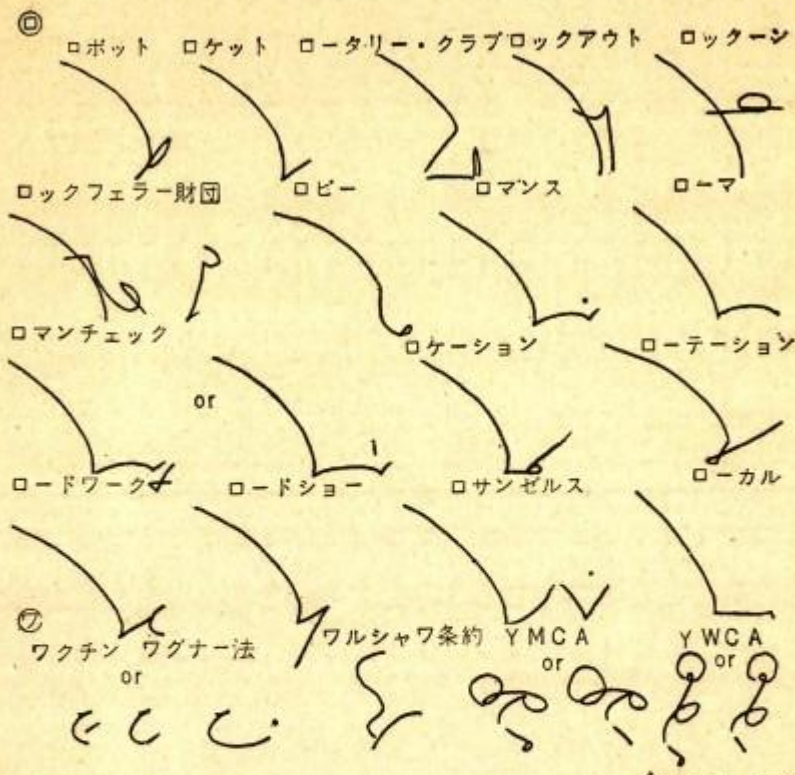
リベラル リベラリズム リフレッシュ リクリエーション リサイタル

⑨ ルイセンコ学説 ルネッサンス ルクセンブルグ ルーズベルト

⑩ レインジャー レニン主義 レジャー レニングラード レビュー

レベル レーヨン レギュラー レポート レジスタンス

〔研図99-11〕



[研図99-12]

例題では、省略法の使い方によってもっと別の書き方もありますが、ここではだいたいの標準を出しておきました。なお変音符号は、それぞれの学力、実力の程度、ことに発言内容の難易度によって適当に処理します。一般的には、ことばを知っていれば変音符号は省略します。

以上の特徴音やその他例題によって、多少外国語を知っていればすぐ理解できると思います。たとえ外国語を全く知らなくても、例題をくりかえし練習すれば、普通使われる外国語に対してだんだん自信もつき応用できるようになる

と思います。なお「新聞新語辞典」など適当な参考書で、発音とかことばの内容を知るとともに、その書き方を研究するとか、毎日の新聞雑誌などに出てくる外国語を速記文字にして、ことばに親しむことがよい練習になります。

だいたい自分に意味のわからないことばは非常に速く聞えたり、音がはっきりしなくて書きにくいものです。知らないことばは聞きまちがえ、書きまちがえやすく、また発音どおりに書いたつもりでも読み返しのときにまちがうことが多いのです。その反対に見慣れ、聞き慣れたことばは、速記文字が多少乱れていても正確に読めます。こういうことから速記者には広い常識が必要になるわけです。

速記文字が普通の国字を書くときのような気持ですらすら書けるようになれば、これ以上の略字を作る必要もなく、今までの文法を要領よく使って日本語の中に入ってくる程度の外国語は十分書けます。なお速記といっても場合によっては「かな」や簡単な漢字などを速記文字の中に適当に使っていくことも一つの方法であり、これらは上達するに従って自然と理解されてくることですから、特に説明ということでもなく一言書き添えておきます。

あ と が き

以上で研究編を全部終わります。研究編では(1)どうすれば字の形が簡単になるか——省略法の研究、(2)どうすればなめらかに書けるか——書き方の研究、(3) 1と2を兼ねた速度の研究、この3つを常に目標にして練習をしてください。自己流を出さずに着実に省略法を研究し、自分で解決のつかない場合は通信指導の「学術指導部」もあり、また実地に練習したい人のためには「速記学校」もありますから、そういう機関を有効に利用して技術の完成をはかってください。

実務についたときの心がまえ

最初実務についたときは、真剣味がみなぎっているものですが、その気持で常に練習をしなければなりません。たとえば演奏家が常に技術を練り、心身の健康に注意するように、速記者も実地にあたってあわてないように日ごろの練習や勉強とともに健康に注意することが大切です。ふだん聞き慣れないことばに出あってもあせらずに、つづり字のよしあし、便利か便利でないかなどは問題にせず瞬間的に頭にひらめいたまを筆に表わせる力を養っておきましょう。

財団法人 早稲田速記普及協会

東京都新宿区戸塚町 1-476-4 電話東京 (03) 202-5391 内

昭和37年8月1日 初版発行
昭和43年3月5日 重版発行

非売品

著者 川口 彦
編者 川口 晃 玉
発行者 川口 晃 玉
印刷所 一色印刷株式会社

発行所 株式会社 言潮社

無断転載を禁じます

電話 (03) 746-6674 東京0352
東京都新宿区戸塚 1-532

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

文部省認定社会通信教育

セクレタ

このページは研究編を修了した女性のための広告です



速記のできるあなたこそ

秘書に最適!

とうとう最後までやり通しましたね。ここまでするにはたいへん努力されたことでしょう。ほんとうにご苦労さまでした。

いよいよ速記はあなたのものになりましたね。最初はミミズミみたいな線に過ぎなかったのが、今ではちゃんと意味ある文字になってしまったのですから——さぞかしご満足のことでしょう。

ところで速記をマスターされたあなたは、これからさき速記をどう生かしていこうと思いますか。もし具体的には決まっていないうら、あなたにすばらしい職業を紹介しましょう。

秘書です。おもに会社の経営者のもとで電話の応対をしたり、上役のスケジュールを調整したり、文書をファイルしたり、訪問客と会ったりして、経営者を助けてやる仕事をする秘書です。やりがいがあるとは思いませんか。

* * *

ところが現代の花形、秘書にも大きな欠点があります。それは速記ができないことです。速記ができないから電話がかかってきた時など、ちょっと話がむずかしくなるとなれども聞き直さねばならないし、また口述速記ができない

リー講座

このページは
究編を修了した
女性のための広
告です

から経営者が手紙を出したいと思ったら全部自分で書かねばならないといったありさまです。これでは能率が上がるわけがありません。経営者がウの目・タカの目で『速記のできる秘書』をさがしているのも当然すぎる話なのです。

あなたはいま速記という最高の武器をもっています。最もすぐれた秘書になれる条件と素質はもっています。

あとは、秘書として最低限度必要な常識や技術を身につければよいのです。

さあ！ 迷わず秘書を目ざしましょう。まづ「セクレタリー講座」の案内書をとって、見てみましょう。この案内書はきっとあなたの運命を変えるに違いありません。無料です。

講座の内容と形式

- ◇主教材はテキスト全6冊〔教養編3冊、技術編3冊〕で、経済と経営からファイリング、接遇技術まで豊富な内容。
 - ◇補助教材は副読本3冊、学習レコード6枚〔英会話、オフィス会話〕、速記文字能率暗記カード。
 - ◇機関誌SECRETARYの発行〔毎月1回〕、スクーリング・学習研究会の開催、課題報告・質問券の交換など、学習活動の促進をうながしています。
 - ◇講座修了期間：8か月。学費：8,500円〔4回分割払いで、教材が届いてから学費を納入する制度〕
 - ◇配本：第1回配本 入学申込みから10日程で届きます。
第2回配本 入学後、2か月めの下旬。
第3回配本 入学後、5か月めの下旬。
- 案内書はハガキに『案内書送れ』と書いてお申込みください。

◇ハガキのあて先→財団法人 早稲田速記普及協会

セクレタリー講座教育部

東京都新宿区戸塚町 1-476-4

TEL 東京 (03) 202-5391~5



言潮社發行